

仙台市文化財調査報告書第305集

大崎八幡宮の松焚祭と裸参り

調査報告書

平成18年12月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第305集

大崎八幡宮の松焚祭と裸参り

調査報告書

平成18年12月

仙台市教育委員会

序 文

このたび、『大崎八幡宮の松焚祭まつたきまつりと裸参り調査報告書』を刊行することになりました。

大崎八幡宮の松焚祭は「どんと祭」として広く市民に親しまれ、毎年1月14日夜から翌15日未明にかけて行われる仙台の冬の風物詩のひとつです。その起源については必ずしも明らかではないようですが、お正月の松飾りや注連縄、神札などをお焚き上げするという、私たちの正月・小正月行事と密接に関わってきた祭です。また、この祭には裸参りが伴うという特色があり、特に門前にあった天賞酒造の蔵人などによる裸参りがその起源とされ、市内各所から多くの団体が参加するようになっています。

現在では、市内はもとより県内各地で「どんと祭」や裸参りが行なわれるようになりましたが、旧仙台藩領において少なくとも150年以上も続く行事は大崎八幡宮だけです。仙台市では、これらの特色をふまえ、平成17年に無形民俗文化財として文化財指定することができました。

本報告書では、大崎八幡宮の松焚祭・裸参りの歴史の変遷や現状、さらには市内、県内各地にみられるどんと祭・裸参りの様相に関しての報告・考察を加え、この行事を、より広い視野でとらえなおした内容となっております。

最後になりましたが、本調査や報告書の刊行に際しましては、各地の皆様方や関係諸機関にはひとかたならぬご指導・ご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成18年12月

仙台市教育委員会

教育長 奥山 恵美子

凡 例

- 1 本書は平成17年1月に仙台市教育委員会が「大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）」を仙台市無形民俗文化財に指定したことを受けて実施した、平成16年および17年度仙台市民俗文化財調査「大崎八幡宮の松焚祭と裸参り」に関する調査報告である。
- 2 本調査は仙台市教育委員会が仙台民俗文化研究会に委託して実施した。
- 3 本調査の業務従事者は何れも仙台民俗文化研究会会員で、代表・調査員 佐藤敏悦、調査員 小田嶋利江、調査員 関口健、調査員 安藤直子、調査補助員 山口岳の5名である。
- 4 本調査の対象は仙台市青葉区八幡4丁目6番1号に所在する大崎八幡宮において毎年1月14日から15日未明にかけて行われる「松焚祭」および「裸参り」と、当市の内外で実施される「どんと祭」、「裸参り」等の関連習俗を伝承する関係者である。
- 5 本報告書の年号表記は元号を優先し「元号（西暦）」のように記載した。ただし「平成17年」のように極めて近い時期については西暦を省略した。
- 6 本報告書における民俗語彙に関しては原則としてカタカナ表記とした。ただし、漢字表記の可能な場合は初出のみ「カタカナ（漢字）」等とし、以後は漢字で表した。
- 7 本書に使用した新聞記事は、宮城県図書館及び仙台市図書館所蔵のマイクロフィルム、保存版等を参照した。引用にあたっては河北新報社からの許可と全面的な協力を得た。
なお、検索については、小田嶋利江、関口健、安藤直子、山口岳がこれにあたった。
- 8 参考写真の撮影に関しては仙台民俗文化研究会の調査員が行った。また、岩手県矢巾町の高橋 満氏、同県紫波町の畠山進一氏、本田完治氏、門前克子氏、宮城県大和町の早坂秀子氏、仙台市青葉区の岩松卓也氏をはじめ、一番町四丁目商店街振興組合、JR 東日本仙台支社、仙台市立病院など関係する多くの個人や企業団体より所蔵写真の提供を受け、その一部を掲載した。
- 9 本書の執筆は、第1章1節・2節・3節、第2章1節・3節(1)(7)(8)、第3章1節(5)・3節(1)(3)(5)、第4章3節を佐藤敏悦、第1章4節、第2章2節・3節(3)、第3章1節(3)(4)・2節(1)(2)(5)・3節(6)、第4章1節、資料集を小田嶋利江、第1章2節(3)、第2章3節(4)を関口健、第2章3節(2)、第3章3節(2)、第4章2節を安藤直子、第2章3節(5)(6)、第3章1節(1)(2)・2節(3)(4)・3節(4)を山口岳が分担して行った。
- 10 本書の編集は仙台市教育局文化財管理係の伊藤優が行った。なお、編集にあたっては仙台民俗文化研究会の佐藤敏悦、小田嶋利江、関口健がその補助にあたった。

目 次

序 文
凡 例
目 次

第1章 大崎八幡宮のどんと祭	1
第1節 本調査の目的と視点	1
(1) 仙台市指定無形民俗文化財への指定理由	
(2) 本調査の視点	
第2節 大崎八幡宮の歴史	2
(1) 大崎八幡宮の位置と遷座	
(2) 三つの大崎八幡と龍宝寺	
(3) 大崎八幡宮の祭礼	
第3節 どんと祭への理解と先行研究	7
(1) どんと祭への一般理解	
(2) どんと祭の発祥についての先行研究	
(3) 裸参りについての先行研究	
(4) どんと祭の名称についての先行研究	
第4節 どんと祭の諸相	15
(1) 大崎八幡宮の祭礼と暁参り	
(2) 松焼き・松納め・松焚き	
(3) どんど・どんどまつり・どんとさい	
(4) 寒参り・裸参り・薄衣参り	
(5) 仙台市域の若年と八幡さまの祭り	
第2章 どんと祭の変容と展開	28
第1節 仙台地方の正月送り行事	28
(1) 正月送りの様相	
(2) 松焚きの事例	
第2節 大崎八幡宮のどんと祭の現在	31
(1) 松焚祭採火式－平成18年1月1日大崎八幡宮拝殿－	
(2) 松焚祭点火式－平成16年1月14日大崎八幡宮境内馬場先－	
(3) どんと祭－平成16年1月14日大崎八幡宮境内・八幡町－	
(4) どんと祭とあかつき参り－平成18年1月15日大崎八幡宮境内－	
第3節 どんと祭のひろがりの変容	34
(1) どんと祭のひろがり	
(2) 事例・仙台市中心部、東照宮のどんと祭	

- (3) 事例・仙台市中心部、大日堂のどんと祭
- (4) 事例・仙台市中心部、三宝荒神社のどんと祭
- (5) 事例・仙台市中心部、陸奥国分寺のどんと祭
- (6) 事例・仙台市郊外、大倉定義如来のどんと祭
- (7) 事例・仙台市郊外、賀茂神社のどんと祭
- (8) 事例・仙台市郊外、泉パークタウンのどんと祭

第3章 裸参りの現状と変遷47

第1節 大崎八幡宮への裸参り47

- (1) 裸参りの現状
- (2) 事例・天賞酒造の裸参り
- (3) 事例・仙台市立病院の裸参り
- (4) 事例・JR 東日本東北支社の裸参り
- (5) 事例・個人による裸参り

第2節 岩手県南部地方の裸参り56

- (1) 東北の裸参りの諸相
- (2) 南部地方の裸参り
- (3) 事例・岩手県二戸市、似鳥八幡神社の裸参り
- (4) 事例・岩手県紫波町、志和八幡宮の裸参り
- (5) 事例・岩手県雫石町、三社座神社・永昌寺の裸参り

第3節 裸参りの拡散69

- (1) 流行としての裸参り
- (2) 裸参りの画一化
- (3) 事例・勝山酒造部の青葉神社への裸参り
- (4) 事例・佐元工務店の陸奥国分寺への裸参り
- (5) 事例・栗駒建業の賀茂神社への裸参り
- (6) 事例・早坂酒造店の吉岡八幡神社への裸参り

第4章 どんと祭から見えるもの83

第1節 時代に見るどんと祭と人々83

- (1) 暁参りと松納め
- (2) 仙台城下の正月と八幡さまの縁日
- (3) どんと祭り与人々

第2節 どんと祭の現在から見えるもの90

第3節 おわりに～ドンドの火とどんと祭 102

【資料集】 大崎八幡宮の松焚祭と裸参り 106

図・写真.....	140
大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）参考文献.....	153

第1章 大崎八幡宮のどんと祭

第1節 本調査の目的と視点

(1) 仙台市無形民俗文化財への指定理由

平成17年1月18日、仙台市教育委員会は「大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）」を仙台市の無形民俗文化財に指定した。指定に先立ち、1月11日に開催された仙台市文化財保護審議会に諮問された『仙台市指定民俗文化財指定理由書』（註1）によれば、大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）の由来・証拠・伝説として「青葉区八幡に所在する大崎八幡宮では、毎年1月14日日没から翌15日未明にかけて、正月の松飾りや注連縄、神札などを焚く祭事が行われている。この祭礼は現在では一般にどんと祭の呼び名で知られているが、祭を主催する大崎八幡宮では、正式には松焚祭（まつたきまつり）と呼称している。

この祭の起源について、社伝では300年の歴史を持つというが、史料的に確認できる初出は嘉永2年（1849）の『仙台年中行事大意』で、少なくとも近世末期には行われていたことが分かる。またこの祭礼の特色のひとつとなっている裸参りについても、嘉永3年（1850）頃の成立とみられる『仙台年中行事絵巻』に杜氏による裸参りの様子が描かれており、すでにこの頃には行われていたことが知られる。

なお、どんと祭の呼称が使われ始めるのは明治40年頃とみられ、以後大正時代になって広く定着していく様相が当時の新聞記事等により確認される。」と記載されている。

またその説明として同指定理由書では「大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）は、1月14日から15日にかけての小正月に、正月の松飾りや注連縄、神札などを焚き上げる習俗である。この祭礼は日本各地に広く分布する「小正月行事」の一種とみられるが、仙台地方における正月神送りの一形態を示す民俗行事である。

また、現在市内の神社等で広く行われているどんと祭は、仙台市消防局の平成16年の調査によれば157カ所で開催されたが、近世（江戸時代）以来の継続性を持つものは大崎八幡宮の他に確認することができず、大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）は広く市民に親しまれているどんと祭の祖形となった祭礼として重要である。」と記載されている。

註

1. 『仙台市指定民俗文化財指定理由書』は仙台市文化財保護審議会の答申を受けて、仙台市教育委員会文書「平成17年1月17日告示仙台市教育委員会告示第1号」として告示された。

(2) 本調査の視点

本調査は仙台市無形民俗文化財指定を受けて平成17年度に実施されたものである。

本調査の目的は前記の仙台市指定民俗文化財指定理由書の内容の確認と証明である。その視点は指定理由書によれば大きく分けて「大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）の起源と推移」「どんと祭と小正月行事の関連性」「大崎八幡宮以外へのどんと祭の拡大とその背景」「大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）での裸参りの起源と推移」「大崎八幡宮以外への裸参りの拡大とその背景」の解明であろう。そしてこれらの調査結果から、近世の仙台という「都市」で発生したどんと祭が、その後の近代化の中でど

のように推移し、今日もなお貴重な民俗文化財として受容されているのかを明らかにすることである。

本調査における用語の定義であるが、「どんと祭」については前記の仙台市指定民俗文化財指定理由書に準拠し「仙台市を含む宮城県内で広く行われている、毎年1月14日日没から翌15日未明にかけて、正月の松飾りや注連縄、神札などを焚く行事」と定め、特定の寺社等に拠らない一般名称とする。これによって「大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）」も一般名称のどんと祭に包含されるわけであるが、その理由は現在では前記の定義の行事が大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）を手本として広く行われており、それらを区別するためには実施されている寺社名や地域名によって弁別することが必要であるからである。よって以後は、総称としてのどんと祭以外の個別のどんと祭については、寺社名または地域名を明記し、大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）も「大崎八幡宮のどんと祭」と記載するか、あるいは無形民俗文化財指定対象として特定する場合は「大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）」または「大崎八幡宮の松焚祭」と記載する。

また一般名称のどんと祭に「祭」の文字が使用されているのに「行事」と定義する理由については、どんと祭を実施する主催者や場所が現在では寺社等の宗教関係者やその境内地以外に広く拡散し、後述するように新興住宅団地の町内会が団地内の公園で実施するケースなども多く、祭事とはいえない側面も強まっているためである。

このように本調査の主要な対象は大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）であるが、その実情を明らかにするためには、仙台市内や仙台市の周辺地区で広く行われているどんと祭や小正月行事との比較対照が必要であり、さらにこの祭礼の特色のひとつとなっている裸参りの起源を調べるためには、仙台地区の酒造関係者とその出身地域の習俗等を広く採集分析しなければならない。したがって本調査は無形民俗文化財指定後の祭礼のみならず、過去の先行研究や、本調査に先立って行われていた同一調査メンバーによる酒造に関する民俗調査の事例などからも、幅広い引用と調査結果の対照を行っている。

本調査では大崎八幡宮以外の事例について多くの比較対照調査を行った。その例としては、どんと祭同様に正月飾り等を焚き上げる行事でありながら、どんと祭から影響を受けたのではなく独自の民俗行事として伝承されてきた可能性の高い仙台市大倉地区のオサイト、同じく正月飾り等を焚き上げる行事に裸参りの伝統までが残されている岩手県二戸市のサイトギや岩手県志和町の五元日祭、そして大崎八幡宮のどんと祭から影響を受けつつ様々に展開して現在に至った仙台市内や周辺部のどんと祭の事例がある。中でも岩手県の事例は、仙台地方の酒造りを担った南部杜氏の故郷での行事であり、大崎八幡宮のどんと祭を特徴付けていた裸参りの起源にも関わりあいの深い事例報告である。

第2節 大崎八幡宮の歴史

(1) 大崎八幡宮の位置と遷座

大崎八幡宮は仙台市青葉区八幡4丁目6番1号に鎮座する神社で、祭神は応神天皇、仲哀天皇、神功皇后の三柱である。昭和51年10月に宮城県神社庁が発行した「宮城県神社名鑑」によれば境内地は12,432坪、桃山式権現造で国宝の本殿15坪、幣殿10坪、拝殿21坪で、現在の宮司は15代目にあたる小野日博昭である。

大崎八幡宮の社名は、藩政時代は「大崎八幡宮」であったことが明和9年(1772)の『封内風土記』などの記述で確認できるが、明治4年の太政官布告で近代社格制度が制定されたときに「大崎八幡神社」に改称し、旧社格で村社に列せられた。戦後の昭和22年に神道指令で社格が廃止された後もしばらく大崎八幡神社の社名であったが、鎮座400年の記念大祭を10年後に控えた平成9年6月に社

名を古来の「大崎八幡宮」に改めた。なお庶民の間では「八幡堂」と呼ばれていた時期もあったとされている。

大崎八幡宮の遷座ははっきりしていて、慶長12年(1607)である。伊達家の記録である『政宗君治家記録引証記 二十一』では「一、竜宝寺八幡宮御造営御遷宮ノ事 真山記九 一、同八月十二日、八幡宮殿成就シテ御遷宮(中略)此宮殿営作ハ慶長九年甲辰ノ秋ニ初テ、四ヶ年ニシテ成就」とある。由緒については、明和9年(1772)に田邊希文が記したとされる『封内風土記』や安永4年(1775)の遠田郡八幡村の『風土記御用書出』によれば、大崎八幡宮はもともとは岩手県の胆沢郡八幡邑(現奥州市、旧水沢市八幡)にあった八幡宮(現存社名、鎮守府八幡宮)を大永7年(1527)に奥州探題の大崎義全(ママ)が宮城県の大崎郡八幡邑(現大崎市、旧田尻町八幡)に移し、大崎八幡神社と称したとされている。但し、これには異説がある。また大崎八幡宮に伝わる享保元年(1716)の絵巻文書の『奥州仙台大崎八幡来由記』によれば、伊達政宗が米沢に在った頃、政宗のもとに大崎氏が尊崇していた遠田郡八幡邑の大崎八幡神社のご神体が届けられたという。天正18年(1590)に大崎氏が滅び、天正19年(1591)に伊達政宗が岩出山に移った際、政宗は城内に仮宮を建てて大崎八幡神社のご神体を安置し、慶長5年(1600)には遠田郡八幡邑から大崎八幡神社を岩出山に遷座した。さらに伊達政宗が仙台に城を構えて移るに際して、政宗が米沢時代から尊崇し岩出山に遷座させていた成島八幡とともに大崎八幡神社を仙台に移すこととなった。そして慶長9年(1604)に仙台北下の現在地に社殿の造営を始め、慶長12年(1607)に完成した大崎八幡宮は、成島八幡を合祀し現在に至っている。

大崎八幡宮は仙台藩の歴代藩主の崇敬が篤く、二代藩主伊達忠宗から黒印状が下賜され、社領493石が与えられたほか、藩主の命によって社殿の修造や来由記の制作などが行われた。祭礼は現在では1月14日のどんと祭が9月15日(明治の中頃までは旧暦8月15日)の例祭より人出が多く著名であるが、藩政期に書かれた年中行事記録や紀行文では、先に述べた嘉永2年(1849)の「仙臺年中行事大意」以前には「松焚き」をするとどんと祭のはっきりした記録が見当たらない。これに対して旧8月の例祭は流鏝馬がおこなわれる他、相撲や見世物などが許されて人気を集め、大勢の人出があったことが、ほぼ藩政期を通じて記録されている。なお、今日どんと祭のご神火が焚かれる場所は、その流鏝馬が行われた馬場先で、石段を登りきったすぐ左手の広場である。

ところで大崎八幡宮が遷座した地であるが、この地は仙台北下の西北端の広瀬川北岸の河岸段丘上のさらに小高い丘陵の頂上部にある。境内地は南北に長く、参道や社殿は南面している。社殿のある丘陵は「恵沢山」と呼ばれ、海拔は約83メートルで、これは城下の中心であった大町の高さ約40メートルより大幅に高い位置にある。大崎八幡宮は元禄8年(1695)の『仙台鹿の子』には「御城府より遠山なる故に遠八幡といふ」とあり、この地が仙台北下のはずれであったことは重要である。

この大崎八幡宮と別当寺である龍宝寺の門前町が現在の八幡町で、大崎八幡宮が遷座した慶長12年(1607)には町が成立していたと見られる。明和9年(1772)の『封内風土記』によれば「大崎八幡町。宅地凡九十。市人凡千三百四十一口。男八百六口。女五百三十五口。」とあり、当時の仙台北下では大町、国分町に次ぐ規模の大きな町であった。またこの町は関山越え最上街道の出入口であり、街道筋の茶屋町としての性格と、宿駅である下愛子や熊ヶ根方面から運び込まれる主に薪などの荷駄に入市税を課す「御仲下改所」が設けられていたことは、この町の特徴であった。

(2) 三つの大崎八幡と龍宝寺

宮城県内には現在大崎八幡と呼称する神社が三社ある。一つは仙台の大崎八幡宮、その前身である遠田郡八幡邑(現大崎市、旧田尻町八幡)の大崎八幡神社、そして旧岩出山町内(現大崎市、旧岩出

山町下野目)の大崎八幡神社である。この三社の関係と、大崎八幡に合祀された成島八幡とその別当寺としての龍宝寺について述べておく。

田尻の大崎八幡神社 遠田郡八幡邑(現大崎市、旧田尻町八幡)の大崎八幡神社は、奥州探題に任ぜられた大崎氏が崇敬した神社であった。由緒は前述の大永7年(1527)の勸請説の他に、社伝や神社明細帳によれば、天喜5年(1057)源義家創建の「三八幡」のひとつで、正平16年(1361)に大崎家兼が社殿を再興し大崎八幡と称したとの説もある。いずれにせよ大崎氏の滅亡後、伊達政宗が尊崇してはじめ岩出山城に、次いで仙台の地に遷座したが、元宮は別当寺である八幡寺とともに現地に残された。享保元年(1716)7月に別当寺の八幡寺が提出した『八幡宮仙台江取移候義二付書出』(鈴木家文書、昭和58年、田尻町史史料編)によれば「正保3年(1646)6月に義山(二代藩主忠宗)の黒印と一貫二百文の寄進を受けた」ことや政宗や忠宗が参詣したことが記されている。また社殿も正平16年(1361)に大崎家兼が再建した建物が残されていたとする一方で、宝暦10年(1760)に水月堂が記した『奥州里諺集』(「仙台領の地誌」平成13年2月、今野印刷)では「遠田郡八幡村に八幡の拝殿計有、此所の八幡大崎繁昌の頃ハ、宮も有しよし、没落の後、仙台へ移されたりといふ、其ゆへに本社ハなく拝殿計也、此所へ本社を立る事ハ仙台の大崎八幡より御ゆるしなけれハ成かたきよし云伝ふよしなり」とあり、仙台の大崎八幡宮との関係が必ずしも順調でなかった時期があることを窺わせている。因みにこの神社は明治初年に野火からの類焼で社殿や一切の宝物、文書類も焼失し、さらには明治から昭和にかけて常任の神職がおらず荒廃した。社殿はその後に再建されたが、現時点では、旧田尻町の大崎八幡神社には、仙台の大崎八幡宮と直接関わりのある祭事や行事、神楽などは見出せないとのことである。

岩出山の大崎八幡神社 旧岩出山町内(現大崎市、旧岩出山町下野目)の大崎八幡神社は社伝と教育委員会による掲石板の由緒書によれば、高倉天皇の承安年間(1171～1174)に藤原秀衡の家臣照兵衛高直が、秀衡の命を受けて旧岩出山町下野目に勸請した八幡宮で、藤原氏が滅ぶと衰微したものを、暦応年間(1338～1344)に奥州探題の大崎家兼が社殿を修復して大崎氏の氏神とした。天正年間(1573～1592)に江合川の氾濫で流され、現在地に移ったとされている。昭和3年に社殿が焼失したため、仙台の青葉神社から社殿を移築し、昭和46年11月に社名を大崎八幡神社と改称した。

岩出山の大崎八幡神社と仙台の大崎八幡宮の間では、毎年秋に大崎八幡宮でおこなわれる流鏝馬の射手に、岩出山の大崎八幡神社の社家が奉仕していたとされている。安永2年(1773)の玉造郡下野目村の『風土記御用書出』では「品替之御百姓四人」として「作左衛門、善左衛門、仲兵衛、清左衛門」が「但右四人仙台大崎八幡宮御神事御やふさめ往古より相勤」と記載されている。また同年と見られる『風土記御用二付御的射大社土代数書上』では「御的射 笠原作左衛門、同 高橋善左衛門、同 尾形仲兵衛、大社司 高橋清左衛門」の連名で「往古ハ大崎八幡宮遠田郡八幡村ニ而八月十五日御流鏝馬相勤申候処八幡宮仙台江御移以後仙台ニ而相勤」とし「右四人共ニ御知行七百文宛」「右四人共ニ御神事上下御用之節ハ名字帯刀ニ而上下仕候」とあることから、流鏝馬の射手は古くは田尻の大崎八幡神社の流鏝馬で、仙台遷座後は大崎八幡宮で射手を勤め、その際は名字帯刀が許されていたとされている。なお現在の大崎八幡宮の流鏝馬の射手は、4人の直系の子孫ではないが、その技術を伝授されてきた人たちである。

龍宝寺と成島八幡 大崎八幡宮の東隣にある龍宝寺は、藩政時代は大崎八幡宮の別当寺であった。『封内風土記』では「恵沢山宝珠院龍宝寺。在城北。真言宗。城州醍醐三宝院末寺。旧在羽州米沢成島。不詳何時何人開山。伝云。後花園帝。康正中。澄海法印中興。」とある。「米沢市史」第1巻第4章第

1節『中世の宗教と文化』（平成9年3月、米沢市史編さん委員会）によれば「龍宝寺は成島八幡の別当寺で、伊達氏の祈祷寺である。この龍宝寺は、本来伊達家が帰依していた伊達郡梁川の亀岡八幡宮（のち仙台に移る）の別当寺であった。寺伝によると、伊達朝宗が常陸国中村に開基したのであるが（中略）伊達家が米沢へ移ると、同寺は成島八幡宮の別当寺となり、さらに伊達家が仙台へ転封するとき同家に随伴して、寺宝等は米沢から仙台へ移された。」とある。これは史料で裏付けられる。「大日本古文書」の『伊達家文書』では、伊達家が米沢に在った天正10年（1582）の『性山公御自筆年始御儀式巻』では正月六日に「りうほうし（龍宝寺）へ年始参候」とあり、また伊達政宗が岩出山にいた慶長5年（1600）正月の『諸寺家年始進物日記』表紙『慶長五年正月四日諸寺家中』に「一五十七うりやほう寺（龍宝寺）」との記載があり、龍宝寺が米沢から岩出山を経て仙台に移ったことがわかる。

龍宝寺が別当寺であった成島八幡神社は、元宮が現在も米沢市成島町に鎮座し、正安2年（1300）の棟札が残る古社であるが、伊達政宗が岩出山に移った際に岩出山城内の「八幡平」に勧請され、その後仙台に移る際に大崎八幡宮に合祀された。龍宝寺はそのまま大崎八幡宮の別当寺となったが、明治初年の廃仏毀釈で廃寺となり、文書や寺宝も散逸した。明治3年の神仏分離で龍宝寺45世永憲が還俗して大崎八幡宮の祠官大崎清美となり、別当寺としての歴史を閉じた。

（3） 大崎八幡宮の祭礼

大崎八幡宮所蔵の『大崎八幡宮年中行事』は、文化年間（1804～1818）の終わりからその後にかけての記録であり、この頃、同社の神主を務めた沼田豊前正の手によるものとみられる。当時の祭礼と神事に関する社務や作法、物事の取り決めの際に交わされた文書の写しなどを詳細に渡って書き留めたその内容は、江戸後期の成島八幡宮における神社祭祀の有り様を当時の神職の目を通じて知ることのできる今日においては数少ない記録の一つといえる。次の一覧は、その『大崎八幡宮年中行事』に記された年中の行事を整理したもので、現在の大崎八幡宮において、それらと同日に行われている祭礼や神事等をこれに加えた。

近世期の成島八幡宮は、12の社家により奉祀され、神主を中心として11人の禰宜がそれぞれの役に応じて神職を勤めてきた。同社の祭礼の中で重視された2月の「卯ノ御神事」と8月の「大御神事」、4月と12月の2度の「御神事」は、あわせて「四ヶ度御神事」と総称され、領主やその代参などを迎えて執り行われるものであった。これらの御神事は、この後明治期にいたって姿を消していったとみられるが、境内赤鳥居前での「忌竹式」から始まる「大御神事」は、今も例大祭として残り、鳥居祭、神楽、御輿渡御、流鏑馬などが姿を少しずつ変えながら受け継がれている。

ところで、『大崎八幡宮年中行事』には、今日の松焚祭に係わる記事が1月14日の記述として見うけられる。すなわち、

- 一、十四日惣禰宜中松明まで御宮尔詰居来申候 先十四日暮前相圖太鞆打候也夫ヨリ出仕勤行常之通 身曾貴 太祓十二度 中臣祓壹度 三種太祓三十六度 祈念撰掌拍手等常之通 神燈十二燈 江献之油等ハ當番人ヨリ世話いたし候 相調候而十六日敬錢勘定之節 入料引當候 當方之禰宜江相渡ス十四日夜當番所并御拜殿ニ而会相用ひ申候炭薪等も同日當番人世話役被右調代右同断
- 扱右十四日御神事自分御神事ニ而寛延年中時分ヨリ歟祖父出雲守代ヨリ段々参詣者大勢ニ見え候ニ付其居當番人神燈神酒相献様ニ取斗候処一年殊ニ参詣多夫ヨリ惣禰宜詰居候処段候ハ、世間ニ而ハ御神事とつたへ大勢参詣在之様ニ相成候由祠官沼田若狭義豊前正叔母賀ニ有之処享和二年七十三歳ニ相成候処先年之次第段々覚居相咄申候也 ※下線は筆者による

とあって、この日は全ての禰宜が「松明」まで宮に詰めていたことを記す。また、18世紀中葉の寛延

【『大崎八幡宮年中行事』にみる大崎八幡宮の祭礼（江戸後期）】

日時	祭礼・神事	現在	日時	祭礼・神事	現在
1月1日	朝御宮出仕勤行（～5日まで同じ）	歳旦祭	6月1日	朝御宮出仕勤行	月首祭
7日	七草御宮朝出仕勤行		15日	朝御宮出仕勤行 大御神事修復物の見分	月次祭
8日	龍宝寺年始初めにより出仕		7月1日	朝御宮出仕勤行	月首祭
11日	朝出仕勤行		7日	龍宝寺へ祝辞	
14日	惣禰宜中松明まで御宮詰居	松焚祭	15日	朝出仕勤行	月首祭
15日	朝出仕勤行 神楽献納	松焚祭	21日	大御神事神楽稽古初め（～8/8まで）	
16日	前日散銭配分 神楽御道具等の見分		22日	大御神事入用の龍宝寺へ申し出	
29日	御宮出仕勤行（陰暦大の月晦日正月）		8月1日	赤鳥居前他忌竹式勤行	月首祭 鳥居祭※
2月1日	朝御宮出仕勤行	月首祭	5日	神主この頃より大御神事別火斎戒入 大御神事御神楽稽古納めの御祝儀	
11日	八幡町火伏勤行祈祷		8日	禰宜中夕飯より大御神事別火斎戒入	
15日	朝御宮出仕勤行	月次祭	9日	大御神御切削（ぬさ）の用意	
16日	前日御初穂配分		13日	朝内陣掃除、晩神楽、湯立式献納	
上旬頃	卯ノ日御神事（四ヶ度御神事）		14日	大御神事、神輿渡御（四ヶ度御神事）	例大祭※
3月1日	朝御宮出仕勤行	月首祭	15日	禰宜中朝まで御宮詰め居	例大祭※
3日	節句朝御宮出仕勤行		17日	神輿散銭配分	
15日	朝御宮出仕勤行	月次祭	18日	流鏝馬神事	
4月1日	朝御宮出仕勤行	月首祭	9月9日	御宮出仕勤行、禰宜中龍宝寺へ祝辞	
3日	御神事（四ヶ度御神事）		12月14日	御神事（四ヶ度御神事）	
15日	朝御宮出仕勤行	月次祭	26日	年中散銭配分	
5月1日	朝御宮出仕勤行	月首祭	28日	門松立て	
5日	朝御宮出仕勤行		30日	大晦日 御宮出仕勤行	
15日	朝御宮出仕勤行	月次祭			

※例大祭は、現在9/1の鳥居祭にはじまり、9/14から9/15にかけて本祭が行われる。なお、同社では今日、この他に節分祭、皁月祭、水無月大祓式、御鎮座記念祭などが主要な祭祀として行われている。また、月首祭と月次祭は8月および10月以降も行われる。

年間（1748～1751）の頃より、参詣者の増えたことを、享和二（1802）年で73歳となる叔母婿の神職沼田若狭の語りとして述べており、松焚祭の始まりを知る上で注目されるものと言えよう。下線を付したこの下りでは、当番の神職が「燈神」や「神酒」の献上を取りはからったことから、参詣者が増え始め、禰宜がその対応のため総出するようになったところを、世間には御神事と伝わり、一層の賑わいとなったと記す。松焚に関しては触れられてはいないが、あるいはその始まりは、神職達が12月28日に作った門松や自らの家々で飾ったその他の松飾りを松明にあたって、まとめて焼納（松焼き）したことによるものであり、やがて参詣の人々も、その例に習うようになったのではなかろうか。松焚場の中心に今日では正月の社を飾った大門松が据えられるのも、あるいはこの祭の始まりと関連するのかもしれない。

第3節 どんと祭への理解と先行研究

(1) どんと祭への一般理解

平成15年に社団法人宮城県観光連盟が観光キャンペーン用に発行した「ウェルカム みやぎ観光ガイドブック 03」では、どんと祭の説明として次のように記述されている。「毎年1月14日、宮城県内各地の神社などで行われる小正月行事の一つが「どんと祭」。正月の松飾りやしめ縄、神府（ママ）を神社に納め、これを神火で燃やして新年の幸福、商売繁盛、無病息災を祈る祭りで、全国でも有数の小正月の行事として定着している。中でも、仙台市青葉区の大崎八幡宮のどんと祭は裸参りをする事で全国的に有名になっている。参加者は猿股に白足袋、わらじを履き、口に含み紙をくわえ、右手に洋鈴、左手に提灯を持って市内を参拝する。」

一方仙台市内で発行されている日刊紙「河北新報」の平成18年1月15日朝刊1面記事では、前日1月14日のどんと祭について次のように掲載されている。「小正月の伝統行事「どんと祭」が十四日、東北各地の神社などで行われた。仙台市青葉区の大崎八幡宮では午後四時半ごろ、積み上げられた正月飾りに火が入れられた。参拝客は燃え盛る御神火に手を合わせ、一年の無病息災や商売繁盛を祈った。

恒例の裸参りに参加したのは百一団体の約三千百人。白いさらし姿でちょうちんを手に、かねを鳴らしながら境内を練り歩いた。（以下略）」

このように一般的な認識としては、どんと祭は「宮城県内や東北各地の神社」などで行われる「小正月の伝統行事」で、中でも「大崎八幡宮のどんと祭は裸参りの参詣が行われる」ことで有名である、ということになる。しかしこの記述は民俗学的に見た場合は正鵠を得ていない。どんと祭が宮城県内各地で広く行われるようになったのはごく最近のことで、ましてや東北各地で行われているわけではない。また小正月の伝統行事とされるが、小正月に松飾りを「納める」ことは広く行われているが、松飾りを焼くのは宮城県内ではごく稀な事例であった。このように大崎八幡宮のどんと祭については、裸参りの参詣ともあいまって他の神社仏閣のどんと祭とは一線を画すべきものであった。

最新の民俗誌のうち、仙台市史編さん委員会が平成10年3月に発行し、あえて「二十世紀が終わろうとする時点で記録された（中略）民俗誌」とことわった「仙台市史特別編6民俗」によれば「ドント祭 正月十四日の宵から翌暁にかけて大崎八幡宮の境内で行われる小正月の行事である。「ドント祭」の呼称は大正期以後のことで、古くは「松焚き」といった。（中略）夕方小正月の年取りのお膳を歳徳神さまに供え、家族そろって食膳についた後で松飾りと注連縄を取りはずして東ね、大崎八幡宮に持参して焼いた。」さらに「造り酒屋の杜氏による裸参りが行われている。現在では酒屋以外にも企業や団体、また個人で裸参りに参加する者もいる。平成九年（一九九七）のドント祭には一三二団体、約三二〇〇人が参加した。戦前、（中略）現在のように個人や各団体が参加することはごく稀であったし、戦後、女性が参加するようになった時には奇異な目でみられたものであったという。（中略）このドント祭は、市内の各地区への影響も大きく、昭和三十年代以降には各地区の神社でドント祭を始めた例が非常に多い。」と記載されている。

(2) どんと祭の発祥についての先行研究

藩政時代のどんと祭史料 どんと祭の発祥に関する文献のうち、最も重要なものは昭和15年7月に仙臺昔話会から発行された「仙臺年中行事繪巻 附仙臺年中行事大意」である。本書は常盤雄五郎が所蔵していた「仙臺年中行事繪巻」を収録したもので、郷土史研究家の三原良吉が解説文を書き、そ

の中で絵巻の成立年代を嘉永3年(1850)頃としている。この絵巻は三原の解説によれば「此種の仙臺資料として唯一無二」であるとし、実際他に同様の藩政時代の風俗を描いた資料は極めて稀である。この絵巻には『正月習俗の図』に三人の男が裸で鉢巻きと腰に前垂れの下がった注連縄を着け、先頭が鐘、二番目が三宝、三番目が「菅原」と書いた桶を持ち、裸足で歩いている姿が描かれ、そこに「裸まうて」と記されている。これについて三原は解説で「十四日の夜行はる、大崎八幡の松焚神事の裸参り」と記述している。(図1参照)

さらに本書に掲載された「仙臺年中行事大意」は二世十遍舎一九が江戸山崎屋清七から嘉永2年(1849)に刊行した「奥羽一覽道中膝栗毛」のうちの第四篇の仙台の年中行事部分を抜き出したもので、別名『奥州仙臺行事』とも呼ばれている史料である。ここには「十五日。大崎八幡宮。十四日夜より参詣群集す。この日、門松を八幡の社内にて焚失るなり。」と記載されており、これらの史料によってどんと祭と裸参りが、それぞれ藩政時代末期に遡れることが明らかにされた。

その後、昭和47年1月に仙台商工会議所が発行した「会議所ニュース」に掲載された「仙台の正月 幕末の正月行事」で、時代的に嘉永より遡ると見られ、一説には文政13年(1830)ともいわれる仙台市博物館所蔵の燕石斎薄墨の「仙府年中往来」が紹介された。紹介者は元宮城県図書館長で仙台郷土研究会会長の佐々久で、その内容は「十四日ハ松を曳きて(中略)同日夜から十五日昼まで大崎八幡宮参詣群集」と記されている。但し「仙府年中往来」に関しては、この模写を掲載して藩政時代の年中行事等を詳しく紹介した小西利兵衛の「仙臺昔話電狸翁夜話」(大正14年4月発行)には、8月15日の大崎八幡神社祭典の賑わいの記述はあるものの、正月のどんと祭に関する記述が全く見当たらないのが気になる点である。

さて、これらの史料とともによく引用されるのが昭和6年10月に宮城県教育会から「宮城教育」の特集号として発行された「郷土の伝承」第1輯に収録された『封内年中行事』である。この編者は不明であるが記述内容は「仙臺では十四日から暁かけて大崎八幡宮に焚松祭を執行され、途も社もうづまるばかりの盛況である、中にも数百人の裸体詣りが神鈴を鳴らして雪を踏んで寒風の中を進むのが威勢よく見られる、之等を暁詣でといふてある。」となっている。

どんと祭の民俗学的研究 このように藩政時代末期にまで遡ることが確実などんと祭であるが、その発祥についての民俗学的な研究は意外なほどに少ない。戦前では昭和15年2月に仙臺観光協会が発行した「仙臺の年中行事」で「松焚(どんと)祭」に特に解説がつけられている。この解説の筆者は不詳であるが、前記の『奥州仙臺行事』や『封内年中行事』を引用して「門松、年繩を大崎八幡神社境内で焚くことは武家でも商家でも一様に行はれた行事であつたものと考へられる」とし、さらに「(門松を)七日或は十四日に撤した時、そのまゝにしては汚すやうな恐れがあつて川に流すとか、浄火で焼く習ひが生じて来た。(中略)民間で松飾りや、しめ縄を焼くことも昔は各自の家々でしたのだが、サンギッチョの児童遊戯に誘はれて「守貞漫稿」にある如く(中略)諸河岸に持ち出して共同に焼く風となり、その児童遊戯が廃れてからは一は火の用心等の関係から著名な神社、鎮守の境内などへ持ちよつて焼くドント祭の風俗と変じて来たものであらう。」と記している。

戦後は高度成長のもとで各地の民俗行事が急速に衰退に向かつていった。このため文化庁が昭和37年度から39年度の3か年計画で全国的な民俗資料一斉調査を行った。その後全国各地の民俗調査や研究の成果を都道府県別の「日本の民俗」として出版することとなり、宮城県分については昭和49年7月に竹内利美を著者として第一法規出版から「日本の民俗 宮城」が出版された。その中の正月行事の項目に「仙台市内でも正月飾りは十四日まで残し、同夜大崎八幡社の祭りの庭に持参して焚く。(中略)この祭りをドントサイと呼ぶのは大正期以後の通称で、古くはマツタキ(松焚き)であった。宮城県下には他地方のトンドのような松焼きの正月送りは仙台市の大崎八幡社以外にはないらし

い。ほとんどが屋敷神（明神さま・ウチガミ・稲荷さま）に納め、あるいは屋敷内の明きの方の木に納めている。」とし、大崎八幡宮のどんと祭は、宮城県内で極めて孤立した祭りであると結論付けている。

これに対して大崎八幡宮では「参拝のしおり」（平成17年版）において「当宮の松焚祭は三百年の歴史を有す全国でも最大級の正月送りの行事で、正月飾りや古神札等を焼納する正月送りの行事であり、当宮においては「松焚祭（まつたきまつり）」といいますが、他地域では一般に「左義長（さぎちょう）」、又はその火の勢いから「ドンド焼き」等とも呼ばれております。」と記している。さらにどんと祭のパンフレット「どんと祭 裸まいるの御案内」（平成16年版）の中では「どんと祭は、本来当社に於いては松焚祭（まつたきまつり）と言って居りましたが、一般には、左義長（さぎちょう）と言う正月の行事です。また松飾りなどを焚く火の勢いから、トンド、ドンドなどともいわれ、サイノカミの信仰と相俟って、サイト、サギッチョなどとも言われます。これは、古来より我が国で行なわれていた神事ですが、それが“サギチヨウ”と呼ばれるようになったのは、中国の風俗を取り入れからの事のように思われます。」としている。300年の歴史といったことの根拠は全くふれられていないが、松焚きの行事の由来を中国の古代行事に求める主張の背景には、佐々久が昭和36年1月発行の「宮城縣史12（学問宗教）」の『神社概説』に掲載した記述や、昭和63年1月に「仙台商工会議所月報」に掲載した『どんと祭考』で「上元節の燈節は漢民族の祭りとして民間に続けられた。日本でも年中行事として各地に伝わり、九州北部では左義長、南部では爆竹とワラを束ねてホケンギョウとして形式を保ち、（中略）仙台のドント祭は、中国の燈節兒から伝わった語源をもとにして呼び習わされたのであろう」等と書いたことに影響されているとも見られる。

一方宮城県内には数少ないとは言いつつも、正月飾りを焼く行事が山間部の七ヶ宿町や仙台市の大倉地区、加美郡などに残されている。それとの関係や都市と農村部との違いなどに注目する民俗学研究が、近年発表されている。小野寺正人は平成16年5月に新人物往来社から出版された「宮城県の不思議事典」の『大崎八幡宮の「どんと祭」はなぜ始まったのか』で、大崎八幡宮のどんと祭と七ヶ宿町の「サイドヤキ」の類似性をとりあげ、「七ヶ宿町は近世の参勤交代のために開設された街道であったので峠越しに山形や福島の影響を受けてこれらの行事が行われていたものであろう。」とした上で「近世の城下町として発展した仙台は住民の正月送りの形態として「八幡堂の松焚き」をしだいに盛りあげ、「どんと祭」にしたものであると見られる。」とし、近世期の人的交流と仙台の都市的性格がどんと祭を作ったと考察している。

また三崎一夫は、平成12年3月に宮城県教育委員会が発行した「宮城県文化財調査報告書第82集 宮城県の祭り・行事」の解説文『宮城県の行事』の中で、大崎八幡宮の「この地はかつて市街地の北西隅にあたり、全くの推測であるが、もともとは町はずれで正月飾りを燃やすことがあって、やがて当社の神事に組みこまれたのではあるまいか。」とし、それが全県的に普及したことについては「現今では農村部であっても住居は近代風に改められ、屋敷の隅に正月飾りが放置されたままでは好ましくなく、それに正月のものは粗末にできないという感覚もあって、早々に処分したいという意識から違いない。いずれ民俗習俗が短時間に変化した一例である。」としている。

この平成12年3月に宮城県教育委員会が発行した「宮城県文化財調査報告書第82集 宮城県の祭り・行事」の報告書本編には『大崎八幡宮のどんと祭』についての従来にない画期的な報告が佐藤雅也によって執筆されている。この中で佐藤は従来のどんと祭をめぐる史料に加えて、明治以降の新聞記事を検索し、どんと祭という名称が定着していく過程やどんと祭そのものが大崎八幡宮から他の神社仏閣の祭りに拡大・拡散していく様子を明らかにした。

さらに本調査実施中の平成17年9月に、本調査の中間報告ともいべき論文が仙台市教育委員会文化財課主事で、民俗学研究者の中富洋によって発表されている。論文は東北学院大学民俗学OB会

が発行した「東北民俗学研究」第8号所収の『大崎八幡宮の松焚祭の祭礼的な特質について』と題された原稿用紙40枚程のもので、藩政時代から現代までの史料や新聞記事、大崎八幡宮の「参詣のしおり」から消防局の「どんと祭消防特別警戒結果」に至るまでの資料20点について紹介し、それに論考を加えていったものである。史料の中には初出となる藩政時代の「大崎八幡宮神主 沼田豊前正『大崎八幡宮年中行事』(大崎八幡宮蔵・未刊)」も含まれており、現状においては最も精緻な論考である。この論文所収の史料は、本調査と共有することになっていたが、中富は残念なことに本調査実施中の平成18年1月21日に病で急逝し、資料だけが我々の手元に残されている。中富の論考の主旨はどんと祭の持つ都市型祭礼の性格を明らかにしようというものであり、それは明らかに本調査の方向と一致する。中富はいわば本調査のうちの大崎八幡宮に直接関係した文献的資料の収集と解析を担っていたのであり、それに対する見解は今後のどんと祭調査にひとつの指針を与えるものである。論文掲載誌と遺族の了承を得て、少し長くなるが中富論文の結び部分の一部を以下に転載する。

中富洋『大崎八幡宮の松焚祭の祭礼的な特質について』所収の『むすびにかえて』

「(前略) 祭礼の変遷過程の概要は次のように整理される。

近世末(一八三〇年代まで) この時期には(中略)一月十四・十五日に多くの参詣があったことが記されているが、松焚きについての記載はない。可能性として、この参詣はあかつき参りで、松焚きそのものはまだ存在していなかったことも想定される。

近世末(一八四〇年代中葉以降) (略) この時期にはあかつき参りと併せて、松焚きと裸参りの所在が確認される。少ない資料からの推測になるが、一八三〇年代から同四〇年代中葉にかけて、何らかの契機で松焚き、裸参りが付加された可能性も想定される。いずれにしても、現在の松焚祭の形態の上限期となっている。

近代(明治時代～昭和二〇年) 明治時代以降の仙台市は東北地方の中核都市としての性格がより明確となり、各種官公署、学校、事業所や軍事施設が集中して近代都市としての体裁を整えていくが、この都市の拡大に併せて松焚祭も一層の拡充がみられ、「どんと祭」の呼称を定着させつつ、仙台を代表する祭礼となっていく。また大正時代以後は、開催場所の拡大化もみられるようになり、大崎八幡宮以外の寺社でも松焚きの行事が行われるようになる。

なお、この時期の松焚祭の祭礼的特質は、当時宮城県下で広く行われていた小正月の暁参りを基盤としていることである。つまり構造的には、主たる「あかつき参り」に「松焚き」と「裸参り」が付随していたものとみることはできないだろうか。

また、この時期の特徴として特筆すべきことは、不特定多数の都市住民の参詣者で維持・拡大したことや、松飾の回収を行う(ママ)請け負うものの存在、また花柳界の参詣などに、いわゆる都市的な性格がうかがわれることである。

現代(昭和二〇年以降) 仙台の市街地は昭和二十年の空襲で荒廃するが、終戦後は新しい社会体制下で急速な戦後復興が図られ、戦前同様に東北地方の中核都市として拡大を続けていくこととなる。大崎八幡宮の松焚祭(どんと祭)は、神社の聞き取りによれば、終戦の翌年昭和二十一年の一月にも実施されており、それ以後も景気の拡大や都市の拡充と併行しながら、いっそうの隆盛をみることとなる。昭和三十から四十年代にかけては、十五～二十万人の参詣者を集める祭礼に成長し、「どんと祭」の呼称も完全に定着して、仙台を代表する祭礼として定着するようになる。

なお、戦後のこの時期は社会変革に伴ってさまざまな民俗が大きな転換がみられることはよく知られているが、仙台地方の小正月行事にも明瞭な変化があり、従来一月十五日に行われたあかつき参りの習俗も廃絶の傾向をたどることとなる。これに伴って大崎八幡宮の松焚祭(どんと祭)の参詣の様相にも大きな変化が表れている。神社の聞き取りによれば、昭和三十年代半ば頃までは、十五日の明

け方まであかつき参りの参詣で混雑が続いたが、これ以降はその様相に変化がみえ始め、夜半以降の参詣者は極端に減少し、現在に至っているという。現代の松焚祭では、従来は祭礼の基盤ともなっていた「あかつき参り」の性格が失われ、松焚きと、裸参りが主要な構成要素となったものとみられる。大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）を民俗行事として見たとき、この変化は見逃すことのできない画期として位置付けされよう。

またここ数年、日本の社会形態には大きな変容がみられ、それを象徴するもののひとつが地方分権の考え方である。従来日本の地方都市の経営は中央政府に依存する形で維持されてきたが、社会状況の変化により財源も含めた独自性が求められるようになってきている。この過程で従前の日本社会ではみられなかった都市間競争がいつそう激化する状況となっており、これを克服するための戦術としてのシティーセールスの強化や、街自体の活性化を図るいわゆる地域起こし事業の振興は、地方都市の重要な政策課題となっている。この過程において、地域の個性を反映すると考えられている「伝統文化」はその重要なツールとして利用される傾向にあり、現実には仙台市においても、どんと祭をはじめとして仙台七夕や、すずめ踊り、仙台城跡などの「伝統文化」は仙台という都市の個性を象徴する顔として、さまざまなプランや都市PR、そしてその周知を目的とするメディア素材のプロローグとして頻繁に使用される事例が目立っている。このような近年の状況も、どんと祭の現代的な変容の一種として理解すべきかもしれない。

ここまで、近世から現代に至る大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）の変遷と特質についての概観を行ってきたが、これらを集約すると、この祭礼を読み解くキーは「都市」という概念に集約されるのではないかと考えている。この祭礼は一貫して、近世に成立した「都市」としての仙台の環境下において生成され、変容を続けながら今日まで継承されてきたもののようにみえるからである。内田忠賢は都市の特性として「多様な価値観を許容して、新しい価値を生み出すこと」、「血縁・地縁的ではない、社縁的・選択縁的な結合契機の役割が大きいこと」などを指摘し、また都市の民俗のパターンのひとつとして「村落出身者が都市に移住後、彼らの持つ民俗文化が残存あるいは変容したもの」をあげている（二〇〇〇『日本民俗大辞典』など）。

先述したように、大火で松飾を焼き上げて正月を送る行事は地域の民俗的な背景からみると一見異質なものに写るが、内田が指摘するような「都市」の概念を基盤にして捉えなおせば、その特性のラフスケッチの輪郭が浮かび上がってくる。この祭礼を改めて構造的に分析し、「あかつき参り」、「松焚き」、「裸参り」など、祭礼の主要な構成要素について、その出自も含めた詳細な検討が今後の課題であるといえるだろう。」

（3） 裸参りに関する先行研究

裸参りの起源や推移についての研究は、どんと祭の研究そのものに比べてもさらに少ない。前項の大崎八幡宮のどんと祭のパンフレット「どんと祭 裸まいるの御案内」（平成16年版）では「二百五十年余の歴史をもつ、全国でも最大級の正月神送りの神事である大崎八幡神社（ママ）の松焚祭裸まいるは、神々が神の国へ登られるための炎を目指し、厳寒の中、裸で参られるものですが、前述の通り、寒の仕込みに入る酒杜氏の新酒の吟醸祈願のための神詣でありました。」と記しているが、250年という歴史の根拠はない。

裸参りの初出史料は前項の「仙臺年中行事繪巻」（嘉永3年（1850）頃）の『正月習俗の図』に描かれた「裸まうて」の絵図である。これについて三原良吉は解説で「十四日の夜行はる、大崎八幡の松焚神事の裸参り」と記述しているが、その根拠は示していない。この絵巻と一緒に掲載された「仙臺年中行事大意」でも「十五日。大崎八幡宮。十四日夜より参詣群集す。この日、門松を八幡の社内

にて焚失るなり。」と記載されているが、裸参りが来ていることには触れられていない。この史料によって言えることは、藩政時代末期の正月に裸参りが行われていたことは明らかであるが、まだ日時や場所は不明である。

次に「仙臺年中行事繪巻」の3人が杜氏あるいは酒屋である点についてであるが、三原良吉は特に言及していない。しかし3人目の男の持つ桶に書かれた「菅原」の文字は、万治3年(1660)に仙台でも最古参の市中酒屋として創業した国分町の酒造家菅原家(銘柄名「千松島」)であると推定されることや、明治期以降今日に至るまで造り酒屋の裸参りが裸参りの原点であると広く信じられ、また多くの造り酒屋に裸参りの伝統が残されていることから、ほぼ確実であろうと見られている。この点については菊地勝之助が昭和39年に郵辨社から刊行した「仙台事物起源考」の中の『どんと祭(松焚祭)の由来』の中で「仙臺年中行事繪巻」に載せてある裸参り姿は、今より約百余年前、仙台北下国分町酒醸家菅原屋(今の千松島醸元菅原家の先代)が醸造の安全を祈願された際のものであるという。」と記載している。

裸参りの性格については、酒屋であれば酒造の安全祈願ということになるのだろうが、酒屋以外に広がるとするならば、そこには何らかのご利益を保証する「謂われ」などがなければならない。その点で注目されるのは昭和6年の「郷土の伝承」第1輯に収録された『封内年中行事』で、「数百人の裸体詣りが神鈴を鳴らして雪を踏んで寒風の中を進むのが威勢よく見られる、之等を暁詣でといふてゐる。」との記述は、「アカツキマイリ」という習俗と裸参りの習合を意味すると考えられ、裸参りが造り酒屋の酒造安全祈願を離れて、様々な団体や個人による「参拝行事」の一形態と化していったことの裏づけとなっている。

裸参りの拡大の様子について宮城県が企画し昭和59年5月に宝文堂から出版された「ふるさとみやぎ文化百選 まつり」で、監修者の佐々久と竹内利美は「この裸参りは造り酒屋の「杜氏連中」が素裸の腰に注連飾りを下げただけで鈴を鳴らしつつ寒風について参拝し醸酒祈願をしたのがはじまりであるが、その勇壮な姿がどんと祭の呼びものになって、近年は市内の商店・会社からも数十組が繰り出し、どんと祭にかかせない景物となっている。」と記している。

裸参りは年々拡大傾向にあり、最近では大崎八幡宮以外の神社のどんと祭でも裸参りの姿を見ることがようになった。また大崎八幡宮には芸者衆などの水商売の女性の裸参りや、戦時中には「出征者の為め尽す婦女子」の裸参りを掲載した新聞記事が見られることを、平成12年3月に宮城県教育委員会が発行した「宮城県文化財調査報告書第82集 宮城県の祭り・行事」の中の『大崎八幡宮のどんと祭』の項目で佐藤雅也が報告している。また佐藤雅也はこの報告の中で「なお、現在、南部杜氏の里、岩手県紫波町の志和八幡宮(一月五日の五か日祭)や盛岡市盛岡八幡宮(一月十五日)には「裸参り」の行事が伝わっている。文化年間以降には、杜氏、蔵人が仙台地方へ冬場の出稼ぎにくるようになるが、大崎八幡宮の松焚祭における裸参りが、これらの南部杜氏、蔵人たちによって広められたのではないだろうか。」として、南部地方の正月行事の裸参りとの関連性について言及している。

これらの先行研究を踏まえて、今回の調査においては、藩政時代の他の寺社への正月の裸参りの事例も検討対象とした。例えば『仙台始元』では、「木下薬師の通夜 木下祭祀の事は三月にあり堂塔の真圖は爰に出す 正月七日の夜諸人群をなして木下薬師に賽す是を七日堂と云通夜する者多し 夜籠りといふ寒候薄衣を着て詣る者あり裸参りといふ」とある。これについては後に論じることとする。

また造り酒屋における裸参りの聞き取りを得た株式会社一ノ蔵社長の桜井武寛氏(昭和19年1月生)によれば、彼の実家である東松島市(旧矢本町)河戸の造り酒屋「桜井商店」(銘柄名「菊水」現在「一ノ蔵」に経営統合)では、50年ほど前には地域ではどこも小正月どんと祭をやっていなかったが、8人いた南部からの蔵人が大晦日の深夜に、地域の鎮守である「須賀神社」に裸参りに行っていた。蔵元は一切関わりなく、蔵人だけの行事であった、とのことである。

(4) どんと祭の名称についての先行研究

どんと祭の名称をめぐっては、これまでの先行研究はいずれも藩政時代に遡るものではないとし、大正時代以降に「ドントサイ」と呼ばれるようになったとしている。例えば昭和49年7月に竹内利美を著者として第一法規出版から出版された「日本の民俗 宮城」の正月行事の項目では「この祭りをドントサイと呼ぶのは大正期以後の通称で、古くはマツタキ（松焚き）であった。」とし、また仙台市史編さん委員会が平成10年3月に発行した「仙台市史特別編6 民俗」でも「ドント祭 正月十四日の宵から翌暁にかけて大崎八幡宮の境内で行われる小正月の行事である。「ドント祭」の呼称は大正期以後のことで、古くは「松焚き」といった。」としており、これはほぼ定説と見なされている。

どんと祭の名称の由来については、平成12年4月に発行された「日本民俗大辞典」で倉石忠彦が「とんど 小正月の火祭行事。ドンド、ドンドヤキ、ドンドンヤキなどとも呼ぶ。（中略）トンド、ドンド系の呼び名は全国的に見られる」とし、民俗行事の一般名称であるとしている。また大崎八幡宮発行のパンフレット「どんと祭 裸まいるの御案内」（平成16年版）では「松飾りなどを焚く火の勢いから、トンド、ドンドなどともいわれ」とし、さらに昭和27年3月に仙臺市役所が発行した「仙臺市史6 別編4」に所収された藤原勉の『仙臺方言』では「ドンドセー どんとさい ドンド祭。焚火祭。左義長。正月十四日の夜、大崎八幡神社其他の神社境内に行われる、松飾を各自持参して行って火にくべる火祭りの行事。京都でドンドといい、他地方ではドンドンヤキ、ドンドヤキ、ドンドーなどという。」として「ドントサイ」は「ドンド」の転訛した方言とのとらえ方をしている。このドンドからドントへの転訛は、その後ろに付く「サイ」の前には濁音が付かないという音韻上の必然であるとの見方もある。

このように「ドント」を自然発生的名称あるいは一般名称とする説に対して、民俗学研究者の三崎一夫は、昭和48年3月に発行された「宮城縣史21（民俗）」所収の『年中行事』の中で「十四日の夜、「八幡堂の松焚き」といって、松飾りを大崎八幡社の境内へ持って行って焚く。（中略）この行事は現在ドントサイと呼ばれているが、大正時代に某社が宣伝のため関西のトンドを真似て移したのが訛ってドントとされたものである。」と記している。さらに三崎は平成4年8月に桜楓社から発行された「祭礼行事・宮城県」の中でも「現在の「どんと祭」は、大正期に同様の行事を関東以西でトンドとよぶことに倣ったがドントとされて定着したものである。」とし、どんと祭の名称が人為的につけられたものであるとの見方を示している。

一方どんと祭の名称の定着の過程について、平成12年3月に宮城県教育委員会が発行した「宮城県文化財調査報告書第82集 宮城県の祭り・行事」の中の『大崎八幡宮のどんと祭』の項目で佐藤雅也が、また平成17年9月に東北学院大学民俗学OB会が発行した「東北民俗学研究」第8号所収の『大崎八幡宮の松焚祭の祭礼的な特質について』で中富洋が、それぞれ明治時代以降の仙台市内で発行されていた新聞記事を検索し、どんと祭の名称の初出と定着化の状況を検証している。この中で佐藤と中富がともに注目したのは、仙台市内で発行された日刊紙の「河北新報」の明治39年1月14日と明治41年1月14日の記事であった。そこで問題とされている明治39年と41年の河北新報の記事を改めて検証してみる。

大崎八幡の松炊祭（まつたきまつり）仙台古来の慣例 起りは慶長十二年より

今夜は例年の通り大崎八幡社の松炊祭（まつたきまつり）だが戦争のお正月故松取め方々のお礼詣などもあるべく常には倍して賑はう事だらうと思ふ△色々の旧慣例が年々に廢れて行くにも拘はらず、此の松炊祭（まつたきまつり）許りは少しも変る事なく、年々盛んになるので、仙台市内は申すに及ばず、宮城名取の郡部からも態々松取めに來る△金儲けには抜目のない世の中、近頃では

荷車や荷馬車で各戸の松を集む神楽囃で収めに来るものもある、追々は松取請負株式会社と云ふのが市内に出来るかも知れぬ△扱此松炊祭（まつたきまつり）と云ふは東北では珍しい慣例であつて六県下何処にも此習しがないのみならず、仙台藩でも唯此城下の仙台許りで行はれて居つた習慣である△夫に就いては何か面白い縁起でもあることかと調べて見ると別段何と云ふ事でないが此松炊祭の抑々の起りに就いて少し許り聞き込んだ事を書いて見よう△一体此大崎八幡の落成は慶長十二年であつて青葉城よりは五年後れて出来上つた、最も此の社の元を尋ねて見ると、最初は遠田郡八幡村に在つたので、八幡太郎義家の建立したのだとか云ふ話である、義家の子孫が下総国大崎郡に禄を食んだので大崎の名が此八幡様にも附いて来、夫から飛び々に飛んで仙台の八幡様も大崎八幡と云ふ事になった、政宗公が岩手山に城を築いた時遠田の大崎八幡を岩手山に移し、仙台に城を築いてから又此地に移したのなそうだ△エライ由来記を述べて了つたが、遠田に在つた時も岩手山に在つた時も、此松炊祭（まつたきまつり）と云ふ者はなかつたが、此地に移つた即ち落成の年慶長十二年に始めて此松炊祭（まつたきまつり）が起つた、初めは至つて微々たる者であつたが年増に盛んになつて来たとの事である△然らば此慣例が突然何処から移つてきたかと云ふに夫れは漠然として取り留めた事は判つて居らぬ△併し正月の松を焼くと云ふのは、清浄な者を汚しては成らぬとの考から起つた事で、朝廷の古い儀式にも見えて居り、又九州地方では一般に正月の松を神社の境内で焼くか是をドンドと称えて居る、ドンドと云ふ事は歳時記にも見えて居るから発句を作る人は知つて居る△つまり大崎八幡の松炊祭（まつたきまつり）も即ち此ドンドであつて其神体が宇佐八幡の分身故九州の方の習慣が何かの場合に此仙台に紛れ込んで古来の慣例（ママ例カ）となつた者と見える△夫は兎に角にとして若い人方などは炬燵に這入り込んで居眠りしているより今夜は大崎の松火にあつて身を浄めるのも結構な事と思はれる△夜は何でも五時頃から焚き始めて九時十時頃が一番盛んに燃え、後はトロトロ火が明くる朝迄残つている

「河北新報」明治39年（1906）1月14日

大崎八幡の松炊祭（トント）

今夜は例年の通り大崎八幡神社の松炊祭（まつたきまつり）だが此松炊祭（まつたきまつり）と云ふのは当大崎八幡でばかり執行するので東北地方では多く其の例を見ない凡ての旧慣例が年とともに廃れ行くにも不拘この大崎八幡でやる松炊祭（まつたきまつり）のみが反対に其起源の当時より日に月に盛んになつて行く此松炊祭（まつたきまつり）は何年前から行はれてあるか其本社とも云ふべき遠田郡田尻町字八幡なる郷社大崎八幡神社では此旧慣はないそれから見ると其後のものであらう政宗公が岩出山に遠田の八幡から大崎八幡を遷宮したが間もなく仙台に城を築かれてから当市に移した岩出山邊の神社の何処にも此松炊祭（まつたきまつり）と云ふはない此起りは慶長十二年に始めて起つたので仙台に移されてからなのである此慣例は慶長十二年に至つて突然起こつたが問題であるが委しいことは漠然として取り留めた事は判つて居らぬが多分九州地方からの習慣が何らかの場合に紛れ込んだのか又は政宗公が持つて来られたのかの二ツにほかならぬのである九州地方では一般に正月の松を焼くと云ふて清浄なものを汚してはならぬと云ふ処から起こつた事で朝廷の古い儀式にも見えて居る大崎八幡は其神体が宇佐八幡の分身故自然政宗公が加へたのであらう九州地方でやる松炊祭（まつたきまつり）は歳時記にも見えて居つて旧き習慣である朝廷では御神楽などの時に禁中の庭上に焼く篝火がある之れを庭燎と云ふて居るが庭燎の起源は芝居即ち俳優と其の起源を同じであつて天照皇太神が天の岩戸に隠れさせ玉へる時天の細女命が可笑しく面白き手振足踏をして歌ひ舞ひて神の御心を和げ楽しませた時に庭燎を焚いたに起因して居るそれを神事に用いたのが今の松炊祭（まつたきまつり）の時にも行ふやうになつたのである神楽が廃れて清浄なる松を汚ざる為めと云ふ処にばかり重きを於いて来たのらしひ今宵は定めて賑わふ事であらう（白村）

「河北新報」 明治41年(1908)年1月14日

上記の引用記事の()内はルビであり、明治41年の記事の最後の(白村)は署名である。この資料について佐藤雅也は「宮城県文化財調査報告書第82集 宮城県の祭り・行事」中の『大崎八幡宮のどんと祭』で、「明治三十九年一月十四日「河北新報」の記事をきっかけに、「どんと祭」という表記が登場してくる。」として当時の記事から「大崎八幡の松焚祭も即ち此ドンドであって其神体が宇佐八幡の分身故九州の方の習慣が何かの場合に此仙台に紛れ込んで古来の慣習(ママ)となった」を引用している。さらに佐藤雅也は「明治四十一年一月十四日「河北新報」では「大崎八幡の松焚祭(どんとさい)」「松焚祭(まつたきまつり)」「八幡祭」が併記されだす。」としたうえで、以後の河北新報紙上には「松焚祭(どんと祭)」の名称が使われ、「大正八年以降になると、「松焚祭(どんとさい)」、「どんと祭」、「ドント祭」と表記され、大正時代にはすっかり「どんと祭」という呼称が定着していった。」としている。

また中富洋も「東北民俗学研究」第8号所収の『大崎八幡宮の松焚祭の祭礼的な特質について』で、新聞資料を検証した結果として「明治十一年から三十八年までは、「どんと」の呼称がみられないこと。明治三十九年の(資料)記事で初めて「松焚祭」の呼称が使用され、また併せて九州の正月行事の「どんと」の例を引き、大崎八幡宮の松焚祭がこれと同様の性格のものであるとの解釈を示している。この記事は明治四十一年の(資料)とともに、「どんと祭」の呼称の起源を示唆するものとして特に着目される。「どんと祭」の名称は、これ以後大正時代にかけて徐々に定着していく様相がうかがわれるが、この呼称は当時の新聞記事に端緒のある可能性も想定されよう。」と記述し、新聞記事の果たした役割が大きいとの見方を示している。

なお三崎一夫は、平成12年3月に宮城県教育委員会が発行した前述の「宮城県文化財調査報告書第82集 宮城県の祭り・行事」の解説文『宮城県の行事』の中で、「現在の名称は「どんと祭」であるが、民俗語に付された「祭」が漢音なのは不自然であり、神道的な命名であることは明らかである。」と解説し、人為的命名説を補強している。

第4節 どんと祭の諸相

本節は、近世文書や明治以降の地方新聞記事等を文献資料として、近世から明治大正期を経て昭和前期までのどんと祭の諸相を編年的にたどる。その作業を通して現在の話者からの聞き取りによっては手の届かない、あるいはかろうじて手が届いても輪郭の不鮮明な「どんと祭」の前史を、歴史的にたどるための基礎資料の整理を目指している。

中富洋が指摘するように、現在「大崎八幡宮の松焚祭(どんと祭)」として催行されている祭礼と、多くの人々によって参加享受されているその祭り習俗は、「一貫して、近世に成立した「都市」としての仙台の環境下において生成され、変容を続けながら今日まで継承されてきたもの」である。それゆえ今後の課題として、「この祭礼を改めて構造的に分析し、「あかつき参り」、「松焚き」、「裸参り」など、祭礼の主要な構成要素について、その出自も含めた詳細な検討」が欠かせない(註1)。ここではその提起を受け、(1)大崎八幡宮の神事としての松焚祭と参詣者の歳事としての暁参り、(2)大火で松飾りを焚き上げて正月を送る行事としての松焚き、(3)大崎八幡宮の松焚祭の呼称として広く普及しているどんと祭、(4)どんと祭に欠かせない習俗として定着している裸参り、そして(5)かつては松焚きと併存連携して一連の「後の正月」風景を形成していた「若年」の行事と八幡さまの祭り縁日の姿について、前記の資料を編年的に整理し、どんと祭前史を通観する基礎作業としたい。

この資料整理作業の論理的端緒は、もとより「大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）」として我々が目にしている現在の祭礼とそれにまつわる民俗が、歴史的に形成され変遷してきた事象であることに他ならない。したがって本節の記述は、現在の呼称とその概念によって資料を解説することを戒め、資料における語彙とその指示する内容に寄り添うよう努めた。また地方新聞記事の資料としての利用にあたっては、地域民俗の変化を対象として記述することにより自覚化し、なんらかの解釈を加えることによって新しい意味を付加し、そして地域民俗の担い手である読者に発信していくという、地方新聞がもつ媒体としての特性にも留意したい。

なお、本書の末に付した「【資料集】・大崎八幡宮の松焚祭と裸参り」は、本節の記述の基礎資料となった近世文書や地方新聞記事等の資料集成である。したがって、本節では総括的に資料内容を通観するにとどめ、その詳細は同資料集にゆずる。なお、照応する資料集の資料番号を付して相互参照の手がかりとした。

(1) 大崎八幡神社の祭礼と暁参り

江戸期 藩政時代の近世文書のうち、正月14日宵から15日にかけての大崎八幡宮への人々の参詣を記述しているのは、資料1『仙臺始元』（以下資料番号のみ資料名の語頭に付す）、3『大崎八幡宮年中行事』、6『仙府年中往來』、7『仙臺年中行事大意』の4点である。

このうち、3『大崎八幡宮年中行事』のみが神社側資料で、14日日没前から松の内が明ける15日未明まで禰宜全員が本殿に詰めて「常」の神事を行うこと、従ってその間本殿には「神燈十二燈」が灯され当番所には炭薪が焚かれること、寛延年間（1748-1751）頃から参詣人が年ごとに増加して「大勢参詣」という文化年間（1804-1818）当時の現状に至ったことが記されている。作者の大崎八幡社神主沼田豊前正にこの経緯を語り伝えたのは、叔母聲で同じく同社祠官をつとめた沼田若狭であった。若狭によれば、14日宵から15日の神事は「自分御神事」ではあるが、豊前の祖父沼田出雲守の代頃から当日の参詣人が増え始め、詰めていた当番人が神燈や神酒などを献じて接待の便宜をとったため参詣者は年ごとに増加し、禰宜全員が本殿に詰めて神事を行っているため、「世間」では公式の「御神事」と伝え広め、さらに多くの参詣者が詰めかけるようになったという。翌15日は八幡社の月次例祭の祭日でもあり、この14日宵からの神事は「松明」を迎える社家内の夜籠り儀礼であったと考えられる。

1『仙臺始元』は3『大崎八幡宮年中行事』とほぼ同年代の、6『仙府年中往來』と7『仙臺年中行事大意』は数十年後の大崎八幡に「参詣群集す」様子を簡潔に伝えている。とくに1『仙臺始元』はその賑わいを活写しているが、大崎八幡社の八月例大祭を「八幡祭式」と記すのに対して、正月14日は「大崎八幡神賽」「大崎八幡に夜賽す」ともっぱら参詣者側からの記述であるのは3『大崎八幡宮年中行事』の記述と呼応しているように思われる。

明治期 明治期最初に刊行される「仙臺日日新聞」とその後継紙である「陸羽日日新聞」は明治11年から15年までの仙台を拠点とする唯一の地方新聞である。「仙臺日日新聞」に4点（資料10,14,15,16以下資料番号のみを記す）、「陸羽日日新聞」1点（18）、正月14日の大崎八幡社に関する記事が見られる。明治11年の記事（10）のみ新暦で、後（14,15,16,18）は旧暦の正月14日を取材している。明治11年1月15日の10「仙臺日日新聞」に「大崎八幡の祭禮」とあり、明治12年2月5日の14「仙臺日日新聞」に「大崎八幡神社の祭典」と見える。残りの3点の記事には「祭禮」「祭典」の記述はなく、「一昨夜は舊正月十四日に當るゆゑ」「一昨、夜は舊正月十四日なれば」と正月14日という「後の年取り」の当日であることが大崎八幡に参詣群集することの自然な由縁として理解され

ている。

明治16年から24年までは「奥羽日日新聞」が唯一の新聞資料となるが、「奥羽日日新聞」に12点(19,22,25,27,29,30,32,33,34,36,37,38)大崎八幡参詣の記事が見られる。そのうち新暦14日に当るものが7点(19,22,27,32,33,36,38)、旧暦14日に当るものが5点(25,29,30,34)で、同じ年の新旧暦とも参詣者の賑わいが伝えられ、この時期まで新旧二回の大崎八幡への参詣が行われていたことが見てとれる。さらに明治17年2月13日の25「奥羽日日新聞」の「一昨夜は舊暦正月十四日に當りしとて(略)賑ひは新暦に倍せし」などの記述から、旧暦行事への人々の愛着が根強いことがうかがわれる。

これらの記事のうち、明治18年2月25日の29「奥羽日日新聞」に、「来る廿八日は旧暦正月十四日に當るに付八幡町大崎八幡社に於て例の如く祭典執行せらるゝ由」とある他は、大崎八幡社の祭典についての記載はなく、残り11点の記事は14日宵から15日暁方まで大崎八幡に参詣することを「暁参詣」「暁参り」と呼称し、多くの記事はその見出しにも「暁参り」を掲げている。「奥羽日日新聞」はこれ以降一貫して、新旧暦とも「暁参り」の呼称を使用し、好んで記事の見出しとしているが、明治19年1月16日の記事(33)で市内櫻ヶ岡神社と神宮教会所、明治17年2月13日の記事(26)で名取郡笠島道祖神社、明治19年2月21日の記事(35)で名取郡館腰神社と道祖神社、明治16年2月26日の記事(21)では福島県福島町での霊山など、大崎八幡社以外の暁参りの賑わいをもたびたび取り上げている。

さらに正月14日から15日にかけての仙台市域の正月習俗全体を「若年」の行事ととらえ(20,27)、暁参りをその一連の風景の一齣として位置づけている。明治17年1月16日の記事(22)に「○一昨夜の景況 その模様こそ異(かは)れ是は孰れの地方にも有我國の舊習にて正月十四日の夜は當仙臺地方に手は持ち打と稱へ物好なる騒客(ひとひと)は思ひ思ひに奇様の装束をなし祝ひのためとて甲家乙戸(そこここ)を廻りて種々の狂藝妙技をなし人をして驚を喫し腹を抱かしむ(略)借(さて)また八幡なる八幡社への参詣人は悪路なるにも拘はらず陸續と押し出して年始の飾り松等携へ來り社内へ堆たかく積み之を焼き終夜人の絶えざりしは是も又當地の舊慣とこそは知られたり」とあり、この時期同紙はこれら伝統行事に対して「當地方の舊習として」(23)「風習は未だ去らず」(26)などの常套句を多用している。これらの記事の背後には、一連の伝統行事が大きく変化しようとする兆しを自覚し、一方で未だ変化していない事象を伝統的な語彙によって明確に名付けることにより対象化しようとする、同紙記者の媒体としての自覚が一貫しているように思われる。

明治25年から34年までは、「奥羽日日新聞」の他に「東北新聞」「東北日報」「仙臺新聞」「奥羽新聞」そして「河北新報」など多くの地方新聞が創刊され、多彩な記事資料が残されている。大崎八幡参詣の記事は31点(39,40,43,45,48,49,51,52,54,58-72,74,78-83)見え、そのうちの「東北日報」4点(45,48,54,59)、「東北新聞」5点(63,66,69,74,81)、「奥羽日日新聞」1点(72)が「八幡神社の祭禮」「八幡社の祭典」に言及しているのに対し、「奥羽日日新聞」「東北新聞」「東北日報」の記事13点(39,43,49,50,51,52,58,62,64,65,70,78,79)は大崎八幡参詣を引き続き「暁参り」「暁詣で」ととらえている。

これらの記事の中で、明治29年1月12日の63「東北新聞」は「●八幡神社祭禮 當市大崎八幡社は來十四日夜祭りにて松納め翌十五日は本祭なり」と十五日の本祭に対して十四日が夜祭りでありまた松納めの日であるとする。これは正月14日の大崎八幡参詣を「松納め」「注連納め」と呼称する新聞記事の初出であり、以降「仙臺新聞」「東北新聞」「河北新報」などにも多用されるようになる。明治30年1月14日の69「東北新聞」にも「●八幡神社祭禮 本晩は正月十四日俗に松飾り奉納と唱ひ八幡町同社の夜祭りなり」とある。神社祭禮の本祭と前夜の宵宮、そしてそこに集う参詣者の歳事としての松納めという理解の構図を、最も簡潔に表現している。なお、明治30年に「河北新報」が創刊されるが、明治32年1月13日の78「河北新報」では「●大崎八幡の暁祭り 來る十四日の夜より十五日に掛け八幡町の大崎八幡宮に於て例年の通り暁祭を執行し」と、「暁祭り」という呼称

を使用しているのが注意される。

明治35年から明治末年までは、「河北新報」2点(84,100)と「東北新聞」2点(99,106)に大崎八幡神社の祭典についての言及がある。一方「暁参り」の呼称は少数例(85,109)を除きほとんど姿を消す。明治37年1月15日の100「河北新報」では「●八幡神社の國威宣揚祭 當市八幡町鎮座の大崎八幡神社に於ては例年の通り昨日松焼例祭(せうせうれいさい)を行ひ併せて全國神職會決定の趣旨に依り國威宣揚祭を営みたる處」とあり、それまで「祭禮」「祭典」とのみとらえられてきた神事に「松焼例祭」という理解が示されている。翌明治38年1月14日の105「河北新報」では、「●大崎八幡神社の祭典 當市大崎八幡神社にては今十四日例年の通り松納めの祭事を執行す」と、参詣者側の時事である「松納め」という意味づけが神社側の神事の性格づけに反映している。翌明治39年1月14日の108「河北新報」と同年1月16日の110「東北新聞」がともに「大崎八幡の松焚祭(まつたきまつり)」「大崎八幡祠の松焚祭(まつたきさい)」の呼称を始めて使用する。以降多くの記事(109,115,119,124)に見るように「松焚祭」の呼称は「どんとさい」の呼び名と連携して定着し継承されていく。

大正昭和期 大正2年から7年までの「河北新報」が現存せずこの期間の新聞資料が欠落しているが、大正8年以降は「大崎八幡の松焚祭(どんと祭)」の呼称はすでに確立され、大正期の「河北新報」記事はほとんど「松焚祭(どんと祭)」の名称で神社側神事も周辺の祭り習俗も含めて呼称されるようになる(125-129)。

昭和期に入ると一連の「河北新報」記事(130-143)に見られるように、「どんと祭」「ドント祭」の名称が「松焚祭」の文字から自立して使用され始め、昭和10年代には表記として一般化し、特に神事を指し由緒を述べる時以外は「松焚祭」の名称は使用されなくなる。

(2) 松焼き・松納め・松焚き

江戸期 近世文書のうち、大崎八幡社の境内で正月の門松注連縄などを焚火で焼く習俗の初出は、嘉永2年(1849)成立の7『仙臺年中行事大意』であり、近世の記録では現在のところこれが唯一の資料である。そこには「○十五日大崎八幡宮十四日夜より参詣群集すこの日門松を八幡の社内に焚失(たきすつ)るなり」とのみ記され、この門松焼きが、なんらかの神事をともなう神社側の行事であったのか、社家内部の焚上げを参詣者にも開放したものなのか、参詣者への接待としての焚火に松納めの松が次第に投げられるようになったのか、この資料だけからは確定できない。ただ先述のように、文化年間(1804-1818)成立の『大崎八幡宮年中行事』によれば、正月十四日宵からの神事は本来参詣者に対する公式の神事ではなかった。そうであればこの松焼きも、参詣者の増加が神社の自覚的主導ではなかったように、神社側のなんらかの便宜提供に端を発した、参詣者からの自然発生的習俗ではなかったかと考えられる。

明治期 江戸から明治にかけての町場・市域において、門松注連縄の処理がなんらかの課題になっていたことをうかがわせる新聞記事が、明治期を通じて散見される。明治11年1月21日の11「仙臺日日新聞」に、石巻の火事騒ぎの記事がある。巡査や消防が半鐘を聞いて駆けつけてみると、「火事ではなうて例の頑的連が五幣を擔出し門松やら七五三繩やらを焼捨居た」と判明する。当時の都市部において松飾りや年繩の適切な処理が、火災の危険を負った課題になっていたことを示している。同時に旧習を守る人々「頑的連」は、以前から松飾りなどをそれぞれが焼き捨てることによって処理してきたことが示唆されている。同じ記事の結びに「今頃は廳下邊では斯んな事はありますまいと石巻

の伊志嘉波さんから申して來たるが廳下にもまだまだ」とあることからすると、仙台市域でも個人が私的に松を焼き捨てることは、好ましくないにせよ実際は行われていたと考えられる。

すでに江戸期から江戸市域では松飾りを焼き捨てる「どんと」は火災の危険から禁止されていたが、伊達藩政期の仙台市域も何度も大火に見舞われて広範囲の被害を被っている。当然私的な松焼きは禁忌され、なんらかの公共的松飾り処理が考案され普及していたものと考えられる。明治32年1月15日の79「東北新聞」に、「●大崎八幡暁参り 來十四五兩日大崎八幡宮にては例の通り松焼無代價執行」とあり、明治45年1月14日には「●八幡神社松焼祭 (略) 因に松メ繩等は毎年の通り無代價で焼却す可しといふ」とある。明らかに有償の松焼き・松処理の存在が前提されている。そうした状況が、明治39年1月14日の108「河北新報」の「△金儲けには抜目のない世の中、近頃では荷車や荷馬車で各戸の松を集む神樂囃で収めに來るものもある、追々は松請負株式會社と云ふのが市内に出来るかも知れぬ」という記事の背景になっていよう。

正月14日の大崎八幡参詣を取り上げた明治25年までの新聞記事の中で、当日松飾り注連縄を境内で焼いている記述が現れるものは3点(17,22,27)、決して頻出するとは言えず、大崎八幡参詣の記事が毎年現れる中ではごく稀である。さらに新聞記事としての初出である明治13年2月26日の17「仙臺日日新聞」の記事は、当夜の士族と鋸職人の若者同士の喧嘩の詳報の情景描写として記述されており、「松焼き」を大崎八幡参詣という正月行事の眼目として取り上げているのではない。それに対して明治17年1月16日の22「奥羽日日新聞」と明治18年1月16日の27「奥羽日日新聞」は餅搗き・繭玉・鳥追い・持打ちなど一連の「若年」の正月行事の一環である暁参りとして大崎八幡参詣を意味づけ、そしてその暁参りに欠かせない景物の一つとして境内での松焼きを記述している。そうした記述の背後にうかがわれる同紙の媒体としての自覚については先述したが、それ以降明治25年まで「松焼き」への言及は見られない。

それが明治26年1月17日の48「東北日報」に「○八幡神社の祭禮 去る十五日は當市八幡町大崎八幡神社大祭日にてありければ前日の宵祭の如き老幼男女の人出夥しく(略)社前には例年の通り四方より持來りたる門松を燃しければ炎焰天を焦し其賑はしさ言はん方なかりし」と松焼きの記述があらわれてからは、次第に頻度を増して言及されるようになる。またここでの「炎焰天を焦し」という表現は、やはり明治末頃から大正期に増加してゆき、昭和期に頻出するようになる類型表現の初出である。

そしてそうした門松を携えて大崎八幡に参詣し境内の焚火に松を投じるという習俗に対して、明治29年1月12日の63「東北新聞」は「松納め」と名づけ、明治30年1月14日の67「仙臺新聞」は「門松納め」と一般化している。この「東北新聞」の記事が新聞記事における「松納め」の初出と思われるが、以降明治30年代の「東北新聞」を中心に「松納め」「注連納め」の呼称が常用されるようになり(69,81,83,85,90,91,99,101,104,105,107,108,109,112,120,123)、やがて明治37年1月15日の101「奥羽新聞」と明治38年1月14日の105「河北新報」にも「松納め」の呼称があらわれる。しかも先述のように、明治37年1月15日の100「河北新報」では、それまで「祭禮」「祭典」とのみとらえられてきた神事に「松焼例祭」という理解が示され、翌明治38年1月14日の105「河北新報」では、参詣者側の歳事である「松納め」という意味づけが神社側の神事の特長にも「松納めの祭事」として反映している。翌明治39年1月14日の108「河北新報」と同年1月16日の110「東北新聞」がともに「大崎八幡の松焚祭(まつたきまつり)」「大崎八幡祠の松焚祭(まつたきさい)」の呼称を始めて使用し、以降「松焚祭」の呼称は「どんとさい」の呼び名と連携して定着し継承されていくことも先述した。また大正昭和期以降の変遷についても前項の記述を参照されたい。

こうした新聞記事の編年的変遷は、もともと市域での松飾りの適切な処理として機能していた松焼きの習俗が、「若年」の行事の一環である「松納め」として明確に捉え直され、さらにそれが神社の

神事から周辺の祭り習俗まで含めた祭行事全体の呼称である「松焚祭（どんと祭）」として明示範囲を拡げて、地方新聞という媒体により提起され普及定着していく過程を浮かび上がらせているように思われる。

(3) どんと・どんとまつり・どんとさい

江戸期 遠藤日人（-1836）は、諱は定矩（さだのり）、通称は清右衛門・伊豆之介、字は文規、号は日人、知行高一〇五石の仙台藩大番士で、漢詩・書・俳画・長刀をよくした。文化文政期（1804-1830）を中心に活動した当時の仙台俳壇を代表する俳人である。その『日人句集』の春の部に「どんと焼く里はしらみて鴨歸る」の句がある（4）。また、日人と並ぶ同時代の俳人松窓乙二（しょうそうおつに）の『乙二句集』にも、「あの畑はしつけぬ麥かどんと焚」の句が見える（5）。乙二は、庵号が松窓、俳号が乙二。刈田郡白石の千手院という修験の家に生れ、父について俳諧を学び、奥羽俳諧の四天王と称された。日本各地を旅し、蝦夷までも足をのぼし、各地の俳人と交流を持った。これらの句は、仙台の俳壇においてはすでに藩政期から、「どんと」の語が季語として違和感なくなじんで使われ、その語の担う特定の習俗が句想の素材として生きていたことを語っている。

仙台藩領内には歌枕の地と伝えられる景勝地が多く、江戸期を通して多くの俳人たちが来仙して塩釜や松島をめぐる吟行し、土地の俳人たちと交流して俳諧の座を設け、多くの紀行や句集を残している。寛文2年（1662）の西山相因『陸奥塩竈一見記』、元禄2年（1689）の松尾芭蕉『奥の細道』もそうした流れの中に位置づけられる。また来仙する俳人の中には大淀三千風や渡辺雲裡坊のように仙台に長期滞在して多くの門人を育てる者があられ、そうした系譜を伝えつつ、領内各地の俳人達を含みつつ、仙台俳壇は形成されていった。文化文政期（1804-1830）には句作を生活の中で楽しむ層が厚みを増し、江戸の蕉風俳諧が伝えられ、仙台の俳人も藩外各地の俳人との広い交流の中で作句の想を練ることになる（註2）。

そうであれば、他郷の地域性を色濃く担った季題・季語に関する知識も、作句の素養として備えられねばならない。江戸期の「俳諧歳時記」類の隆盛は、地域を横断した作句の共通基盤を培おうとした各地の俳人たちの熱意が支えていたにちがいない。これら江戸期の歳時記の系譜には大きく二つの系列が見られ、一つは貞門系の伝統的な季題・季語集である「季寄せ」であり、もう一つは近世中期以降における本草学や地誌の隆盛に呼応した生活百科としての「歳時記」である。他郷の地域習俗の考証に必要なのは后者であり、その中で江戸から明治にかけての代表書が嘉永4年（1851）刊、滝沢馬琴編・藍亭青藍補『増補俳諧歳時記栞草』（以下『栞草』）である（註3）。

『栞草』では春の部に「三毬打（さぎちやう） 左義長（さぎちやう） どんと 爆竹（はうちく） 吉書揚（きつしょあげ） 菱の葩（はなびら）をほこらす」の項がある。以下には『徒然草』『和漢三才図会』『荆楚歳時記』等を引いて各語の原義を考察し、最後に「凡、民間十五日の朝、毎家の飾藁松竹を取収め、一処に集めて焼之、止牟止（トムト）とす。児童の試筆（かきぞめ）の書を天に上ぐ。○武江にては官禁ありて爆竹（さぎちやう）をせず」と編者の考察と当時の実状を注記している（註4）。

明治期 先述のように、「松焚祭（まつたきまつり・まつたきさい）」という呼称の新聞記事における初出は、明治39年1月14日の108「河北新報」と同年1月16日の110「東北新聞」である。そしてこの「河北新報」の記事に、「又九州地方では一般に正月の松を神社の境内で焼くか是をドンドと稱えて居る、ドンドと云ふ事は歳時記にも見えて居るから發句を作る人は知って居る△ツマリ大崎八幡の松焚祭（まつたきまつり）も即ち此のドンドであって」とある指摘が、「松焚祭」と連携して「どんと祭」という呼称が広く普及する一つの端緒になったことは間違いない。

ただ、伊達藩政期の俳人遠藤日人と松窓乙二の句に「どんと」「どんど」の季語が織り込まれていることからすれば、明治期の俳壇においても同様であったと考える方が自然である。そのことは、明治30年から40年にかけての正月の俳句欄に類出する、「どんど」「とんと」「左義長」を季語とする一連の作句がなによりも明かにしている(77,86,88,89,97,98)。特に明治36年1月23日の97「河北新報」の俳句欄に、「清秋會句録」と題された6名による13句が掲載されているが、そのうち「どんど」の季語を織り込むもの3句、「左義長」の季語を織り込むもの3句で、半数近くの句が「どんど」「左義長」の習俗を取り上げている。また句の内容から「どんど」の内容は神社境内での松飾焼きであり、日付から考えて14日の大崎八幡境内の松焼きに句会として吟行した時の一連の作句であろう。それに対して明治36年1月1日の88「河北新報」に掲載する「新年海」と題する6名による10句には、「海暮て丘に小きどんと哉」の1句だけが「どんど」の季語を折り込んでいる。10句それぞれの「新年海」の情景がさまざまであることから、「新年海」という季題を与えられて各人がそれぞれの作句を寄せた題詠であることがわかる。そしてこの一句の中で「どんど」に詠み込まれている意味は、明かに神社境内の松焼きなどではなく、野外の焚火であり野焼きであると読み取る方が作句の情景と情感にふさわしい。おそらく、少なくとも「河北新報」に投句する当時の俳人たちの用法では、「どんど」と「左義長」には意味に広狭の差があり、「左義長」は松飾り注連縄を焼き上げる正月行事だが、「どんど」の意味用法は、さらに正月の野外での焚火・野焼きという広がりをも許容している。

なお、「河北新報」は明治30年の発刊時から仙台の俳壇と深いつながりを持っている。発刊当時の家庭文芸欄担当は佐藤紅緑、記者には俳人の近藤泥牛があり、二人を中心として正岡子規の俳句革新運動に呼応した俳句会「奥羽百文会」が結成された。「河北新報」創刊号の文芸欄には、同会の第一回句会の作句が「同行四人」の題で掲載され、二人の句も紅緑・鬚男の名で見えている。紅緑と泥牛はその年のうちに退社するが、明治30年代には習俗故事や文芸の特集記事を「國分坊」のペンネームで書いていた佐藤豹五郎がおり、彼は明治36年1月1日の「河北新報」5面に「大淀三千風と其の後継者」、翌明治37年1月1日の「河北新報」30面に「はいかいの字義に就いて」という俳諧の特集記事を「國分坊」の名で執筆している。また明治39年2月10日の「河北新報」では、旧暦元日にちなんで「五十年前の仙臺(一)正月の行事」と題し、藩政時代の仙台藩士の正月行事について詳細に紹介している。佐藤豹五郎の関心と得意分野の在処がうかがえる(註5)。佐藤豹五郎は、後に『宮城県史』14巻(1987宮城県史編纂委員会)の「俳諧研究篇」を分担執筆している。

こうした「河北新報」の家庭文芸欄の流れの中に、正月14日の大崎八幡についての「どんど」の初出記事も位置している。それは明治35年1月15日の84「河北新報」に「境内はどんど火(ひ)の焰(ほのふ)熾んに暗(や)みを照して鈴の音かしましかりき」と、何の説明もなく「どんど火」と熟して現れる。この記事だけ取り上げると唐突ではあるが、仙台の俳壇では江戸期から「どんど」の季語が使われていたこと、「どんど」には野焼きの情景をも許容する意味の拡がりを感じられること、そして仙台の俳壇と深いつながりを持ち習俗故事にも関心を寄せている「河北新報」の紙面に現れた記事であることを考えると、それなりの系譜を持つ語として了解される。

同様に、正月14日の大崎八幡境内での松焼きを「松焚祭」と名づけ、九州地方の松焼きである「ドンド」と等質の正月行事として並立させた、明治39年1月14日の「河北新報」の記事も、「ドンド」なる新規の呼称を唐突に提出したものではない。それは、俳壇の人々に意味のゆらぎを伴って使われており、紙面の俳句欄にもしばしばあらわれる、「どんど」なる不鮮明な語をその原義から解説し、その「どんど」を仲立ちにすることで、仙台市民になじみの深い大崎八幡の松焼き習俗を他地方の類似習俗によってより自覚的相対的に捉え直そうとする記事であったろう。

その後、翌明治41年1月14日の114「河北新報」にも「大崎八幡の松焚祭(トント)」の見出し、類似の論旨で「白村」署名の記事が見える。それ以降「河北新報」は、一貫して現在まで「松焚祭」と「ど

んどさい」の呼称で大崎八幡の松焼きの記事を載せるようになり、同時に「火炎は天に押し」(120)「松焚(どんど)の火煙が天を焦がし」(125)等、松焚きの火勢の壮観さを描写する類型表現が紙面に頻出するようになる。

大正昭和期「河北新報」における「松焚祭」と「どんとさい」の呼称は、明治末期から大正期にかけては「松焚祭」に「どんとさい」のルビを付した形であられる。ただ、明治期ははまだ「どんとさい」のルビは確定しておらず、「どんど」「とんと」「どんどさい」「どんとさい」などのゆらぎがあり(114,115,120,121,123,124)、それが大正期に入るとほぼ「どんとさい」に収斂される(125,126,127,129)。さらに昭和期に入ると「松焚祭」から離れた仮名書きの「ドント祭」「どんと祭」が次第に多用されるようになっていく(131,133,134,139,140,141,143)。ただ大正昭和期になっても、写真のキャプションや商店の大売り出し広告などに、「どんど祭り」「どんと祭」の呼称があらわれ、当時発音されていた音韻の実際をうかがわせる(註6)。

また松焼きの火の呼称は、昭和6年1月16日の132「河北新報」で「天を焦がす浄火炎々」という表現で「浄火」が以降一般化し(135,140)、昭和13年1月15日の134「河北新報」以来「御神火」も多用されるようになり現在にいたっている。

(4) 寒参り・裸参り・薄衣参り

江戸期 安永～文化年間(1772-1818)成立の2『仙臺始元』に、「木下薬師の通夜 木下祭祀の事は三月にあり堂塔の眞圖は爰に出す正月七日の夜諸人群をなして木下薬師に賽す是を七日堂と云通夜する者多し夜籠りといふ寒候薄衣を着て詣る者ある裸参りといふ」とあるのが、仙台周辺における「裸参り」を記録した初出資料である。

嘉永年間(1848-1854)成立の絵図資料8『仙臺年中行事絵巻』には、「裸まうで」と題した三人の男の姿が描写されている。装束は三人ともに裸体裸足で、頭には白鉢巻を締めて後ろの結び目に松を差し、腰には藁の下がりやを腰蓑状に巻きつける。先頭の男は片手に鈴を持ち、二人めは三宝に載せた供え餅を抱え、三人めは酒桶を肩に担ぐ。桶には「菅原」の文字が見え、國分町の酒造家菅原甚左衛門家をあらわすと考えられる。家伝によれば菅原家は万治三年(1660)創業の酒造家で代々甚左衛門を名乗り、現当主は十代目、銘柄は「千松島」である(註7)。

これら二点の資料を比較すると、『仙臺始元』の裸参りが「薄衣」を身に着けているのに対して、『仙臺年中行事絵巻』では文字通りの裸体裸足である点において、明らかな装束の相違が認められる。

江戸期に各地に流行した「裸参り」と呼ばれる寒修行をかねた寺社参詣は、各地の地誌紀行にも記録されている。天保7年(1836)刊の鈴木牧之『北越雪譜』初編卷之下には「雪中の寒行者」の項がある。

雪中の寒行者

我が家に江戸に二たとせ居たる僕あり。かれがかたりしに、江戸に寒念仏とて寒行をする道行者(どうしんじゃ)あり。寒三十日を限りて、毎夜鈴ヶ森、千住にいたり刑死の回向(えこう)をなす。そのすがたは股引(ももひき)・草鞋(わらんづ)にてあたたかに着てつとむるなり。また寒中裸参(はだかまゐり)といふあり。家作にかかはるすべての職人の若人らがする事なり。そのすがたは、常より長く作りたる挑灯(ちょうちん)に日参などの文字を太くするしたるを持ち、裸にて□(れい)をふりつつとくはしりて、おもひおもひにころざすい所の神仏へまゐるなり。まるんとする時は、かならず水を浴ぶ。寒中の夜は、幾人(いくたり)も西東へはせありくとかたれり。我が国の寒行は事はこれに似て、その行ははなはだ異なり。我が国の寒行は所

として雪ならざるはなく、寒気のはげしきことはまへにいへるがごとし。その雪をふみて毎夜寒念仏、または寒大神まゐりとて、寒中一七日或いは三七日、心に日をかぎりておのれが志す神仏にまうづ。おほくは農人(のうにん)の若人(わかうど)ら、商家のめしつかひもあり、昼は業(いとなみ)をなして夜中にまうづるなり。昼のいとなみのあひあひ日に三度づつ水をあぶ。なほあぶるは心々なり。禁じて身を拭(のご)ふ事をせず、ぬれたるままにて衣服(きるもの)を着(ちゃく)す。坐するには米稿(いねわら)の穂の方をくくしたるを扇のやうにひらきてこれに坐す(このわらは七五三(しめ)のこころとぞ)。かりにも常のごとくには居らず。このゆゑにこの束ねたる稿(わら)は帯にはさみてはなたず。また、行の中には無言にて一言もいはず。また母のほか妻たりとも女の手より物をとらず。精進潔斎は勿論なり。他の人も、彼が腰にはさみたるわらを見て行者なる事をしり、むごんなれば言葉をかけず人々つつしむ事なり。これはもし、行者にことばをかけ、行者あやまってことばをいだけば行破れたるゆゑ、はじめより行をしなほすゆゑなり。また無言の行はせざるもあり。さて夜に入れば千垢離(せんこり)をとり、百度目に一遍づつかしらより水をあぶるゆゑ、十遍水を浴ぶ。身のごはずきるものをあらため、雪ふらずとも蓑笠なり。あるいはいかなる雪荒にもいとふ事なく鉦(かね)うちならしつゆく。これにはかならず同行のものある故、そのかどにいたりてかねをならせば、同行も家にありてかねをうちあいさつとして出できたる。家に入らざるものは、この行者女に『行きあへば身のけがれとして川に入り、または、井戸をこふて水をあぶる事まへのごとくして身をきよめ、さてまゐるなりこのゆゑに行者の鉦の音をきけば女はすべて門へはいでず、道にあへば遠くにかねのおとをききてかくるなり。行の内人の死したるをきけば、たとひ二里、三里ある所とても、つねに知る人知らぬ人を論ぜず、志願の所にまうでたる帰るさなど、その家にいたりねんごろに回向す。これも行の一つとす。さるゆゑに、不幸ありて日のたたぬいへにては、行者のきたるをまちてもものくはせんなど、いかにも清くして待つなり寒念仏・寒大神まゐりの苦行あらまし件(くだん)のごとくなれば、他国はしらず、江戸の寒念仏裸まゐりに比ふれば、はなはだ異なり。かかる苦行をなすゆゑにや、その利益(りやく)の灼然(いちじるき)事を次にしるしつ。苦行して折れば、いづれの神仏も感応ある事を童蒙に示す

なお『北越雪譜』には次に「寒行の威徳」という項があり、寒行者を害そうとした者が神罰を被ったという当時の実話が記録されている(註8)。

『北越雪譜』が伝える江戸の「寒念仏」と「裸参り」については、歳時記や年中行事記の類にも記載されている。天保9年(1838)刊『東都歳時記』の「十一月 寒の入」の項に、「○寒中水行(但し、冬の内も出る)、寒念佛出る。○神佛裸参り、なかんづく中の郷の太子堂へ作事の諸職人夜中参詣す」とある(註9)。寒念仏については『江戸府内絵本風俗往来』に「寒の入より諸寺院の僧、老壯とも未明に起きいで、冷水に身を清め、念仏三昧の寒行を勤む。なかには毎夜鉦を打ち鳴らし市中を修行す。これを寒念仏といふ。誠に心さむしき趣して、聞くも寒きを覚えたり。僧は木綿の衣一枚に法衣を着し、足袋などは用ひざるなり」と、裸参りについては『江戸府内風俗往来』に「諸職人の弟子小僧は皆、十ヶ年の年期中にその職業を覚ゆ。しかるに、手練手管意匠の難き、神仏の加護を得て、技倆人に秀でんことを望み、難行の発心、寒三十日の間、日暮るれば、主人より少時間暇を乞ひて、水垢離をなし、身を清め、裸、素足にて白木綿の鉢巻し、長堤燈を携へ、鈴を打ち鳴らして不動尊、さては金比羅大権現に発願し、一心に技倆の成功を祈るなり」と、その風景がこまやかに語られている(註10)。

また先に引いた嘉永4年(1851)刊『栞草』の冬の部には、「寒念仏(かかねぶつ)」と「寒垢離(かんどり)」の季語を載せている。

寒念仏(かかねぶつ) [滑稽雑談] 伝へ聞くに、往古にはなかりしことなり。京、田舎にて、僧俗に限らず衣、寒三十日暁天に及びて、山野に出、高声に念仏を唱ふ。これを寒念仏といふ。近

年宝永に及びて、京の在俗、男女老幼を隔てず、五三昧廻りとて、寒夜に鉦をならず行粧（ぎゃうさう）、暄（かまび）すし。

寒垢離（かんごり） 修験の徒、寒中、道路並に橋の上に立て、水を浴び銭を乞ふなり。是を寒垢離といふ。是、寒中の水行（すいぎょう）なり（註11）。

以上の近世資料から、天保～嘉永年間（1830-1854）の江戸では「寒念仏」と呼ばれる念仏行者の寒中修行と、「裸参り」と呼ばれる作事に関わる職人の若者たちによる寒中の寺社参詣祈願が流行していた事が分かる。「寒念仏」は保温に充分な着衣に草鞋履きか、木綿の衣一枚に法衣を付けて素足の薄着姿、「裸参り」は裸体裸足に白鉢巻を締め長堤燈を手に持ち、ともに夜半に鈴を振り鳴らしながら行われる。「寒念仏」は刑死者の回向なども行い、「裸参り」は参詣前の水垢離を伴う。また天保年間（1830-1844）の越後塩沢でも「寒念仏」「寒大神まゐり」と呼ばれる寒中の精進潔斎を伴う寺社参詣が、農家や商家の若者によって盛んに行われていた。こちらは蓑笠を付け、やはり夜中に鈴を鳴らしながら参詣し、日常的に水垢離をとり女性との接触を断ち無言の行を貫くなど、厳格な精進潔斎を伴っている。無言の行であることと、「七五三（しめ）」に見たてた藁坐を常に帯に挟んでいることが注意される。

一方仙台では、江戸での裸参り流行と同時代の嘉永年間（1848-1854）「裸詣で」と呼ばれる寺社参詣が正月の景物として描かれている。裸体裸足に白鉢巻を締め鈴を振り鳴らしている姿は、江戸の「裸参り」と同じ流行圏にある習俗であることを推測させる。ただ仙台での裸詣では、装束では腰に藁の下がり巻いており、裸参りの担い手の象徴として考えられているのは作事の職人ではなく、街中の酒造蔵に詰める若衆たちであった。さらに『仙臺始元』の木下薬師の通夜についての記述によれば、文化年間（1804-1818）には江戸の「寒念仏」に類する薄着での寺社参詣が行われ、それが「裸参り」の呼称で呼ばれていた。ただ仙台での両資料は、江戸の「寒念仏」「裸参り」のような、数日間連続して参詣する「日参り」ではないようである。江戸での寒念仏、裸参りの流行の始期が文化年間まで遡りうることと、仙台への流行の伝播とその模倣があったことが推測される。

明治期 明治11年から21年までの新聞記事で当時の「裸参り」にあたる習俗に言及する記事は6点（12,18,23,26,30,35）、そのうち新旧暦正月14日夜の大崎八幡参詣においては2点（18,30）、残りの4点（12,23,26,35）は宮城県内外の他寺社参詣における「裸参り」習俗の報告である。また6点の記事のうち4点（18,23,26,30）に「裸体参（はだかまる）り」の呼称が使われているが、装束についての具体的記述はない。「裸体参り」の呼称がない明治11年2月4日の12「仙臺日日新聞」には、老婆が「夜十一時とも覺ふしき頃急に水を被り薄き一重に着更へつゝ」とあり、明治19年2月21日の35「奥羽日日新聞」には、「いかなる立願ありてにや此寒中も厭はず單物（ひとへもの）一枚の参詣人を多く見受たりしと云」とある。この場合裸体ではなく薄い単衣の着物を身につけている。なお、明治17年2月13日の「奥羽日日新聞」には、「裸体参り」と並んで、「跣足参（はだしまる）り」の呼称もあらわれている。

大崎八幡社以外の寺社としては、仙台周辺では中山不動尊（12）、名取郡笠島村の道祖神社（26,35）、同郡館腰神社（35）、県外では山形市周辺の各社（23）が見られる。明治11年2月4日の「仙臺日日新聞」の媼の中山不動参詣記事は、毎夜水垢離をとって薄い単衣一枚で深更にかけて参詣するという形から、「寒念仏」にならう寒行を実践していた信神者があったことを伝えている。また明治17年2月13日の26「奥羽日日新聞」は、笠島の道祖神社の旧正月15日の暁参りの賑わいを活写しているが、太夫と呼ばれる神職による縁結びの占いに心躍らせて多くの若者達が未明に参詣し、そこにやはり若者の「裸体参（はだかまる）り」が参じている。両記事は鮮やかに、「寒念仏」と「裸参り」という二つの寒行が代表する類似習俗の持つ両面性を切り取っているように思われる。また、明治17年2月1日

の23「奥羽日日新聞」は、山形市の「二年参り」と呼ばれる旧暦大晦日から元旦にかけての寺社参詣を伝えているが、「中には裸体参（はだかまゐ）りとして查公（さこう）に認咎（みとが）めらるゝも見えたり」とあり、裸体による参詣が警察による風紀上の取締り対象であったことがうかがえる。明治27年1月14日の51「東北日報」にも「瘦我慢に齒を喰めて裸か参りするは違警罪の禁物なれば能々注意すべし」とある。

明治22年1月16日の36「奥羽日日新聞」が大崎八幡への暁参りの記事で、「中には如何なる立願のある難有連にや裸体参り又は薄着参りと唱ふる参詣人も六七名はありて」と「裸体参り」の別名として始めて「薄着参り」の呼称を使うが、それは裸参りをする参詣人自身の呼称であつたらしい。以降明治末年まで、裸参りを取りあげた記事は34点（36,38,39,50,51,54,58,59,61,62,65,79,80,81,82,83,84,85,86,93,95,105,107,109,110,112,116,118,121,123）、そのなかで「裸体参り」以外に、「薄着参り」（34）、「薄衣参（はくいまゐ）り」（79）、「薄衣参（うすぎまゐ）り」（80,84）、「跣足参（はだしまゐ）り」（83,112）、「寒参（かんまゐ）り」（83）、「白衣詣で」（109）、「寒詣で」（121,123）など、さまざまな呼称が使われている。

ただ、装束の描写は常に「白の鉢巻白装束弓張堤燈片手に」（123）という風姿であり、「男女の裸詣（はだかまゐ）り」の小見出しの下に「四五人宛組合をなし一様の提灯を手にし寒天に白単衣（しろひとへ）一枚洋禪（づぼん）と云ふ扮装にて」（110）とあることから、さまざまな呼称があれ、実態は白の単衣に白鉢巻の姿であつたと思われる。ただ白の単衣でも長着の単衣の場合と腰までの白い半纏や肌着の短衣の場合とがあつたようで、明治33年1月15日の「河北新報」のイラストでは長着をあわせ、明治39年1月14日の「東北新聞」のイラストでは白い半纏をはおっている。さらに腰に巻いた注連縄が最初に確認できるのは明治29年1月16日の65「奥羽日日新聞」の記事であり、口に噛む含み紙が最初に確認できるのは明治39年1月14日の「東北新聞」のイラストである。含み紙を噛みながら無言で静かに歩を進めるという様式は、明治においては必ずしも典型ではないようで、関の声を上げながら駆け抜けていく裸参りの若者の描写が、記者の現地報告記事にしばしばあらわれている。

明治44年刊の若月紫蘭著『東京年中行事』の一月曆には、明治期の東京深川不動での「寒詣り」の賑わいと活気がこまやかに描写されている。最後に紫蘭は「昔の寒詣は素裸でやったもので、その頃はむしろ裸詣りと言った。『東都歳時記』を見ると、神仏裸参り、就中中の郷太子堂へ作事の諸職人夜中参詣すと出ている。けれどもそれが許されなくなって、白鉢巻に白足袋白衣と変わったので」と解説している。仙台における「裸体参り」「薄衣参り」などの呼称の揺らぎも、裸体参詣の取締りにより白衣着用に移行した実態と「裸」の旧称との間に生じた意味の落差からくる揺らぎであつたと考えられる。また深川不動の裸参りでも、参詣者の若衆は「懺悔懺悔、六根清浄」を声高に叫びつつ駆け来たり、境内の井戸で「般若心経」や真言を唱えながら何度も水垢離を取るなど、無言の行としての要素は見られない（註12）。

大正昭和期 大正期の「河北新報」記事においても、「裸体参り」（126）、「寒詣で」（128）、「寒詣り」（125,129）「薄衣詣（はくいまゐ）り」（127）などの呼称が並行して使用されるが、昭和5年頃から「裸参り」にほぼ統一され、現在に至る。また「裸参り」が記事の見出しの中に始めて登場するのは、大正14年1月16日の「河北新報」の「昨夜の松焚祭 大崎八幡社の賑ひ 寒も詣りも多かった」からで、「裸参り」の写真が最初に掲載されたのは、昭和11年1月15日の「河北新報」である。当時境内には水垢離場が設けられていたらしく、禪一つで水垢離を取る男達の写真が白衣の裸参りの若者の写真とともに上下に並んでいる。以降ほぼ毎年裸参りの写真が掲載されている。

昭和期に入ると、松焚祭・どんと祭と裸参りは一組で祭事を中心として扱われるようになり、とくに昭和10年代から松焚きと裸参りに皇軍大勝や武運長久などの祈願を読み込む記事が多くなっ

ていく (135,136)。戦後は、昭和20年代半ば頃から一貫して裸参りを含むどんと祭を正月送りの伝統行事と捉え、餅花売りなどの江戸明治以来の小正月の伝統風物と連なる歳事として記述している (138,139,140)。

(5) 仙台市域の若年と八幡さまの祭り

天保年間 (1830-1844) には成立していたとされる6『仙府年中往來』は、「十四日ハ松を曳きて米玉の花を咲せ赦宣子ハ襟に□を懸晴着を飾り門に立て祝を得く夕べにハ餅打海鼠曳とて童共打群て是を引く同日夜宮より十五日迄大崎八幡宮参詣群集す」と、元旦と並ぶ「後の年越し」の目白押しの風物を数え上げている。それだけ14日から15日にかけては「若年」とも呼ばれる正月の大きな節目に当たるが、14日宵から15日未明にかけての大崎八幡参詣は「暁参り」と呼ばれてその「若年」の掉尾に位置づけられる。その歳事の構造は明治期にも基本的にはそのまま受け継がれている。

明治期仙台市域の一月十四日、伝統習俗に満ちていたろう「若年」は、閑雅な情趣がにじむ日であるよりは、開け広げな喧騒に満ちた一日であったようだ。年越しの餅を搗く杵の音、繭玉木を売り歩く近在農家の女性の売声、厄払いのために行者が吹き鳴らす法螺貝の音、法華信者の団扇太鼓の響き、鬼やらいのため何度も空に放たれる鉄砲の音、門ごとに餅貫いに歩く子供たちの掛合いの声、餅打ちチャセゴ暁参りと忙しげに深更まで行き交う人々の足駄の音、夜の白む頃そここで上がる鳥追いの声と、一日が喧騒を伴った習俗にすき間なく満たされている。14日宵から15日未明にかけての大崎八幡参詣は、「若年」の締めくくりとしての「暁参り」と捉えられ、その時正月の松飾りや注連縄を持ち寄る参詣者にとっては、それはまた「松納め」でもあった (10,14,22,57)。

仙台周辺でも、江戸期から暁参りで賑わう社寺がいくつかあり、岩沼の竹駒神社、塩釜の塩釜神社などは広く知られている。名取郡笠島村の道祖神社境内も正月15日未明は暁参りの男女で毎年雑踏するが、ここでは太夫様と呼ばれる神職が境内に詰めかけた参詣者の方を指差して男女縁結びの占いをするため、若い男女が連れだって参詣する。この道祖神社の暁参りに象徴的に見られるように、若い男女が夜を徹して連れ立って歩く事への寛容が、各地の暁参りに広く見られ、大崎八幡の暁参りも文字通りの老若男女が夜明けまで集う事が許容される場であった (26,37)。

仙台市域の若年の行事は、近在農村地域の女正月の行事と多くの共通習俗を持つが、市域特有の姿をとるものも少なくない。思い思いの仮装をして家々を訪れ、様々な持ち芸を披露して祝儀や馳走のもてなしを受ける「持打ち」も、料理屋・芸者置屋・貸座敷などが軒を連ねる常盤丁でのそれは、「三番叟茶番浅島忠信二十四孝其他」などで見物人が山をなしたという。広く周辺から市中に集まった専門の芸能者たちとそれを目当てに花町につめかける人々の姿がうかがわれる。市中の芸妓や幫間も年始と称してそうした芸能披露に加わっていたようである。「鬼やらい」の豆撒きも、國分町奈良屋のそれは、烏帽子を冠に威儀を整えた者が金平糖や蓬莱豆を撒くというので、これにも見物人が山をなした。目覚ましい見物が披露され、それが見物されることが、仙台市域の正月の醍醐味として享受されている (22,24)。

若年行事の最後が大崎八幡の松納めと暁参りだが、明治の早い時期から宵宮の縁日として賑わいがうかがえる。八幡町の参道沿いは軒提灯と珠燈がともされ、境内も大提灯と電燈で明るく、多種多様な祭り屋台がひしめき合った。見世物小屋も毎年数棟掛けられ、ジンタ・拍子木・三味線の音が屋台の客引きの声とともに、行きも帰るもままならない雑踏の中で喧騒をきわめている。松焚場は当時大杉に囲まれていたらしく、杉の梢を抜けて煙りと火の粉があがり、松納めの人々がしばらく大火を囲んでいる。境内も市中の道路も未舗装のため、厳寒の暁参りの時期は凍結し、参詣者はしばしば転倒するが、それ自体が暁参りの一つの景物として人々

に楽しまれていたようである。明治30年代、芝居小屋や芸妓屋などが荷車に松飾りを満載して神楽囃子や楽隊付きで松納めに乗込むことが流行し、中には松飾りで形作った軍艦を担いで松納めをする者もあった。芝居一座と芸妓達は参詣の華やかさでも参詣者たちの耳目を集め、揃いの赤い提灯に人力車を連ね楽隊を引き連れて乗込む壮士芝居の一座や、馴染みの旦那を引き連れて艶やかな芸者姿で参詣する芸妓達は、例年暁参りの見物の一つになっている。祭りの賑わいにつきものなのが掬摸や賽銭箱荒しと喧嘩騒ぎで、市中にも盗難や喧嘩などの警察沙汰が常に話題となり記事の素材となっているのである(17,39,74,78,83,84,86,91,93,94,95,102,110,121)。

註

1. 中富洋「大崎八幡宮の祭礼的な特質について」(東北学院大学民俗学OB会『東北民俗学研究』8 2005) pp.119-133
2. 仙台市史編さん委員会編『仙台市史 通史編5 近世3』(仙台市 2004) pp.351-364 第4節俳諧
3. 堀切実「解説」(『増補俳諧歳時記栞草』下巻 岩波書店 2000) p.552
4. 前記『増補俳諧歳時記栞草』上巻 pp.195-196
5. 創刊百周年記念事業委員会編『河北新報の百年』河北新報社 1997 pp.45-49; 金沢規雄「佐藤紅緑と仙台」(『ふるさとの文学史』第4号 平成12 東北文学調査会)
6. 大崎八幡社前の八幡町で生まれ育った昭和14年生れの男性話者によれば、子供時代、当時の年配者や近在の農家出身者は「どんとさい」ではなく、「どんどもつり」と呼びならわしており、年配者や市外の者が使う古風な言い方のように感じていたという。また宮城県の各地で行われている松焼き習俗の呼称の中で、「どんどもつり」「どんどもつり」などが確認される。刈田郡蔵王町宮では「ドンド焼き」(『ふるさとみやぎ文化百選 まつり』1984)、桃生郡河北町飯野川では「ドンドン祭り」(『わがふるさとの飯野川』1965)、加美郡中新田町では「ドンド祭り」(『中新田町史』1964)などが報告されている。メディアによって普及した「どんと祭」とは別の「どんと」の系譜があることを推測させる。
7. 佐々久『國分町と菅原家』宝文堂 1984
8. 朝倉治彦編『日本名所風俗図会 1 奥州・北陸の巻』角川書店 1987 pp.48-49
9. 斎藤月岑 朝倉治彦校注『東都歳時記3』平凡社 1972 p.57
10. 前記『東都歳時記3』p.58 註6
11. 前記『増補俳諧歳時記栞草』下巻 p.374
12. 若月紫蘭 朝倉治彦校注『東京年中行事1』平凡社 1968 pp.99-101

第2章 どんと祭の変容と展開

第1節 仙台地方の正月送り行事

(1) 正月送りの様相

宮城県内における「松納め」「正月飾り送り」は、一般的には暮れに「明きの方」の方角から松の枝を伐り出し、それを使って神棚や玄関の「松飾り」を作ることから始まる。そして正月を迎え、14日まではその松飾りをそのまま飾っておくことが通常であった。

1月14日夜に、家中の松飾りは家長あるいは家督息子の手によってはずされる。それは束ねられるが、そのうち神棚などに飾られた注連縄に付けられた御幣は別にされ、深夜に家長か家督息子は庭に出て、長い竿の先にその御幣を取り付け、それを振り回しながら「ヤーハイ ヤーハイ」と唱えて「鳥追い」をする。

翌15日は家族で朝に「あかつき粥」を食べ、それから「ウチガミ様」や「鎮守様」などに「アカツキマイリ」に行く。前日はずされた松飾りは、その際かあるいは早朝に家長や家督息子の手によって、裏山や「明きの方」の立ち木に結び付けられたり、「ウチガミ様」の祠の前に置かれたりして、やがて朽ち果てていく。

このような「松納め」「正月飾り送り」は、昭和40年代までは仙台市郊外を含めて宮城県内に広く分布していた。これに対して松飾りを焼くどんと祭は仙台市街地、それも大崎八幡宮に限定された行事と見なされてきた。第1章で述べたように、先行研究の多くがそのような立場をとってきたのである。それが現在は宮城県内各地ともどんと祭一色になってしまった。仙台市郊外での、どんと祭以前の典型的な「松納め」の事例を報告する。

仙台市泉区古内、若生家の松納め 仙台市泉区古内の賀茂神社では、本章第3節の(7)で詳述するように、昭和40年代の終わり頃からどんと祭が始まり、現在ではどんと祭の人数が1万8,000人と、泉区内で最も賑やかなどんと祭が行われている。その主役は初めは神社周辺の住宅団地の住人であったが、現在では古くからの地域住民もどんと祭で正月飾りを焚いており、昔のやり方を守っている人はほとんどいないと見られている。しかしそれは比較的最近のことであり、どんと祭の主催者である賀茂神社の氏子でさえ、昭和30年代までは昔ながらの小正月行事と松納めをおこなっていた。

賀茂神社の氏子総代長で仙台市泉区古内の農業、若生勝勇さん(昭和5年1月生)方では、正月の松飾りは暮れの12月30日に自宅の裏山に入り「迎えて」来た。松は「三蓋松」になっているものを伐りだし、枝を少し落として玄関に飾った。落とした松の枝は神棚に飾った。その日は自宅で注連縄を緋い、御幣と昆布をつけて玄関の松と神棚に飾った。これらの松飾りは1月14日まで飾っておいた。

1月14日は、朝に家督息子が風呂に入り、裏山からミズキと栗の木を伐りだして来た。「若木迎え」と言っていた。ミズキの木には梗米の粉で作った団子を「刺し」た。栗の木は7本か9本の枝のあるものを伐り出し、平たい小判形の餅を刺した。また14日の朝に玄関と神棚の松飾りはずした。注連縄の御幣はずし、松と注連縄は丸めて玄関などに置く。それらはどんと祭が始まってからは賀茂神社に持っていったが、それ以前は14日の夕方に、家の外の敷地の西の端にあった「ウジガミさん」の祠の横に置き、そのまま置きっぱなしにしていた。また長さ3メートルほどの細い竹を伐り出し、注連縄からはずした御幣を竹の先に取り付けた。

1月15日の明け方まだ暗いうちに、家督息子が起こされ、祖父の羽織を着せられて家の外に出る。

御幣をつけた竹を振り回しながら家のまわりを廻る。その時の唱え言は「イノシシ カラシシ ケツツ モック モック ヤーヘ ヤヘ ホーホー」であった。

15日の朝は、小豆の入った「アカツキガユ」をつくった。家の外の「ウジガミさん」と古内部落の鎮守の「二渡神社」に参拝し、アカツキガユを供えた。

若生さん方では、松飾りは現在も作っているが、その他の小正月行事はどんと祭が始まった頃から止めてしまったとのことであった。

(2) 松焚きの事例

仙台市中心部以外の「松納め」は、松飾りが前述したように氏神の祠の脇に放置されたり、裏山の木にくくりつけられたり、というのが大半であった。そのため、広く普及拡大する前の大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）は、宮城県内では極めて孤立した行事であるかのように捉えられることが多い。しかし改めて仙台藩領内の年中行事と松納め行事を細かく検討していくと、そこには意外に多様な「火焚き」の行事、すなわち松飾りを集めて焼く行事を見出せるのである。これらの行事とどんと祭の直接の関係についてはさらに分析が必要であり、軽々には論じられないが、事例として把握しておくことは重要であろう。

今回の調査では、仙台藩領内の福島県伊達郡から宮城県内、岩手県胆沢郡までの市町村史をはじめ民俗調査報告書など、89の文献から、合わせて139の松納めと小正月行事の事例を採取した。市町村はいずれも平成の市町村合併以前の自治体単位である。これらの事例は原則としてその地域でどんと祭が始まる前の民俗行事で、139の事例中、松飾りを焚く行事として福島県梁川町、宮城県七ヶ宿町、仙台市、女川町江ノ島、加美郡内、岩出山町、東和町などで合わせて28事例が確認された。また藁を焚く「オサイドタキ」が鳴子町で、藁で作った「鳥追い小屋」とおぼしき小屋を焼く行事が宮城県宮崎町の「焼け八幡」と東和町嵯峨立で確認された。これらの中からいくつかの事例と、今回聞き取りをおこなった事例を報告する。

七ヶ宿町関の門松焼き 1月15日早朝、団子を入れた小豆粥を炊き、「暁粥」と言って神に供え、その後正月の松飾りや注連縄を下ろす。15日午後から、下ろした松を八幡様の鳥居前で燃やす。これを「門松焼き」といい、「目糞鼻糞飛んで行け、銭と金飛んでこい」とはやし言葉を唱える。門松焼きの火で餅を焼いて食べると虫歯にならないといい、持ち帰って子どもたちに食べさせる。この餅を「力餅」という。(七ヶ宿町史編纂委員会編『七ヶ宿町史 生活編』1982)

加美町(旧宮崎町)西原 1月14日、下ろした正月飾りの幣をはずし、年縄や松を炉で燃やし、その火で粥を炊いて家内中で食べ、灰は別にして屋敷神に納める。以前この灰を「三峰山」の碑のある集落の入口まで持って行き納めていた。(文化庁文化財保護部『無形の民俗文化財記録第39集 南奥羽の水祝儀』1996)

大崎市(旧鳴子町)鬼首田野のオサイドタキ 1月15日暁、ワラ10～15束持ってきて訪問先の家で焚く。雪の降り積もった庭の上で「祝え 祝え 三度の祝い 明きの方から宝物持ってきた」と唱える。家人は庭の上にゴザを敷き、家の戸を開け、行李の蓋も開けておく。主人は羽織袴で訪問者を迎え入れ、オスイ(お汁)などを添えて一杯あげ、家族繁盛の唱え言葉にこたえる。(文化庁編『日本民俗地図2』1978)

登米市（旧東和町）嵯峨立川端の鳥追い小屋 1月15日、鳥追い小屋に火をつけて燃やすと、川端の人々が注連縄や松を持ってきて火に投げ込んで焼いた。この火で餅を焼いて食べると、この年は病気をしないで過ごせると言われていた。（東和町史編纂委員会編『東和町史』1987）

仙台市青葉区大倉、早坂家のドントサイ 仙台市青葉区大倉の農業兼建設業の早坂光雄さん（昭和3年2月生）は、大倉地区の有力なマケ（家筋）の本家につながる家で、屋号は「まるもり」、早坂光雄さんで7代目である。早坂家には代々、正月飾りや神札を裏山の氏神さまの祠の前で焚く行事を伝えている。この行事の名前は「ドントサイ」と言う。光雄さんが子供の頃から「ドントサイ」と呼んでいたという。大倉地区で「ドントサイ」をおこなうのは4軒で、いずれも本家筋の家である。4軒は早坂家と結城家（屋号みなみ）、下田家（屋号しもだ）、新国家（屋号につくに）である。

早坂家の松迎えは12月30日で、持ち山に入り松を21本伐り出して来る。松には注連縄を輪にして「輪通し」を作って飾る。床の間に「歳徳神」の札を貼った掛け軸をかけ、その前に伐り出した松のうち三蓋松になっている1本を飾る。残った20本の松は、母屋や納屋、馬小屋、作業小屋など全ての建物の入口に飾る。母屋の玄関飾りは「そのような格の家でない」として飾らず、他の建物の入口と同じ松飾りにする。また21の松飾りの下には、直径5センチほどの丸餅を二つ重ねた「フクデ」を12月28日に作っておき、それを飾る。但し、暮れに親戚などに不幸があった場合は、近い親戚は21日間、遠い親戚は7日間、火が悪いので松も飾らず餅つきもせず、ドントサイもしない。21日が明けてまだ1月中ならば、22日目に餅をついて神様にだけ上げる。

1月14日の夕方に松飾りをすべて下げて座敷にまとめて置く。

1月15日の午前3時頃に当主の妻がアカツキガユを作り、家の神棚に上げる。小豆と餅を入れるが、塩味はつけない。昔はヤヘーボイの前に、庭から川に向かって火縄銃で空砲を撃った。ヤヘーボイは早朝に子供が竹に御幣をつけて家のまわりを廻った。唱え言は「ヤヘー ヤヘー ムケエホウノヤルメラ ネムルドモ カブルドモ アサハヤクオキテ トリ ボイネ ボイネ」。当主と家督息子は、早朝に裏山の氏神にアカツキガユを供えて拝み、定義山に歩いて行って暁参りをした。家に戻ってから、皆でアカツキガユを食べた。

ドントサイは1月15日の夕方で、当主がまず風呂に入ってから、前日に下げた松飾りや神札を裏山の氏神様に持って行く。氏神様は母屋の東の裏山の中腹にあり、木の鳥居の先に小さな広場があり、そこに7つの石の祠がへの字型に並んでいた。総称して代々「白山神社」と呼んでいたが、平成17年11月に新しい祠を作り、7つの古い祠から中の石や焼物の稲荷神像や石像を出して、一つの祠に並べて安置した。大倉の小倉神社の宮司に来てもらって神事をした。ドントサイは氏神様の祠の前の広場に、木の枝などを積んで置く。午後6時頃に早坂家を本家とする4軒のマケの家の家族がそれぞれの家の松飾りを持って集まって来る。氏神様に酒と餅を供えて、ローソクを灯す。松飾りを積み上げ、早坂家の当主がマッチで火を点ける。

ドントサイの火のまわりで大人は酒を飲み、子供たちは餅を焼いて食べる。切り餅を竹に刺して熾きで焼いて食べると風邪を引かない。火の粉や煙をかぶると1年間無病息災などと言った。夜の8時頃まで火を焚き、その後は早坂家に移ってマケの人たちで宴会をした。大倉地区の鎮守の小倉神社でも15日にオサイドがあるが、早坂家の一族はそのオサイドには参加しなかった。

ドントサイの由来はわからない。近所でもドントサイをやる家とやらない家があるが、その違いはわからない。ドントサイはずっと昔からやっていたという話と、早坂家の4代目が幕末の頃に出羽三山に行って免許をもらい、そのとき始めたという話もある。

仙台市青葉区大倉、石田家の小正月行事とオサイド 石田家は大倉字新山に古くからある農家で、冬

場には炭焼きなどを生業としてきた。現在では、暮らしもかわり、炭焼きなどは行わなくなったが、小正月の行事などは、今も途絶えることなく伝承され、続けられている。

正月の14日には、家中の注連縄、松飾りを下ろし、納屋などにまとめて寄せておく。平成18年は納屋にまとめて置かれていた。家の門口には、紙シデを集めて長い竹の先に結びつけたものを立てる。これをハライヘイソクといい、紙シデは風雨でなくなってしまうが、秋までは立てたままにしておく。この日はウルコメの粉を蒸してだんごにし、ミズキの枝に刺してダンゴ木を作り飾る。他にアワボといって、アワ餅の代わりに（昔はアワ餅だったと伝えられている）餅を大きく小判型にまとめ、大判小判を摸して同じように枝に刺す。そこに、早乙女を摸したソートメを餅で作って下げる。上の大きい団子を笠に、藁に小さい餅をつけた房をすそ模様に見たてる。また手、肌の白いマイダマ木（種類不明）の枝に餅を小さく丸くして、稲穂をかたどったマイダマを作って飾る。マイダマは年取りの時も作られて飾られるが、それは下されて新しいマイダマを飾る。古いマイダマは干して油で揚げて塩や砂糖をつけておやつに食べるという。

15日朝は、ウルコメの粉でだんごを作り、小豆を煮た中に入れ、何の味も付けないアカツキ（あるいはアカツキだんご）を作り、まず神棚に供えてから、家族全員が食べる。味がしないので子どもたちは食べたがらないが、一つでもいいからと必ず食べさせる。元日から15日まで、アカツキだんごを食べないうちは、あんこ餅と鶏を除いた四つ足の肉は食べてはならないものとされている。15日の夜7時頃、前日にまとめておいたヘイソク・タマガミ・門松の竹・注連縄・松飾りなどを持って集落の小倉神社境内に参詣する。社殿の前には、集落の家々より納められた正月飾りが集められ、ベツトウサン（別当さん）の神事後、火がともされる。別当さんとは、この神社の神職のことで現在まで14代続くという。集落では、この神社の前で正月飾りを燃やすことをオサイドと呼ぶ。このオサイドに加わって正月飾りを送ったあと、同家では屋敷の庭先で前の年に刈り取った藁を五・六把ほど燃やすが、これもオサイドと呼んでいる。以前は、「正月は神の月だから」といって、仏壇はこの日の翌日を待ってから開けるものであったという。だんごの木やマイダマは、正月の20日になってから下げ、その木は、とっておいて、春先味噌を煮るときの燃料にする。

第2節 大崎八幡宮のどんと祭の現在

本節では、大崎八幡宮のどんと祭の現在像として、八幡宮が執行する神事としての松焚祭と、そこに集う担当者や奉仕者や参詣者たちによって形作られるどんと祭の習俗とを、時間の経過に沿って記述する。正月元旦歳旦祭での採火式から14日のどんと祭当日の点火式、境内と八幡町の賑わい、15日未明にかけて続く参詣の様子までの実況をたどる。

なお記述は、14日の点火式とどんと祭の様相は平成16年、元日の採火式と夜半から15日未明までの境内の様相は平成18年の実況である。

（1）松焚祭採火式—平成18年1月1日大崎八幡宮拝殿—

現在、大崎八幡宮松焚祭の採火儀式は、正月元旦の歳旦祭に含まれ、その次第の中で執行されている。平成18年1月1日の歳旦祭は、一昨年保存修理が完了した同宮拝殿で午前九時から齋行された。拝殿の向かって右手に小野目宮司と神官3名、左手には氏子総代7名が向かい合わせに座を占める。神事は修祓に始まり、宮司一拝、献饌、祝詞奏上と続き、次いで松焚祭（まつたきまつり）の「御神火」を打ち出す「採火の儀」が小野目宮司によって執行される。宮司が白布で作られたマスクと手袋

を身につけ、火打ち石と火打ち金で火花を打ち出して火口で受け、その火種が付け木で蠟燭に移され、蠟燭の焰は厨子形の箱に納められて本殿に安置され、14日の松焚祭当日まで「忌火」として灯し継いで保たれるという。「採火の儀」の後、御神楽「浦安の舞」が2名の巫女によって奉奏され、玉串を捧げて拝礼し、撤饌、宮司一拝で歳旦祭は終了した。

なお、十数年前は1月14日当日、点火式の場で火打ち石を使って採火していたが、火をおこすのに手間取り、参詣人もとどこおるため、1月1日の歳旦祭の中で採火式を行うようになり現在にいたっている。

(2) 松焚祭点火式—平成16年1月14日大崎八幡宮境内馬場先—

平成16年1月14日昼過ぎ、小雪が舞う中、松焚祭の神事を控えた大崎八幡宮では、すでに各家から納められた正月の松飾りや縁起物の達磨などが石段上の鳥居横、馬場先の広場に巨大な山を築いている。四囲に青竹を立て注連縄をめぐらした広い松焚場に松飾りなどが積み上げられ、その中央には去年暮れから鳥居前に設えられていた大門松二基が並んで据えられ、門松中央の青竹二本を結んで太い注連縄が掛けられている。参道側には簡易な木製祭壇と麻がらを束ねた十数本の松明が用意され、松飾りの山にはすでに雪が降り積もって白くなっていた。

神事は午後四時から松焚場前の祭壇で、小野目宮司他一名の神官により齋行された。氏子総代世話人数名が立ち会い、仙台東一番町商店街の代表が招待されている。同商店街は氏子の範囲には入らないが、年末大売り出しの看板としてアーケードを飾った大鳥居を毎年松焚祭に納めに來ることから、点火の儀に招待されるようになったという。神事は、修祓、宮司一拝、献饌、祝詞奏上の後、代表が玉串を神前に捧げて拝礼し、宮司一拝によって終了する。その後点火の儀に移り、氏子総代と東一番町商店街の代表が、採火式で打ち出された「忌火」を麻がらの松明に移して松飾りの山に点火する。雪が降りしきる中、四方から点火された火は見る間に焰を拡げて全体を包み、同時に松焚きの大火を囲んだ参詣者の人垣から感嘆とも安堵ともつかないざわめきが起こった。

(3) どんと祭—平成16年1月14日大崎八幡宮境内・八幡町—

平成16年1月14日のどんと祭は朝から曇り空であったが、昼過ぎからみぞれ交じりの雪が降り出し、次第に本格的な雪景色となった。境内は祭りにつきものの食物・玩具などの露店と達磨・熊手・纏・仙台駄菓子などのどんと祭名物の縁起物を売る露店が参道の両側に並び、松焚の火が点火される頃は、もう出店の準備も済んで増え始めた参詣者が露店の間を行き来していた。雪模様の中、ビニールを掛けたたくさんの華やかな熊手を売る店先には大熊手が、纏の店には大纏が掲げられ、仙台駄菓子の店には八幡様の鳩にちなんだ「はとパン」や担ぐほど大きな「ねじりオコシ」が電球の間に下がっている。仙台達磨もどんと祭の縁起物として数軒の店が大小の鮮やかな達磨を背の高さの順にきれいに並べて客を待っている。どんと祭に古い纏や達磨を納めに來た人がこれらの店で新しい達磨や纏を買って帰るのだという。神社が出店する甘酒茶屋の前も、熱い甘酒を啜る人で人垣ができている。例年どんと祭は寒気の底にあたり、「大崎八幡宮縁起甘酒」として、多くの参詣者に熱い甘酒は喜ばれているのである。

参道横の馬場南端広場の松焚場では、点火式が終わり松飾り・達磨・神札などを積み上げた山全体が火に包まれ、降りしきる雪の中でも火炎の勢いは増していった。次第に厚みを増してきた参詣者は石段を登り切るとすぐ鳥居左手の松焚の火に向い、持参した松飾りや古い神札、達磨などを投じてからも、しばらく火を囲んで暖をとり同伴者と歓談している。この火に当たると一年間健康であるとい

う伝承はまだ生きている。白い装束に長い棒を手にした火の番数人が火の周囲に立ち、常に火勢に気を配りながら火の世話をしている。消防署は松焚場の南に消防自動車を常駐させて警戒し、警察官は境内の各所に立って一般参詣者を整理し裸参り参加者を順路に誘導している。

点火式の前から姿を見かけ始めた裸参りは、五時を過ぎると会社・商店など各種団体が絶間なく、鉦を鳴らしながら参道に行く。男の装束は、白い晒しを腹に巻き半股引に白鉢巻・白足袋・草鞋履きに腰に注連縄を巻き、女はその上に白の晒し半纏をはおる。白紙を折った含み紙を口に噛み、片手に団体名を入れた長提灯を持ち、片手に鉦を鳴らしながら歩む。社殿が保存修理中のため仮拝殿で参拝し、お神酒をいただいてから「御神火」と呼ぶ松焚きの火に向かう。松焚きの火に腰の注連縄を投げ入れ火の回りを右回りに廻って、鳥居横から龍宝寺方向に抜けて帰路につく。参拝が終わった裸参りの面々は、少し緊張がほぐれて寒さが身にこたえるのか、多少肩をすぼめつつ心なしかくつろいで雪の中を引き上げていく。

夕闇が濃くなっていく八幡町の国道沿いは、各商店や家々が道沿いに紅白の提灯を連ね、火を入れた提灯の光の中で、歩道や商店の軒に白く雪が降り積もっていた。八幡町の各商店は普段の商売物とどんと祭のための飲食物などを店先に並べ、家族の手伝いを交えて参詣者に声をかけている。老舗味噌屋の味噌おでん、菟藟屋の玉菟藟など、古くからの味を知る常連客が買い求めていく。国道沿いに長い黒板塀を連ねる藩政期からの造り酒屋天賞酒造では、例年清酒と甘酒と手作りの豚汁の出店を蔵前に出す。雪のどんと祭で体の冷えた参詣客や帰り道の裸参り参加者が大勢立ち寄り、熱く爛をしたコップ酒や暖めた甘酒や豚汁で暖をとっている。造り酒屋の社長はみずから店先に立って、立ち寄る参詣客や店前を通る裸参りの列に声をかけていた。

降りしきっていた雪も止み、裸参りと一般参詣客が減り始めた午後七時、天賞酒造の黒塀の前に人垣が出来ていた。この酒屋は大崎八幡宮の御神酒酒屋であり氏子総代をつとめる家で、そこから毎年繰出す裸参りは、蔵の芳酒醸成を祈願して南部の蔵人たちが裸で詣でた時の古式を伝える姿だという。その酒屋の裸参り行列が二個の大ぶりの祭提灯が下がる黒木の門をくぐって、今出発する所である。酒銘柄が浮かぶ二挺の高張り提灯を先頭に、大鉦を振る先導、陣笠に袴姿の男二人、紋付袴姿の酒屋主人、祈願板・ボンデン・御幣・御神酒・鯛・野菜・鏡餅などの奉納物を捧げる男たち、その後から左手に屋号の入った提灯、右手に鉦を持った男たち十数人が続く。袴姿と紋付姿の三人の他は全て裸参りの装束だが、腰の太い注連縄とその大ぶりの御幣は見応えがある。酒屋の裸参りのために交通規制をした国道の中央を、見物客の人垣の中、ごくゆったりと鉦を大きく一斉に振り、足並みを揃え、緩やかに行列はねっていく。周囲には揃いの半被に長股引姿の店の者たちが、裸参りの男たちに気を配り、時に近づいてかいがいしく濡れた含み紙を交換する。八幡さまの石段を昇り、拝殿で参拝し、御神火を三度廻るのも同じ緩やかさは保たれ、帰路もそれが乱れることなく男たちは黒木の門に戻ってきた。この酒屋は蔵の郊外移転を決めており、八幡町の蔵から出る最後の裸参りであるという。

(4) どんと祭とあかつき参り—平成18年1月15日大崎八幡宮境内—

平成18年1月14日のどんと祭は、ときおり強く降りしきる雨の中で行われた。雪になることはあっても雨になることは稀な時期、参詣者には雪よりも喜ばれなかったか、例年より人出は薄かったようである。

雨も上がった午後十時の大崎八幡宮は、参詣者の雑踏もすでに引き、絶間ない裸参りの鉦の音もすでになく、祭りの喧騒は遠のいていた。だが露店はいまだ電球を灯し、去り難い参詣者がむしろゆったりと露店の間を行き来して、家族連れや若者同志が、まだ火勢の衰えない松焚きの火を囲んでいる。

午後十二時近くなる頃、参詣者の厚みがまた少し増してくる。多くは国分町・一番町周辺の飲食店・

居酒屋などの従業員や接客係と思われる男女である。若い従業員同士それぞれ思い思いに服装をこらした男女の集団、年上の経営者が従業員の若者たちを気配りしながら引き連れている集団、店に出る着物姿やドレス姿で常連の男性客と連れ立って参詣する接客業の女性、そうした人々が数人ずつ、石段を昇ってきては鳥居横の松焚きの火を囲み、多彩な人垣が厚くなっている。多くは店を飾っていた大ぶりの熊手・達磨・纏などの縁起物の入った袋を手に、店の仕事を終えた後に大崎八幡に参詣し、店の縁起物を松焚きの火で焚き上げて歓談している。それがまた、彼等の欠かせない年中行事としての楽しみにもなっている様子がうかがえる。そうした飲食業・接客業の人々の参詣にまぎれて、近在の年配者と思われる男性が松飾りと思われる新聞包みを火に投げ、静かに手を合わせて帰っていく姿も見られた。

十一時頃からあちこちで店を片づけ始めた露店は、十二時をまわって日付が変わる頃には大半が店仕舞いとなって参道の両側は暗さを増したが、石段を昇ってくる参詣者は途絶えない。15日の午前三時をまわる頃には、飲食業の男女にかわって、夜更かしをして時間をもて余したらしい男女二人連れや若者たちが火を囲み、急ぐでもなく時間を過す。そうした情景は空が白み始める頃まで変わらなかった。

第3節 どんと祭のひろがりの変容

(1) どんと祭のひろがり

仙台市中心部においては、今日、どんと祭以外の「松納め」「正月飾り送り」の事例を採集することは困難である。それは大崎八幡宮の松焚祭に幕末からの歴史があるばかりでなく、今から百年ほど前には仙台市内の複数の神社でどんと祭がおこなわれ、正月飾りをどんと祭で焚くことがあたかも昔からの伝統行事であるかのように考えられていたからであろう。そのことは当時の新聞記事からもうかがい知ることができる。

●一昨夜の松焚祭（どんとさい） △近年珍らしき良夜 △押な押なの大群集

例年の一月十四日夜は市内各戸の戸の松飾りを徹して之れを八幡町の同社へ納め又北四番丁の松尾神社、大町一丁目頭の櫻ヶ岡神社、荒町毘沙門天堂その他へも持参して神火に附する慣はしなる（以下略）

「河北新報」明治44年（1911）1月16日

どんと祭はその後も他の神社に広がり続け、昭和7年には明治期に創建された青葉神社でもどんと祭が始められる。

青葉神社でもどんと祭 裸詣りの申込みが非常に多い

近方の便宜をはかり青葉神社でも今年から境内において仙臺名物である松焚祭を執行すること、なったが、十四日宵から撤宵で古い神札や松飾りをお祓祝詞を白して浄火で焼き上げる、同時に水防鎮火祭と満洲派遣軍の武運長久祈願祭も行ふが裸参りも既に伊澤酒造店其他から申込みあり、花火打揚、奉納神樂等相當賑はふべく通町北鍛冶町其他五ヶ町では大いに意氣込んでゐる。

「河北新報」昭和7年（1932）1月14日

戦後は高度成長のもとでどんと祭は飛躍的に拡散して行く。

今夜の大崎八幡神社には去年の十五万人を上回る二十万人の人出が予想され、寒中の名物“はだか参り”も繰り出して景気づけをする。

なお同市内の“どんと祭”は大崎八幡神社ほか七十九ヵ所の神社（三消防署調べ）で行われる。昨年は六十四ヵ所だった。

「河北新報」昭和40年（1965）1月14日

仙台市内のどんと祭会場は、仙台市消防局調べで平成16年は157ヵ所。18年も会場に変更はあるが157ヵ所となっている。以下に、仙台市内の寺社から仙台市郊外の住宅団地まで7ヵ所のどんと祭の事例を列記し、どんと祭がどのようにして広がっていったか、また現状はどうか、大崎八幡宮との違いは何か、などを報告する。

（2）事例・仙台市中心部、東照宮のどんと祭

仙台市青葉区に位置し、国指定重要文化財である東照宮では、1月14日の昼過ぎから15日午前零時にかけて、正月送りの行事であるどんと祭が実施されている。

どんと祭当日の朝、拝殿で点された御神火は、神事後、宮司や神職の手で斎場へと運ばれ、平成18年（2006）には午後3時から点火式が行われた。この年、東照宮には48,600人の参拝者が訪れ、斎場で燃え盛る火に手をかざし、あるいは火のそばで手を合わせるなど、1年の健康を祈願する姿がみられた。

東照宮においてどんと祭が始まった時期については、正確な記録が残っていないものの、神社への聞き取りによると、戦後すぐ昭和22年（1947）から23年（1948）頃開始されたとみられている。開始当初は、宮町周辺の氏子が神社へ松飾りや門松、神札を納め、それを焚き上げるという小規模な正月送りの行事であったと言われている。しかし戦後、神社周辺に住宅が増えるに連れて、参拝者は急激に増加してきた。平成18年（2006）現在、仙台市内では神社や町内の公園敷地など157ヵ所でどんと祭が実施されているが、そのうち、仙台市の中心部に位置する東照宮への参拝者数は、仙台市内では大崎八幡宮に続いて2番目に多く、宮城県全体でみても、大崎八幡宮、岩沼市の竹駒神社に続いて、3番目に多い参拝者数を数えている（註1）。平成18年（2006）のどんと祭では、参道に63軒の露店が並び、境内は参拝客で非常に混雑したため、拝殿前では参拝者をロープで区切り、参拝順を一時的に規制するなど、雑踏警備にも細心の注意が払われた（註2）。なお、東照宮では、仙台北警察署、交通指導隊宮町分隊、小松島分隊、宮町地区防犯協会、仙台北地区交通協会に警備を依頼している。また、参拝者数が増加しただけに止まらず、団地の建設などに伴う住宅数の増加に伴い、正月飾りを納める参拝者の居住範囲も拡大してきた。従来、東照宮で氏子区域と認識してきた、宮町、小松島、小田原、東照宮といった地域に限らず、現在では、南光台、旭ヶ丘、鶴ヶ家、東仙台といった団地や、上杉、台原からも参拝者が数多く訪れている（註3）。

周辺に住宅地や団地が建設され、参拝者が増加したことにより、東照宮に持ち込まれる正月飾りの量も増加した。東照宮のどんと祭においては、青葉消防署、青葉消防団小松島分団、宮町分団が消防・警戒に当たっているが、どんと祭の翌日が必ずしも休日とは限らなくなったこともあり、消防団員の翌日の仕事を考慮して、午前零時には消火作業に入らざるを得ない。持ち込まれた松飾りや注連飾りを残さず焚き上げるため、神社では当初17時であった点火の時刻を、昭和56年（1981）から16時に繰り上げ、さらに平成8年（1996）頃からは15時まで繰り上げている。

また、1月15日が祝日であった平成12年(2000)までは、深夜11時を過ぎても参拝者が見られたが、その後、1月14・15日が平日に当たるようになった後には、夕刻から夜にかけての参拝者数は減少している。つまり、東照宮においては大崎八幡宮と同様に15日未明から早朝にかけて参拝する慣習は見られない。さらに最近では、仕事の都合で14日には参拝できない人が、それ以前に正月飾りを納めに訪れることも増えており、どんと祭へ訪れる人々の、参拝の時期や時刻の分散化が顕著であると言う。

平成9年(1997)頃からは、正月飾りを燃やすことによるダイオキシンの発生など環境問題が取り沙汰されるようになり、これに伴って東照宮においても、納められる正月飾りに使用される材料の分別に努めている。最近では、門松や松飾り、注連縄、古いお札、お守り、神棚、達磨などの縁起物のほかに、年賀状や本、写真、教科書、人形、ぬいぐるみ、こけし、故人の遺品、財布が持ち込まれることも増えている。そのため、神社では正月送りの神事とは関係のないもの、燃えないものやゴミは持ち込まないこと、プラスチックやビニール類はあらかじめ取り除いて納めることを呼びかけており、斎場に分別用の箱を設置するほか、分別に当たる係員を配置して、徹底した分別を心がけている。

また、東照宮においても、どんと祭の日には、数組の団体による裸参りが行われている。神社への聞き取りによると、東照宮で裸参りが行われるようになったのは、昭和50年代のことであり、地元の建設会社や商工会が参拝したことが始まりである。それまで、他の建設会社と共に大崎八幡宮に裸参りをしていた、近隣の建設会社が単独での裸参りを起案し、参拝先を大崎八幡宮から東照宮へ変更したことがきっかけであると言われており、それ以降、東照宮への裸参りが行われるようになった。また、最近は見られないものの、東照宮への裸参りが始まった当初は、個人による裸参りも見られた。裸参りの参加者は、水を浴び、体を清めてから裸参りに臨む。団体ごとにより一列となり正面の参道を、鉦を振りながら上り、拝殿前で整列して御祓いを受けた後、参拝する。その際、口に挟んだ含み紙に包まれた小銭を賽銭箱へ投げ入れる。その後、拝殿脇でお神酒を受け、斎場に下りて御神火の周辺を3回回り、3周目には腰に巻いた注連縄を御神火の中へ投げ入れる。

平成18年(2006)に、東照宮へ裸参りをしたのは3団体であり、例年3～5団体が裸参りをを行っている。企業の他に、近隣に位置する病院の看護師らによる裸参りが行われているが、これは最近のことであり、他に献血のPRを兼ねた血液センターの職員による裸参りも行われている。裸参りの参加者のうち、企業参加者は商売繁盛を、また病院関係者は患者の早期回復を祈願していると言われてしている。

東照宮の裸参りは、当初大崎八幡宮に参拝していた団体が、参拝先を東照宮へ変更したことをきっかけに定着したものであり、大崎八幡宮への参拝を見本としている。また、どんと祭についても、大崎八幡宮の形式が意識されており、大崎八幡宮を中心として仙台市内に広がりを見せてきた「どんと祭」の拡散の様相が随所に伺える。

註

1. 宮城県警によると、どんと祭の参拝者数は、2000年には合計644,500人(うち大崎八幡宮112,800人、竹駒神社80,000人、東照宮58,800人)、2001年には合計332,800人(うち大崎八幡宮52,700人、竹駒神社70,000人、東照宮57,500人)、2002年には合計544,000人(うち大崎八幡宮69,000人、竹駒神社75,000人、東照宮59,500人)、2004年には合計393,000人(大崎八幡宮59,000人、竹駒神社80,000人、東照宮50,000人)を数えている。このことから、近年のどんと祭における東照宮への参拝者数は、宮城県内では3番目に位置付けられることが明らかである。なお、2001年に参拝者数が半減したことは、移動祝祭日の導入によると推測される。
2. 縁起ダルマや纏、ねじりおこし、はとパンなど、縁起物を売る露店も多く、中でも縁起だるまを販売する店は3軒出店している。
3. 東照宮では、宮町、小松島、小田原、東照宮を氏子区域としている。どんと祭の際には、宮町商店会青年部が、

甘酒や玉こんにゃくの販売を行っており、どんと祭は周辺地区の住民による交流の場としても機能していることが伺える。

(3) 事例・仙台市中心部、大日堂のどんと祭

オダイニッツアン（大日さん）として親しまれる柳町の大日堂は、この町の鎮守的な堂祠であり、未と申年の守本尊としても信仰を集めている。慶長6年の仙台開府に際して、城下の町割りに用いた縄を焼き、その灰の上に大日如来を安置したことがこの堂の始まりと伝わり、近世には柳生山教楽院大日堂を号したという。教楽院とは、当時の大日堂の別を勤める町修験であった。明治29年以降、大日堂とその境内地は、柳町の町人有志によって共有管理され、別当も新たに迎えられている。この別当は、終戦後まで数代焼き、時期によっては法螺貝を吹いて町内を回り、堂を維持するための浄財を募ったという。今では、教楽院の墓所のある土樋の西光院が別当を頼まれ、祭祀などを勤めている。

大日堂は確認できる範囲では、大正8年の南町大火と昭和20年の仙台空襲に伴って2度ほど火災に見舞われている。戦後は昭和22年に仮堂が置かれ、現在の堂は昭和29年に再建されたものである。現在の堂と境内地は、町内の有志で組織されている「大日会」によって維持され、どんと祭などの行事もこの会を中心として行なわれている。柳町の老舗タゼンの田中善次郎氏(大正14年生)によると、同氏の子供の頃のお大日さんの境内は、今よりもたいぶ広く、土塀によって囲まれていた。堂の入り口には山門もあって、その内は近所の子供達のよい遊び場であった。境内ではパッタなどをしたり、野球をすることもできたという。タゼンでは、代々の主人が総代を引き継ぐなどして大日堂の世話役を務めてきた。田中善次郎氏もまた長きにわたり大日会の会長などを務めている。現在の大日堂では、正月の元朝参りやどんと祭、7月の大日如来の祭典などが大日会を中心として行われている(註1)。どんと祭は、昭和の初めにはすでに行われており、田中善次郎氏は、その幼少の頃にお祖父さんやお婆さんなど家の人に抱かれて参詣したことを覚えているという。同氏の子供の時分には、大日堂の境内も広く、納められる松飾りも今より大分多かった。積み上げられた松飾りは、夕方には数メートルの高さになるほどであった。子供たちにとっては、正月飾りはよい遊び道具ともなった。ガラスで作られたダルマの目を取るなどして、堆く積まれた正月飾りの山の周囲で遊んだ。田中善次郎氏の若い頃には、タゼンからも裸参りに行く人があった。この日は「女の年取り」でもあり、裸参りに参加する人は家の女衆と一緒にご馳走を食べてから出掛けていった。近くの銭湯で身を浄め、大日さんを拜んだあと大崎八幡に詣でたようである。裸参りは、タゼンの行事として行われたわけではなく、希望する職人や丁稚が知人と誘い合うなどして参加するものであった。大崎八幡宮に向かうため、柳町を抜けていく裸参りの一行も、大日堂に参詣するものであったという。近隣にあった酒屋や醤油屋の裸参りは大勢で、数十人が大日堂に立ち寄って、別当のお祓いを受けていった。

戦時中は境内に大きな防火水槽が設けられ、炎が空襲の目標ともされる危険性もあったことから、どんと祭は行われなかったようである。戦後まもなくして、どんと祭は再開されたが、大日会のできる以前は、町内の有志により行われることもあった。以前は納められる松飾りも多かったため、どんと祭も明け方くらいまで行った。町の人は店じまいをしてからやってきた。女の正月のような日でもあり、馴染みの芸子と連れだって訪れる旦那衆などもあった。大日さんが守り本尊となるため、未年や申年になるといつもより何倍も大勢の人で賑わった。現在は午後3時頃、別当の西光院さんに拜んでもらいお堂の灯明を移して着火する。火を付ける役は以前は別当が行なうものであったが、今日では西光院や大日会などの名のある人が受け持っている。営利の目的ではないため、どんと祭の宣伝は一切行っていないという。それでも大勢の人が訪れてくれる。町にも近いため、松飾りを燃やす場所の少ない一番町の人なども燃やしに来る。口こみで訪れる人もあり、西光院の祈禱を受けていく。祈

祷は午後より宵の口まで数回行われ、家内安全など様々な祈願が寄せられる。同会で保存されている祈禱の申込書によると、平成10年には70数名の祈禱申し込みがあって、申込者は地元ばかりでなく仙台市の全域に及んでおり、遠くは神奈川の横浜などからの依頼もみられた。大日会でもお札やお守りを販売しており、参詣者が買い求めていく。近年では午後9時頃には、正月飾りを焼く火も落ち、その後は片平消防所管内の消防団に番を頼み、どんと祭の夜は終わる。

註

1. 大日堂に関する記述の一部については、柳町会編『御譜代町やなぎまち—戦災50年・柳町会復興40周年記念誌—』（1995）及び同会編『御譜代町やなぎまち—戦災60年・柳町会復興40周年記念誌—』（2005）を参考とした。

（4）事例・仙台市中心部、三宝荒神社のどんと祭

南鍛冶町と三宝荒神社 南鍛冶町は青葉城の東方、藩政期仙台北城下域の縁辺に位置する職人町である。藩祖伊達政宗が米沢から岩出山を経て仙台に入封するのに従ってきた鍛冶職衆が置かれた町とされ、最初の城下割りでは元鍛冶町に配置された鍛冶職衆は、元鍛冶町が侍屋敷に組み込まれたため、南北の北鍛冶町と南鍛冶町に移された。

元和年間（1615-1624）、南鍛冶町の鍛冶職衆が、鍛冶の守護神として三宝大荒神を現社地に勧請し、社殿を建立したと伝える。以来、三宝荒神社は鍛冶職の守護神として、火防の神、竈の神として南鍛冶町に鎮座し現在にいたっている。その間、寛保年間（1741-1744）に社殿が火災で類焼するが、明和年間（1764-1772）に再建されている。明治40年（1907）に境内地の北に第一中学校（現仙台第一高等学校）が建設され、そこへの新道が境内を横切ることになった。南鍛冶町の信徒たちは資金を拠出して西隣の土地を買取り、その地を清めたうえで明治41年（1908）6月19日の例祭の日に社殿を遷座した。現在の荒井荒町線の鉤の手の角から三宝荒神社横を仙台一校まで北東に延びる道路はこの時の新道である。遷座前の境内はその新道と現境内向かいの駐車場を合わせた一帯であった。なお、三宝荒神社の神体は、現在の花京院通りにあった聖護院末の本山派修験道場花京院の脇仏であったと伝えられ、厨子に納められたまま今まで一度も開帳されることがないという（註1）。

荒町から南鍛冶町、穀町、南材木町、河原町にかけての一帯は、藩政期から明治大正昭和初期にかけて、仙台市域と周辺の農村地帯とが接する街道筋の町場であった。六郷・七郷の農家の人たちは馬車でやって来ては、仙台の町中まで行かずともこの町々でさまざまな用足しを済ませることができた。それだけさまざまな店屋が軒を連ね、河原町は青物市、歳の市などで賑わっていた。

南鍛冶町の松納めと暁参り 現在南鍛冶町には鍛冶職人は見られないが、先代あるいは先々代まで鍛冶職を営んでいた家は少なくない。そうした家の正月歳事として、昭和初期の松納めと暁参りの二つの事例を紹介する。

一つめの事例は祖父の代から南鍛冶町で馬車・馬耕鋤などの製作を営む鍛冶職の家に生れた、大正13年生れの千葉富次郎さんからの聞き取りである。話者の子ども時代である昭和初期、正月14日から15日にかけての家の歳事は以下のものであった。14日には家と仕事場の松飾りを下ろして団子木を飾り、松飾りの御幣をはずしてミズキの幹の先に結びつけ、松はまとめておく。夕方6時頃、近所の子どもたち5、6人がチャセゴといって廻りの家々をめぐる。各家の玄関先に子どもたちが並び、皆で「銭持ち、金持ち、宝持ち、こっちの旦那さん身上持ち、お祝いなしてくないん」と唄ってその家の者に餅や蜜柑を貰う。

夜中の11時過ぎ頃、アカツキガユと呼ぶ小豆入り粥を炊き、2寸径の丸いザッキ4個（あるいは5個）に粥を盛り、そのザッキをオゼンコと呼ぶ角膳に乗せて神棚前に供える。4個のザッキは神棚の年徳

神・恵比寿・大黒・保食神（うけもちのかみ）に対応している。また下ろしてまとめておいた松の間にも粥をあげる。その後、家の男が御幣を結びつけたミズキの幹を持って、竈神さま、井戸神（水神）さま、お明神さま（屋敷神）、工場のファイゴの上の神棚のお荒神さまを巡る。各神の前でミズキの御幣を振りながら「ヤヘイ、ヤヘイ、ホー」と大声で何度も唱える。それを「お正月さんを送る」という。その後まとめた松を持って三宝荒神社に参り、境内の焚火でその松を焼き捨てる。それを「お荒神さまに暁参りして松を納める」という。

二つめの事例は、現当主の曾祖父の代から南鍛冶町で鍛冶職を営み、父の代に金物商兼業となり、戦後もっぱら金物店を営むようになった家に嫁入りした、現当主の母にあたる大正4年生れの女性話者からの聞き取りによる。話者が嫁入りした昭和初期には、夫は鍛冶職と金物商を兼業し、店では番頭なども数人使っていたという。

14日の夕方、家中の松を下ろしてまとめ、座敷の縁側から庭に出す。晩遅くアカツキガユと呼ぶ小豆粥を炊き、神棚に供えてから若い番頭たちに好きなだけ粥を食べさせ、それから家の者が食べる。家と店の者全員で神棚を拝してから家を出、門口で主人か一番番頭が下ろした松の一部を振ってお祝いしながら、「ヤーへ、ヤヘヤへ、ホッホッホ」と唱える。それから同様に唱えながら皆で家を巡り、まとめた松を持って暁参りに行く。暁参りは荒町の毘沙門さんに参ってから、八幡町の大崎八幡さんに行き、その境内で松を焼き捨てる。大崎八幡さんまで行けない年は毘沙門さんで松を焼いたが、遠くとも大崎八幡さんまで持っていくものであり、そこで達磨などを買って帰るのが楽しみであった。また店の番頭たちが大崎八幡さんへ裸参りをしたこともあったという。

三宝荒神社と周辺のどんと祭 近傍では荒町の毘沙門堂、六十人町の城取神社、五十人町の伊達八幡神社、裏柴田町の白鳥神社などでも昭和初期にはどんと祭を行っていたという。現在では毘沙門堂と伊達八幡神社のみが継続している。

先の千葉富次郎さんによれば、幼少時代の記憶のある昭和初期、正月14日の晩に三宝荒神社境内で松飾りを焼いていたという。そして同夜に三宝荒神社に参ることを「暁参り」といい、その折下ろした松飾りを持参して火に投じることを「松納め」といった。また境内の焚火で松飾りを焼く行事をすでに「どんと祭」と呼んでいたという。三宝荒神さんに松飾りを納めに来るのは、成田町・茶畑・穀町・三百人町・石名坂などのごく近くの人たちであったようだ。

なお、三宝荒神社の祭事は戦後まで近くの「拝みやさん」と呼ばれる男性がもっぱら担当していたが、その没後は町内の泰心院の住職が一貫して執行していた。それが数年前に同じく町内の東漸寺の住職に依頼するようになり現在にいたっている。

現在、三宝荒神社のどんと祭は、同社の氏子総代を中心に南鍛冶町の氏子が主体となって準備執行されている。商店街組合である南鍛冶町商栄会も甘酒接待の店を出すなど協力している。

三宝荒神社のどんと祭の現在 2006年1月14日のどんと祭当日は、昼過ぎにはすでに持ち込まれた松飾りや古い達磨などが舞殿前に積み上げられて小さな山をなし、関係者が準備に携わっていた。鳥居の右手には南鍛冶町商栄会が甘酒の奉仕所を設け、横の掲示板には同会の年末大売り出しの景品である新米の当選者が張り出されてあった。午後4時の点火に先立ち、同町内の東漸寺の住職が本堂で仏事を執り行った。

午後4時、消防署員が立会うなか、参道横に水を満たしたバケツを円形に置き、中心に松飾りの一部を積み上げて火が入れられる。火入れは、祈祷の終わった祭壇のお燈明の火によって行われる。その火をロウソクに移し紙で囲って風除けにし、氏子総代の一人がそれを手にして社殿を降り、参道横に小さく積み上げた松飾りの山の四囲に点火する。火勢に応じて納められた松飾りが少しずつ投げられ、松飾りを手にした近傍の人々がおりおりやって来ては、松を火に投げ入れていく。参詣者はしばし火に当たったり甘酒を飲んだりした後、それぞれ帰っていく。どんと祭の火に当たると一年間風邪

をひかないという言習わしは、今でも地元の人たちに伝えられているという。

集まった松飾りの山は子どもの背丈ほどだったので、午後6時近くには大方の松飾りが火に投じられて、松飾りの山は小さくなっていた。

註

1. 三宝荒神社の縁起・神体などの伝承は、昭和6年（1927）に町内有志によりまとめられた小冊子『三寶荒神社縁起誌』に、明治41年（1908）の境内地移転の経緯は、境内の石碑「沿革碑」に拠った。

（5）事例・仙台市中心部、陸奥国分寺のどんと祭

仙台市若林区木ノ下にある国指定有形文化財陸奥国分寺は、近世においては「金光明四天王護国山医王院木ノ下国分寺」と称し一山寺院を形成した。古くから一山鎮守として白山宮が勧請されている。この陸奥国分寺内の薬師堂では1月14日16時頃から23時頃までどんと祭が催される。昭和37,8年頃までは隣接する白山神社で行われていたが、宮司の交代や諸事情を経て行われなくなった。そのような中、薬師堂では七日堂の日にだるまを納め、一回り大きいだるまを買って帰るという習俗が行われていたが、その際だるまを納めにきた参詣者に正月飾りの処分について相談を受けたことをきっかけに地域住民が持ち寄る正月飾り、松飾り等を薬師堂で燃すようになったという。

どんと祭の運営は国分寺薬師堂つぼの会という世話人の集まり（50人ほど）にお願いしているという。祭場は国指定史跡の一部となっており、仙台市教育委員会の許可を得て使用している。火災などの予防のため、14日当日、世話人たちが配置される10時頃まで松飾り、正月飾りの搬入はできない。平成18年（2006）は陸奥国分寺薬師堂の半纏を着た10名ほどの世話人が鐘楼南側のどんと祭会場に参詣者から正月飾り、門松や縁起物を受け取り山に積んでいる様子が見られた。薬師堂に正月飾り等を燃しに持ち寄る人々の大部分は若林区在住者と宮城野区の一部（国道45号線南側在住者）であるという。納めた後、参詣者は松飾りの山の西側に設けられた祭壇に手を合わせていた。正月飾りの山は松飾りや門松、正月飾りを世話人が受け取り薬師堂参道東側に4つ作る。消防署からの指示で最終的にはそれらを熊手で1つの山にまとめ、23時には消防車の放水によって消火する。

薬師堂では神棚・仏壇・人形・個人の遺品・縁起物などはダイオキシンの問題もあり、どんと祭には納められないとしている。それら納められない物は本堂脇の仮設テントにて供養料（一口2,000円）と共に預かる。持参した参詣者は形代（人型紙）とよばれる供養札に品名と納めた人の名前を記入し、それを代わりに焼き上げる。納められた人形や縁起物は11月下旬にまとめて供養する。これを薬師堂では焼浄会（しょうじょうえ）と呼び平成11年（1999）より行っている。チラシやインターネットなどで正月飾りと分けて納めるように呼びかけている。

1月14日は15時になると本堂にて祈祷を行い、護摩を焚く。その火をろうそくで木札の東に移し、数人の僧侶が祈祷の文言を唱えながら正月飾りの4つの山へと向かう。正月飾りの山の西側に設けられた祭壇にて祈祷を行い、最寄りの山から左回りに点火してゆく。

16時30分頃から続々と裸参り行列が団体ごとに到着する。薬師堂での裸参りは20年近く続いているという。平成18年（2006）は7団体（工務店、病院、ボーイスカウト、地元商工会、スポーツ少年団など）の参加があった。出発地は各団体それぞれに決めている。出発時刻については祈祷の時刻が重なってしまわないよう薬師堂側でおおよそ30分おきに到着するよう配分する。

裸参り各団体は仁王門（調査時点では修復中）から参道に入り、本堂を右回りに3周し、2人ずつ本堂に入る。その際、口にくわえている含み紙（5円玉を挟み込んでいる。三角形）を外し賽銭として箱に投入し御神酒を飲み、祓いをする。本堂での祓いが終わると参道を通り松焚の火の回りを右回

りに3周し3周目に腰の注連縄を解き、火に投入する。裸参り参加団体には薬師堂側から人数分の御札と御守が渡される。各団体おおよそ20人ほどの行列で、男女の別なく幅広い年齢層の参加がみられた。往路は含み紙のため口はきかず、整然と歩くが火の回りや帰り道では寒さを訴える声や小走りになる参加者も散見された。各団体多少のちがいはあるものの基本的に袴・大提灯（団体名）・酒・三宝（野菜）といった構成であった。衣装に関しても鉢巻（前締め）、晒し、半股引、軍手、白足袋、草鞋、右手に鈴、左手に提灯、腰に注連縄といった姿で、根本的な違いや奇抜な格好は見られなかった。

（6）事例・仙台市郊外、定義如来のどんと祭

仙台市大倉は、青葉区の北西部に位置する。広瀬川の支流である大倉川の峡谷沿いに集落が散在する山間地で、奥羽山脈を境として山形県と接する。近世には大倉村として一村をなし、明治22年（1889）に合併して大沢村の大字となった。戦後は、宮城村、宮城町の大字を経て、昭和62年（1987）に仙台市となる。地区内の大部分を山林に覆われ、県内各地の山手に多い平家伝説の地の一つとしても知られる。定義如来の名で信仰を集めている大倉の浄土宗極楽山西方寺の由緒（『宮城県寺院名鑑』1994 仏教文化振興会）によれば、平氏が壇ノ浦の戦いにおいて敗れた後、平貞能が源氏の追討を逃れて大倉の地に隠れ住み、平重盛より預かった阿弥陀如来の宝軸を安置し、安徳天皇と平氏一門の冥福を祈ったという。貞能が世をはばかって名前を「定義」と改めたことから、この地を定義と称し、如来を「定義如来」と呼ぶようになったと伝える。建久9年（1198年）7月7日に平貞能が没した地にその従臣たちが貞能の遺命をうけ、墓上に如来の宝軸を安置した仏堂を作ったのが西方寺の始まりとする。

定義は、西方寺の門前集落で、現在の戸数は24戸である。集落では、定義如来のことを「オテラサン（お寺さん）」と呼び、その周辺には山の神や稲荷などがみられる。現在では観光地化しており参道で土産物屋などを商う人も多くなっているが、以前はもっぱら炭焼きなど林業を生業として暮らしを立てていた。炭焼きが盛んであった頃は、今から40年ほど前のことで、ほとんどの家で黒炭を焼いていた。もっとも、炭の原木を自家でまかなえるほどの山を持っていた家は4軒あまりと少なく、他の家では国有林の払い下げなどをして炭焼きを行っていた。現在のように土産物屋などをして暮らすようになるのは、昭和30年代後半から40年代にかけてのことであった。

お寺さんでは、今日、正月の14日に「どんと祭」が行われている。この日に御札や絵馬などをお焚き上げする行事は35年ほど前より行われていたが、どんと祭と呼ぶようになったのは最近のことであるという。定義の人々も今日では、このどんと祭の火で松飾りや正月飾り、ホシノダマガミなどを焼いて正月を送るようになった。どんと祭は、お寺さんが主催し、火の始末などの手伝いは檀家である定義集落の人々によって行われる。お飾りや絵馬などは、本堂の前の四隅に竹を立て注連縄で囲ったところに集められ、住職の祈祷（お飾りの前に祭壇を用意して行う）を受けたあと午後3時頃に火入れ（祈祷の際の灯明を火種とする）が始まる。正月飾りを納めるのは定義の集落を含めて大倉周辺の檀家（280軒ほど）がほとんどで、他の参詣者は絵馬や古札など以前にこの寺で請けたものを燃しに来るという。

どんと祭で燃やすようになる以前、定義の集落では、お寺さんの裏手にある山の神様の境内が正月のお飾りを納める場所であった。正月15日未明、日付の変る頃に納められたお飾りは、そのまましばらく放置されて、2月2日の山の神講で燃やされるものであった。山の神講は、集落の全戸によって組織されており、講の当日は朝の7時から夕方まで正月飾りやホシノタマを燃した。その火でオフクデ（餅）を焼いて食べると病気になるかといわれていた。お飾りを燃した後は、各家の主人か跡取り（家督）が当番の家が集まって様々な料理を作りひと時をすごした。山の神講の料理には、メヌ

ケ（魚）を煮たものが定番であったが、古くは鮫焼きなども出されることがあったという。正月飾りを燃さなくなった今日も、山の神講は行われている。

（7） 事例・仙台市郊外、賀茂神社のどんと祭

賀茂神社について 仙台市泉区古内糺1番地に鎮座する賀茂神社は、社名や地名が示す通り京都の糺ノ森に鎮座する下鴨神社を勧請した神社である。神社が平成17年に発行した「賀茂神社御参拝の栞」の「賀茂神社由緒書」によれば、「本神社は元塩竈神社に鎮座せられ、只州宮と称し元禄年間該神社造替の節、今の地に遷座され伊達藩の崇敬篤き社であった。元禄八年十月十三日伊達綱村公の命により「只州の御社を別所に奉還すべき」とその社家鎌田信濃守に申しわたし十一月十三日には新しい御遷座の地を選ぶべく、御社くじを占し、現在の古内村を御社地と選定し、先ず下賀茂社の御社を元禄九年二月二十九日着工、同年九月二十三日に塩竈より正遷座の儀を行い、「御祖神社」として奉斎した。同年十月十四日上賀茂社の棟上げ、翌元禄十年正月二十九日には上賀茂社の正遷座の儀を行い「別雷神社」として奉斎する。」と記述されている。本殿は2社あり、向かって右が下賀茂神社で祭神は「玉依姫命」、向かって左が上賀茂神社で祭神は「別雷神」である。2社の本殿と棟札は昭和39年に宮城県的重要文化財に指定されている。現在の神社の神職は泉区実沢の熊野神社との兼務で宮司が石川昇氏、禰宜が石川隆穂氏である。

平成15年から賀茂神社氏子総代長である泉区古内の若生勝男さん（昭和5年1月生）によれば、賀茂神社の所在地は旧七北田村で、昔は七北田の二柱神社の宮司が神職を兼務していたが、いつの頃からか旧根白石村の熊野神社の兼務神社に移った。賀茂神社は明治期に百日咳などのはやり病の神様として繁盛したが、戦後は一時期衰退した。また塩釜から移ってきた神社なので、地元の泉区古内や根白石では鎮守とは考えておらず、正月15日の暁参りには参拝しない。暁参りは古内地区の古くからの住人は二渡神社に、丸太沢地区の人は貴布禰神社に参拝している。賀茂神社は、昭和31年頃に氏子が中心になって鹿踊りと剣舞を復活させ、昭和39年に本殿が県的重要文化財に指定されてからやや注目されるようになった。昭和50年代に神社の近くに加茂団地が造成されてから賑わうようになり、現在に至っているという。

賀茂神社のどんと祭の経緯 賀茂神社で何時からどんと祭が始まったかは定かではない。賀茂神社のある古内地区は昔からの純農村地帯で、以前は正月飾りの松はどの家でも暮れに山から伐り出し、正月15日に暁参りの際に家の裏の氏神様の脇に納めていたという。賀茂神社の石川隆穂禰宜や若生勝男氏子総代長からの聞き取りでは、昭和40年代の終わり頃に、旧泉市内や当時の仙台市のはずれに住宅団地の造成や分譲が始まると、松が取れると団地の住人が松飾りを賀茂神社に持ってくるようになった。そのままにして置けないので、神社の役員が脇の広場に集めて焼いていた。またその後、神社の近くで野火が頻発したため、氏子で防火クラブを作り、集まった松飾りは1月14日に禰宜にお祓いしてもらったあとに火をつけて防火クラブが管理した。それがどんと祭に発展していった。

昭和50年代に加茂団地と長命ヶ丘団地ができると、松飾りを神社に持ってくる人が急に増えた。神社の役員をしていた若生勝男氏が、消防団のポンプ車に乗り込み、賀茂神社でどんと祭をやるので松飾りを神社の脇の広場に直接持ってきてほしいとスピーカーで呼びかけながら、加茂団地と長命ヶ丘団地を回った。神社の広場には森林組合からもらった材木の Coppas を積み上げ、それに松飾りを投げ入れて燃やした。また境内で防火クラブが甘酒などを売って、収益はどんと祭の運営費用や神社の防火対策費などにあてた。現在もどんと祭は神社と氏子の共同主催でおこなっている。

住宅団地のうち賀茂神社に最も隣接した加茂団地は、地権者で組織した加茂団地土地区画整理組合

が昭和52年10月に区画整理法の事業認可を得て開発分譲した住宅団地である。第1期と第2期の開発で、総面積は153ヘクタール、昭和58年12月に最終の換地処分が行なわれた。平成18年3月現在の仙台市住民基本台帳による加茂1丁目から5丁目までの人口は、2,213世帯、住民は6,339人である。

加茂団地の最初の住人の一人である泉区加茂2丁目の菅野允章氏（昭和14年8月生）は、昭和53年3月に加茂団地の第1回分譲で建売住宅を購入し、仙台市の幸町から転入した。菅野氏によれば、当時は賀茂神社では既にどんと祭をやっていたという。しかし入居した翌年の昭和54年は、それまで正月飾りを焼きに行っていた大崎八幡宮のどんと祭に行ったという。賀茂神社のどんと祭に行くようになったのは入居2年目の昭和55年からで、その時は団地から賀茂神社までの道路がまだ整備されておらず、雪の積もった狭い路地のような道を苦勞して歩いて神社まで行ったという。当時は夜店などは出でおらず、賀茂神社のどんと祭が賑やかになったのは昭和60年代に入ってからで、泉区の将監団地や仙台市北部の西勝山団地などからも参拝客が来るようになったという。

賀茂神社のどんと祭は、その後は年々賑やかさを増している。現在では参道の両側と火を焚く広場の周囲にも露店が軒を連ねて、付近の道路は昼過ぎから大渋滞となっている。参拝客は仙台市消防局のまとめで、平成16年1月14日が1万2,300人、夕方から土砂降りの雨が降った平成18年1月14日が1万8,410人と増え続けており、泉区内では最も人出の多いどんと祭である。また近年は裸参りも訪れるようになった。裸参りの最初の参拝は、平成2年に大崎八幡宮への裸参りの帰路に賀茂神社を訪れ、翌年から正式に裸参りを続けている仙台市泉区野村の建設業者「栗駒建業」で、次が平成4年から社屋移転を機に大崎八幡宮から賀茂神社に裸参りの行き先を変更した「東日本放送」、さらに平成18年からは「ボーイスカウト宮城県連盟泉第一団」の子供たちが参加するようになった。

平成18年のどんと祭 平成18年1月14日のどんと祭当日、仙台市泉区の賀茂神社は早朝から正月飾りを持って訪れる参拝客で賑わっていた。午前9時には、普段は駐車場として使われている参道西側の広場に持ち込まれた正月飾りやダルマ、門松、神棚用のお社などがおよそ2メートルの高さにまで積み上げられていた。正月飾りの周囲は、一辺が12メートルの四角で囲まれるように4本の青竹が立てられ、注連縄が回されていた。積み上げられた正月飾りの中心には杭が打たれ、高さが15メートルほどの長い竹が立てられ、その先端には大きな御幣が飾り付けられていた。神社の拝殿正面には国旗と紅白の幔幕が飾られ、参道には露店が立ち並び、社務所脇には賀茂神社防火クラブがテントを張って甘酒と焼き鳥を売っていた。午後2時には正月飾りは直径7メートル、高さ3メートルほどに積み上がっていた。

午後2時、石川隆穂禰宜がワゴン車で大幣などの道具類を運んで来て、正月飾りの南側に仮の祭壇を設ける。氏子代表らが三宝に盛った米、お神酒、鯛、大根・人参・青菜、りんご・みかん・苺を三宝ごと仮祭壇に飾る。午後2時40分、仮祭壇前に氏子代表や消防団、防火クラブの役員ら26人が整列する。石川隆穂禰宜が拝殿に行き、ガラスのケースに入れた蠟燭に灯されたご神火を持って戻り、ケースごと仮祭壇に置く。ご神火は元旦に採火して蠟燭に移し、拝殿に安置してどんと祭まで灯しておくという。

午後2時45分に神事が始まる。石川隆穂禰宜が仮祭壇に向かって祓いの祝詞を奏上し、仮祭壇と参列者、そして積み上げられた正月飾りへの修祓をおこなう。どんと祭の祝詞を奏上し、禰宜、氏子総代長らが玉串を奉奠する。続いて氏子総代長、泉消防署の代表、消防団の代表、婦人防火クラブの代表ら6人に蠟燭を渡し、禰宜と6人がガラスケースの上から持った蠟燭にご神火を移す。それぞれ積み上げられた正月飾りの周りに並び、午後3時に花火の合図で正月飾りに点火する。燃え上がると四方の青竹と注連縄がはずされて、火に投げ入れられる。禰宜はガラスケースのご神火を拝殿に持って戻り、仮祭壇を撤収して神事を終える。以後、どんと祭のご神火は消防団と防火クラブのメンバー

が管理する。

参拝客は火が点される頃から増えだし、午後4時頃には参道に長い行列ができた。点火直後にボーイスカウトの子供ら26人が裸参りに訪れ、夜7時には栗駒建業、その後に時間をずらして東日本放送の裸参りが訪れた。夕方から雨になったが、平成18年はどんと祭の日が土曜日で、日中の人出が多かったため、参拝者の総数は1万8,410人と例年より大幅に増えた。

(8) 事例・仙台市郊外、泉パークタウンのどんと祭

泉パークタウン高森地区について 仙台市泉区の泉パークタウンは仙台市北西部の、旧泉市の市域であった泉ヶ岳の丘陵地を造成して作られた巨大な新興住宅団地の総称である。泉パークタウンを開発したのは最大手の不動産会社三菱地所株式会社で、昭和44年に用地取得を開始し、昭和47年に造成を開始、昭和49年9月に宅地の分譲を開始、昭和50年8月に最初の入居者が居住を開始した。泉パークタウンには開発順に高森・寺岡・桂・紫山の4つの住宅団地と、流通工業団地の明通地区、さらにはスポーツ施設地区などがあり、総開発面積は1,070ヘクタール、計画人口5万人と、北日本で最大規模の住宅都市開発である。泉パークタウンの開発前の土地は無人の雑木林や原野であり、もともとの住人は存在せず、居住者はすべて他地域からの移住者である。平成17年9月末現在の仙台市住民基本台帳による人口は、4つの住宅団地を合わせて8,255世帯、25,127人で、分譲開始から既に30年が経過したが、まだ開発は続いており、近年は手頃な販売価格のマンション分譲によって比較的若い世帯の居住も増えている。

泉パークタウンの4つの住宅団地のうち、高森地区は最初に開発分譲がおこなわれた地区である。昭和50年に最初の入居者が居住したあと、翌年昭和51年には仙台市バスの乗り入れが始まり、52年3月に入居者が100世帯を突破、4月に泉市立(当時)高森小学校が開校、同月に高森町内会が発足した。高森地区では新規の一戸建て住宅の分譲販売は終了し、住民の高齢化が進んでいたが、平成元年にはマンション(集合住宅)の新築分譲が始まり、それは現在も続いている。平成17年9月末現在の仙台市住民基本台帳による高森地区の人口は、高森1丁目から8丁目まで合わせて2,901世帯、8,547人であり、前年同月に比べて世帯数が86世帯増加している。

高森地区のどんと祭の経緯 高森地区では、平成17年には高森連合町内会が主催して1月14日のどんと祭、4月29日の運動会(高森小学校と共催)、8月6日の盆踊り大会、10月1日の親子スポーツ大会グランドゴルフの各イベントが開催されている。主催者の町内会は、昭和52年4月に高森町内会として発足し、昭和60年4月に高森1丁目から8丁目までの区画ごとの町内会に分かれ、その上に高森連合町内会が発足して現在に至っている。連合町内会の会長は初代が三尾一喜氏、二代が庄子喜兵衛氏、三代が昭和63年から現在まで会長を務めている相原廣之氏である。

町内会主催のイベントのうち、最も早く始まったのが昭和52年1月14日のどんと祭で、以後平成3年からは高森東連合町内と共催で、さらに平成5年からは桂連合町内会も共催に加わり、3つの連合町内会による共催事業として高森2丁目の高森自然公園内多目的広場(通称明神広場)でおこなわれている。

聞き取りをおこなった高森連合町内会の相原廣之会長(大正12年3月生)は、昭和51年11月に泉パークタウンの80世帯目の住人として仙台市台原から高森1丁目に転居した。昭和52年の高森町内会発足とともに町内会役員となり、昭和60年の高森連合町内会発足時には事務局長、昭和63年からは連合町内会長を務めている。高森地区の最初のどんと祭は昭和52年1月14日におこなわれたが、その時はまだ町内会が発足していなかった。しかし当時住人がいた高森1丁目と高森3丁目にはそれぞれ

親睦会があり、合同でイベントをやろうということになり、どんと祭をおこなった。この時の話し合いが町内会結成につながっていった。どんと祭は初回から団地内の高森2丁目の広場でおこなわれていたが、昭和63年に当時の泉市が仙台市に吸収合併され、広場が仙台市の高森自然公園の一部に指定された。当時の仙台市の規則では、自然公園内で火を焚くことが禁じられていたため、どんと祭も会場変更をせまられた。このため連合町内会では仙台市に対して、どんと祭の会場の広場は、もともと公園ではなく多目的広場であり、通称「明神広場」と呼んでいると主張して、どんと祭の会場使用許可を得たとのことである。

泉パークタウンには神社仏閣はまったくない。以前、鎮守の神社を創りたいとの声があったが、特定の宗教施設を創ることはどうかとの意見もあって、実現しなかった。また、泉パークタウン内の寺岡地区では、以前、寺岡地区の西に隣接している泉区根白石字行木沢東の上ノ原神社の境内でのどんと祭に参加したことがあったが、現在は寺岡連合町内会が寺岡地区の広場でどんと祭をおこなっている。しかし住人の中には現在も上ノ原神社のどんと祭に行く人も多い。

平成18年のどんと祭 平成18年1月14日の高森地区でのどんと祭は、平成17年10月31日に開かれた高森・高森東・桂の各連合町内会の合同会議で決定された。日時は平成18年1月14日（土）の午後4時30分から午後8時30分まで、会場は高森自然公園の明神広場、幹事は桂連合町内会で、実行委員長は桂連合町内会の奥野会長が選ばれた。どんと祭のために準備するものとしては、以前からの申し送りでも青竹の幣串4本、注連縄30メートル、御幣束、鷹口、鉈、鋸を用意する。それに会場内に4張りのテントを張り清酒と甘酒をふるまうこと、玉こんにゃくの出店の依頼をおこなうことが決まった。

平成17年12月に回覧板でどんと祭の計画が各家庭に知らされた他、平成18年1月中旬のどんと祭の前には地元新聞の折込として町内会の皆様宛の「どんと祭のご案内」が配られた。それによると、主催はどんと祭実行委員会、共催は高森・高森東・桂の各連合町内会、趣旨は「本行事は正月飾りや門松、旧年中にお受けした神社のお礼、お守り、および書き初め、だるま等を御神火により焼く火祭りの行事です。」としたうえで、「私たちの地区には神社はございませんので、厳格な意味での神事とはいきませんが、この行事の趣旨をご理解いただき、次の事項について必ずお守りください。」として3つの注意事項を列記している。それは「生ゴミ、不燃物等の持込は絶対しないで下さい。ダイオキシンの発生防止のためビニール類は取り外してお持ち下さい。（ミカン、もち等は取り外して下さい。入り口で確認します）持ち込み時間：午前10時～午後8時まで。（午後8時以降は入れません）」であった。また「点火午後4時30分～午後8時（持ち込み終了）以後消火」とし、さらに「お神酒・あったかい甘酒を用意します。（無料）夜店も出店します。」として参加を呼びかけている。

どんと祭の準備は、前日までに青竹を伐り出すことと注連縄を作ることから始まる。青竹は高森東連合町内会の北村栄一会長の知人が所有している団地近くの竹林から伐り出す。長さ4メートルほどで、一番上の50センチほどの枝と葉を残して、その下の枝葉を落とす。注連縄は高森東連合町内会の北村栄一会長と町内会役員の有志が作る。また前日中に広場内に火を焚く「祭場」が準備される。地面を縦横2メートル、深さ30センチほど掘り下げ、周りに掘った土を盛り上げる。その中に太さ10センチ、長さ180センチの丸太30本を井桁に組んで高さ180センチにする。

平成18年1月14日のどんと祭当日は、朝のうちに祭場のまわりに4本の青竹が立てられ、御幣をつけた注連縄が廻される。注連縄は会場の広場を囲むフェンスにも取り付けられる。広場の入り口には持ち込み品をチェックするテーブルが置かれ、ビニールや不燃物が分別される。正月飾りを持ち込む人は朝から断続的にやってきて、昼過ぎには井桁の回りに積み上げられる。午後4時30分、町内会の役員が四隅の青竹の根本に塩を撒き、積み上げられた松飾りに灯油がかけられる。点火するのは

例年、高森東連合町内会の北村栄一会長と決まっています、北村会長が畳んだ新聞紙にライターで火を点け、松飾りに火をつけて行く。燃え上がった段階で、町内会役員がハンドスピーカーで参加者に呼びかけ、実行委員長の合図で全員がそろって火に二拝二拍手する。後は午後8時30分に消火するまで火は焚かれ続け、また用意された甘酒や出店のまわりには子供たちが群がっていた。

平成18年の泉パークタウン高森のどんと祭の人出は、仙台市消防局のまとめでは300人であった。これは平成16年の人出の2,000人を大きく下回ったが、人出が減った理由は平成18年は午後5時頃から雨が降り出し、間もなく土砂降りとなったためであった。しかし天気予報で夕方からの雨が報じられていたため、点火前に正月飾りを持ち込む住民は多く、それなりの数量の正月飾りが集まった。

第3章 裸参りの現状と変遷

第1節 大崎八幡宮への裸参り

(1) 裸参りの現状

大崎八幡宮のどんと祭の名物とされる裸参りは、藩政時代末期まで遡れることはこれまでの研究等で明らかとなっている。現在まで続く裸参りのピークは、昭和40年代から50年代にかけて仙台市内の企業や大学など多様な団体がPRを兼ねて行うようになったため、その後仙台市内各地の寺社でどんと祭が行われるようになると、裸参りも分散傾向を見せてくる。しかしどんと祭の中心が大崎八幡宮であるように、裸参りも圧倒的多数が大崎八幡宮への参拝であり、その数は平成18年には101団体2,433人にのぼっている。近年では裸参りの参拝者は事前に大崎八幡宮に申し込みをすることになっているが、千円のお守り代と昇殿料を支払い貸衣装でも揃えれば、誰でも気軽に参加できることが人気の理由でもある。

この裸参りの作法や形については、本章第3節で詳述するが、元来は造り酒屋が酒造安全を祈願して参詣したのが始まりとされ、造り酒屋の裸参りの作法が最も正統的であるとされてきた。しかし最近消費者の日本酒離れと造り酒屋の減少で、正統的な裸参りが次々に姿を消し、最後まで大崎八幡宮への裸参りを続けていた天賞酒造（現まるや天賞）も平成17年に仙台市内から川崎町に移転し、平成16年のどんと祭を最後に裸参りを行っていない。このため平成18年には、天賞酒造の裸参りの伝統的な様式を守ろうと、市民有志が「仙臺伝統裸参り保存会」を結成し、道具類を「まるや天賞」から借用して裸参りを行った。その設立趣意書によれば、正統な天賞の裸参りは「1. 水をかぶって体を清める」「2. ゆっくりと歩み、行きも帰りも私語を慎むために「含み紙」をくわえ、列から離れない」「3. 鈴をそろって鳴らす」「4. 列の順番にしきたりがあり、動かさない」というものである。仙臺伝統裸参り保存会の発起人代表で20年ほど前から毎年、天賞の裸参りに参加してきた谷徳行さん（昭和26年生）は「酒造りに根差し、脈々と受け継がれてきた誇りある地元の文化を絶やしたくない。次世代に伝えていくため、今はわれわれが頑張る。伝統の様式にできるだけ近づけていく。」と語り、これに対して大崎八幡宮も「様式を絶やさずに残すことは非常に意義がある」と歓迎している。

平成16年を最後に天賞酒造の裸参りは行われていないが、次項でその最も正統的とされる天賞酒造の裸参りの様子を詳述する。なお次項の表記は仙台市教育委員会から当研究会が委託された平成15年度「天賞酒蔵に係る民俗調査」の調査結果に依拠したものであり、天賞の調査報告書と重複する部分があることをあらかじめ断っておく。

(2) 事例・天賞酒造の裸参り

天賞酒造と大崎八幡宮 天賞酒造株式会社（当時）が平成16年に発行したパンフレット「天賞のあゆみ」によれば、「仙台藩祖伊達政宗公建立国宝大崎八幡宮の御神酒酒屋として文化元年（1804）三代目勘兵衛が現在地にて創業。屋号は丸屋。当初、八幡宮御使の鳩にちなみ「鳩正宗」、明治38年日露戦争終結を祝い、天祐により勝利を得た感謝の気持ちから「天勝正宗」と称しました。明治41年大正天皇が皇太子として仙台に巡啓された際、お買い上げの榮に浴したことを記念し「雲上嘉賞 天之美祿」より「天賞」と改め、現在に至っております。」とある。

天賞酒造の蔵元は代々「天江勘兵衛」を襲名するが、その天江家に伝わっている文書によれば「嘉

永4年(1851)丸屋勘兵衛が龍宝寺門前(八幡町)の伊藤屋治兵衛から酒株や家屋敷を買い取った」とある。ここに登場する丸屋勘兵衛は、家伝等によれば広瀬川の橋の修復などへの功績で天江姓を名乗ることが許され、文久元年(1861)に死去した天賞第四代蔵元の天江勘兵衛と思われる。また『宮城県酒造史』(早坂芳雄、1958、宮城県酒造組合)によれば、明治4年(1871)に宮城県庁に提出された「酒造願」では「天江勘兵衛」(六代と思われる)が「清酒150石」の造石を出願しており、天江家が四代丸屋勘兵衛以来、九代天江勘兵衛(平成16年3月31日死去)まで、150年以上にわたって八幡町で酒造業を営んできたことはほぼ確実である。

また「天賞のあゆみ」にも述べられているように、天江家が藩政時代から大崎八幡宮の御神酒酒屋であった可能性は高く、明治期に使っていた「鳩正宗」のラベルでは、八幡宮御使の二羽の鳩が向かい合った姿で数字の「八」を表している。さらに天江家は昭和の初めからは確実に大崎八幡宮の氏子総代を務めて御神酒を奉納しており、天江家は大崎八幡宮とは極めて密接な関係があった。

天江家とどんと祭 天賞酒造蔵元の一族で、幼少期と近年を八幡町の天江家で暮らした天江久さん(大正15年生)は、天江家の年中行事としてのどんと祭とその日の様子について次のように話している。「どんと祭の裸参りの準備は七草が過ぎた頃から徐々に始める。仕事の合間に、店の人たちが紙垂型を切って梵天を作り、何枚もの含み紙を折り、ゴボウ締めで幣束を挟む仕事や提灯や鉦などが用意される。また、どんと祭当日の振舞酒の準備や当日に出店で売る甘酒の仕込みも行われる。

1月14日は、店方は朝から、裸参りのための準備と出店の準備に終始する。その合間をぬって、正月のお供え餅、お飾り、注連縄、松飾りをはじめ、神棚に祀られた一年分のお札もおろして大崎八幡宮に納めに行く。

昭和初期のどんと祭の裸参りの参加者は、蔵人と店方だけで多くの人数が集まった。蔵人や店の従業員、蔵で使用する道具の修理を行うブリキ屋、タガ屋、大工なども参加した。裸参りでは、現在は天江家の当主が先頭に立つが、八代天江勘兵衛までは裸参りの先頭に立つことはなかった。また大崎八幡宮に奉納する祈願板は当主が書いていた。

この頃、裸参りをした人たちは、参詣後に蔵で直会をした。直会の参加者は蔵人など裸参りに行った人だけで行っていた。直会の料理は毎年趣向が凝らされるが、かならず「ひき煮しめ」が出された」という。

平成16年1月14日の天賞酒造の裸参り 参加者は合計26名。主人(蔵元である天江文夫社長)、「祈願板持ち」と4名の「付き人」は天賞酒造の従業員であるが、それ以外は全て一般参加者である。天賞酒造には天賞愛好会(自称)という昔からの天賞ファンのメンバーがおり、彼等が事前に参加の申し合わせを行なう。天江文夫社長によれば、昭和54年の段階で裸参りへの蔵人以外の参加者がすでにいたとのことである。最近では蔵人の年齢が高くなったため、蔵人は介添え役にまわり、注連縄や晒しを巻いたりするような手伝いをしている。またこの年は「杜氏」は不在で参加していない。

裸参りの準備は、1月に入ってから参加人数分の衣装などを準備し、蔵の中に保管されている足袋や鐘などの確認をする。1月13日は午後から蔵人の談話屋で、天賞酒造の従業員たちが注連縄に御幣を付け、含み紙、三方や衣装を準備する。以前は蔵人が梵天や含み紙の準備をした。祈願板は仙台市青葉区芋沢の大工が作り、それに掛ける注連縄は蔵人が作り、文字は社長が書いたという。また蔵の中では、蔵人が裸参り当日の天賞の出店に出す甘酒の準備を行う。その後、裸参りの後の入浴に使う木桶を洗っておき、翌日のどんと祭と裸参りの用意を済ませておく。

以下は1月14日当日の時間経過である。

裸参り参加者が天賞酒造に集合(午後5時)

出欠確認と一般参加者から参加料1,000円の集金(午後5時)

蔵内での参加者の草履サイズ合わせ（午後5時30分）

社長挨拶、総務部長から参加者の役割告知と段取りの説明（午後5時40分）

初心者に鈴の振り方や歩き方をベテランの参加者が指導（午後5時50分）

蔵内の井戸から水を半切桶に汲み水垢離（午後6時20分から）

着替え（水垢離後から午後6時45分まで）

裸参り参加者の衣装は鉢巻、含み紙、晒、半股引、白足袋、草履、腰に注連縄をつける。主人・杜氏（平成16年は杜氏は参加せず）は天賞の紋付袴姿、足袋、草履を着用する。袴は袴と陣笠、足袋、草履を着用する。付人は揃いの半纏、鉢巻、足袋、草履を着用する。

主人と袴北・南は他の参加者たちとは別室で着替える。裸参り参加者は、まず水垢離をして体を清めてからタオルで体を拭き、着替え始める。半股引を穿き、次に足袋と草鞋を履く。その際、脱げないように白い紐で足袋と草履を固定する。鉢巻の両端はハサミで切る。晒が巻き終わったら、注連縄を付ける。後ろは、注連縄を輪のようにする。

集合写真撮影（午後6時50分）

屋敷内の松尾神社に参拝、二拝二拍手一拝（平成16年度は社長のみ）

奉納物や採物を揃え参加者全員が整列（午後6時50分）

裸参り参加者の採物は、高張り提灯、祈願板、梵天、幣束、お神酒、魚、野菜、餅、提灯、鈴、太刀である。付人は、「天賞」と名の入った手提げ袋を持つ。採物の保管と準備は天賞酒造で行う。

大崎八幡宮に奉納する祈願板には、平成16年は「祈願 日新志 平成甲申一月十四日 天賞蔵元 一同敬白」と社長が揮毫した。大崎八幡宮に納められている天賞酒造の祈願板は昭和52年からの26枚が保存されており（身内の不幸のあった昭和57年と昭和天皇崩御の64年には参拝せず）、それらの祈願板の祈願文は「祈願 芳醇醸酒」（昭和52年）、「祈願 酒造安全」（昭和54・63年）、「祈願 上天美祿」（平成7年）などである。

裸参り行列出発（午後7時）

- 1) 先頭 高張り提灯（2名）
- 2) 大振り（一番鈴）…右手に大きな鐘、左手には提灯を持つ。
- 3) 袴北、袴南…左手は太刀に添える。
- 4) 主人・（杜氏）…左手には提灯を持つ。
- 5) 二番鈴
- 6) 祈願板
- 7) 梵天
- 8) 御幣
- 9) お神酒…お神酒は天賞酒造「本醸造」を二本、奉納と書かれた板に括り付けて持つ
- 10) 魚…魚は鯛で尾頭付き1匹を三方に乗せて持つ
- 11) 野菜…野菜は大根、人参、ゴボウで切らずに三方にのせて持つ
- 12) お餅…鏡餅二枚を三方にのせて持つ

残り8名は左手に提灯、右手に鐘を持って、後ろに続く。付き人は4名で、計26名。

通常の裸参りの行列は歩道際の車道を歩くように警察から指導されるが、天賞の裸参りだけは昔から通りの中央を通ることが大崎八幡宮から許されていたという。このため大崎八幡宮前的大通り（国道48号線）は、天賞の裸参りのために一時通行止めになり、天賞の裸参り行列は通りの中央をガラーン・ガラーンという鐘の音に合わせて、行きも帰りもゆっくり歩く。鐘も他の裸参りと異なって腕を大きく頭上に振り上げ、ゆっくり振り下ろしながら大きな音で鐘を鳴らす。

参加者のうち主人と2名の袴以外は含み紙を啜る。含み紙を啜るのは「神に息をかけてはいけ

ない、話をしていけない」という意味がある。付き人が含み紙を交換する。

八幡神社本殿参拝（午後7時20分）

本殿の前を一回廻る。本殿では祈願版・ボンデン・御幣・お神酒・魚・野菜・餅を奉納しお神酒をいただく。口紙はお神酒をいただく前にはずす。

御神火を廻る（午後7時30分）

腰の注連縄を御神火に入れ、火を三回廻る

龍宝寺参道より帰路につく（午後7時40分）

天賞到着（午後7時50分）

入浴、着替え（到着後すぐ）

裸参りの参加者たちは、天賞酒造に到着したら、ぬるま湯に入る。湯は酒の仕込みに使った木桶にあらかじめ用意してある。以前そのぬるま湯は、ぬるいものから熱いものへ三段階に分かれていたが、現在ではそれは行われていない。

蔵の中で直会（午後8時20分から）

（3）事例・JR東日本仙台支社の裸参り

大崎八幡宮どんと祭への裸参り参拝を新年の恒例行事としている団体のなかに、広域企業の東北支店・仙台支店が多く含まれている。JR東日本と通称される東日本旅客鉄道株式会社の仙台支社も、20年近くにわたり毎年欠かさず、正月14日に白い裸参り装束の男女の参加者が行列を連ねて大崎八幡への裸参りを行なっている。

裸参りの経緯と祈願 JR東日本仙台支社の社員数十名が、同社の代表祈願者として大崎八幡どんと祭に裸参り参拝するようになった経緯については、社内に明確な記録が残されているわけではない。ただ同社総務部広報室によれば、1987年に国有鉄道が分割・民営化され、東日本旅客鉄道株式会社が設立された頃から大崎八幡への裸参りは行なわれており、開始時に立てられた裸参りの祈願は、鉄道会社として最優先されるべき「鉄道運行の安全」と、民営化に際して課せられた命題である「商売繁盛・社業発展」であったという。2007年の裸参り参拝について社内各部署に送付された「大崎八幡神社 裸参り参拝の実施について」という標題の連絡文書にも、「運転及び傷害等の無事故、社業の発展並びに商売繁盛祈願のため」と記されており、裸参りに託される願いは変わらず受け継がれている。さらに、鉄道旅行の企画とその提供を中心的業務の一つとする同社は、管轄地域の習俗行事に積極的に参加貢献することを会社の社会的貢献として掲げており、大崎八幡裸参りの他、仙台の初夏の祭りとして定着した仙台青葉祭りにも山車を提供するなどして参加している。

裸参り参加者数などの過去の記録はないが、かつては参拝終了後の参加者の移動のために大型バス2台を待機させた時期があったという。近年は裸参り祈願者と介添え者合わせて60人ほどのため、バス1台が大崎八幡近くの牛越橋脇に待機している。

裸参り準備のダイヤグラム 仙台支社の組織は、設備部・運輸車両部・事業部・営業部・総務部と監査室によって構成されるが、裸参りの企画準備から当日の実施運営と後日の事後処理にいたるまでの幹事は、1年毎に各部が持ち回りで担当する。2007年の裸参り担当は事業部であった。

例年裸参りの準備は前年の10月下旬頃から始められている。2006年11月30日には、事業部長から社内各部長と監査室長、さらに隣接するJR仙台病院長宛に、「大崎八幡神社 裸参り参拝の実施について」と題する連絡文書が送付され、各部署から裸参りと介添えの参加者の推薦、参加者の装束などの規格の申告、裸参り参加者の健康診断実施の周知などについての依頼がなされた。12月に入ると準備は本格化し、裸参りの装束・持物・備品などの在庫確認と不足品の発注、記念写真撮影依頼、

参拝者送迎用のJRバス申込み、参拝後の浴場施設申込み、ホテルの直会会場申込み、JR仙台病院への参拝者健康診断申込みなどを、常に作業日程表をにらんで照合しつつこなされていった。

2007年の年が明けると、大崎八幡宮に初穂料を納めて裸参り参拝申込みがなされ、裸参り参拝者の健康診断がJR仙台病院で行なわれ、装束・備品・行程・施設・経費などが最終確認され、事業部内担当者の最終打合せがなされる。5分刻みに予定された当日の裸参りの流れに沿って、各担当毎の裏方作業の流れを一覧表として図示した「裸参り作業ダイヤ」が作成され、当日の支社長室での代表者祈願、支社玄関前での出発式、仙台駅前での駅長激励と応援団からのエールなどの分刻みの場面想定が式次第と配列図によって確認されるのである。まさにダイヤグラムによる1分刻みの正確さで運行される鉄道列車のように、微細周到に企画運営された裸参りには、いかにも鉄道を支える職業人たちの職人気質がいかんなく発揮されているようである。

2007年1月14日の裸参り 2007年の1月14日は日曜日であった。裸参り参加者の受付は12時30分から支社内会議室で行われた。当年の裸参り参拝者は48名、うち男性36名、女性12名、介添者は8名、他に団長を事業部長、先導を事業部課長がつとめ、参拝参加者は総勢58名であった。一方準備運営などを取り仕切るのは、事業部を主体にした10名の担当者である。また裸参り参拝者の年齢層は、20代28名、30代11名、40代7名、50代2名であった。裸参り参拝者と介添者は社内各部とJR仙台病院に依頼して選抜されるが、参加の判断は最終的に本人にまかされている。それでも毎年60名近い参加者が保たれているのは、裸参り参拝を希有な体験として興味を抱き、みずから志願する参加者が少なくないからであろう。この年もJR病院に依頼された裸参り参拝者の人数は8名であったが、応募した参加者は10名にのぼり、いずれも20代の女性看護師であった。

参加者には『大崎八幡宮松焚祭裸参り』と題した葉が配られる。表紙には「どんと祭の由来」として正月送り行事である松焚祭と酒杜氏の祈願参拝である裸参りの由来が解説され、中に行程表・配列図・経路図などの裸参りの各要項が綴じられている。その中の注意事項として「参拝に際してはアクセサリー等を身に付けないでください」「神事、社員の代表です。厳粛な気持ちで参拝するようお願いいたします」と記されていた。

受付の後、男女別の部屋で装束への着替えがなされた。裸参り参拝者の装束は、男性の場合頭に白晒しの向う鉢巻き、腹に白晒しを巻き、パッチと呼ばれる白の半股引を履き、足には白足袋に草鞋を履く。口には三角に折って中に五円玉を挟んだ白紙を噛み、腰には藁の注連縄を巻く。女性は白いTシャツに白いショートパンツを履き、白い半纏を羽織り、その他は男性の装束と同様である。介添者は、スーツ姿の上に「JR東日本」の社名が染抜かれた白い半被を羽織る。団長は羽織り袴を着付けて草履を履く。これら装束一式は市内の衣料品店ダイコクヤが専門に取り扱っており、毎年必要数を注文して揃えられている。

参加者の着替えが終わると14時から支社長室で代表祈願が行われる。団長・先導を含む参加者代表10名ほどが支社長室に入り、支社長室の神棚の前に支社長とともに整列し、神殿に二礼、二拍手、一礼を行なって祈願した後、神社に納める旧年の神札と破魔矢が神棚から下ろされ、支社長の手から参拝者に手渡される。14時10分に参加者全員が支社正面玄関前に集合して記念撮影の後、社員たちが見守る中で出発式が行われた。最初に団長が出発の決意を述べた後、支社長が壮行の挨拶を送り、参加者は裸参りの行列を組んで、提灯の蠟燭に火を入れ、含み紙を口に咬んでから、社員の拍手のなかを仙台駅に向け出発する。

行列の配置は先導と団長以外は二列縦隊を形作る。列の先頭中央に先導者、次に「JR東日本」名入りの高張提灯一対を左右に掲げる参拝者2名、次に団長が続く。その後ろを、ダルマ、御神酒、魚、餅、野菜、破魔矢・神札を三方や祝儀台に載せたり、晒しで首に掛けた6名が二列縦隊で続く。その後ろに右手に鉦、左手に社名入り弓張提灯を持った参拝者38名が二列で続き、最後尾に2名の参拝

者が高張り提灯一對を掲げる。介添者8名は含み紙や蠟燭の予備を持って行列の周囲に寄り添って同行する。この配列は参拝終了まで保たれる。なお、この時奉げられていたダルマは、社内列車司令室に安全祈願のため飾られていた一尺ほどの松川ダルマで、毎年ダルマは裸参りのおり大崎八幡に納められるという。

出発後一行はすぐ仙台駅前に到着し、駅舎前ペDESTリアンデッキの上で仙台駅長の出迎えを受け、駅舎前に整列して仙台駅長の激励の挨拶と、仙台支社応援団の応援披露を受けた。通りかかった市民や駅利用者も足を止めて人垣ができ、拍手などで声援を送る姿が見られた。特に応援団員の一人が裸参りに参加しており、応援のときだけ隊列から抜けて裸参り装束のまま応援の太鼓を叩く姿は、見学者にも好評で盛んな拍手が送られていた。

仙台駅に立寄った後、行列はアーケードの架かる中央通りを西進し、一番町通り商店街で右折して一番町通りのアーケードを北進し、定禅寺通り、二日町通りに出、裸参り用品を扱っている二日町の衣料品店ダイコクヤで休憩をとる。休憩後、大崎八幡神社前を通る国道48号線に達し、左折して国道を西進し、東北大学病院前を経て、15時40分頃に大崎八幡宮前に到着する。例年中央通りのアーケードはビル風が強く、国道も風の通り道になりやすく、この区間の歩行が寒行として厳しいものになるという。

大崎八幡宮に到着すると配列のまま石段を登り参道を進んで拝殿を右回りに廻ってから奉納物を納め、拝殿内で神札・破魔矢を授けられ、一人一人御神酒をいただく。神札は三体で、ともに東日本旅客鉄道株式会社仙台支社 取締役仙台支社長名で、祈願内容は「商売繁盛」一体に「安全」二体である。その後御神火の回りを右回りに一回りして16時過ぎころ参拝を終わる。

参拝が終了すると参加者たちは牛越橋脇に移動し、待機していたJRバスに乗車して南吉成の大型浴場で入浴・着替えの後、JRバスに乗車して市内ホテルの直会会場に移動し、18時30分から、参拝者、介添者、幹事である事業部の担当者に、各部署の担当部課長と支社長、仙台駅長を迎えて直会の席が設けられた。直会では乾杯の後、参拝者の代表数名が感想を述べ、終りに裸参りの主催幹事が今年の事業部から来年の運輸車両部に引き継がれて締め挨拶となる。

裸参り体験のもたらすもの 終了後につぶやかれ、直会で発表される裸参り初体験の感想には、ほぼ共通の思いが見てとれる。何よりもまず「裸参り」という寒行によって、今まで一度も経験したことのない未知の「寒さ」を体感したこと、そしてそれにもかかわらず参拝終了まで脱落せずやり遂げた自身に達成感と充足感を感じたこと、その達成感がこれからの通常業務をこなしていく自信と活力になると思われること、さらに提灯の社名を掲げつつ参拝することで会社の一員であり代表である自身を意識し、かつ沿道の声援を受ける中で地域に支えられている自社を実感することである。そうした思いをもって新人の若者たちは、裸参り体験を「参加して良かった」「感動した」と一様に総括しているようである。

(4) 事例・仙台市立病院の裸参り

大崎八幡宮を始めとする仙台市内各地のどんと祭には、多くの病院・医療施設からの裸参りが参拝する。その中でも仙台市立病院のそれは、30年前から途絶えることなく毎年継続し、女性を含めた100名近い裸参り参拝者が列を連ねて大崎八幡どんと祭に詣でる姿が、常に仙台市民の目を引きつけてきた。

裸参りの経緯 仙台市立病院の裸参りは、昭和53年(1978)に始められた。10年後の昭和62年(1987)には、裸参り10周年を記念して、裸参り開始時の経緯と裸参り実行委員会の準備運営の姿が、ビデオにより丹念に撮影され、明確な方針のもとに編集されナレーションを吹き込まれた記録映像として

ビデオディスクに残されている。これは明かに、仙台市立病院の裸参りを院内の重要行事として、その経緯と実践を記録することで、裸参り草創の頃の熱意と志向とを後の世代に継承する手がかりにするべく作り込まれた映像である。

その映像中の回想と、昭和58年(1983)の裸参り以来参拝者や裏方として関わり続けてきた管財課職員の話によれば、裸参りの起りは、飲み仲間の整形外科医たちによる酒の席での思い付きであった。当時の院長の口癖は「病院一家」であり、細分化した大組織である病院全体の連帯と連携を高めるためにも、院内の組織を横断して「俺らみんなで何かやっぺや」という志しと遊び心に根ざしていたようである。毎年正月14日に仙台の繁華街一番町を闊歩する裸参りの姿を思い出し、その「何か」にふさわしい催事を裸参りに定めたという。

整形外科から発起された「仙台市立病院の裸参り」構想は、まったく何もないところからの企てであり、資金、参加者、準備などのさまざまな困難を抱えていた。そこで彼らは院内に募金を呼びかけて資金を集め、同様に参加者を募集し、あらゆる知合いとつてを駆使して準備を整え、裸参り参加者35名、介添役である取巻きも合わせて総勢50名による第1回裸参り実施まで牽引していく。

そして回を重ねるごとに参加者も順調に増え、当時若い女性社員を多数加えて観衆に好評だった三越百貨店の裸参りの大集団とも、肩を並べる規模の行列を連ねるようになった。現在にいたるまで、仙台市立病院の裸参りは途切れることなく継続され、2007年で30周年を迎えた。

2007年1月14日の裸参り 2007年1月14日の裸参りの参加者は、参拝者71名、そのうち男性37名、女性32名、小児2名、そして取巻き14名の総勢87名であった。各診療科の医師、看護師、検査技師、薬剤師、事務職員などまで、病院内のあらゆる部署からの参加者とともに、希望があれば職員の知人、家族をもその行列に迎えている。最近ではわざわざ裸参り参加のために来日したアメリカ人もあったという。

午後、院内で男女別に着替えを済ますと、10階大講堂に参加者・関係者が集合して、出陣式が行われた。当初の出陣式は2階ロビーで樽酒の鏡割りをし、調理室で作り熱くした豚汁を運び込んで行われていた。後に院内が飲酒禁止になり、調理を行わなくなって、10階の講堂で升酒を振る舞うのみのものになった。かつて2階での出陣式では、職員の家族知人、入院患者に加え、外来患者や地域住民までが、その出発を見送りに人垣を作り、賑やかで盛大な出陣式であったという。

参拝者の装束は、男性は白い晒しの向う鉢巻きをし、腹に白い晒しを巻いて半股引を履き、足には白足袋に草履を履き、腰には藁の注連縄を巻く。女性は白い半纏とショートパンツを身につける以外は男子と同様である。ともに三角に折った懐紙を口に咬み、片手に鉦、片手に「仙台市立病院」の名を画いた弓張り提灯を持つ。多くの参拝者は昨年の神札を納めるために晒しの胸元や半纏の懐に挟んでいる。

行列は先導1名を先頭に、男女の行列先頭各1名、「仙台市立病院」名の3本の高張提灯を掲げる女性6名、紋付袴姿の男性3名、三宝に餅・魚・野菜を載せて持つ男性3名、鉦と弓張り提灯を持つ女性25名、男性28名が二列縦隊で続き、最後に子供2名、男性2名が掲げる高張提灯2本、最後に男性1名が最後尾をしめて行列は終わる。行列の後には介添役の取巻き14名が交換用の懐紙の予備を持って続き、さらに後に内科の医師等の救護班が固めている。当初救護班は救護の旗を担いで続いていたという。また、鉦と提灯を持つ二列縦隊の参拝者は、必ず鉦は行列の内側、提灯は外側に持つしきたりがある。

参加者は出陣式を終えると、病院正面玄関前で行列を組んで懐紙を口に含み、14時30分に出発した。東二番丁通り、国道4号線を北進し、南町通りに左折して西進し、東一番丁通りの入口からアーケードの繁華街の中を端から端まで北進する。かつてはアーケードの一部しか行程に組み入れていなかったが、参加者に病院全体の代表としての緊張感を持たせるために人通りが多く注目される東一番

町アーケードの全長を行程に組み入れたのだという。

アーケードを抜けると正面に仙台市役所が位置し、15時頃から30分ほど市役所のロビーで休憩をとる。かつて病院勤務であった市役所職員などが集まって出迎え歓談する。以前は仙台市長が裸参りを出迎えていた時期もあったという。休憩後市役所を出発し、北一番丁通り、晩翠通りを経て国道48号線に入り、17時前に大崎八幡宮に到着する。

石段を登り、鳥居をくぐって拝殿に進み、神殿を1周してから、奉納物を取めて新年の神札を授かり御神酒をいただく。ここから松焚場に戻り、腰の注連縄と古い神札を火に投げ入れて裸参りは終了する。帰りは17時30分頃、牛越橋脇に待機しているバスに乗車して帰院し、参拝者・取巻き・裏方など全関係者で直会が催されて、2007年の裸参りが終了した。

仙台市立病院の裸参りは、6キロ以上の長距離を踏破する多人数の隊列で、全行程を徒歩で大崎八幡に参拝する団体の中では、もっとも長距離を参拝する裸参りの一つであろう。病院前を出発してから帰りのバスに乗車するまで、休憩も含めてじつに3時間にも及ぶ。しかし毎年準備に当たる担当者たちは、祈願のための耐寒行としての本旨を守ろうと、手袋や女性参加者の下着、ストッキング、さらにはアクセサリなどを遠慮してもらうようにしているという。

裸参りに託す思い 病院に勤務したばかりの若い新人は、有力な裸参り参加者として常に期待されている。成行きで参加することになった新人も、始めて体験する長時間の耐寒行の後、帰院して直会に出席した彼らの表情は一様の笑顔であるという。未知の体験を自身でやり遂げたという充足感から、「やって良かった」という共通の感想が語られるようである。

また、裸参り10周年記念のビデオディスクの中で、裸参りを最初に発起した整形外科医たちは、遊び心と隣り合わせの裸参りに寄せる切実で熱い思いを語っている。一人は、多くの部署に細分された総合病院の中で、踏み込んだ人間関係を結びづらい職場でのお互いの角を裸参りが壊し、丸くなった人と人が円滑に日常の業務を運べるようになるという。一人は、裸参り体験が、社会の構成員としての自身、病院の構成員としての自身の自覚を呼び覚まし、社会人としての役割と責任の自覚につながる。それに応えてもう一人は、「仙台市立病院」名の高張提灯が掲げられた情景を目にして、自身はこの中の一員として日々業務に勤めていることが涙が出るほど嬉しかったと語っているのである。

もとより、これらの裸参りに託す思いの基底には、医療従事者としての祈願が持つ本来的で切実な意味が常に意識されている。いかなる部署であろうとも病院の職員であるかぎり、祈願はまず患者さんたちの回復祈願であり健康祈願であることは言うまでもない。そういう意味で医師も看護師も担当患者ひいては市立病院の患者全ての代参者であり、そのため出発にあたっては、参加者は裸参り姿を担当患者に見せに行き、患者も注連縄の藁をお守りとして欲しがるのだという。かつて出陣式が2階ロビーであった時には、車椅子や点滴を付けた患者たちが大勢見送りに赴いて人垣が出来た。看護師に頼んでベッドのままロビーまで運んでもらって見送った患者もあったという。

裸参りの継承 こうして、30周年を迎えた仙台市民病院の裸参りは、多くの関係者のさまざまな思いによって支えられてきた。第1回から定年まで26回も参加し続けた女性看護師を始め、10回、15回と連続参加の職員たちは、また裸参りの準備運営にも忙しい勤務の合間を塗って献身している。15回参加している検査技師は、二人の娘も一緒に毎年参拝してたという。一方で、当初の裸参り開始の経緯と志しを継承する工夫もさまざまなされている。10周年記念のビデオはその一つであり、参加者を減らさないために、3回連続、5回連続参加する参拝者と取巻きには、記念品や祝儀を用意している。そして祈願としての本来の姿を保とうとする努力も、仙台市立病院の裸参り継承の試みの一つである。

(5) 事例・個人の裸参り

大崎八幡宮のどんと祭には多くの団体や企業が裸参りに訪れるが、その中には個人や家族での参加といったケースも見受けられる。仙台市青葉区二日町のユニホーム販売の「ダイコクヤ」では、以前から個人参加者用に裸参りの衣装ワンセットを販売し、着付けのアドバイスもおこなっているが、毎年一人二人は個人参加の新規購入者がいる他、以前に衣装を購入した個人参加者に注連縄などの消耗品のダイレクトメールを送っており、裸参りの個人参加は確実に増えていると話している。その個人参加の先駆けと言える人物が仙台市青葉区木町通在住の岩松卓也さん（昭和14年生）である。以下は岩松さんからの聞き取りである。

岩松さんは昭和30年に中学校卒業後に仙台市一番町の「東一市場」内の魚屋に勤め、その魚屋が裸参りを行っていたので、昭和31年1月のどんと祭で魚屋の主人らと裸参りに出かけたのが最初であった。その後、高校在学中もその魚屋でアルバイトを続けたため、裸参りには毎年出ている。当時は東一市場の中で裸参りを行っていたのは3軒の魚屋と蕎麦屋、それに組事務所のあった博徒の一家で、所謂「素人」は裸参りはしなかったという。また女性の裸参りはうるう年の時だけに限られ、洗い髪で白い衣装を着けて女性だけで参った。魚屋の裸参りは店が終わってからで、夜7時過ぎに出発したが、帰りに国分町を通るとキャバレーなどの飲食店に呼び込まれて、ただでご馳走になったこともあったという。

大学に入り魚屋のアルバイトをやめたが、それまで続けてきた裸参りをやめる気にはなれなかった。アルバイトの時に水商売の女性に「3年続けたら願がかなう」と言われたが、3年でやめるのではなく、学生ながら年に一回何かをやり続けたいと思い、ひとりで裸参りを続けることにした。衣装や道具を用意し、当時住んでいた（若林区）古城東から往復5時間半をかけて大崎八幡神社（当時）に裸参りした。夕方、水道の水を20杯かぶり、腹巻をして足袋の中に唐辛子を入れ、替えの足袋を持って出た。当時はひとりで裸参りをしていた人はいなかったのではないかと。裸参りは厳粛なもので、街の人たちも神聖なものを見るような思いで見守ってくれた。街を歩いていると、見送る人や参拝客が自分の肌に触れたり、酒を振舞われたものだった。学生時代から市内の小料理店やトンカツ屋で板前の修業をしており、結婚後も調理の仕事をしている時期も、ひとりでの裸参りは欠かさなかった。

昭和44年に長女が誕生し、（宮城野区）原町に移って、翌45年に当時8ヶ月の子供を抱いて裸参りに出た。妻は最初は反対したが、長女は3歳のときに一緒に歩いて裸参りに行くようになった。昭和50年に次女が誕生し、翌年から娘2人を連れて裸参りに出た。また昭和51年に（青葉区）大町に現在の店「とんかつ処 岩松」を出店した。その頃からテレビや新聞に取り上げられるようになり、撮影のために明るい時間に歩いて欲しいとの要望が寄せられたのと、裸参りから戻ってから店を開けるため、午後3時過ぎに出発するようになった。

娘を連れて裸参りを続けたのは、年中無休で遅くまで飲食店で働いていたので、子供と接する時間が少なかった。裸参りをする事で、同じ寒さを体験し、父親と共有することで仲間意識を持てるのではないかと考えた。小さい頃は子供は大学病院のあたりで、寒さで泣き出したが、綿アメを買ってやったりして、なだめなだめ連れて行った。2人の娘は中学生まで父親と裸参りに参加した。その後はひとりで裸参りを続けたり、店の常連客が参加したいと言って一緒に行ったこともあった。長女が結婚して平成3年に孫の男の子ができたが、その子も6年間一緒に裸参りをした。

岩松さんの裸参りは1月14日の午後3時過ぎに青葉区木町通の自宅の風呂場で水をかぶってから出発する。衣装は白はちまきと白の晒しの腹巻、パンツの上に猿股をはき白足袋。右手に鐘、左手に「岩松」と書いた提灯を持つ。草履などの履物と腰の注連縄はしていない。岩松さんが最初に裸参りをした昭和30年代はじめには、履物と腰の注連縄はなかったと言い、昔のやり方を守ったという。衣装

はデパートなどで購入し、提灯ははじめは柳町の「椎名提灯店」で購入し、現在は若林区遠見塚の「キリエ」で作ってもらったが、これまでに3回取り替えたという。

岩松さんは昭和60年代以降、裸参りが形骸化しお祭り騒ぎになったと違和感を持っていた。平成11年に裸参りに行った時、翌年に大崎八幡宮が大修理に入るのを知り、突然涙が出て歩けなくなった。これが限界だと悟り、その年で44年間続けてきた裸参りを終わりにした。しかし平成19年に、仙台の高校に入学した長女の長男（孫）がひとり裸参りに行くと言い出した。孫は岩松さんと一緒に6回裸参りに行っていたが、転居によってその後は裸参りに行かなかった。高校生になったのもう一度やってみようというのと、祖父の健康を祈ってひとりで行くとのことであった。平成19年1月14日午後3時に、青葉区木町通の岩松さんの自宅を出て大崎八幡宮に向かったところ、提灯の「岩松」の文字を見て「また始めたの」と声をかける人がいたという。また裸参りの一番乗りで石段の下に着いたところ、「裸参りが来ました」のアナウンスとともに参拝客が拝殿まで道を空けてくれた、「あの時の気持ちよさは忘れられない」と言っていたという。

岩松さんは裸参りを続けた理由として「やり続けることで自信が持てた。終わると次は365日後だと思い、がんばろうと思った。裸参りの醍醐味は、神社に着いて火のまわりを3回廻り、熱い思いをしたあと、再び寒さの中を帰ってくる、その熱さと寒さ、それを実感することにある」と語った。

第2節 岩手県南部地方の裸参り

本節においては、初めに東北各地の「裸参り」と呼称される行事および類似するものの事例を、特定の観点から概観し、注意される特性を示したうえで、特に岩手県南部地方に伝承される裸参り習俗の表徴を指摘し、それが仙台市大崎八幡宮どんと祭における裸参り習俗と系譜関係にあることを示唆したい。なお東北地方の裸参り習俗の通観には、1991年から2006年までの「河北新報」の地方記事を主として参照した。

次に岩手県南部地方の裸参りの事例として、新年の年占行事中で行われる二戸市似鳥八幡宮の裸参り、五元日祭とともに行われる紫波町志和八幡宮の裸参り、そして蔵人の習俗として伝えられている雫石町三社座神社の裸参りを取りあげ、その様相を記述する。

（1）東北の裸参りの諸相

東北地方の年中行事としてのハダカマイリ（裸詣・裸参）は、「若者たちが裸になって参拝する祭典・行事」（『秋田民俗語彙事典』稲雄次編著 無明舎出版 1990）、また「若者たちが裸で神参りに参加する行事」（『青森県百科事典』1981 株式会社東奥日報社 森山泰太郎担当）、「若者たちが裸になって参拝する行事の一つ。裸祭りとも呼ぶ」（『秋田大百科事典』秋田魁新報社 1981 齋藤寿胤担当）とあるように、特定の条件を備えた「裸参り」は、「一人前の成人式をすませた男子」であり、「祭りの構成員すなわち村の社会的地位にある者」が、みずからを提示し誇示する祭事としての特性を備えている。

ただ、東北各地の「裸参り」と呼称されてきた行事習俗、あるいは体系化された一連の祭事に組み込まれて「裸参り」と呼称される要素は、たしかに多くの場合「村の若い衆たちの晴れ姿」ではあるが、その他のさまざまな動機・意味付け・役割などを付加されて成立している。そこでまず、東北各県の裸参り習俗を順次概観してみたい。「東北の裸参り装束採り物一覧」（表1参照）に取りあげた30件の事例を一覧し、それを「東北の裸参り装束採り物分布図」（図3参照）と照合すると、特定の性格

を共有する裸参りが特定地域に分布する場合と、孤立した事例同士が発生や機能面で一致する場合が見てとれる。

年縄奉納 青森県津軽地方には、大晦日から元日にかけて、数十キロから数百キロもある大しめ縄や福俵などを、集落の産土社に奉納する行事、すなわち年縄奉納の習俗がかつて広く分布しており、いくつかの集落が今も伝承している。この年縄を担いで集落を練り歩き、産土社に参詣して奉納するのが、白鉢巻に相撲回し姿の裸参りの若者たちである。

弘前市鬼沢（おにざわ）地区には鬼神社（きじんじゃ）と呼ばれる興味深い産土社がある。鬼神社は、岩木山に住む鬼である大人（おおひと）が村人に農耕のわざを教え、逆堰と称する困難な用水堰を一晩で造って村人の開田を助けたため、感謝した村人が鬼神様を祀ったと伝えられる。鬼神社の社名額の「鬼」の字には「ノ」がなく、鬼沢地区では節分に豆撒きをしない。鬼沢の裸参りは旧暦の正月元旦である。昨年中から地区の人々が総出で大小合わせて40余しめ連縄を作る。鬼神社に奉納する大注連縄は直径60センチ、重さ70キロ、中型の物でも重さ40キロある。元日の朝9時頃、裸参りの若者たちは鬼神社に集合する。雪と冷水を入れた大桶に肩までつかった後、藁火で体を温め、登山ばやしに合わせてそれを数回繰り返して水垢離をとる。男たちは白鉢巻に白の相撲まわし、素足に草鞋履きで、大注連縄などを肩に担ぐ。登山ばやしの笛・太鼓を先頭に、幟や供え物を持った婦人たちと行列をつくり、地区内約2キロの道を「サイギ、サイギ」の掛け声とともに練り歩く。地区の7ヶ所の神社や祠をまわって参拝し、注連縄や供え物を奉納する。この裸参りは三百年以上前から続いているという。

裸参りの若者たちが正月の産土参りに年縄を奉納し、新年の豊作・大漁・安全などを祈願する事例は、他に南津軽郡藤崎町常盤の常盤八幡宮、西津軽郡鰹ヶ沢町舞戸の正八幡宮、西津軽郡深浦町岩崎にも見られる。とくに岩崎の裸参りは豊作大漁祈願に作占の趣向も加味されている。岩崎の年縄奉納は新暦12月30日の暮れに行われる。その一週間ほど前から村の男たちが集会所に集まり、大しめ縄やしめ俵を作る。当日は30人ほどの男たちが精進潔斎した後、重さ約80キロの大しめ縄2組を担ぎ、「サイギ、サイギ、ドッコウサイギ」と声を掛けながら村内を練り歩く。岩崎漁港近くで二手に分かれ、山の武甕槌（たけみかづち）神社と海の弁天堂の鳥居に大しめ縄を掛ける速さを競い、翌年の大漁・豊作を占う。海側の神社が勝てば大漁、山側の神社が勝てば豊作と言い伝える。男たちの現在の装束は、白鉢巻に腹に白晒を巻き、半股引に草鞋を履く。この裸参りは産土講の伝統行事として350年以上続くという。本来は旧暦12月3日に行われていたが、近年は村外に出た若者達もどってくる新暦12月30日に行われている。

なお、津軽の裸参りに特有の相撲まわしを着けた裸姿は、旧暦8月1日の岩木山登拝「お山参詣」においてかつて見られた若者習俗である。

水神への奉納 同様に裸姿の男たちが大しめ縄やえびす俵を奉納する裸参りでも、秋田県の鹿角市土深井と湯沢市岩崎に伝わる由来伝承は、その発生においては氾濫する米代川や皆瀬川の水神・龍神に捧げられた奉納物であったことを示唆している。

鹿角市十和田土深井の裸参りは、寛文10年(1670)ごろ、地区を流れる米代川が度々氾濫し、村人が苦しんでいたところ、古い師が「災いを静めるためには、水で身を清め神社にお参りせよ」といったのが裸参りの始まりと伝えられている。現在新暦2月第三日曜に行われる土深井裸参りは、もとは二年に一度の旧暦2月19日に行われた。当日は早朝から男たちが15メートル程の大しめ縄を作り、正午に裸姿の男たちが村堰で水垢離をとり、大しめ縄を担いで稲荷神社の一の鳥居に奉納し、続いて稲荷神社、八幡神社、駒形神社、山神社を巡拝する。白晒しの腹巻き、半股引、足袋、草鞋、腰に藁の下がりの細いしめ縄、口に白紙をくわえ、手に祈願を書いた幟を持つ。腰にしめ縄を結び、口に白紙をくわえる無言の行列であることが、しめ縄・俵奉納の裸参りの中では得意な装束作法を持っている。

湯沢市岩崎の裸参りは水神社初丑祭りと呼ばれ、八幡神社境内の水神社に裸参りの男たちがえびす俵を奉納する。天正元年（1573）に皆瀬川の竜神にさらわれたと伝えられる岩崎城主の娘能恵姫（のえひめ）をしのんで、姫を祭る水神社で、姫の嫁入りの日だった旧暦11月の初丑の日に行われる。出稼ぎ者が増えた1960年ごろに途絶えたが、89年に地元有志によって復活した。当日は岩崎地区の20～60歳代の男たちが、鉢巻・足袋・禪姿で、6町内毎に分かれて、えびす俵を担ぎながら寒空の下を練り歩く。水神社にえびす俵を奉納する際、奉納を済ませた町内が、後からやってきた町内を入口付近で荒々しく迎え、男たちは「ジョヤサー、ジョヤサー」と威勢良く声をあげて激しくもみあい、豊作と水難除けを祈願する。

蘇民祭 岩手県南半の旧伊達藩領は、廃絶した事例も含めて「蘇民祭」と総称される正月の「裸祭り」が濃密に分布する。蘇民祭は水沢市黒石の黒石寺蘇民祭が古い伝承形態とされるが、その一連の祭事は体系的に構成され重層的な構造・意味を持つと考えられる。ここでは、その祭事の次第の一つとして組み込まれている蘇民祭の「裸参り」を中心に考えたい。多くの蘇民祭は基本的に、水垢離を伴う裸参り、柴燈木（ひたき）登り、別当登り、鬼子登り、蘇民袋争奪の祭事次第によって構成されている。祭事の冒頭に位置する「裸参り」は、祭り参加者たちの祭りへの祈願の意味を担っている。

黒石寺蘇民祭は旧暦1月7日の夜半から翌8日早朝にかけて行われ、7日午後10時ころから始まる裸参りで幕を開ける。この裸参りは「夏参り」または「祈願祭」ともいい、厄年の者を含めた祈願者が禪に地下足袋・草鞋姿で、境内の瑠璃壺川で水垢離をとり、薬師堂と妙見社を三回巡って参拝する。男たちは禪一つに地下足袋や草鞋、片手に角燈、片手に洗米をお捻りにして参拝する数だけ割竹にはさんだ浄飯米（オハンナイリ）を持つ。「ジャッソウ」「ジョヤサ」などの掛け声をかけながら境内の薬師堂・妙見社を巡り歩き、参拝する度に手に持ったオハンナイリを一包みずつ賽銭箱に投じていく。

西磐井郡平泉町平泉の毛越寺常行堂では、新暦1月20日夜に行われる「二十夜祭」も蘇民祭といわれる。祭事の始めに常行堂の講衆ら数百人が献膳・蘇民袋などを捧げて毛越寺に向かう「お上り行列」の中に、数え42歳の厄男を中心とした裸参りの一行がある。裸参りの男たちは鉢巻に禪、地下足袋姿で、大松明や手木を持つ。厄男たちは、太鼓、ほら貝に先導され、腰で支えた大松明を振りかざしながら、「ヨッ、ヨー」と悪魔払いの気合いを入れながら歩行する。

このように蘇民祭の裸参りは、掛け声を上げ、気合いを入れながら歩行する作法・所作が一般的だが、南部地方と隣接する蘇民祭の北限地域に、白紙を口に咬んだ無言の裸参りで開始される蘇民祭が存在する。花巻市矢沢の胡四王神社では、慶応年間に疫病流行を鎮撫するため蘇民祭が初めて行われたという。裸参りの男たちは、白鉢巻に白晒しの下帯を着け、白足袋に草鞋を履き、腰に紙垂の下がった太めのしめ縄を巻く。口に三角形に折った白紙をくわえ、松明を手を持つ。麓の神社遥拝殿前で神主によるお祓いを受け、水垢離をとり、天狗、宮司、鉦・太鼓に先導され、行列を構成して山頂の本殿へ登る。

また花巻市石鳥谷町の光勝寺五大堂の光勝寺五大尊蘇民祭では、旧暦正月7日夜の前夜祭で裸参り祈願祭が行われる。6日午後7時、1キロ西の公民館に参加者が集合し、水垢離をとり装束を整えて、神楽囃し・法螺貝に先導されて、「ジャッソー」の掛け声をあげ拳を突き上げながら、行列歩行して光勝寺に向かう。境内一の鳥居をくぐると掛け声を止め、口紙をくわえて五大堂、本堂に参拝して祈祷・加持を受け、口紙・角燈の紙を燃やす。すなわち掛け声をあげる裸参りと白紙を噛む無言の裸参りが一の鳥居の内外で交替しているのである。

年占 西津軽郡深浦町岩崎の裸参りが年縄奉納と海山の豊凶占いを兼ねていたように、正月の年占祭事に裸参りが組み込まれている事例も各所に単独で散見される。

岩手県では二戸市似鳥（にたどり）の似鳥八幡宮のサイトギでは、旧暦大晦日から正月6日までのオコモリ、6日夜にサイトギの前の裸参りを合わせ行う。オコモリとは、大晦日に炊いた飯を土地の

五穀を表す5本の剣状に盛り上げ、それが崩れるかどうかで凶作か否かを占う。6日午後7時ころ、社殿で似鳥新山神楽の権現舞が奉納され、神主が祝詞を奏上し薪に点火する。裸参りの若者たちが水垢離をとり、装束を整える。白鉢巻に白晒しの腹巻き・締込み、ケンダイを腰に巻き、白足袋に草鞋、口に含み紙、手に御幣を持つ。鈴を振る先導者に従って石段を登り、八幡宮を参拝してから境内の観音堂他の小祠を順に巡って参拝する。参拝が終わると腰のしめ縄を八幡宮の柱に結んで奉納し、生木の長いテコを手にして火の回りを囲み、ほら貝と太鼓の音に合わせてテコで四方から薪を揺さぶって火の粉を舞い上がらせる。神主は火の粉の流れる方向と様子で豊凶を占う。サイトギは井桁に組んだ薪を燃やし、裸参りを終わった男たちが薪を揺すって炎を掻き立て、火の粉の流れる方向と様子で豊作不作を占う。

宮城県では加美郡加美町柳沢の焼け八幡と呼ばれる複合的意味を持つ小正月行事がある。正月14日に若者たちが柳沢地区の高台にある八幡神社に、竹とわらで「御小屋」を作り、そばにある老木に月数を示す12束あるいは13束のわらを吊るして点火し、作物の作柄を占う。15日は若者たちが集会所で酒を酌み交わし、下帯一つで神社に裸参りし、「ヨイサ」「ヨイサ」の掛け声とともに地区内の44戸を回って手おけの酒を振る舞い、顔にススをつけて歩き、最後に御小屋に火をつける。

旧伊達藩領の裸参りの古い伝承においては、無言の作法は一般的ではなかったことが推測される。災厄除け 特定の災厄を端緒にして、その災厄を防除する祭事が行われる場合、火難除け・火伏せ祈願は「水かけ祭り」の形で表れている。岩手県では一関市大東町大原の水かけ祭りは、現在新暦2月11日だが、もとは旧暦1月18日に行われていた。その発生については、明暦3年(1657)正月18日の江戸大火を機に、仙台藩の代官所のある大原にも防火を呼びかける触書が回り、1月18日を厄日と定め火防祈願、火防宣伝の祭りとして始まったと伝えられる。やがて厄落しをかねるようになり、今は厄除け祈願の意味あいが強い。当日は大原商店街の道路5区間約500メートルを、約200人の裸男と加勢人(かせっと)が、花火の合図とともに一斉に駆け出し、叫び声を上げながら全力疾走する。沿道に詰め掛けた人たちは「ハレ、ハレ」と声を掛けながらバケツやおけで勢いよく清めの水を浴びせかける。祭りのきっかけとなった江戸の大火は「振り袖火事」とも呼ばれ、振り袖に付いた火が原因である。そのため女人禁制で、厄年の女性の身代わりに幼い男児の加勢人が参加する。走り終えた後、男たちは輪になって一斉に「納め水」を浴びる。男たちは白鉢巻に白晒しの腹巻き、半股引に白足袋・草鞋の姿で、商店街の道を叫び声を上げながら駆け抜ける。

また福島県の双葉郡浪江町権現堂の水かけ祭りも、江戸期の大火を契機にしている。1859(安政6)年に発生した大火で現在の浪江町の中心部、権現堂村82戸の家々が西風にあおられて焼失、町並みをそれまでの東西沿いから西風に強い南北沿いに造り替え、中央に水路を通した。さらに浪江神社を現在地に写し、毎年旧暦の正月八日、火災予防を祈願して浪江町消防団第1分団が主催して実施される。防火祈祷祭裸参りともいう。町消防団員や厄年の男たちは、白鉢巻に白晒しの半纏と半股引に白足袋を履く。もとは裸に腰注連縄を着けただけだったが、昭和4年浪江警察署長からの「お達し」で白装束をまとうようになったという。浪江神社でお祓いを受け、先頭に家屋に水を掛ける水掛け役の後に、「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声を発する白装束の一行が続く。沿道で待ち構えていた住民は水を掛け、声援を送る。参加者は権現堂地区の目抜き通り約四キロを走り、締めには万歳三唱をして終り、公衆浴場で暖まる。

一方、突然の岩手山の噴火に遇ってその沈静を祈願したのが、岩手山の麓に位置する八幡平市西根町平笠の裸参りであると伝えられている。享保年間(1716-1736)、岩手山腹が噴火して溶岩が流出し、焼走り溶岩流ができる。山の噴火と当時流行していた疫病を鎮めようとして平笠の人たちは裸参りによって岩手山に祈願した。太平洋戦争中は出征した夫・息子の無事を祈って女たちによって続けられ、戦後一時中断するが昭和40年に復活する。現在は女性参加者が過半を占め「女裸参り」として知ら

れている。女たちは白鉢巻に白の肌着を着け、長い白の下がりのケンダイ、手に鈴と験竿、口に独特の折り紙にした含み紙を噛む。当日は盛岡などではハサミと呼ぶ験竿に鈴を手にした白装束の女性たちが、朝8時半ごろ宮田神社を出発、家々の求めに応じて門付けをしながら八坂神社までの約13キロを5時間ほどかけて歩く。始終口紙を噛んで歩行する無言の行である。

安産・成長祈願 単一の事例として山形県余目町千河原の八幡神社に「やや祭り」と呼ぶ祭事が伝承されている。その由来伝承は以下のようなものである。第15代応神天皇の皇子大山守命が、悪臣の謀反にあつて千河原の地に逃れ、村の長老弥左右衛門家の産屋の妊婦にかくまわれた。それに感謝した皇子は、妊婦に「私が死んでも神となってお前を守り、世の産女の安産を祈ろう」と言い残したという伝説にちなむ。かつては子どもの裸参りだけでなく、若者もお百度参りを行い、夜にはワラ束で互いの体を打ち合った。このときの「ヤアヤア」という掛け声から、やや祭りと呼ばれるようになったという。少年たちは白鉢巻に藁のケンダイ（腰蓑）、を着け、素足に草鞋を履く。裸姿の少年たちが、手桶で何杯も冷水を浴びせられ、村内を一周する。かつては神社の参道で、同じ裸姿の若者たちが、鳥居と拝殿の間を往復する度に冷水をかぶってお百度参りを行った。

寒行 横手市雄物川町二井山の湯殿山神社の裸参りは、かつての信神者の寒行の本来の姿を伝える行事である。裸参りは「お柴燈」とも呼ばれ、かつて二井山地区の者は、各家一人は裸参りに参加した。また女性参加者は「夏参り」と呼ばれる浴衣姿での参拝を行ったという。裸参りの者は新暦1月7日の夜、奉納する百匁蠟燭に願事を記し、熱い風呂で身を清め暖めた後、下帯一つに腰に細いしめ縄を巻き、素足で神社まで走り、境内の井戸で水垢離をとり、社殿に百匁蠟燭を奉納して帰る。

(2) 南部地方の裸参り

岩手県南部地方の裸参りのなかで、その装束所作の表徴をもっとも鮮やかに示しているのは盛岡市内の裸参りである。現在盛岡市内の寺社で行われる正月の裸参りは、北山の教浄寺・八幡町の盛岡八幡宮・内丸の桜山神社などで、それぞれ新暦1月14日・15日・26日に参拝が行われる。盛岡の裸参りは教浄寺で発生し、古くは教浄寺のみで行われ、後に盛岡八幡宮・桜山神社にも波及したと伝承されている。

盛岡市教浄寺の裸参り 教浄寺は北条氏滅亡に殉じた南部茂時の時宗の菩提寺としても三戸にあった。慶長17年（1612）南部利直が盛岡に城を移すにあたり、教浄寺も盛岡北山に移転する。利直は恵心作と伝える阿弥陀如来像を教浄寺に奉納し、奉納を祝して七日間一般人の参観を許したところ、参詣者が雲集し、それ以来「おあみださん」の名で親しまれるようになる。旧暦12月14日は阿弥陀の年越の祭礼で、阿弥陀像の年に一度の開帳があり、腰ミノだけの姿で裸参りする者があり、盛岡の裸参りはもと教浄寺だけで行われていたと伝える。

現在教浄寺の裸参りは地域の消防団員などによって担われているが、裸参り参加者は風呂に入って体を清め、暖めた後、装束を整える。白鉢巻、白い晒しの腹巻き、紙垂を付けた腰ミノ状のケンダイを着け、しめ縄を斜めに背負い、素足に草鞋を履く。口には三角に折った白紙を噛み、右手に鉦、左手にハサミを持つ。ハサミとは、一間余りの割り木に三角に折った半紙を数十枚挟んだもので、片手だけで捧げていることは難しいため、ケンダイを巻いた腹にハサミの端を乗せて片手を添える。他に消防団なら団旗を持つ者、高張り提灯・長提灯を持つ者、魚・野菜・お捨りにした洗米などをそれぞれ三宝に入れて捧げる者など、整えられた隊列を組んで出発する。歩調は非常に緩慢で、全体の歩調を揃えるために一歩ごとに一斉に鉦を振る。その鉦の音に合わせて大きく一步を踏み出す度に、ハサミの先端を地面に摺るほど前に倒し、おもむろに後ろ足を寄せると同時にまたハサミを立てる。そのように歩調を合わせ、極めてゆっくりと練りながら参道を進み、本堂で祈祷を受けて供物を奉納し

た後、腰のしめ縄をはずし、ハサミなどの持物を納めて裸参りは終了する。

装束の細部やハサミの白紙の枚数など、各消防分団の伝承に微細な異同はあるようだが、盛岡八幡宮、桜山神社の裸参りの装束・作法所作・参拝方法などは基本的に共通している。

年越祭・縁日 教浄寺に見られるように、盛岡の裸参りはその寺社の本尊・神体である神仏の縁日の日、そして暮れから正月にかけての寺社の年越祭・祈年祭の日に合わせて行われている。教浄寺の場合、本来旧暦では暮れの12月14日が阿弥陀の縁日であり年越しの日であるため、年越祭は旧暦12月14日に行われ、年に一度の「おあみださん」の開帳もこの日に行われていた。かつてはこの開帳に多くの参詣人が群集したといい、藩政期にその賑わう雑踏に向けて腰ミノ一つで裸参りを敢行する若者が現れたのであろう。近代以降新暦使用が普及し、月遅れの新暦1月14日に年越祭を定めたため、裸参りも新暦正月14日に行われるようになり、近年では松飾りを焚くどんと祭まで合わせて行うようになっている。

現在盛岡八幡宮は新暦1月15日、桜山神社は同1月26日に裸参りが見られるが、ともに両社の年越祭の日である。

雫石町の裸参り 同様の事情は盛岡周辺の裸参りにもうかがえる。岩手郡雫石町の裸参りは、町中にあった造り酒屋の蔵人たちが、暮れの12月14日に永昌寺の阿弥陀如来の開帳に、裸参りをしたことに始まると伝えられている。現在は新暦1月の第3日曜に行われるが、かつては旧暦12月14日の阿弥陀如来の縁日に合わせた開帳の祭日であったことが、盛岡市教浄寺の事情と酷似している。雫石の裸参りは昭和初期に中断の後、昭和55年に復活されるが、その装束・所作の点でも盛岡の裸参りと細部まで一致する。盛岡の裸参りが直接移入されたことが推測される。

紫波町志和八幡宮の裸参り また紫波郡紫波町の志和八幡宮の裸参りは、戦前、志和八幡宮の五元日祭に合わせて地区の酒蔵、醤油蔵などの若者達が裸参りを行っていたと伝えられる。五元日祭とは、正月5日未明から境内に2基のかがり火を焚き上げ、法螺貝を鳴らし時の声をあげて魔を払う新年の祭事である。かつては多くの参詣者で賑わったといわれ、やはり賑わう祭りの雑踏への若者の裸参りであったのだろう。ただ、志和八幡宮の裸参り装束は、盛岡・雫石の裸参りとは構成に基本的相違がある。白鉢巻に白い晒しの腹巻きをし、白の半股引に草鞋を履き、しめ縄は肩に背負わず、紙垂の付いた太いしめ縄を腰に巻き、ケンダイは着けない。手に鉦とハサミ、口に三角に折った口紙をくわえ、緩慢な拍子で鈴を振りながら大きくゆっくりと練ることは盛岡と共通する。すなわち装束の中心が腰ミノ状の藁のケンダイではなく、大ぶりの紙垂れの下がった太いしめ縄であることが、志和の裸参りの表徴であるといえよう。なお、雫石と志和八幡宮の裸参りについては以下の節に詳説する。

遠野市小友の裸参り また、遠野市小友の巖龍神社の裸参りも藩政期以来の祭事だと伝えられる。伝承によれば、明暦4年(1658)に不動岩の前に拝殿を造り、その翌年の旧暦1月28日、厄年の者が裸参りを行って以来今日まで継続されているという。28日は不動の縁日で、旧暦1月28日は小友地域の不動講の新年最初の縁日にあたる。装束は白鉢巻に白晒しの腹巻き、禪か下帯、草鞋を履き、腰に紙垂の下がったしめ縄を巻く。口には三角に折った口紙をくわえ、右手に角燈を持つ。裸参りの行列は、神社でお祓いを受けた後、42歳の厄男が先頭で大鈴を降り、蠟燭を燈した角燈を右手に、巖龍神社から上宿橋そばの大般若供養塔までの約350メートルを三往復し、健康・家内安全・高校合格などを祈願する。小友の裸参りには盛岡・雫石・志和に特徴的なハサミが見られず、緩慢な練り歩きもなく通常の歩行を行う。

仙台市大崎八幡宮の裸参り 仙台市とその周辺で、藩政期まで遡れる裸参りの事例はごく限られる。大崎八幡宮の裸参りもその限られた一つだが、現在の装束・所作・作法などが、そのまま古い形態を継承しているものでないことは確かである。

現在、大崎八幡宮の裸参りで一般的な装束は、白鉢巻、白晒しの腹巻きと半股引、足袋に草鞋を履

き、腰に紙垂れの下がったしめ縄を巻き、口に三角に折った白紙を咬む。古い形態を残すと伝えられる市内造り酒屋による裸参りの形式も基本的に共通するが、特徴的なのは自前で用意する腰のしめ縄が太く見事なことと、歩調が緩慢でゆっくり間をおいて鉦を振って歩調を揃え、通常の歩行ながら練り歩きの律動に近いことであろう。

明治大正期の仙台の地方新聞の記事によれば、当時の大崎八幡宮の裸参りの装束・作法は極めて多様な在り方が許容されており、参加者の手持ちの装束と趣向にまかされていた。文字通り下帯一つの姿から、「薄衣参り」という白の下着や晒し半纏をはおる者、「裸足参り」といって素足で参拝する者、また二井山湯殿山神社の「夏参り」に通じる浴衣などの単衣の長着を着る者など、各装束の推移と盛衰はあるにしろ、常に複数の姿が併存していたことは確かである。またその所作や作法においても同様に多様で、行列をなさず気の合う者同士で三々五々連れ立って歩く姿、鬨の声をあげながら駆け抜ける若者たちなど、現在正統的と意識されている造り酒屋の静かに整った裸参りからは逸脱する雑多な様相こそが、当時の裸参りの一般的ありようだったと考えられる。無言の行を誇示する口紙の存在を最初に確認できるのも、明治39年1月14日の『東北新聞』においてである。

さらに時代を遡れば、『仙台年中行事絵巻』に見られる「裸まうで」の蔵人は、裸体に腰蓑を巻くのみ、口紙も嚙まず、素足で歩んでいる。現在の仙台の裸参り装束ではなく、盛岡教浄寺の発生期の姿によく一致する。

暁参り なお気仙沼市唐桑の日高見神社の1月14日夜の例祭は、かつては御崎神社の「暁参り」とも呼ばれ、はじき猿・さっぱ舟などの伝統玩具などの夜店が出て賑わう。昭和の初期まで、大願をかける者は「一点参り」という浴衣一枚での参拝を行っていたという。刈田郡蔵王町宮の刈田嶺神社の同日夜の暁参りも近在から人々が群集して賑わうが、ここでは暁参りの日に境内の夫婦杉に大草鞋を奉納する。現在刈田嶺神社の暁参りでも裸参りが行われている。宮城県においては毎年暁参りで人々が雑踏し、縁日が連なるような特定の社祠に、多くの裸参りが集ってきたようである。

裸参り装束の系譜 現在の岩手県南部地方とその周辺の裸参り装束・所作の分布を一覧し（分布地図参照）、仙台大崎八幡宮の裸参りの装束と所作の変遷を概観すると、現在の正統的とされる裸参り装束・所作の系譜を推測できる。

口紙を咬む裸参りは南部地方全般に広く分布するが、県境を接して隣接する秋田県鹿角市十和田土深井と、仙台大崎八幡宮を除く他地域には見られない。その範囲の北半には腰蓑状のケンダイを装束の中心に置く地域があり、南半には太い横綱と呼ばれるしめ縄を腰に巻くことでそれにかえる地域がある。ケンダイ地域と横綱地域の接する中心部は、縁日に群集する観客にとって、もっとも見応えのある裸参り行列の次第・装束・所作の形式を造形した地域といえる。この点がこの地域の裸参りの最も際だった特性であるように思える。

見物（みもの）としての裸参り 見応えのあるケンダイや横綱で装束の中心に観客の視線を定め、長いハサミを体全体で大きく上下に操り、鉦を振って極めて緩やかな歩調に揃え、見得をきり決めを作りながらゆったりと進む「お練り行列」ともいえる裸参りの姿は、他地域の裸参りにはない。これはあきらかに個人の信仰に根ざした簡素な寒修行の姿とも、村や町の若者たちがそれぞれの仕方で祭りに興じる姿とも、質を異にしている。いわば群集する観客にとって見応えのある見物であること、鑑賞物であることを追求した裸参りのありかたを示していよう。

大崎八幡宮の裸参りと南部の蔵人たち 現在、大崎八幡宮の裸参りの装束は、明かに南部地方南半の横綱を中心に置く装束の系譜に連なる。行列次第・所作においても南部地方中心部の形式を継承していると考えられる。ただ、南部地方中心部に特徴的なハサミと、したがってハサミを使った大きな練りの所作とは取り入れなかった。その代わり片手に鉦、片手に弓張り提灯を持ち、ゆったりと鉦を振りながら歩行するというまた別の練りの姿を造形した。この鉦と弓張り提灯の組み合わせは、江戸期か

ら明治期にかけて流行した東都の裸参り姿の方を継承しているのである。

雫石の裸参りは町中の造り酒屋の蔵人によって始められ、盛岡の裸参りの装束・所作をそのまま取り入れている。そこから示唆を得るなら、かつては雑多だった仙台の裸参り習俗の中に、見物としての整った行列次第・装束・所作の形式を造形する契機になったのは、やはり町中の酒蔵に詰めていた南部地方出身の蔵人だったのではないか。もとより最初は『仙台年中行事絵巻』に見えるような簡素で個人的な営みだったのだろう。それが蔵元、縁日の群集などとの協働のなかで、お練り行列として造形され、形式化、組織化、恒常化していったことが推測される。南部杜氏が裸参りを最初に伝え、だからこそ酒屋の裸参りこそが最も正統な古い形態を残している、という仙台の伝承は、おそらくこうした人々が群集する縁日という場での協働に、南部の蔵人がたしかに関っていたことを伝えているのだと考える。

そこで仙台の裸参り習俗がその系譜に連なると推測される、岩手県南部地方の裸参りの三つの事例を次に記述する。

(3) 事例・岩手県二戸市、似鳥八幡神社の裸参り

岩手県北部、青森県境に面した二戸市に所在する似鳥（にたどり）八幡神社（二戸市似鳥字林ノ下37番地）に二戸市無形民俗文化財「サイトギ（祭斎）」と呼ばれる祭礼がある。似鳥八幡神社は旧社格は村社、勧請年代は定かではないが、『二戸市史』によると「もと長流山観世音と称した。天正五年（一五七七）南部二四世春政公の時、田口刑部三郎をして堂宇を修築している。その後のことは詳かではないが、寛永九年（一六三二）、寛文四年（一六六四）、正徳四年（一七一四）、明和二年（一七六五）修築の棟札が残っており、また享和二年（一八〇二）奉納の石燈籠二基がある。明治四年（一八七一）神仏混淆廃止の時、白旗八幡を合祀して八幡神社と改称した。」と記されている。祭神は「誉田別命」である。また、本殿の脇には糠部三十三観音の三十二番札所「長流山観世音」が祀られている。氏子数は約330戸、崇敬者は約900人である。

似鳥八幡神社のサイトギは、旧正月6日に行われる年占行事である（平成18年は2月3日の開催であった）。サイトギとは境内に2mほどの高さまで井桁に組んだ木のことで、このサイトギを燃やした際に生じる火の粉の飛び具合で作物の生育を占う。サイトギの木は、昔は火の粉を激しく舞い上げる胡麻木だったが、近年は雑木で行っているようである。このサイトギは近隣住民の正月飾りや札などを納める場ともなっており、サイトギ当日も正月飾りを持参する参詣者が多数見られた。神社の裏手の小屋では昼頃より裸参りの準備が平行して行われている。裏山からひいた水を木桶に溜め、簀の子を敷き、水垢離の準備をする。地下水は厳冬の野外に放置しても凍らないのだという。小屋の中には参加者の衣装類が揃えられている。神前には「オコモリ」と呼ばれる20cm程の飯の山が5つ三宝に乗せられ旧暦元旦より供えられる。この5つの山は地域の重要作物である稲・稗・粟・大豆・小豆（又は麦）を意味し、旧正月6日、すなわちサイトギ当日の飯の山の状況でその年の5種の作物の出来具合を占うのだという。これらサイトギ・裸参り・オコモリの3つによって似鳥八幡神社の年占は行われる。

夜7時頃、八幡神社の本殿にて新山神楽の権現舞が奉納され、神主の祝詞奏上にて五穀豊穰を祈願する。その後、法螺貝の合図で豆殻からサイトギに点火される。昔は青笹を使ったと伝えられる。

夜8時頃、神社裏手の小屋では禪1つに着替えた裸参り参加者が2人ずつ水垢離をとる。木桶に張った水を手桶に汲み、両手で頭上に振り上げ、右左右と3度かぶる。水垢離の済んだ者は小屋に戻り、晒、前締め白鉢巻き、白足袋、草鞋、注連縄を身に付ける。小屋の中は参加者の熱気に満ちていた。8時30分頃、装束を整えた参加者は小屋の前で神酒を飲み、含み紙を口にくわえ、手に御幣を持ち、

行列を組む。鈴振りの先導について神社裏手の小道を進み、石段を登り、本殿と石段の間を3度往復した後、2人ずつ参拝する。その後、観音堂やサイトギを囲むように並ぶ小祠を2人ずつ参拝し、含み紙をサイトギの火に投げ入れる。参拝の済んだ行列は再度本殿前に戻り、腰に巻いていた注連縄を本殿の柱に巻き付け、4m程の木の棒を持ち、サイトギの周りに立ち並ぶ。参加者は木の棒をサイトギに差し入れ、法螺貝の合図と共にテコのようにサイトギを揺さぶり、火の粉を舞い上がらせる。この火の粉が飛ぶ方向によってその年の豊凶を占うのである。火の粉が南側の石段の方向へ流れると豊作、逆方向であれば凶作なのだという。一通り、火の粉を上げた後は木の棒でサイトギを叩き、井の字に組まれた木を崩す。この後、裸参り参加者は本殿前へと戻り、神主の託宣を聞く。平成18年の託宣は「豊作」とのことである。その後、裸参りの記念撮影を行い、参加者は衣服を身につけ、本殿にて神楽保存会、氏子らと共に直会を行う。

裸参りの参加者は似鳥八幡神社周辺の男性の参加者が大半だが、山形県や関東からの参加者も見られた。これら他県からの参加者はインターネットなどで情報を収集し、参加を申し込むという。似鳥八幡神社のサイトギは他地域からの参加を拒むことはないが身内の不幸・出産があった場合、参加できない。

(4) 事例・岩手県紫波町、志和八幡宮の裸参り

南部杜氏の里として石鳥谷町（現花巻市石鳥谷）と共に全国的に有名な岩手県紫波町上平沢に鎮座する志和八幡宮（岩手県紫波郡紫波町字八幡73番地）に五元日祭（ごかんにちさい「御勤日」とも書く）と呼ばれる正月行事がある。この五元日祭は八幡太郎義家が奥賊誅伐の際、志和八幡宮に戦勝を祈願したことに由来し、義家の戦勝報恩感謝のため毎年正月5日の早朝より境内で大篝火を焚き上げ、みかんまきや餅まきが行われる。「五元日祭」という名称の行事は周辺の町村には他に見られず、地域住民にも独自のものと認識されている。現在では1月15日にどんと祭を開催し古い御札や正月飾り等を燃すが、古くはこの五元日祭で処分されていたようである。出店も立ち、ミカンまきや餅まきでは早朝にも関わらず多くの近隣住民が集まる。餅まきの餅には当たりが3つ入っており、当たった人には二福神（恵比寿・大黒）が贈られる。競って餅を拾う人、早速食べる人など正月らしい賑わいを見せる。氏子青年会や近隣に住む人々の話によると昔は五元日祭で5枚一組にした白煎餅（餅米で作る）が売られていたという。この煎餅を篝火で焼いて食べると健康でいられるのだそうである。

この五元日祭と平行して同日志和八幡宮では裸参りが催される。この裸参りは元来、近隣にあった造り酒屋の蔵人が醸造安全を祈願して行っていたものと伝えられる。志和八幡宮からも程近い上平沢集落には大正末頃まで営業していた造り酒屋があった。銘柄は「富久鯛」という。地域では「権兵衛酒屋」の名称で語られる。創業者は近江商人の村井権兵衛という人物であった。地域住民の間ではこの人物が南部杜氏の生みの親と考えられている。『紫波町史』によると南部杜氏の起源は紫波町内に土着した近江商人の近江屋村井権兵衛が紫波町志和地区（旧志和村）で酒造業を始めたことに由来しているとある。村井権兵衛酒屋は里謡にも登場し、明治30年頃は造石高3000石で職工店員は8,90名であったと口伝されている（『紫波町史』第2巻P672）。この権兵衛酒屋は大正末頃まで続くが、経営を多岐に広げすぎて大正13年、破産に至ったという。上平沢在住の中村良一さん（大正6年生）は子供の頃、この権兵衛酒屋の蔵人たちによって行われた裸参りを実際に見たそうである。この酒屋が裸参りを始めたのではないかと語る。中村さんによれば昔の権兵衛酒屋の裸参りは禪一つで行っていたという。採り物の「挟み」や供物、注連縄などは現在と同じようなものだったと語る。酒屋だけではなく、醤油屋など大きな風呂を持つ家（多くの従業員を擁す商家）でも行っていたそうである。冷えた体を温めるため、一度に大人数入れる風呂がなければ裸参りはできなかった。風呂の確保は裸参りを

行う上での必要条件だったようである。

志和八幡宮の裸参りは戦後中断（註1）されていたが、昭和49（1974）年の志和八幡宮氏子青年会の結成を機に氏子青年会を打ち出すために何かをしよう、という機運が高まった。そのような中、地域の古老より昔行われていた裸参りの話を聞き、氏子青年会が復活させたという。この古老は裸参りに参加した経験はなかったが準備などを手伝ったことがあり、注連縄や道具の作り方を知っていたという。復活後、裸参りがニュースなどで放送されるようになり「絶対続けなければならねえなあ」と思うようになったという。以降現在まで氏子青年会主導で継続されている。年代により上衣の有無などの差異はあるものの基本的な衣装は現在の大崎八幡宮の裸参り衣装と似ている。鉢巻き（前締め）、台形状に折られた口紙、鉦、幣束を差した注連縄、白足袋に草鞋を履く。一時禪を締めたという話もあるが、写真などで確認できるのは半股引を着用している姿のみであった。志和八幡宮の裸参りで特に目を引くのは「ハサミ（挟み）」と呼ばれる三角形に折った紙を49枚挟み込んだ2mほどもある長大な杉の棒を持つ点である。由来や起源は不明だが、この挟みを一歩歩くごとに大きく上下させる。この動きと連携した歩き方が志和八幡宮の裸参りの大きな特徴となっている。裸参りへの参加者は志和八幡宮の氏子だけではなく盛岡など他の町村からもみられるが、多くは紫波町近辺に勤務しているなど何か縁のある人が出るもので誰でも参加可能というわけではないようである。また女性の参加を断っているわけではないが習慣的に男性だけの参加になっている。前年に子供が生まれた人や身内に不幸のあった人は裸参りには出られない。

裸参りの衣装・採り物などは氏子青年会が作成・購入し準備する。注連縄の藁は前年の新ワラを使い（元はミゴを使って作ったという）、12月の第一日曜に参加者分を氏子青年会で作成する。準備は男性だけで行われる。裸参り復活前は各参加者、団体で作ったようである。できた注連縄は神楽殿にしまっておく。挟みも同じく12月中に氏子青年会で作成する。挟みは復活当初、材料に半紙を用いていたが、雪や湿気などですぐに垂れてしまうため、現在は奉書紙を用いて作成している。正方形の紙を少しずらして三角形に折った紙を49枚作成し、中央に溝の入った杉の角棒に挟み込み、ねじ止めする。口紙も同じく奉書紙で作る。復活当初は口紙の中にトウガラシを挟んだというが今は行っていない。大崎八幡宮など仙台の裸参りでは正方形の紙を半分に折った三角形のものが定着しているが、志和八幡の裸参りでは口紙は台形状に折り、細い側（上底）を口にくわえる。他の採り物・衣装は購入する。復活当初は防寒のため半袖シャツを着て晒しを巻いた。今は上半身は晒しのみである。

平成18年1月5日の志和八幡宮裸参り 志和八幡宮の裸参りの日は例年雪が降るといふ。平成18年も例にもれず風のない静かな降雪に見舞われた。雪が降らないと裸参り特有の厳かな雰囲気が出ないと話す人もおり、雪を歓迎しているようだった。まだ日の出前の早朝4時頃、参加者、世話人が志和八幡宮に集合する。その後、志和八幡宮より車で10分ほどの距離にある温泉施設あづまね温泉ききょう荘へバスで向かい、温泉に入り体をあたためる。裸参り復活当初は近隣の家々で風呂を借りて参加者は各家に分散して体をあたためていた。いきなり熱い風呂に入ると体が冷めやすいので風呂を借りる各家々に頼み、ぬるめの湯から徐々に熱く焚いてもらったという。だがそれぞれ異なる場所で風呂に入ると集合までに体が冷えてしまうので一カ所で風呂に入る方が便利がよいということになり、現在ではあづまね温泉ききょう荘で入るようになったそうである。参加者が入浴中に氏子青年会の世話役が施設内の座敷にて着衣の準備を進める。座敷、および出口までの廊下には草鞋の藁が落ちないようにビニールシートを敷き、注連縄、晒しなどの衣装を用意する。入浴の済んだ者から座敷で氏子青年会らに晒巻きなどの身支度を整えてもらう。長年参加しているベテランが経験の浅い者や1年目の者に衣装の着用を手伝う姿も見られた。衣装の準備が済むと、御神酒を飲みおにぎりなどで腹ごしらえする。裸参りの前日は食事をとらないのだという。参加者全員の身支度が整った後、ききょう

莊よりバスで出発地点へ向かう。5時30分頃、上・下の各出発地点にて行列を整える。準備でき次第出発する。志和八幡宮前の裸参りの通る道沿い（商店街）の各家々からは見物人が顔を出し、裸参りの男達の行列を見守る。地域の人々には事前に祝儀袋を配り、行列が前を通過するときにご祝儀を出してもらい、それを世話役が集める。最近では毎年出してくれる家も増えたという。その後、参道前の鳥居にて、上・下、2つの行列が合流する。裸参り復活後、行列出発地点は上と下の2カ所に分かれたが、これは八幡宮前の多くの人に見てもらおうための演出なのだという。氏子青年会による復活後の裸参りは各所にこのような演出が盛り込まれ、裸参り独特の雰囲気強調している。合流し、鳥居をくぐった後はすり足でジグザグに歩き、一步ごとに挟みを上下に大きく振る。カマイタチといって寒中の風などで肌が切れることがあるがそれを防ぐため走ってはならないのだという。参道を神社へ向かい、拝殿で一礼し、拝殿・本殿を左回りに一周し、一度鳥居から神社を出る。その後神社前にある農業用水の堰を渡って禊ぎを行い、再度神社へ戻り拝殿・本殿を三周し、供物を納め、祓いをする。腰に巻いていた注連縄は御神木に結びつけ、拝殿前にて記念撮影を行う。その後、一時解散し再度ききょう莊へバスで向かい、入浴して体温を戻す。この後、神社で直会となるが、直会には参加せずそのまま仕事先へ向かう人もおり、全員の参加ではない。このとき神木に結びつけた注連縄は志和八幡宮のどんと祭で焼く。志和八幡宮でどんと祭を実施するようになる前は1年間神木に注連縄を掛けたままにしておき、翌年の五元日祭で焼いたが、あまり見栄えもよくなかったのでどんと祭で焼くようになったそうである。直会は五元日祭と裸参りで別個に行われる。五元日祭と裸参りは中断の影響か、別個の行事のように見受けられた。

裸参り行列（平成18年1月5日）

参加者20名、奉納者12名。半数ずつ上・下の出発地点より出発。

役職は基本的に氏子青年会で決める。裸参り参加1年目の者は裸参り行列の花形である挟みを持つことはできない。以下に平成18年度の行列の内訳を記す。

- ・ 袴：青年会の会長
- ・ 氏子青年会会旗：下より
- ・ 小提灯×2：上より
- ・ 御神酒：下より
- ・ お供え：下より
- ・ 三宝（魚）：下より
- ・ 三宝（野菜）：上より
- ・ 三宝（果物）：上より
- ・ 挟み×12：上・下、各6名ずつ。

註

1. 熱心に戦勝を祈願して裸参りを続けていた人が敗戦を機に裸参りをやめてしまった。このような事例も裸参り中断の原因の1つのようなのである。

(5) 事例・岩手県雫石町、三社座神社・永昌寺の裸参り

雫石街道と雫石 雫石は、雫石川中流の河岸段丘上に位置する雫石盆地に開けた集落で、藩政期には盛岡と秋田を結ぶ要路であった雫石街道（現国道46号線）の宿駅として発達した。元禄期まで幕府や諸大名の馬買衆はこの街道を下向し、幕府巡見使の藩境視察では雫石に御仮屋が設けられた。盛岡

藩の地方行政単位である雫石通十ヶ村の中心地として雫石代官所が置かれ、雫石の町は検断を中心に自治が行われた。

近江商人高嶋屋 寛文10年(1670)12月、雫石村の兵右衛門という者が造酒屋を営んでいたが、御物成、すなわち酒税としての御礼金を上納できず、盛岡の上野市右衛門に造酒株を保証する酒屋証文を売却する。この造酒株取得を契機として市右衛門は雫石に造酒屋「高嶋屋」を出店して名を市左衛門と改めた。以降明治初期まで、代々の高嶋屋市左衛門は雫石の酒造家、後にまた材木商として大店を切り盛りしていく。

上野市右衛門はもと、宇都宮城主奥平氏の家臣、上野市兵衛の次男であり、寛永年間(1624-1644)藩主が転封のおり、「次男以下は隨身自由」の意を受け、武士を捨てて宇都宮の商家に仕えて商人となった。寛文9年(1669)、盛岡新町の美濃屋権兵衛を頼って移住し、翌10年雫石の造酒株を美濃屋の助力で取得するのである。初代市左衛門には男子がなかったことから、二代目には、盛岡市本町の近江屋市兵衛の手代で、近江国高嶋郡北畑村の清水清右衛門の弟勘十郎を婿に迎える。近江商人『高嶋屋』の屋号は、この勘十郎に由来するのであろう。

四代目市左衛門の時代に、酒造業にくわえて木材・鉱山にも事業を拡大し、寛保2年(1742)には藩の新田開発政策に尽力した功により、四十石刀差しを許されている。四代目は長男には造酒屋と高嶋屋市左衛門の名跡を、次男には四十石刀差しの家格と上野家の名跡を継がせ、上野市兵衛と改めさせた。

高嶋屋は雫石の大商家として、飢饉の救済、菩提寺廣養寺の再建などに努めたという。雫石町中町の曹洞宗廣養寺の施設の多くを高嶋屋が寄進し、享保19年に寄進された大鐘楼と大梵鐘も大檀家高嶋市右衛門と米沢半兵衛両人の建立と伝えられる。上野家は江戸末期には代官下役を勤め、明治以降は県会議員、初代雫石町長のほか、海軍中將、肖像画家などの人材を輩出している(註1)。

雫石の酒造 一般に藩政期の造酒屋は、年々の米の豊凶により変転する藩の統制を受け、酒造石高の増減と店の盛衰はめまぐるしい。雫石の造酒屋も藩政期を通じて興隆と廃業を繰り返している。宝暦年間(1751-1764)雫石通りには高嶋屋を含めて三軒の酒屋が店を構え、上町・中町・下町の町並みに当てた上酒屋・中酒屋・下酒屋という町中での通称も記録されている(註2)。だが寛政年間(1789-1801)には造酒屋は高嶋屋一軒のみとなり、その経営は思わしくなく造石高も減少し、天保12年(1841)には藩から150駄の米を借り受け、安政4年(1857)には清酒の酒造高を60石に減らして濁酒の醸造に切り替えるなど、店を維持する努力を続けている。

文久3年(1863)、高嶋屋は家屋敷から酒造道具までを火災で焼失し、雫石通りの造酒屋は姿を消す。そうした中で、雫石の検断、各村の肝入・老名の連署連印のうえ、雫石通村々惣百姓の名の下に、高嶋屋への再興のための米300駄の十ヶ年年賦償還での貸付け願いが、雫石通代官宛に出されている。書面では、百姓共の山川の働きも、駅所夫伝馬相勤める者も、酒屋が無くては迷惑し、万事融通ならず、市中はいよいよ衰え、役人の宿を勤める者も無くなり、村一統容易ならざる迷惑をしていると訴え、さらに「万一上納相滞り候はば、市左衛門へ不拘、御百姓共にて弁済可仕候」と書き添えている。こうして雫石通村々一統の唯一軒の酒屋として高嶋屋は再興され、明治初めまで続けられるのである(註3)。

明治10年(1877)頃高嶋屋は廃業し、その後雫石村に3軒、上野村に2軒の造酒屋が開業され、明治30年(1897)10月その5軒で雫石酒造業組合を組織している。そのうち雫石村中町の和川と下町の大久保は、大正期を経て昭和初期まで営業を続けるが、昭和7年(1932)の金融恐慌により廃業する(註4)。

阿弥陀さんへの蔵人の裸参り 現在毎年1月第3日曜日に、雫石町上町の三社座神社から下町の永昌寺まで、雫石町商店街が軒を連ねる旧国道46号線をたどって行われる雫石町裸参りは、かつてその

道筋に店を構えた造酒屋の蔵人たちが始めた寒中の行事として、町の人々は今も伝承している。

雫石町出身の大正8年生れの男性話者によれば、子供の頃、暮れの12月14日、和川という酒屋の蔵人たちが裸に晒しを巻き、腰簍を着け、ハサミを掲げて、ゆっくりと歩き、阿弥陀さんの寺まで裸参りをしていたという。また、同じく大正11年生れの男性話者は、子ども時代に営業していた大久保という酒蔵と、蔵の敷地に並んだ大きな桶の列を記憶している。そしてその蔵人たちが、12月14日に腰簍を着け、横綱を巻いて、裸参りをしていたという。大正生まれの話者たちの記憶によれば、当時の蔵人の裸参りと、復活された現在の裸参りとは、装束、ハサミなどの持物、所作作法などの点で、大きな違いはないようである。

阿弥陀さんの寺とは、下町の石水山永昌寺のことで、雫石商店街の東端に位置する曹洞宗の寺院である。道沿い西方の浄居山廣養寺の末寺で、本尊は釈迦牟尼仏だが、堂内に阿弥陀如来を安置し、12月14日に祭礼が行われ、この阿弥陀の祭礼に裸参り祈願が行われたのである。なお旧国道沿いには東から西に廣養寺、臨濟寺、永昌寺と寺が薨を並べ、町の人々は順に上寺、中寺、下寺と呼び習わしている（註5）。

こうした裸参りをめぐる町の伝承は、2004年1月18日の裸参りで見学者に配られた案内チラシにも書き記されており、「裸参りの由来」として、「昔、雫石の廣養寺と臨濟寺の間に高島屋という大きな酒屋があり、大正時代に入っては大久保、和川という二軒の酒屋があった。酒屋の蔵廻りの若者たちが健康を祈願しての行事で、毎年厳寒の12月14日に実施された。お酒を呑んでから、足をそろえてゆっくり歩き、永昌寺の「あみだ様」にお参りした」とある。この裸参りは、昭和7年（1932）両酒屋の廃業によって中断し、昭和12年（1937）頃青年会によって再興されるが再度中断し、昭和55年（1980）に雫石町青年団体連合会により復活されて現在まで継続されている（註6）。

雫石の裸参りの現在 2004年の雫石町裸参りは、正月第3日曜日の1月18日に行われた。参加者22名は「裸参り祈願者」と呼ばれ、全て20歳から30歳代の男性である。朝9時に雫石公民館に集合し打合せ、長山の西山診療所に移動して健康診断、その後鶯宿温泉の旅館で昼食をとり、裸参りに備えて入浴する。祈願者の日程表には、その折の注意として「しっかり温まってから、暖かいお湯から順にぬるい湯をかぶり、最後に冷水を浴びて体の毛穴をふさいでから上がりましょう。これをしないと熱が奪われやすくなり寒くなります」と記されている。入浴後12時に上町の三社座神社に移動し、境内の社務所で裸参りの身仕度にかかる。

裸参りの装束は、裸の下半身に白晒しを巻いて藁製の腰簍を着け、横綱と呼ばれる紙垂れの下がった太いしめ縄を腰に巻き、お守りと呼ばれる横綱より小さいしめ縄を輪にして右肩から左脇に斜めに背負う。頭に白晒しで向こう鉢巻きをし、足は素足に草鞋を履く。

12時45分、雪が降り積もった神社本殿前に裸参り祈願者が整列し、神主による神事後、祈願者全員に守札が手渡され、神酒がふるまわれる。その後神社の鳥居前に行列順に整列し、13時に「歩行祈願」と呼ばれる永昌寺までの練り歩きが始まる。

行列の次第は、先頭には最も裸参り参加歴の長い10年目の祈願者がハサミを掲げ、次に御神酒2名、御供え1名、御沙穀（おさご）1名が、それぞれの供物を捧げて続く。その後に提灯・ハサミを持った各1名が続き、6名が祈願内容を墨書した幟を掲げる。同様に提灯・ハサミ各1名の後に、幟6名が続き、最後尾を提灯・ハサミ各1名が占める。幟に書かれた祈願内容は、「五穀豊穰」「無病息災」「家内安全」「商売繁盛」「交通安全」などの一般的祈願の他、「雫石町発展」「明るい選挙」「青少年健全育成」などが見られた。

祈願者たちは皆口に三角に折った白紙を咬む。ハサミ・提灯・幟の担当はそれぞれを左手に持ち、右手に鉦を持つ。片足を一步踏み出すとともに鉦を振り、踏み出した膝を曲げ重心を低くして、ハサミと幟は地面近くまで下ろされ、そのまま数秒間ためられてから、おもむろに体を延ばしハサミ・幟

をもとの位置に引き上げ、後ろ足を引きつける。片足ずつこの所作を繰り返しながら、1.8キロ東の下寺と呼ばれる永昌寺までを1時間半かけ、きわめて緩慢に練り歩いていく。道々、かつて参加した経験者が初参加者に付き添って歩行の所作を指導し、口紙の替えを持って同行する係りが、祈願者の濡れた口紙を新しく交換して世話する。沿道には町の人々が並んで祈願の若者たちを見守り、祝儀袋を用意した者は行列に一礼して係に手渡す。途中、上寺と呼ぶ広養寺、中寺と呼ぶ臨濟寺の参道入口にかかると、各祈願者は練り歩きの所作を中断して寺の門に向かってハサミ・幟とともに深く頭を下げ、再び練り歩きを続ける。

永昌寺の本堂前の雪の上には、堂に向かって3本ずつ2列の竹が雪玉に突き刺して立てられ、各1列3本の竹は縄で結ばれてある。永昌寺に到着した祈願者は、最初に2列の竹の中央を進んで本堂前で供物・持物を納め、そのまま鉦を振りながら2列の竹の外側を右回りに3周して裸参りの歩行祈願を終わる。15時に最後の祈願者が永昌寺に到着し、本堂内で祈祷を受け、堂内の阿弥陀如来を拝して裸参りは終了する。

その後鶯宿の温泉旅館に戻り、入浴して冷えた体を暖める。今度はぬるい湯から順に熱い湯に入るようにと注意される。入浴後、雫石公民館に移動し、祈願者と関係者一同で感謝祭を行い全日程を終了する。

註

1. 高嶋屋上野家の歴史と雫石との関連については、雫石町史編纂委員会編『雫石町史』1979 p.341、雫石町教育委員会『雫石の旧家』1982 p.2-3、近江商人末裔会編『近江商人東北の末裔たち』p.129-131に拠る。
2. 註1前掲書 p.342。
3. 註1前掲書 p.341-345。
4. 註1前掲書 p.889-893。
5. 註1前掲書 p.1167-1168、雫石町教育委員会『雫石の寺社』1989 p.4-6。
6. 雫石町編『雫石町史第2巻』1989 p.1053-1054、「2004年雫石裸参り案内チラシ」。

第3節 裸参りの拡散

(1) 流行としての裸参り

大崎八幡宮のどんと祭の裸参りの主役が造り酒屋の蔵人であったことは論を待たない。

○曉参り 一月十四日の宵より翌十五日の朝迄曉参りと唱へ八幡町なる大崎八幡神社へ参詣するの習慣にて年々同社は賑ふことなるが殊に本年即ち一昨日の宵の中は参詣人頗る多く社内の雑沓一方ならず中にも國分町の酒造家大崎市三郎方にては番頭雇人等十余名が白襦袢一枚にて参詣せし如きは人々の目に付きたりしと併し商ひは相變らず不景氣お蔭で繁昌なりしは常盤丁なりしといふ

「奥羽日日新聞」明治24年(1897)1月16日

この記事に登場する大崎市三郎は、明治初年に創業した蔵元で、銘柄名は「萬歳」であったが、明治44年に廃業している。このように、裸参りは造り酒屋の格好の宣伝の場にもなっていた。それがやがて他の企業にも波及していった。

大崎八幡宮の氏子総代長でもあった庄司寿氏(大正7年生)によれば、昔の裸参りは主に、天賞、勝山、

竹に雀、鳳山などの酒屋が中心になって行っていた。「天賞さん来た」「勝山さん来た」と言って、見ていたという。天賞を含め、酒屋の裸参りは厳粛なものだったという。酒屋の他に、商店街や映画館、百貨店、不動産関係の企業の参加があった、とのことであった。

その一方で裸参りは「祈願」の有力な姿ともされた。日露戦争の最中のどんと祭には次のような裸参りも登場した。

●戦時の裸参り 別項所載の大崎八幡神社祭事に就ては慣例によりて裸参りする者時節柄として殊に多数なるべく就中出征者の爲め盡す婦女子尤も多かるべし

「河北新報」明治38年（1905）1月14日

このように裸参りにはかなり早い段階から、一種のブームのような要素があった。それが一気に加速するのは戦後の高度成長期と、昭和60年代からのバブル時代であった。しかしこの二つの波には違いがあった。高度成長期の裸参りは、裸参りの参加者が企業や団体単位で、しかも気軽に参加できるように裸参りの作法のマニュアル化や衣装の画一化が背景にあった。これに対してバブル期の裸参りは、企業の宣伝用のぬいぐるみで参加したり、酒を飲んで騒ぎまくるなど従来の基本ルールが破壊される傾向があった。さらにその一方で大崎八幡宮以外のどんと祭が盛んになるにつれて、大崎八幡宮以外の神社仏閣のどんと祭に裸参りする人も増えていった。

このように裸参りはその時々々の社会情勢や人々の意識の変化によって様々な形をとってきたと言える。以下では、裸参りの拡散がどのように進んできたのか、実際の参加者の事例をもとに検証し、報告する。

（2）裸参りの画一化

大崎八幡宮で行われる裸参りは、造り酒屋の杜氏や蔵人が、新酒の吟醸、醸造の安全を祈って神社へ参拝したことに始まると言われている。現在の裸参りには酒造会社に限らず、仙台市内の企業や大学など多様な団体が参加しており、平成18年には101団体2,433人が参拝している。参拝者は事前に大崎八幡宮に申し込みを済ませ、千円のお守り代と昇殿料を支払う決まりになっており、衣装を揃え手続きを済ませれば、誰でも気軽に参加することができる。

大崎八幡宮への参拝者の多くは、男性の場合、晒し腹巻に、禪もしくは半股引を着用し、女性の場合には、晒し腹巻に白襦袢もしくは晒し伴天を着用している。男女共に、白足袋を履き、頭には鉢巻きを巻く。腰には細い注連縄を巻き、提灯や鐘を持ち、口には含み紙を挟んで、無言で参拝するという様式が定着している。現在と同様の衣装が定着したのは、昭和40年代のことであると言われており、それ以前には、装束や参拝の形式も様々であった。

本項においては、大崎八幡宮を中心に行われてきた裸参りに関して、参拝時に着用される装束がどのように変化してきたのか、裸参りの衣装の変遷をたどることを目的とする。具体的には、現在の裸参りの原形となった杜氏集団による裸参りの衣装の変遷と、昭和30年代以降、多様な団体が参加し始めた後に生じた変化の過程を検討する。

杜氏の裸参り衣装 どんと祭の裸参りが酒造りの関係者による行事として定着してきたことは疑い得ないが、その衣装には、大きく分けて二つのパターンと時代による変化が見られた。明治期の新聞記事によれば、明治22年1月16日の「奥羽日日新聞」では「如何なる立願のある難有連にや裸体参り又は薄衣参りと唱ふる参詣人も六七名ありて」と記載され、裸参りには裸の姿と薄着の上着を着た姿

の双方が見られたようであった。一方、造り酒屋の関係者の裸参りの姿としては、昭和15年7月に仙臺昔話会から発行された「仙臺年中行事繪巻」の『正月習俗の図』の「裸まうて」では、三人の男が上半身裸で鉢巻きと腰に前垂れの下がった注連縄を着け、先頭が鐘、二番目が三宝、三番目が「菅原」と書いた桶を持ち、裸足で歩いている姿が描かれている。解説によればこの繪巻の成立年代は嘉永3年(1850)頃であることと、三番目の男が持つ桶に書かれた「菅原」の名前から、この裸参りは国分町の酒造家菅原家(銘柄名「千松島」)の蔵人であると推定されている。

その後しばらくは裸参りの衣装についての資料が途切れるが、昭和10年代の姿を伝える写真などが存在する。ひとつは平成6年2月に日曜随筆社から刊行された高木謙次郎氏の『わが酒屋うた』に収められた、高木氏の実家の「鳳山酒造」の裸参りの写真で、キャプションでは昭和10年頃のものとしてされている。そこでの衣装は頭に白鉢巻き、口に含み紙、上半身は長袖の白い肌着のシャツで袖を肘までまくり上げ、腰に太い注連縄を巻き、数本の紙の御幣とたくさんの藁の下がりを前垂れのように着け、白い半股引に白足袋、草鞋を履いた姿が写っている。これとほぼ同じ姿の写真が、昭和15年2月に仙台観光協会が発行した『仙臺の年中行事』の口絵写真に「松焚祭裸詣」として掲載されている。こちらも鳳山酒造の裸参りであるが、持っている「祈願板」の文字が異なるため、時期は違うものであることがわかる。但し姿は同じで、歩きやすいように藁の下がりを腰の左右に振り分けて歩いている写真であり、昭和14年以前の近い時期のものであると思われる。

さらに大崎八幡宮のお神酒酒屋で青葉区八幡町に在った天賞酒造には、大正から昭和にかけて活躍した小説家、随筆家の平山蘆江(1882～1953)が、昭和15年と16年の天賞酒造の蔵人の裸参りを描いた繪巻物が残されている。その繪巻に描かれた衣装は、頭に白鉢巻き、口に含み紙、上半身は白い晒しの半纏を着、腰に太い注連縄を巻き、数本の紙の御幣とたくさんの藁の下がりを着け、白い半股引に白足袋、草履を履いた姿であった。これについて昭和35～52年まで天賞の蔵人をしてきた高橋満氏(大正6年生)の話によると、天賞の裸参りの装束は、近年の上半身裸の前は、晒しの半纏に半股引を着用していたという。中に寒さを防ぐため、麴室で使っていたネルを巻きつける者もいた。足は素足に草鞋で、後に草鞋を作る人がなくなったため、白足袋になったとのことである。これに対して、さらに以前の天賞酒造の裸参りの衣装は違っていたと話す人もいる。大崎八幡宮の氏子総代長でもあった庄司久氏(大正7年生)によれば、昔の天賞の裸参りは20～30人の行列で、鐘の音に合わせてゆっくりとした歩き方をした。装束は禪一本だったが、後に晒しと股引が加わるようになった。禪一本という時期は、勇壯で見ものだったと話している。

このように造り酒屋の裸参り衣装はそれぞれの蔵ごとに、あるいは時代によって変化してきていることが分かる。それがさらに変化し、そして画一化するのは戦後である。次項で詳しく述べるが、天保13年(1842)に酒造を開始した仙台の勝山酒造部では、第2次世界大戦中に取り止めていた裸参りを昭和30年代の初めに復活させた際、衣装も古い蔵人らから話を聞いて復活させた。その衣装は、腹に晒を巻き、上着は着用しない。頭に白はちまき、白い半股引、白足袋、白鼻緒の草履を履く。腰に注連縄を巻き、口に含み紙を咥え、右手に提灯、左手に鐘を持つものであった。勝山酒造部はこの姿で裸参りし、当時は造り酒屋の裸参りでも上半身裸と、上着着用の二つの姿の裸参りが見られたのである。それに再び転機が訪れる。昭和48年秋に天賞酒造の杜氏に就任した高橋貢氏(昭和7年生、平成11年没)が、それまでの晒し半纏を着た天賞酒造の裸参り衣装を、勝山流の上半身裸で晒し腹巻を巻く形に切り替えさせたのである。その理由は当時天賞酒造の蔵人をしてきた高橋満氏(大正6年生)に聞いてもよく分からなかった。しかし勝山と天賞という仙台市内の老舗の酒蔵が、同じ裸参り衣装を採用したことの影響は大きく、やがて八幡町の衣料品店の「ホズミ」が、新しい天賞酒造の衣装、すなわち勝山酒造部の衣装を裸参りの標準形と見なすようになったと言われ、衣装の画一化が始まるのである。

企業による裸参りの始まり 戦後、大崎八幡宮への裸参りが復活したのは、昭和22年のことである。昭和20年代前半には、物不足により肌着などを新調することが難しく、裸参りの参加者数も少数であったと言われている。この頃には、女性の薄衣参りもみられ、上下の肌着を着用した女性による裸参りが行われ、また個人での参拝も行われていた(註1)。

昭和20～30年代には、大崎八幡宮への参拝が10～30数組見られたものの、参拝者の装束はそれぞれに異なっている。白シャツに白パンツを着用する団体や、上半身裸で白パンツを着用した団体、あるいは、晒しに短パン、足袋を履き、鉢巻きを身につけた団体や、白いタンクトップに短パン姿の団体もみられ、含み紙もくわえたりくわえなかったりと、衣装や様式は統一されていなかったとみられる。

前述したように、昭和30年代前半に杜氏集団による裸参りが復活しているが、昭和35年、37年には、企業による団体参拝も行われており、東北放送が所蔵するニュース映像の中に、それぞれ「福島」「だい久製麺」「高橋染工場」と書かれた提灯を持つ3つの団体の裸参りが確認される。

映像に見る限り、昭和35年の「福島」の提灯の団体は、ランニングシャツと白い短パンを着用し、履物は不明、頭には白い鉢巻、紙の御幣を下げた太目の牛蒡締め注連縄をつけ、左手に提灯、右手に鐘、口には含み紙というスタイルで参拝している。また、「だい久製麺」の裸参りでは、同じくランニングシャツに短パン、白足袋で履物なし、右手に提灯、左手に鐘を持って参拝しているが、全員注連縄はつけていない。さらに、昭和37年の「高橋染工場」と書かれた提灯の団体は、上着を着用せず腹に晒しを巻き、白い短パンを履いている。頭には鉢巻き、白足袋で履物なし、口に含み紙を挟み、左手に提灯、右手に鐘を持っている。また、紙の御幣と藁の下がりがついた細い注連縄をつけて参拝している〔東北放送1960年・1962年1月14日〕。

装束のセット販売化 やがて、昭和40年代に至ると、企業や各種団体による集団での裸参りが増加していく。これに伴って、衣料品店による、装束のセット販売が始まり、装束を大量に発注し、販売するシステムが形成されていく。

八幡町に位置する衣料品店「ホズミ」では、一般的な衣服の他、晒しや足袋、「半タコ」と呼ばれる短パンなど、祭り用品も商品の一部として取り扱っており、昭和30年代まで裸参りの参加者は、この店から個別に必要な品物を購入していたと言われている。しかし、団体で裸参りに参加することが定着するに連れて、装束を一括で発注することを求める団体が増加した。そのため、この衣料品店では、装束をセット化し、大量に発注して販売することに着手し始め、現在は「裸参り用品一式」として、洋鈴(かね)、半股引(または裃)、白足袋、帯付の女子用晒伴天、提灯、三方(献備品用)、白緒ゾーリ、はちまき、晒、わらじ、注連縄、ローソク、大奉紙、含み紙をセットで販売している。

衣料品店が装束をセット販売し始めたことで、参加者が個々に衣装を準備する手間が省かれ、初めて裸参りに参加する人が、どのような装束を揃えればよいかわからないという不安を抱く必要がなくなった。このことで裸参りは市民にとって、より身近で気軽に参加できる行事として受け止められていくこととなる。仙台市内から大崎八幡宮へと集合する、大勢の参拝者の装束が画一化されていくのもこの時期であり、このことは、衣料品店による装束のセット販売化を要因としていることが推測される。(図2参照)

装束、様式のマニュアル化 昭和50年代、60年代には、会社や会社の商品のPRを目的とした企業による裸参りが増加し、鮮やかな配色の幟を持ち、行列に会社のマスコットを登場させるなど、装束や様式も大きく変化し、参拝者によるマナーの乱れも指摘されるようになった。

特に50年代後半に至ると、裸参り行事のマナーの乱れを懸念する動きがみられ、古くから裸参りを継続してきた酒造業者は、連名で新聞広告を出し、以下のように論じている。「裸参りは、いま造

り酒屋だけのものではなく、一般に行われるようになった。中には酒を飲んでかけ声を上げたり、太鼓やほら貝ではやして走るなどの一行も見かけるが、故事にのっとり、あくまでも整然と礼儀正しく、厳粛に行うのが本来の姿であろう」〔『河北新報』昭和57年1月13日5面〕。

また、参加団体が急増したことで、八幡町の衣料品店では、初めて裸参りを行う団体の担当者から、装束の着付け方など、助言を求められることが多くなった。こうした事態を受けて、昭和60年(1985)、大崎八幡宮と衣料品店では、裸参りの衣装の付け方や、参拝の際の作法等を記したパンフレットを作成した。このパンフレット『裸参りの御案内 どんと祭』は参拝者に配布されており、ここには大崎八幡宮が捉える「裸参りの本来あるべき姿」や参拝に際しての注意事項が記され、また、衣料品店で購入することができる衣装の一式が提示されている(註2)。

パンフレットの中には、裸参りの際の装束について「服装は白装束として、男子はハチマキ、晒腹巻、禪又は半股引、白足袋を着用し、女子は晒腹巻、半股引、白足袋を着用、ハチマキ、白襦袢(晒伴天)を着用、しめ縄を腰にまき、提灯、鐘などを持参してもよい」と記され、装束の基本が示されている。また、行列の際には、整然さを保ち、私語や掛け声を慎むため、含紙を口にくわえることも注意書きされている。

なお、パンフレットの作成にあたっては、大崎八幡宮の門前に位置する天賞酒造(現「まるや天賞株式会社」)で継続されている裸参りの装束や作法が見本とされたと言われている。ただし、天賞酒造では草鞋ではなく草履を履いており、この点はパンフレットの内容とは異なっている(註3)。

また、案内書の中では、裸参りは元来「寒の仕込みに入る酒杜氏の新酒の吟醸祈願のための神詣」であり、酒杜氏にとって酒蔵に雑菌が入らぬよう禊齋をし、心身を清浄にすることがいかに重要であったかについて触れた上で、「着衣をまとわずに裸で参拝するということは先祖から受け継いでいる清純無垢であるべき私たちの肉体を八幡様に御覧いただき、新年の無病息災、家内安全、商売繁昌などのご加護を頂戴するもの」と述べられ、裸参りがあくまでも「神への参詣」であることが強調されている。さらに、「各種商売の繁昌を願う方々や、心身鍛錬を目的とする方など年々増えていくばかりですが、形だけを追うのではなく、その心をも合わせて、御参拝される事を願うものです」と記述され、大崎八幡宮が捉える裸参りの「本来あるべき姿」が提示されている。

また、「装束を着ける前には必ず、心身の清浄をはかり(水をかぶる、手水をとるなど)神社参拝まで沈黙を守り、おみきなどと称しての飲酒は厳にお慎みください」「神社に到着しましたら、神社世話人、警察官の指示に従い、本殿参拝の後、御神火へ向かってください」といったように、参拝の手順や飲酒に関する注意書きも添えられている。さらに、神社の参拝として適当でない行動は慎むこと、場合によっては参拝を取りやめてもらう場合もあることも書き記され、裸参りのルールや心構えが提示されている。

こうしたパンフレットが作成されたことをきっかけに、仙台市内で行われる裸参りの装束や様式がさらに画一化されていったことが推測される。

裸参りの拡散化—「伝統性」の保持か、企業のPRか— 裸参りが「神への参詣」であることを再確認し、「本来あるべき姿」へと修正しようとする目的で、マニュアルが作成されたものの、その後も、企業が裸参りを通じて社名や商品をPRしようとする動きは加速する一方であった。その結果、裸参りへの参加は、「伝統的」な裸参りの様態を守ろうとする動きと、企業のPRや職員の親睦を深めることを目的とする2つの方向に分散していくこととなる。ある酒造会社は、大崎八幡宮の裸参りが、「酒杜氏や蔵人が醸造祈願のため行っていた『本来の姿』」からかけ離れ、騒々しくなったという理由で、参拝先を大崎八幡宮から市内の青葉神社へ変更している〔資料1〕。

また、裸参りに臨む目的や姿勢は、年々多様化している。平成4年(1992)1月18日の『河北新報』によると、職場や大学ごとの参拝者以外に、遊び仲間同士での参加もみられ、参拝者は裸参りを通じ

て、仲間意識を確認し、あるいは観客に見られる快感を得ることに参加の意味を見出していることも伺える〔資料2〕。

小括 ここまでに論じたように、戦後、復活した後の裸参りは、装束にも統一感がなく、衣類や、腰にぶら下げる注連縄、履物の種類まで、参拝者各々があり合わせのものを着用していたと思われる。その後、昭和30年代後半からは、次第に装束が統一され始め、40年代以降は、団体による参拝が増えたことで、市内の衣料品店に装束を一括注文するシステムが確立され、これにより装束の画一化が急速に進んだ。また、昭和60年（1985）に、大崎八幡宮や八幡町の衣料品店が、装束の基本的な姿や参拝の様式、参拝に当たっての心構え、裸参りの歴史的な背景をまとめたパンフレットを作成したことで、衣装に限らず、参拝の様式も画一化されてきたことが窺える。また、パンフレットが参拝者に配布されることにより、大崎八幡宮が提示する裸参りの歴史や「あるべき姿」が浸透してきていることも推測される。

しかしその一方で、昭和50年代以降は、個々人が裸参りに参加する理由や目的も多様化してきた。その結果、企業のPRを目的に参加する団体が増加しただけではなく、参拝者の中には体に色を塗り、参拝中に酔って大声を上げる人もしばしば見られるようになった。裸参りを古くから継続し、裸参りの「伝統性」を追及する酒造会社は、このことを重く受け止め、他の団体と酒造会社による裸参りを積極的に差別化しようとしている。

現在の裸参りは、(1)醸造の安全を祈願する杜氏集団の行事という「伝統性」を保持しようとする酒造会社と、(2)企業のPRや、職員、仲間内の懇親、自己鍛錬などを目的とする人々により、その目的や意味付けが大きく二分化されており、これに伴って、昭和40年代に画一化された裸参りの装束や参拝の様式は、再び拡散し多様化してきていると言える。

〔資料1〕 大崎参りやめた 勝山企業男衆 どんと祭派手過ぎる 仙台

「伝統行事にそぐわない騒ぎは、もうご免」。一月十四日の夜に仙台市の大崎八幡神社（青葉区八幡四丁目）で行われる小正月行事「どんと祭」に、毎年欠かさず裸参りを続けてきた造り酒屋のしにせ、勝山企業（伊沢平一社長）が、今年は大崎参りをやめ、別の神社へ参拝することにした。参加企業が増えるにつれて裸参りの演出も派手になり、「静かに一年の無事を祈るという本来の姿から懸け離れてしまった」というのが理由。伝統を支えてきた造り酒屋の男衆が、祭りの原点を求めて、あえて“離反”の道を選んだ。

大崎八幡神社のどんと祭の参拝は、年々、大手企業の在仙先機関の参加が増え、昨年の裸参りは百七十団体、約五千人に上っている。女性の姿も目立ち、華やかになる一方、「ショー化が進んだ」「まるで企業のPRイベント」などの批判も聞かれるようになった。

どんと祭は、大正時代に勝山企業など造り酒屋の杜氏（とうじ）たちが、腰にしめ縄を回す仕込みのスタイルで神社に参拝し、醸造祈願をしたのが発祥といわれる。

毎年、勝山企業の前頭役を務める伊沢社長は「今まで我慢を重ねてきたがもう限界。小正月の伝統行事であることをもっとわきまえてほしい」と話す。

伝統と形式を重んじる勝山企業にとって、縫いぐるみや笛、太鼓まで飛び出すここ数年のお祭り騒ぎは、見るに耐えなかったようだ。思い切って今年から、やはり伊達政宗ゆかりの青葉神社（青葉区青葉町）に参拝先を変えることにした。

大崎八幡神社のどんと祭は、戦後になって在仙の企業が「商売繁盛」を祈願するようになり、仙台の伝統行事として定着。十年ほど前から大手企業の支社・支店が参加するようになってきている。

勝山企業の不参加を聞いた大崎八幡神社は「あまりひどいスタイルの参加者にはこちらから注意

してもらいます。参拝を遠慮してもらおうというわけにもいきませんし……。こちらで、いろいろ気を配っていたのですが」と残念そうだ。

大半の企業は既に例年通りの人員規模で、大崎八幡神社への参拝を決めている。その中で昨年、縫いぐるみを登場させたある損保会社では、神社側から「あまり派手なことは遠慮してもらえないか」と要請され、今回は縫いぐるみは使わないなど“演出”を自粛する。

例年、「古式にのっとったお参りを心掛けている」というある地元金融機関では「確かにとっぴすぎる参拝姿への批判はある。古来の方法を守っていききたいものだ」と言っている。

※下線は筆者による

『河北新報』平成4年1月10日

〔資料2〕 ゆうレディース 微に入るタウン 興奮、感激、ダウン 裸参りは「行きはよいよい、帰りはコワイ」の巻

年々、お正月の感動が薄れていくように思う。自分が年を重ねたせいなのか、日々の暮らしが豊かになって、お正月と日常の区別がはっきりしなくなってしまったからなのか。こちらで本来の厳粛なお正月の雰囲気浸ってみるのも悪くはない、と十四日の夜、仙台市・大崎八幡神社のどんと祭裸参りに参加してみた。

「げーっ、これ、太もも丸出しじゃない」「さらしがずり落ちたァ」「ちょっと、こっち向いて言わないでよ」

“かしまし娘”たちの着替えは騒々しい。

正月飾りで送り火をたき、年神様を神の国へ送る正月最後の儀式どんと祭。そこに花を添えるのが裸参りだ。酒杜氏（とうじ）たちが吟醸を祈願して参拝したのが始まりとか。元来、裸参りは男性だけだったが、近頃は企業参加組が女子の新入社員も参加させるようになり、女性の白装束もちらほら見かける。

こちらは日ごろの遊び仲間の寄り集まり。裸参りは初めてだけど、ベテラン組に混ぜてもらったので手はずに抜かりはない。奮発してグループ用のちょうちんも注文し作ってもらった。トレードマークのスズメの紋がバッチリ決まっている。わくわくしちゃう。

★ ★ ★

全員仕事を終えてから集合。キムチなべとコップ酒で体を温めて、午後九時、いよいよ出発だ。一歩外に出ると、うう、ブルブルッ、寒い。

男子はさらしの腹巻きに半もも引き、私たち“かしまし娘”も、それに薄いさらしはんてんを羽織っただけの軽装なんだから。

むき出しの手先がどんどん凍えてくる。途中で「ご苦労さん」とお酒を振る舞われたが、体が冷えて鈍っているせいか、ぬるま湯を飲み干すように、ぐびぐびと飲めてしまう。

少し足元がよるけるのは酔いのせいか、それともあまりの冷たさに頭痛がし、視界が狭まっているためなのか。とにかく裸参りに加わってしまったのだ。含み紙を加えて、黙々と歩くしかない。

いったん腹をくくると不思議なもので、たまにはこんな“行”をするのも良いかも、なんて思えてきた。寒さに負けじと全身に力を込め、暗がりを進んで行くうちに、心が静まってくるような気がしてきた。一緒に歩いている仲間たちとの連帯感も沸いてくる。前に行く男性陣の背中も頼もしいし、自分でちょうちんを持つのも誇らしい。帰属意識というものだろうか。

祭りは「この土地に暮らしているんだ」という思いを新たにさせてくれる。

★ ★ ★

目指すは仙台市青葉区の大崎八幡神社。神社に続く大通りに出た途端、一般参拝客がどっと増え、裸参りの一行はスター並みの特別扱いになった。カメラを向ける人、ビデオを回す人。「あのスズメの紋、どこの飲み屋かな」との声に内心ほほ笑んだ。

「裸参りの列が通ります。道を開けて下さい」とアナウンスが流れ、人垣がさっと開く。顔を引き締めて石段を上り、一般参拝客は入れない社殿に上がってお神酒とお札をもらい、送り火の回りを、これも一般客が取り巻く中を、正月飾りを焼く火に片ほほをあぶられながら三回巡る。お参りはこれで終了。口のほうも解禁だ。

「ハアッ、興奮しちゃった。披露宴での花嫁の気持ちがよく分かるわ。人に見られる快感よね」とナツコ。「私なんてカメラ小僧に二度も迫られちゃった」とカオリ。みんな高ぶっている。

一行はその足で夜の飲食街、国分町へ。なじみの店を門付けしてはお酒を振る舞われる。なみなみとついだコップ酒を一杯、一杯、また一杯。七軒回ったから合計一升（一、八リットル）近くは飲んだらしい。

「それでは〇〇屋さんのご繁盛を願って、お手を拝借。いよー」。リーダーの掛け声を聞きながら、急に意識がなくなった。神社にもうでる前に、積んでおかねばならない修業があったようである。

※下線は筆者による

『河北新報』平成4年1月18日

註

1. 昭和20年代にも女性による裸参りは行われていたが、参拝者数は限られていた。やがて、昭和52年に、女性が団体で参拝したことをきっかけに、その後は女性による裸参りが急激に増加していく。
2. 八幡町の衣料品店が配布しているパンフレットには、左手に鐘を持ち、右手に提灯を持つ姿が参拝の見本として描かれているのに対して、大崎八幡宮の配布物には左手に鐘、右手に提灯を持つ姿／左手に提灯、右手に鐘を持つ姿の2種類が描かれ、見本とされている。
3. 天賞酒造の衣装は、昭和48年以降に勝山酒造部の衣装を参考に変更されたと言われ、草履履きはその時に採用されたと思われる。聞き取りではそれ以前は白足袋のみ、あるいは裸足に草鞋であったという。

(3) 事例・勝山酒造部の青葉神社への裸参り

勝山酒造部の裸参りの経過 勝山酒造部は、仙台市青葉区上杉2-1-50に本社を置く勝山企業株式会社の酒造部門である。勝山企業は元禄年間創業と伝えられる仙台の豪商伊澤家の同族会社で、現在では不動産業や飲食業、学校経営など幅広い事業展開をおこない、それを伊澤家の一族が分担して経営している。このうち家業といえる酒造部門は最も歴史が古く、天保13年（1842）に酒造を開始し、安政4年（1857）に仙台藩御用酒屋に取り立てられている。蔵の複数の関係者への聞き取りによれば、どんと祭の裸参りは昔から長年続けられてきたが、第2次世界大戦中と戦後の混乱期は裸参りをとりやめていた。しかし昭和30年代の初めに復活させることになり、戦前のやり方を知っていた古い蔵人らから話を聞いて、衣装や参拝の段取りなどを決めた。復活させた際の衣装は、腹に晒を巻き、上着は着用しない。頭に白はちまき、白い半股引、白足袋、白鼻緒の草履を履く。腰に注連縄を巻き、口に含み紙を咥え、右手に提灯、左手に鐘を持つものであった。注連縄は蔵人が自分たちの分を作ったという。このように酒造の蔵人の伝統行事として復活したものの、酒造部門の合理化による人員削減などもあって、近年はどんと祭の裸参りは勝山企業全社をあげての行事となり、酒造部はその事務局と準備を担当することとなった。

勝山酒造部の裸参りの参拝先は、長らく大崎八幡宮であったが、平成4年1月14日の裸参りから

青葉神社に行き先を変更した。当時の社長（伊澤平一氏）が、大崎八幡宮の裸参りの風紀の乱れを嫌ったからで、裸参りの発祥とされた造り酒屋の、それも老舗中の老舗の蔵が大崎八幡宮への裸参りを変更したことは、当時は新聞などにも大きく取り上げられ、様々な反響を呼んだことは前項で述べた通りである。

青葉神社は仙台市青葉区青葉町7-1に鎮座し、祭神は仙台藩祖伊達政宗（神号武振彦命）で創建は明治7年である。青葉神社のどんと祭は昭和7年11月14日の河北新報の記事によれば、この年から始めることとなったとのことである。当時は裸参りの申し込みがあり、その中に「伊澤酒造店」が含まれているが、これが勝山酒造部を示すものか或いは勝山の分家で青葉神社に隣接した「伊沢竹に雀本舗」を示すものかは不明である。しかし戦後は勝山酒造部が平成4年に裸参りをするまでは、長らく青葉神社への裸参りの参拝はなく、勝山酒造部の裸参りの翌年頃から仙台市内の比較的近くに本社を置く商業協同組合や文具の卸売会社などが裸参りに訪れるようになったという。なお勝山企業の裸参りは、平成18年は酒造工場が泉区へ移転し、酒造部が操業準備などに手間取ったためとして裸参りを休止した。

平成16年の裸参り 平成16年1月14日の裸参りには、勝山企業の役員や従業員ら36名が参加した。従来と大きく異なったのは、前年から仙台藩主伊達家第18代当主伊達泰宗氏が参加していることで、泰宗氏は勝山企業の伊澤平一会長の呼びかけに応じ、先祖の伊達政宗を祀った青葉神社への特別参拝ということで、紋付袴の正装で参加した。

36名の参加者のうち、紋付袴での参拝は伊達泰宗氏と勝山企業の代表者である伊澤平蔵取締役副会長の2名、裸参りは34名で、全員が男性であった。伊達泰宗氏を除く参加者は、午後3時に青葉区上杉の本社隣の酒造蔵に集合し、食事のあと、工場の釜場に据え付けられた直径およそ1.5メートルの酒造用ホーロータンクに湯を張った風呂に入り、出るとすぐに大きな柄杓で全身に冷水をかけられる。続いて裸参りの衣装に着替える。

裸参りの衣装は、戦後に復活させた時の衣装を踏襲したもので、腹に晒を巻き、上半身は裸で、頭のはちまきは勝山の名前を染め抜いた手ぬぐいであった。下半身は白い半股引、白足袋、白鼻緒の草履を履き、腰に巻く注連縄は、紙の御幣5本を下げ、藁の下がり5本のついた手編みのやや細い注連縄で、酒造部の従業員が作ったという。口には含み紙をし、特別な採り物を持たない者は右手に弓張提灯、左手に鐘を持つ。その姿で、蔵内に設けられた仮祭壇の前に整列し、午後4時50分に酒造の神を祀った青葉区宮町の松尾神社の宮司によるお祓いを受ける。

勝山の酒造蔵を出発したのは午後5時で、行列の順序は、先頭に裸参り衣装の2名、次が紋付袴の伊達家当主、青葉神社に奉納する御手座を載せた三宝を持つ1名、背中に勝山の名入り半纏を着て高張提灯を掲げた3名、高張提灯の文字は中央が「仙臺藩御用酒」左右が「勝山」、続いて紋付袴の伊澤副会長と裸参り衣装の役員2名、樽神輿、襷で結んだ三宝に鏡餅、鯛、大根・人参・牛蒡を盛った3名、以下3列の裸参り衣装の参加者が続き、殿が高張提灯2名であった。

行列は仙台市中心部のおよそ2キロの道のりを、無言で先頭の鐘に合わせてそれぞれ鐘を鳴らしながら、ややゆっくりと30分をかけて青葉神社に向かい、拝殿の脇を通過して本殿の前に整列した。奉納の三宝を献上し、宮司のお祓いのあと、伊達泰宗氏が参拝、伊澤福会長の参拝に合わせて裸参りの全員が拍手を打った。次いで境内の松飾りを焚いているご神火に向かい、左回りにご神火を3回まわって腰の注連縄を火に投げ入れ、拝殿前に整列したあと、順路を逆にたどって鐘を鳴らしながらやや早足で酒造蔵に帰った。

裸参りの参加者は戻った後、ややぬるめに設定した風呂に入り、参加記念のお守りと会社からのご祝儀を受け取り、着替えてから直会の宴会に参加した。

会社ではどんと祭の裸参りは、酒造の無事と優良な酒の醸造を祈願するものだが、会社全体で参加するので企業業績の発展と従業員の健康を祈願しているとしている。裸参りの参加者も、仕事としてやむを得ず参加したと言う者は皆無で、業績向上や自分の健康を願って参加している、10年以上続けて参加している者もあり、参加した以上は言い伝えに従い3年続けたいと異口同音に答えていた。

(4) 事例・佐元工務店の陸奥国分寺への裸参り

国道4号線バイパスに程近い仙台市若林区遠見塚2丁目に本社を置く佐元工務店は昭和30年(1955)佐藤元治氏によって創業された仙台市燕沢の個人工務店を前身とし、昭和53年(1978)「株式会社佐元工務店」となった。現在では営繕部門、賃貸管理部門を独立させ、3社によるSAMグループとなっている。また佐元工務店では周辺地域に対して企業広報誌の配布や感謝祭の実施など地域住民とのふれあいを積極的に行っており、地域の活性化を目指している。広報誌は創刊当初は施工主の紹介などをメインで行っていたが、最近では周辺地域の団体の紹介や地域情報などの掲載へと刷新した。地域に頼られる企業を目指しているという。

陸奥国分寺薬師堂への裸参りは平成18年(2006)で3度目を数える。裸参りは大崎八幡宮での裸参り経験のある同社の常務が中心となり社員によって始められた。大崎八幡宮や愛宕神社は有名だが佐元工務店からでは距離があり、参加者も多く、裸のままでの待ち時間も長いため、比較的近場の陸奥国分寺薬師堂に参拝しているという。沿道から「ご苦労さん」など声援も厚く、地域の一体感が感じられ薬師堂での裸参りに満足していると佐藤元一社長は語る。

同社は入社したら3年間は裸参りを行うという。よって参加者は若手が多く、女性の参加者も目立つ。平成19年(2007)からは同社のパートナー会(左官屋などの連携企業)にも参加を呼びかけるという。無病息災、無事故無災害、商売繁盛を祈願しているとのことだが団結力の強化、地域の活性化など様々な副次的効果もあったという。「裸参りのような共同での行事は連帯感を生む。苦行のような状況を意識的に設定し、乗り越えることに人間は満足感を得るのではないか」と社長は語る。

裸参りを始めるにあたって衣装は佐元工務店の作業着を発注している青葉区一番町の「鳩岡商店」から調達した。提灯や鉦なども全て調達してくれたという。

平成18年の裸参り 衣装・物品の確認は12月から総務が担当して行う。参加者は裸参り当日は15時頃には仕事を切り上げて準備を行い、着替えを済ませ出発前に関の声をあげ、御神酒を飲む。夕方4時頃同社を出発し、徒歩で薬師堂へ向かう。行列は羽織袴を着用した社長を先頭に高張提灯2名が後ろに並び、その後ろには三宝(野菜)持ち1名が並ぶ。以降提灯(社名入り)と鉦を持った参加者19名(男15名、女4名)が続く。総勢23名の参加であった。衣装は前締め白鉢巻、白晒、口には5円玉を挟み込んだ含み紙、半股引、注連縄、白足袋、草鞋履きとなっている。女性はこれに上衣を着用する。コースは事務所前から道路沿いに宮城の萩大通りに出て北上し東北銀行宮城野支店を西に曲がるという薬師堂まではおおよそ30分の道順をとる。道路沿いの企業なども行列が近づくと声援を送ってくれる。

薬師堂到着後は参道から本堂に向かい右回りに3周し本堂に入る。その際、口にくわえている含み紙を外して箱に投入し、御神酒を飲み、祓いをする。本堂での祓いが終わると参道を通り御神火の回りを右回りに3周し3周目に腰の注連縄を解き、火に投入し、帰路につく。

行きは徒歩だが、帰りは薬師堂を出て東に500m程の地点からウェルサンピア仙台(厚生年金健康福祉センターサンピア仙台)のバスに乗り、そのまま直会会場(ウェルサンピア仙台)へ向かう。体が冷え切っているので温泉で体温を戻すのだという。入浴し体温を戻した後、直会に入る。直会では

裸参りの様子を納めたビデオの上映なども行う。

【参加者の感想】 佐元工務店営業女性社員（昭和54年生）

佐元工務店の裸参りに当初より参加しており今年で3度経験。

宮城県外の出身で裸参りを見たことがなく、どういったことをやるのかわからず最初は誘われても断っていたが、いい経験になるかと思いやってみた。3度続けないと御利益がないと聞き続けてみたが、体験してみると話ほど寒くもなく、むしろ沿道からの声援が嬉しかった。準備をしてくれた方々は大変だったと思うが社員の皆で何かをやり遂げる充実感が得られた。その年の裸参りの様子を納めたビデオや温泉も楽しみのひとつ。会社の安全や自分の健康も祈願できるいい機会。女性は珍しいようで声援も多かった。

（5） 事例・栗駒建業の賀茂神社への裸参り

栗駒建業の裸参りの経過 仙台市泉区野村字前河原9-1に本社を置く有限会社栗駒建業は、高橋安敏社長（昭和18年3月生）が昭和56年6月に設立した建築会社で、一般住宅の建築やリフォームを手がけている。平成18年1月現在の従業員は11名である。社名の由来は高橋社長の出身地の旧栗駒町（現栗原市）からとったもので、社屋2階の事務所内の神棚には旧栗駒町沼倉に鎮座する駒形根神社から拝領した「勅宣日宮駒形根神社」の神札が、泉区野村地区の神社である「賀茂神社」と「二柱神社」の神札とともに祀られている。本社の所在地は、昭和56年の創業時は泉区市名坂（当時は泉門市名坂）にあったが、平成元年に現在の泉区野村に移転した。

高橋社長からの聞き取りによれば、栗駒建業のどんと祭の裸参りは、昭和63年に初めておこなった。会社設立から5年が経過し、比較的若かった従業員とのコミュニケーションを図るために、一緒に裸参りをしてみたいと社長が提案し、従業員も賛成したのでおこなうことにした。裸参りの作法や決め事を大崎八幡宮の禰宜に尋ね、教えられた通りに道具一式を八幡町の「ホズミ」から購入して昭和63年1月14日に実施した。当時の泉区市名坂の本社で着替えてから車で宮城県庁まで行き、そこから大崎八幡宮まで歩いて裸参りした。以後、途切れることなく裸参りをしてきたが、平成17年はどんと祭と住宅リフォームのイベントが重なったので、裸参りを中止した。衣装はホズミで調達し、洗って毎年使い回しているが、注連縄とわらじは毎年新しいものをホズミで買っている。

仙台市泉区古内の賀茂神社への裸参りは平成2年に初めて行った。平成2年は、前年に現在の泉区野村に本社を移し、それまで通りに大崎八幡宮に裸参りに行ったが、車で帰りの途中に賀茂神社があり、前年に賀茂神社の長床の修復工事を請負ったので、挨拶をかねて車を下り、そのままの衣装で神社に行ったところ、参詣人の中から裸参りが来たとき驚きの声があがった。それまで裸参りが来たことはなかったということだった。氏子総代らから、ぜひ賀茂神社に裸参りしてほしいと言われたのと、賀茂神社と本社が近かったこともあり、改めて賀茂神社に寄進をして翌平成3年から正式に賀茂神社に裸参りしている。その後、平成5年には賀茂神社拝殿の修復工事を請負うなど、神社との関係は密接になっている。また近年は裸参りのメンバーに、従業員だけでなく下請け業者も加わり、会社としても重要な行事となっている。

平成18年の裸参り 平成18年1月14日の裸参りには12名が参加した。内訳は高橋社長と栗駒建業の従業員7名、下請けの材木業者から2名、水道工事業者1名、基礎工事業者1名であった。午後6時に本社に集合し、事務所の隣のプレハブ建てのテコンドーの道場（社長が地域の子供たちに教えている）で衣装に着替えた。裸参りの衣装はホズミで購入したもので、頭に白はちまき、腹に晒を巻き、白い半股引、白足袋、わらじ履き。腰に注連縄を巻き、口に含み紙を咥え、右手に提灯、左手に

鐘を持つ姿であるが、この日は夕方から土砂降りの雨となったため、裸参りの全員が頭から透明なビニール合羽を着用した。着替え後、2階の事務所で全員が神棚の前に整列し、社長に合わせて二拝二拍手一拝で拝礼し、午後7時に本社を出発した。

裸参りの行列はたて一列で、先頭は栗駒建業と書かれた高張提灯を掲げた高橋社長、次が社旗を掲げた従業員の代表、続いて右手に箱入りの一升瓶の清酒と左手に弓張提灯、次に禊で結んだ三宝を右手で抱え、左手で弓張提灯を持った4名、三宝は二段の鏡餅、鯛1匹、大根・人参・胡瓜・林檎・バナナを盛ったもの、すめめ・昆布・寒天を盛ったもの。以下の5名は鐘と弓張提灯を持った。弓張提灯に書かれた文字は栗駒建業の他に下請業者の名入りのものもあった。

栗駒建業本社から七北田川沿いの道をおよそ2キロメートル離れた賀茂神社まで30分かけて歩き、神社に到着すると石川隆穂禰宜がハンドマイクを持って社務所から出てきて、参詣者に道を空けてくれるように頼み、裸参りの行列を拝殿に誘導した。はじめに向かって右側の下賀茂神社に酒と三宝を奉納し、石川昇宮司によるお祓いを受け、参拝する。次に左側の上賀茂神社に参拝する。このあと参道脇の駐車場で焚かれているご神火に向かい、左回りに3回まわって腰の注連縄を火に投じた。全員がご神火の前で整列していると、石川隆穂禰宜が神酒を持ってきて、全員に配った。裸参りはそれで終了し、参加者は神社前に迎えに来た車に分乗して本社に戻り、着替えの後に直会の宴会となった。

高橋社長によると、裸参りでは会社の業績向上と従業員や下請業者の健康などを願うが、参加者には好評で、言い伝えられている通り3年は続けるという人がほとんどである。下請業者も望んで参加している。また賀茂神社はさわめて好意的で、禰宜さんが出迎えてくれたり、氏子総代がわざわざ酒をふるまって裸参り参加者をねぎらってくれている、とのことであった。

(6) 事例・早坂酒造店の吉岡八幡神社への裸参り

黒川郡今村と吉岡八幡神社 藩政期、黒川郡の中心地域であった今村の町場は吉岡と呼ばれ、現在の和和町吉岡地区にあたる。伊達政宗の三男宗清は、飯坂氏を継ぎ、慶長18年(1613)伊達領に編入された黒川郡に入部する。始め下草(現大和町鶴巢下草)に拠ったが、元和2年(1616)に今村に移り、ここに城下町を建設し、以降吉岡が黒川郡の中心となっていく。元和9年(1623)には、下草から中村(現大郷町中村)を迂回していた奥州街道に、政宗によって富谷・七北田を経て仙台へ直行する新道が開かれ、吉岡はその宿駅としても整備される。この街道は北奥諸大名の参勤交代路として、そして吉岡宿は陸羽街道と羽後街道の分岐点として、ともに欠かせないものとなっていく。

吉岡の城下には、多くの寺社が下草から移され、町場の東北に集められて寺町を形作った。現在大和町役場・吉岡小学校等が位置する町裏地区がかつての寺町で、吉岡八幡神社もその一角、町役場向いに社殿を構えている。同社のもと飯坂氏の氏神で、信夫郡飯坂(現福島市飯坂町)にあったが、宗清が飯坂氏を継いだおり宮城郡松森(仙台市泉区松森)に移され、さらに黒川郡入部にあたり、下草を経て元和4年(1618)に吉岡に移されて黒川郡総鎮守となり、宗清死去後に入部した但木氏によっても崇敬された。『黒川郡今村風土記御用書出』によれば、隔年8月15日の吉岡八幡神社の祭礼には、宗清入部以来の神事として流鏝馬が奉納され、上町・中町・下町の吉岡三町が「渡物」をくり出し、それは元禄2年から安永3年まで間断なく続けられていたという。現在9月の第三日曜日に行われる秋の例大祭でも、流鏝馬と神輿渡御は毎年執行されている。

八幡さまのお歳取りと飴市 吉岡の八幡さまのお歳取り、年越祭は暮れの旧暦12月14日であったが、この日境内に飴市がたった。近年まで飴売りの店を出していた「白酒屋」と呼ばれる吉岡中町の菓子舗吉田家の伝承によれば、この飴市は江戸前期に吉田家の先祖が八幡神社の祭礼で荷鞍飴と島田飴を売り始めたことに始まるという。

島田飴は、糯米を原料にした飴菓子で、手細工によって島田髻をかたどるところからその名がある。この島田飴と飴市の由来が今も吉岡の人々に伝えられている。八幡神社の神主が暮の14日に髪を高島田に結った花嫁を目にして恋煩いとなり、それを慰めるために村人たちが白酒屋で作った島田髻の飴を奉納したところ病が回復し、村人に感謝した神主は暮の14日に縁結びの祭事を行うようになったという。那須直太郎編『伝説 島田飴』によれば、この祭りの日に、町の造酒屋の若い蔵人たちが神社に裸参りするようになり、次第に他の者たちも自分の年齢だけお百度参りをする「お数参り」を行うようになったという。

現在は新暦12月14日を島田飴祭りとし、島田飴のみの露店が出され、縁結びの縁起物とされる島田飴を求めて若い女性や未婚の娘を持つ母親たちが早朝から列をなす。近年は島田飴踊りを創作したり花嫁行列を行うなど、地域観光の祭事としても展開されている。

吉岡の酒蔵 早坂酒造店 城下町であり宿場町でもある吉岡では、藩政期から昭和後半期まで、つねに数軒の酒蔵が造りを続けてきた。早坂芳雄編『宮城県酒造史 別編』（宮城県酒造組合 1962 pp.449-453）によれば、藩政期は多い時で七軒の造り酒屋が軒を並べるが、明治初期は廃業する蔵が相次いだ。明治29年の酒税法改正、31年の濁酒の自家醸造の禁止を契機に新たに蔵を構える酒造家が現れ、吉岡の酒造業は隆盛期を迎える。

有限会社早坂酒造店も、明治29年早坂文七によって吉岡下町に創業された。その醸造銘柄は「松華」「奥乃誉」「奥之華」「奥正宗」などだが、現在は松華のみを使用販売している。

南部杜氏の裸参り 宮城の多くの酒蔵と同様に、松華の蔵でも南部杜氏によって造りが担われ、昭和後半期は紫波町二日町の本田完治杜氏が28年間に渡り、蔵人たちを率いて酒を醸してきた。

本田杜氏は大正14年（1925）生れ、父は桶職人で岩手県紫波町の月の輪酒造などの桶作りをしていたという。本田杜氏は桶職人の修行はせず、毎年夏期は二日町で農業、冬期は各地の蔵での酒造りに携わってきた。20歳代前半に当時最年少で杜氏となり、一級技能士の資格も取り、後に南部杜氏協会の理事をつとめている。また本田杜氏が造りを指揮した時期に、早坂酒造店の松華は、清酒品評会で優等賞を得ている。

本田杜氏とその配下の蔵人たちが吉岡八幡神社への裸参りを行ったのは昭和46年と47年の2年間であった。参加の経緯は、本田杜氏がまず思い立って蔵人に呼びかけ、賛同を得た。事前に蔵人たちが装束・持物などの準備を調べ、当日は社長の早坂芳雄氏も羽織袴姿で参拝に加わった。本田杜氏が裸参りを発起した意図は「醸造祈願」というより、需要に陰りが見えてきていた日本酒、とくに自らが手がけている早坂酒造店の松華を、消費者に直接広告宣伝するささやかな実践になればと、思い立ったのだという。そしてその手段を裸参りに求めたのは、本田杜氏の子ども時代、故郷二日町の本宮（きのみや）神社に数人で裸参りをした自らの体験からの自然な発想であったという。

本田家には、本宮神社の社殿前で10人の子どもたちが裸参り装束で並んでいる、当時の記念写真が残されている。右端の子どもが「紀元二千六百年」の幟を持っているところから、皇紀二千六百年の記念行事が行われた昭和15年であることが分かる。装束はみな白の向う鉢巻、白の晒し半纏に半股引、大振の紙垂れと藁の下がりの付いたきわめて太い注連縄を腰に巻き、口に白紙を噛んで、素足に草鞋を履いている。小さな子ども4名は上げ物が載った三宝を両手で捧げ、傍らにハサミが二本立てかけられている。

一方、昭和46年に吉岡八幡神社への早坂酒造店の裸参りの記念写真には、蔵前の広場に並ぶ裸姿の七人の蔵人と、酒屋の半纏を羽織った本田杜氏と羽織袴姿の早坂芳雄氏、後列には着衣の蔵人四人が見える。裸参りの装束は、白の向う鉢巻き、白の晒しを腹に巻き、白の半股引に、腰に紙垂れの下がった極めて太い注連縄を巻き、口に白紙を噛んで、素足に草鞋を履く。3人は上げ物の三宝を捧げ、一人は紙幣を束ねたボンテンを持つ。前列の2人は右手に鉦を持ち、左手に「松華」「早坂酒造店」と

書かれた角燈を持つ。裸参り装束については、すでによく知られていた仙台大崎八幡宮への勝山酒造のそれに習ったのだと、本田杜氏という。そのため上着を着けずに晒しを巻き、ハサミの代わりにボンテンを持つのであろう。ただ、極めて太い注連縄が装束の中心に置かれる点は、紫波の裸参り装束を継承しているのである。蔵人は蔵の注連縄も空き時間に手作りするものだが、その折裸参りの注連縄もみずからなったという。

吉岡八幡神社のどんと祭と裸参り 飴市が立つ八幡さまの歳取りの縁日に行われた酒蔵の若衆の裸参りが、藩政期まで遡るのか、あるいは明治期から昭和初期までのいずれかの時期にあたるのかは、島田飴をめぐる伝承からは決めがたい。ただ、昭和46年(1971)正月14日のどんと祭への蔵人たちの裸参りは、かつての飴市へのそれを先例として意識していなかったのは確かである。

早坂酒造店の本田杜氏と蔵人が裸参りを試みた昭和46年正月14日は、地域の有志により初めて吉岡八幡神社でどんと祭が執行された日であった。大和町役場の広報である「広報たいわ」によれば、吉岡商店街の店主などを中心とする竹の会が、地域の催事としてどんと祭を企画し、この年初めて開催し、以降例年の行事として恒常化し現在にいたっているという(No.354 平成3年2月号)。初回から10年後の昭和56年(1981)2月号には、「にぎやかに ふるさとの祭りどんと祭」の見出しで、「ふるさとの祭りとして、すっかり定着した恒例の吉岡八幡神社「どんと祭」と記し、昭和59年2月号では「松納めの伝統行事」(No.270)、平成7年(1995)2月号では「小正月の伝統行事」(No.402)と見え、以降「伝統行事」の形容が定着して現在にいたる。また平成7年には町内各地区の神社でどんと祭が行なわれており、平成16年2月号には、宮床の新田八幡神社が初めてどんと祭を行なって地域住民に好評だった記事が見える(No.510)。本来、吉岡周辺の地域では正月の松飾り・注連縄は氏神の祠などに納めるか、個人居宅内で焼き納めていたという。吉岡八幡神社と吉岡地区においては、どんと祭は決して伝統行事ではないが、地域から遊離した「どんと祭」の形式そのものが「伝統行事」と形容されて拡散していく有様を見ることができる。

また、吉岡八幡神社のどんと祭への裸参りは、どんと祭が始まった初年と翌年に早坂酒造が行なってからしばらく途絶えるが、「広報たいわ」によれば昭和52年(1977)から地域の団体によって再び始められ(昭和59年2月号 No.270)、昭和天皇逝去により自粛された平成元年(1889)を除き(平成元年2月号 No.330)、毎年行なわれて現在にいたっている。

早坂酒造の裸参りの装束・作法などは仙台の勝山酒造のそれにならっていたが、昭和52年以来地域の団体が主体になった裸参りは、まったく異なる様相を示している。例年の参加団体は町商工会青年部、スポーツ少年団、町内の企業、自衛隊大和駐屯地の部隊などである。スポーツ少年団は上半身裸で、柔道着・野球のユニフォームなどのズボン、自衛隊員は同じく上半身裸で白の体操ズボン、ともに足はそれぞれの運動靴を履く。他の団体は白の晒しを腹に巻き、半股引で白足袋を履く。いずれもみな白・色・柄物の後鉢巻きをし、白紙は噛まず、腰に注連縄を巻くこともない。多くは松飾りを積上げた手作りの神輿を、皆で掛声を掛けながら境内に担ぎ込み、どんと祭の火に投じていく。なかでも目をひくのは、細部まで作り込んだ手作りの仮装を身に着けた七福神姿で、これは町内企業の社員たちである(2000年10月号 No.462)。

神社側は裸参りの装束や作法に関して、指導めいた干渉は一切行っていない。様式化した既製の装束一式が流通することもなく、参加者個々の発想・趣向と手持ちの装束に任されている。吉岡八幡神社の裸参りは、裸参りのそうした多様で雑多な様相を鮮やかに示している事例である。松飾りを山積みした神輿を掛声とともにどんと祭に担ぎ込む姿は、明治期の仙台大崎八幡宮のどんと祭にそのまま重なり合うのである。

第4章 どんと祭から見えるもの

第1節 時代に見るどんと祭と人々

本節では、仙台大崎八幡社の正月14日夜から15日未明にかけての祭り風景を、江戸末期から昭和前半期までの変遷のなかで、その風景に組み込まれ自らその風景を形作ってきた多様な人々の姿に目をとめつつ叙述する。

最初に(1)江戸期からの仙台地方の小正月行事である「若歳」の歳事に連なる大崎八幡社の暁参りと松納めを概観し、次に(2)それが仙台市域の祭礼、町場の祭りとして顕れる姿と、その有様が明治中期に多様に展開する姿を描写し、最後に(3)それらが「どんと祭」と括られ認知されていく中で、大正期から昭和前期にかけて伝承され続けた祭りの水脈を探ってみたい。(1)(2)の記述は第1章第6節の資料集収載資料に、(3)のそれは主として祭りに関わってきた人々からの聞き書きに基づく。

(1) 暁参りと松納め

後の年越しと大崎八幡社 仙台地方の小正月は「後の正月」「後の年越し」「女の正月」「若歳」などと呼ばれてきた。第1章第4節に概観したように天保5年(1834)の『仙府年中往来』によれば、江戸末期の仙台下では、陰暦正月14日から15日にかけて、数多くの小正月行事が絶間なく連なり、風物を列挙するその行間からは、その晴れやかなせわしさが垣間見えている。14日は松飾り注連縄を下ろして繭玉の木を飾り、町中では晴着を着て門毎に祝儀を乞う「赦宣子」が見られ、夕方は子どもたちが群を成して「海鼠曳き」をし、そして晩は大崎八幡社の夜宮に参詣人が群集し、その雑踏は翌15日まで続いたという。また嘉永2年(1849)の『仙臺年中行事大意』によれば、雑踏するその境内で、役目を終わった門松が焚き捨てられていた。

暁参りと松納め 仙台地方の小正月行事では、正月14日晚から15日未明にかけて地域の産土社や鎮守社、さらには特定の著名な寺社へ参詣することを「暁参り」と呼び、若歳を締めくくる歳事と位置づけられてきた。『仙府年中往来』が伝える、14日夜大崎八幡社への参詣群集は、暁参りの遡及した姿に違いない。一方15日は八幡神社の縁日に当たることから、14日夜は大崎八幡社の新年最初の宵宮でもあったのだろう。

また、14日に下ろされた松飾りや注連縄は、昭和中期頃まで仙台市域周辺では、屋敷神の祠の前に置かれたり、鎮守の古木、あるいは「明きの方」の大木に結びつけられて朽ちるにまかされた。これは宮城県全域で見られた「松送り」「松納め」の在り方でもあった。それに対して旧城下の仙台市域においては、『仙臺年中行事大意』に見るように、暁参りで賑わう大崎八幡社の境内で松飾りなどを焚き上げていた。

そうした暁参りと松納めの大崎八幡社での様相は、明治期仙台の地方新聞の記述によってもたどることができる。14日夜から15日未明にかけての参詣は「暁参り」と呼ばれ、境内での松焼きも「松納め」と意味付けられて、ともに若歳の最後を締めくくる伝統歳事とされている。

明治18年(1885)1月16日の「奥羽日日新聞」には、「暁参り」の見出しで、小正月の風物を活写する記事が見える。

○暁参り 餅搗なる杵の音遠近となく聞くえしは一昨日にしてそれなん若年の祝ひ事物する爲にて繭玉木(まゆたまき)鬻ぐ田舎女(ゐなかめ)の聲さへ何となう春めけるに女の年越杯云ふめれば

裏屋の嬢も今日ばかりはと我の顔するもいとをかし又さすがにむかしの手振捨難の人もありしと見え夜更て後鳥追ふ聲すら僅かに聞えたるなん床し然れば八幡町（はちまんまち）なる大崎（おほさき）八幡（はちまん）の曉參（あかつきまゐ）りも左こそあらめと思ふに違はず宵よりの參詣にて各々松三五（しめ）等の飾り物を持行設けの場にて焼（たく）煙もいつより許多なりしを以て巡査と消防夫とが詰合て其が非常を警固せしとか故（かれ）昨日曉までは引も切らぬ參詣にて同社内の賑はひ一方ならざりしとなん

「奥羽日日新聞」明治18年（1885）1月16日

地方新聞に「松納め」の呼称が見られるのは少し遅く、明治29年（1896）1月12日の「東北新聞」に「●八幡神社祭禮 當市大崎八幡社は來十四日夜祭りにて松納め翌十五日は本祭なり」とあり、明治30年（1897）1月15日の同紙に「●八幡神社祭禮 本晩は正月十四日俗に松飾り奉納と唱ひ八幡町同社の夜祭りなり」とある。

（2）仙台北下の正月と八幡さまの縁日

祭り縁日 旧城下である仙台北下の正月行事の多くは、周辺農村地域のそれと多くの共通項を持つが、市域特有の姿で顕れることが少なくない。明治17年（1884）2月5日の「奥羽日日新聞」には、正月7日の仙台北下の風物を次のように描写している。

○正月七日 當地方の舊習とて舊曆正月七日は朝觀音に夕薬師と稱へ朝未來（あさまたき）より太陽の東の天に冲る比までは元寺小路なる觀音に詣で夕は又木の下薬師へ參り各自我身の幸を祈る者夥多（おびたゞ）しく鉦の緒さへ手に取ることのならぬは是維新前の事にして追々世の開明に随ひ參詣の者の數を減ぜしにぞ本年抔は如何あらんと想ひたりしが一昨三日は其例日なればにや朝觀音は守舊家が前宵の屠蘇の飲み過し歎將七草叩きに疲れて朝起の懶（ものう）かりし爲ならんか左までの雑沓にはあらざりし夕はこれに引きかへ頃日天氣打續きて道は乾坦（よく）且つ常よりは暖氣（あたたか）なるに宵は月さへ清けかりしに浮れてか薬師堂は殊の外賑やかにてありし又同夜は難追（やらい）の声四方聞えて何となく騒々しかりしも中國分町奈良屋の追難（やらひ）を爲す者は烏帽を冠り大豆に代へて金平糖又は蓬來豆を打撒く等當地方には異様のものなれば之を見ばやとて同店の前に人の山をなしたるも亦おかし

「奥羽日日新聞」明治17年（1884）2月5日

当時仙台北下では、正月7日早朝には市中心部の元寺小路萬願寺の觀音に、同日夕から宵にかけては市域南東隅の木ノ下薬師堂に參詣する習俗があり、それを「朝觀音に夕薬師」と稱し、明治期の地方新聞には毎年のようにその賑わいが報じられている。この木ノ下の薬師堂參詣は、『仙臺始元』が「木下薬師の通夜（略）正月七日の夜諸人群をなして木下薬師に賽す是を七日堂と云通夜する者多し夜籠りといふ寒候薄衣を着て詣る者ある裸參りといふ」と伝える、江戸後期の木下薬師七日堂の流れを受け継いでいることは疑いない。

そしてともになんらかの祭り縁日がたっていたことも確かであろう。明治11年（1878）1月8日の「仙臺日日新聞」には、「○昨日は朝觀音に夕薬師とか申して午前五六時比から元寺小路の觀世音へは參詣人がおし掛けへし掛け釣鐘をゴーンゴーンと打散らし近年に無き群集でありました中にも澤山に寄り來り目覺しかりしは満境内作り花の賣店にて恰も春時花の開きたる心地ぞしたりける夕薬師にいたりても随分賑はへたる様子」と新春らしい華やかな屋台の姿を伝えている。木下薬師の七日堂への裸

参りも、この祭り縁日が立つ中に参じて人目をひき記録にとどめられたのであろう。

群集と異様の見物 上に引いた明治17年2月5日付け「奥羽日日新聞」によれば、「鬼やらい」の豆撒きとして、中心街國分町の奈良屋が烏帽子の冠に威儀を整え金平糖や蓬莱豆を撒き、「異様のものなれば之を見ばや」と路上に群集が山をなした。

また、同年1月16日の「奥羽日日新聞」は、仙台の花町常盤丁での「持ち打」のありさまを伝えている。

○一昨夜の景況 その模様こそ異（かは）れ是は孰れの地方にも有我國の舊習にて正月十四日の夜は當仙臺地方にては持ち打と稱（た）へ物好なる騒客（ひとひと）は思ひ思ひに奇様の装束をなし祝ひのためとて甲家（そこ）乙戸（ここ）を廻りて種々（くさぐさ）の狂藝妙戯をなし人をして驚を喫し腹を抱かしむ且つ是等の人にて訪はれし家にては祝儀なりとて金子（きんす）出すもあり酒肴を馳走するもあり又之を謝し斷るもありけり即ち一昨夜は其れに當るを以て午後七時頃より市中は何となく騒がしかりしも左までの事はあらざりしかど常盤丁（ときはちやう）は大賑はひにて三番叟茶番浅島忠信二十四孝其他種々ありて孰れも古体を摸し事物に似せたれ皆奇容戯体ならざるはなく見物人は山を爲して其雑沓云ふべくもあらざりし借（さて）また八幡なる八幡社への参詣人は悪路なるにも拘はらず陸續と押し出して年始の飾り松等携へ来り社内へ堆たかく積み之を焼き終夜人の絶えざりしは是も又當地の舊慣とこそは知られたり

「奥羽日日新聞」明治17年（1883）1月16日

仙台市域の「持ち打」は、思い思いの仮装をして家々を訪れ、様々な持ち芸を披露して祝儀や馳走のもてなしを受ける。それも、料理屋・芸者置屋・貸座敷などが軒を連ねる常盤丁では、「三番叟茶番浅島忠信二十四孝其他種々ありて孰れも古体を摸し事物に似せたれ皆奇容戯体ならざるはなく」その見物人は群集し、花町は雑踏をきわめたという。

明治26年（1893）1月14日の「東北日報」が「○正月乞兒（こじき）ヤレ萬歳、ヤレ歌うたひ、ヤレ餅貫ひと名つけて一月來れば乞□となり市内毎戸の門邊に立ちて年のうちを貰ひ歩くものをば正月乞□と呼ぶことなるが彼等の中には近郷にて相應に暮し居る者も交り居る由破廉恥とやいはん、鐵面皮（てつめんび）とや云はん」と非難する記事は、当時珍しい多様な芸能者が、周辺地域から仙台市域に正月を通じて流れ込んでいたことを語っている。市中の芸妓や幫間も得意先の年始廻りの途上で端芸披露に加わり、中心街各所では連日見物人が山をなした。日常は目にするのでできない目覚ましく華やかな見物が路上で披露され、それをゆきずりの通行人として見物することが、仙台市域の正月の楽しみとして人々に開放され享受されていたのである。

男女の夜歩き 仙台周辺で、広い地域から人々が暁参りに集うことで知られていたのは、岩沼の竹駒神社、塩釜の塩釜神社などである。明治17年（1884）2月13日の「陸羽日日新聞」によれば、名取郡笠島村の道祖神社は、太夫様と呼ばれる神職が、暁参りの参詣者の男女を指差して縁結びの占いをするため、とりわけ若い男女が連れ立って参詣群集し、「近傍は人頭の為に黒し」という賑わいだったという。記事は最後に「當年も男女數十人の参詣ありて何れも若者共なりしが中には裸体参（はだかまる）り跣足参（はだしまる）りもあり境内の積雪をも踏消す計りの雑踏にて定例の指さし式もあり最と盛んにて有りたりとは随分可笑（おかし）かりし次第なりけり」と結んでいる。裸参りの若者が暁参りの群集によって迎えられ喝采され見物として享受されるさまが想像される。

この道祖神社の暁参りに代表されるように、大崎八幡社の暁参りも、若い男女を始めとする老若男女が夜通し出歩くことが許容される場であった。すでに江戸後期の『仙臺始元』の「大崎八幡神賽（略）正月十四日の夜男女老幼群をなして大崎八幡に夜賽す暁天に至るまで諸人一隊一隊行還盡る事なし」という記述に、この夜が担ってきた開放性が活写されている。明治期になってもそれは変わら

ず、明治23年(1890)3月6日の「奥羽日日新聞」に、「○曉参り 一昨夜は舊暦の正月十四日と云ひ宵の小雨の間もなく晴れ霞(かすみ)の衣(ころも)打檠(うちはえ)し月弓男(つきゆみをとこ)浮かれ出しよりいざせ我もと男女打連立ち大崎八幡に参詣するなるべし往復(ゆきかへ)の足音夜た、聞えしが社内の賑へ左こそと推せられぬ」とある。

八幡さまの縁日 明治30年代、芝居小屋や芸妓屋などが荷車に松飾りを満載して神楽囃子や楽隊付きで松納めに乗込むことが流行し、中には松飾りで形作った軍艦を担いで松納めをする者もあった。明治36年(1903)1月16日の「東北新聞」は次のような描写がある。

●一昨夜の八幡社 一昨夜當市大崎八幡社に例年の通り夜禁(よまつ)(ママ)りあり夕頃より老若男女群集雑沓門松年繩を焚く焰(けむり)頗る盛なりき又例の裸躰参(たまみ)りも各隊列を作りて出かけ殊に仙台座興行中の俳優連數十名腕車(わんしゃ)を連ね先頭は樂隊に歩調を整へ後尾には年繩門松等を満載せるチャリーズを附し恰も出征行進隊の如く花々しき有様なりき
「東北新聞」明治36年(1903)1月16日

芝居一座と芸妓達は参詣の華やかさでも参詣者たちの耳目を集め、揃いの赤い提灯に人力車を連ね樂隊を引き連れて乗込む壮士芝居の一座や、馴染みの旦那を引き連れて艶やかな芸者姿で参詣する芸妓達は、例年曉参りの見物の一つになっている。明治36年(1903)1月16日の「奥羽新聞」は、壮士芝居一座野参詣を「●青柳一座の八幡詣(はちまんまり) 仙臺座に興行中なる壯士俳優青柳一座総員十余名にて一昨夜人力車に何れも座名を染抜きたる紅燈(こうとう)を點じ市中音樂隊を先驅に馬鹿囃臺(ばかはやしやたい)を後ろに威勢よく八幡神社に参詣したるは廣告を兼ねたるよき思付みなりし」と伝えている。

祭りの賑わいにつきものなのが拘摸や賽銭箱荒しと喧嘩騒ぎで、市中にも盗難や喧嘩などの警察沙汰が常に話題になっている。明治36年の「奥羽新聞」と明治37年の河北新報から引用しておく。

花柳便りわかなかこ若菜籠(略)▲一昨日の時間過ぎにお八幡様へ参詣おまみりに行った藝妓屋げいしやは吉野家、柳家、いてふ家、玉よろづ、丁子屋、新東家、よろづ家、福すゞき等で其の藝妓が惣出だったから實に花々しく八幡様も大分御眼尻おんまなじりを下げられたか何うだか分からないが一行の中に御精進でも悪かったと見え石段で轉んだ妓ひとなどあって大陽氣おほにぎやかであったげな▲此のお八幡様の宵祭りに若い女の裸参はだかまみりと老婆の裸参はだかまみりと書生の裸参はだかまみりは三幅對の見物であったが惣体に昨年より人出き多く又た裸参はだかまみりも多かった●怪しからぬ縁起物 市内連坊小路七番地庄司清次郎妻カツ(六一)は一昨夜同東九番丁姓不詳アイ、クマなど云ふ面々と打連れ共に怪しからぬ木製の物を扇に載せ國分町界限の家に入り込み餅打もちうちの御祝儀しやべなどと蝶舌をり居りしを風紀係ふうきかりに認められしが昨日一同召喚の上其の不心得を誠しめ釋放
「奥羽新聞」明治36年(1903)1月16日

●参詣の留主に泥坊 北目通り九番地瀧喜太郎(五十五)は長女きさ(二十三)との二人暮らしにて薪炭商をなし居るものなるが一昨夜七時半頃きさと共に八幡神社に参詣に出掛け帰宅して見れば戸が開放しになり居るより不審に思ひ筆筒の中を檢め見しに衣類八點盗難に罹り居るのみか折角搗き立ての餅までも盗まれて皆無なるに二人は尻餅をついて之れはこれは
●次も盗難 一昨夜六時頃當市虎屋横丁の伊藤春吉方にて家族か夕飯を食し居る間に店先に置きたる塩鮭一俵(八本入にて見積二圓)盗難に罹る
●八幡祭りと警察事故 一昨夜の八幡神社祭典は非常の人出なりしより警察事故も多かりしが當市連坊小路の筆職加藤義一郎方の雇人高田忠蔵は黒縹子の財布を金一圓三厘在中のま、拘り取られ名

掛丁二十番地佐々木政治は唐縮緬の風呂敷一枚を拾ひ名掛丁の佐藤キチは妹と倅勇治（十一）を連れて出掛けたる途中にて勇治を見失ひしとて其筋に訴ひ出でしが同夜神社近傍にて発見し又十八九歳の青年が二十二三歳の番頭艇の番頭体の者と喧嘩を始めたるを園田巡査が通り掛かり説諭し次に参詣人中に娼妓らしき女ありしより警官が取調べたるに娼妓にはあらざりしこと判明して許されたり

「河北新報」明治37年（1904）1月16日

（3）どんと祭りと人々

大崎八幡社の門前町である八幡町で生まれ育った昭和14年生れの話者は、親の世代や近在の年配者たちは、現在一般化している「どんと祭（さい）」の呼称ではなく、「どんと祭り」あるいは「どんとん祭り」のそれを日常的に使っていたことを記憶している。ここでは、「どんと祭り」の呼称に代表されるような、現在の話者たちの記憶のひだの奥にとどまっている昭和30年代までの祭りの諸相を書きとめておきたい。

夜祭りの雑踏 現在「どんと祭」と総称される大崎八幡社の正月14日夕から15日未明にかけての祭礼が、現在の話者たちの記憶の中で「縁日」として隆盛であったのは、神社前の国道に市営の路面電車が運行していた時代である。

当時祭りの露店は、大学病院のあたりから大崎八幡社前の鳥居まで国道沿いにひしめき合い、折り重なる人波で行くも帰るもままならないほどの雑踏が延々と続いた。もっとも参詣者が多かった頃は、混雑時は境内に続く長い石段を片側通行にして警官が歩行者の整理にあたり、境内に参詣者が群集してこれ以上の密集は危険と判断されると、石段の最上段で往路の参詣者の進行を遮断し、2-30分後境内の混雑が和らいだのを見はからって通行止が解かれた。それまで密集した参詣者たちは数十分間石段上で立ったまま待っているのである。そのため、大鳥居をくぐって石段を昇り、境内に行きつくまでに30分以上かかることもめずらしくなかった。夜10時を過ぎると混雑も和らぐが、まだ境内はかなりの人出で賑わっており、それは12時近くまで続いたものだという。

神社前まで通じていた市電は、15日の午前2時頃まで特別ダイヤで終夜運行され、市中心部と八幡社を徒歩で往復する参詣者も夥しく、国道から通町を抜けて中心街の一番丁まで、遅くまで人通りが絶えなかった。昭和11年生れの男性話者が、昭和30年から40年代の記憶として、どんと祭の夜は深夜まで人通りが多く、その中を市中心部まで歩いて帰ることが楽しみだったという。「夜、遅くまで歩いたって、寂しくねえんだもん、どこまで歩いて来たって、人がいっぱいじゃ。それ楽しみだっちゃ」と語る言葉には、日頃は中心街でも早い時刻に閉店消灯し人通りが途絶えがちな街路が、この日だけは深夜まで人の波で賑わい華やぐことへの喜びがこめられている。

夜店さまざま 昭和前期から高度成長期にかけてのどんと祭の夜店では、考え得るありとあらゆる品物が商われていた。最盛期には日本全国の露天商が仙台のどんと祭に集まったといわれる。口上販売や実演販売などの特技を磨いた売り手や、各地の郷土色濃い夜店が一堂に会し、互いに気合が入って楽しかったと、毎年どんと祭に夜店を出し続けている仙台駄菓子店の昭和10年生れの店主は語る。

仙台駄菓子、仙台達磨、そしてまといの店は、毎年境内に店を張る老舗である。他に弓矢・風車・張子面・人形などの郷土玩具屋、さまざまな花や提灯などを精巧に紙で造り出した紙細工屋、竹とんぼ・独楽・水鉄砲などを並べた竹細工屋、縁日につきもののヨーヨー売りなど、食物屋では、どんと祭の名物として毎年何軒も見られた甘酒屋、現在の大判焼を小さくした黄金焼き、芭蕉煎餅、スルメの醤油焼き、などこれもとりの品を商っていた。先に引いた明治11年1月8日の「仙臺日日新聞」が、元寺小路の観音の縁日が境内中造り花の店で花が咲いたようになったと報じているが、昭和前期

の紙細工屋はこの造り花の伝統を引く店であろうか。牡丹や菊の造花を始め、提灯や雛人形までさまざまな紙細工品が、あちこちの店先を飾っていたのが見事であったという。

仙台近郊の人々も手持ちの品で露店を開いたようで、野菜の漬物、閑上浜の干物を焼いて売る店など、それぞれ思い付くかぎりの品が並べられた。八幡社前の八幡町の商店も、それぞれの店の品物を持ち寄って露店を張った。終戦後の食糧難時代は、カエルを捕らえて来て焼いて売ったり、マムシを売ったりする店もあり、表に「甘酒屋」の看板を掲げ、裏では濁酒を呑ませる店などもあったという。

戦後しばらくは演芸や見世物の小屋も例年小屋掛けし、手品・玉乗り・軽業などが上演されたが、時に芸達者な参詣人が飛び入りで持ち芸を披露することもあった。また境内の一隅に将棋盤を据え、参詣人と賭け将棋を指す将棋指しも見られたという。

現在、駄菓子・芭蕉煎餅・達磨・まといなどを除き、これらのとりどりの夜店はすっかり姿を消し、大判焼・お好み焼きなどの特定の食物屋がほとんどを占めるようになっている。

縁起物と客寄せ 正月の縁日であるどんと祭には、新春を祝う縁起物の夜店が欠かせない。現在もどんと祭名物とされるのが、板おこしをらせん状に捻った形の「捻りおこし」で、大きなものは長さ50センチを越え、店先に飾られて看板代わりにもなっている。他に「鳩パン」と呼ばれる鳩の形をした平たい堅焼きパンと、その年の干支をかたどった堅焼きパンは、捻りおこしとともに仙台駄菓子屋がどんと祭でだけ売りに出す縁起物の看板商品となっている。細かい装飾と独特の色合いが特色の仙台達磨も、仙台周辺の正月縁日に欠かせない縁起物であり、どんと祭には毎年数軒の店が出る。古い達磨を持参してどんと祭の火で焼き上げて新しい達磨を求めたり、去年より一回り大きな達磨を買ったりする。大小のマトイを並べたまとい屋も、毎年何軒も見られた。現在まったく姿を消している玩具の弓矢も、武神である八幡神にちなんだ縁起物として多くの店が商っていたという。

多くの夜店の売り手たちは、客を惹きつけるさまざまな工夫を凝らした。練った能書きと調子の良い口上を聞かせ、見事な手さばきの実演で目を惹いた。客寄せは手業と喋りが鍵を握っていたのである。縁起物の達磨屋やまとい屋の口上は景気付けと呼ばれ、黄金焼き屋にも黄金焼きの口上があった。

仙台駄菓子の売り手も、菓子の効能や由緒を連ねた能書きを喋ることで客の足を止め、その口上で耳を惹きつけ楽しませて、店先の菓子を勧めた。毎年どんと祭に出店している仙台駄菓子店の当主は、昭和10年に仙台市鉄砲町に生れ、市内の駄菓子屋に弟子入りして7年間修行の後23歳で独立、自転車で市内を行商しながら菓子を売り歩いた。菓子の行商は一軒一軒の家にあがって喋りとおし、持っている菓子を次々試食させて信用を得るといった販売方法をとった。自ら作った菓子を携えて家々を廻り、菓子の口上を述べて客を惹きつける仕方は、「口演」と呼ばれ、駄菓子販売においては日常の姿であった。店主は、「われわれ、作る人が話すんだから、だから聞いてる人も感動するわけね」といい、大道商人とは効能を述べて品物売る芸人だと語る。

また仙台駄菓子の店では、見事な手業を客の前で披露する菓子の実演販売も行なわれていた。餅粉に色をつけて手でさまざまな物を形作るしんこ細工、それを飴で行なう細工飴、吹きガラスのように暖めた飴に息を吹き込んで造形する吹き飴など、熟練した手業は雑踏の中でも多くの客の目を引きつけ足を止めさせたに違いない。ただ現在は、こうした実演販売は保健所の規制によって行なわれていない。

子どもたちのどんと祭 八幡社前で生まれ育った昭和14年生れの男性話者は、小学生だった戦後すぐの頃、大崎八幡社の秋の例大祭には八幡小学校が休校になったことを記憶している。八幡町の子どもたちにとって、お八幡さまの秋祭りとはどんと祭は、一年でもっとも待ち遠しい祭りであったことは間違いない。

どんと祭の日は、露店が準備を始める早い時間から遊び仲間と誘い合って境内を行き来し、心ひかれる露店を一つ一つ注意深く観察し、値踏みしていった。話者を含めた子どもたちが楽しみにしてい

たのが、今の火加減を小さくした黄金焼きの店で、皆で何軒もある黄金焼き屋をめぐる、火加減や最初に引く油の善し悪しまで批評したうえで判断を下す。古い油を使うと焦げやすく、新しい油だと焦げずに味よく焼けるため、油の善し悪しで同じ黄金焼きでも美味しさに大きな差があるため、彼らは「あの三軒目の親父が美味いどお」「あの親父ねや、古い油でねや、あど忙しいどこれだかな」と手鼻をかむ仕草をしたり、竹細工屋を巡っては、「あの竹とんぼ大っきいどお」「あそごの竹とんぼ飛ばねえど」と、あちこち徘徊しては批評を戦わして時を過ぎたという。

昭和初期頃まで、仙台達磨にはガラスの目玉がはめ込まれていた。卵の殻を横に割ったような楕円のドーム型ガラスに、中から黒目と白目を描いてはめ込んだ。どんと祭で数多くの達磨が焼き上げられるため、いくつかのガラス目玉は焚火後に焼け残っている。どんと祭の火はそのままにしておくと、雨か雪でも降らない限り3日も4日も燃え続けた。子どもたちは火勢が弱まったのを待って、長靴をはいて焼け跡に達磨の目や五円玉を拾いに出かける。まだくすぶり続ける焼け屑の上を長靴で歩き回り、達磨の目に気を取られていると、いつのまにか長靴に穴が開く。話者は長靴に穴を開けて家に戻り、「一年一度のお八幡さまのどんと祭だから」と、親にあきれられながらさほど咎められなかったことを記憶している。

仙台芸者と達磨屋 明治期の新聞には、どんと祭の晩、仙台の芸妓たちが人力車で乗りつけて大崎八幡社に参詣する様子が記されているが、芸妓の参詣は昭和期を通じてどんと祭の風物の一つであり続けた。昭和30年代まで人力車で鳥居前に乗りつける芸妓が見られたという。芸妓の参詣はお座敷がひけた後の12時過ぎ頃で、たいてい馴染みの旦那を同伴しており、それを芸妓たちは「暁参り」と呼んでいたという。

昭和11年生れで現在も芸妓をつとめる話者によれば、参詣する時は正月姿であり、芸者のもっとも改まった姿をとる。髪は高島田、あるいは潰し島田、着物は黒い「出」の衣装に柳の帯、髪には鼈甲の簪と正月特有なものとして髪に稲穂を付ける。「黒の出」は黒留袖とは異なり、普通の着物の三分で仕立てられており、柳の帯も普通の丸帯の二本分にあたる。「黒の出」は、裾が長いので黒の出を着ることを「黒を引く」と言う。歩く時は長い裾を左手で袂を取って歩く。その姿を「左袂（ひだりづま）」と言う。雪の時は雪下駄を履き、右手で蛇の目を差して左手で袂を取って歩く。そうした「黒を引く」のは正月と、舞台での踊りを依頼されたり、客に特に依頼されたりした時に限られる。

芸者たちは、商売柄もあり、どんと祭の縁日では必ず縁起物を買うことが約束事となっており、そこには特有な縁起担ぎの習俗が伝承されている。どんと祭に客と行くと、たいてい屋台で達磨・マトイ・捻りおこしなどを買ったり、買ってもらったりするという。

マトイ屋では、大きめのマトイを買って、「その小さいの付けて」とか、「いくらいくらにして」とかと、必ず値切る。その交渉が成立するとその場で皆で手打ちをする。

ダルマ屋では大きめのものを買うが、売り手の隙を見て小さいダルマを袖の中に入れる。左手で袂を取っているため、右手を袂から延ばしてダルマを右袖の中に入れる。それを「ちょっとお連れする」と言う。どんと祭で芸妓がダルマを盗むのは、芸妓にとっても店にとっても縁起が良いとあって、店の者も見ても見ぬ振りをするようになっており、その分の代金は買った分に含めているという。

この「達磨をお連れする」ことは達磨屋の方でも確かに伝承されている。毎年仙台達磨の店を出している昭和11年生れの達磨職人によれば、そうした行為は「盗む」のではなく、芸者が達磨を見つけられずに懐に入れると縁起がいいとし、見つけられないことが肝要なため、また連れの旦那が他に買ってくれることもあり、見ないふりをして「縁起物だから呉（け）てやれ」と若い者に言ったりする。ある若者が店を手伝い始めた最初の年に、目のさめるような芸者が達磨をお連れしようとした。泥棒だと思った若者は持っていたモノサシで軽く叩こうとした。すると芸者は自分の源氏名と藤の花を染め出した手拭を置いていったという。興味深いのは、そうした風習は事前に先輩から言葉で教えられ

ることはなく、祭りの現場でのやりとりの中で体験し、特定の芸者と達磨屋が緊張したやりとりの中で暗黙の了解を結んでいくことが、常に繰り返されていることである。その了解は数年間をかけて安定した一種の信頼関係へと育っていくようである。

祭りを創っていく人々 どんと祭の点火式には、市中心部の東一番町商店街の代表が招かれ、八幡社の氏子とともに松明を手にして松飾りの山に火を点ける役割を担う。氏子ではない彼らが招かれるようになったのには、以下のような経緯がある。

昭和30年代、商店街の店主10名ほどが明治43年戌年生まれで、「戌年の会」を結成し、ことあるごとに戌年の守り神である大崎八幡へ参詣したという。どんと祭や節分など、「何か口実をつけては」年に何度も参詣していた。戌年の会の会員は、商店街運営の中心になってさまざまな行事・イベントなどを企画していたが、一番町商店街の年末大売出しの大鳥居を最初に立てた時、八幡宮のどんと祭に運び込んで燃やすことにした。どんと祭の日は、いったん鳥居をばらして、仙台駅まで運び、仙台駅から錦町を通って八幡神社まで運んだ。店主達が担いで運んだが、重いので途中で若い者たちは逃げてしまった。わざわざ仙台駅まで運んだのは、当時一番町商店街と中央通商店街は切磋琢磨し合っていたので、中央通商店街への示威行動の意味もあった。どんと祭の時の大鳥居は「形になる」「目玉」でもあったので、神社側から依頼され、一番町四丁目商店街の代表が点火式に立ち会い点火係の役割を果たすようになり、それ以来町内会がどんと祭に関わるようになった。

東一番町商店街が大崎八幡社の祭礼に積極的に関わっていったのは、どんと祭のみにとどまらない。もともと30年程前から一番町商店街で節分祭を行っていた。その際八幡社にお払いを頼んでいた。やがて商店街の代表が神社に出向いて豆撒きを行なうようになった。最初は商店街で撒いた豆の一部を八幡宮に持って行って、社務所の庭で撒いた。それがNHKに取り上げられ、それからより大規模に本殿で撒くようになり、今では特別の舞台を作って節分祭をしているという。まさに神社に率先して祭りを創り出している人々である。

また、どんと祭の火で餅を焼いて食べる習俗を、一人で毎年実践し続けた女性がいる。仙台で芸妓を勤めた女性は、大正4年神奈川県平塚市に生まれ、小学校から東京浅草に暮らす。彼女の叔母は仙台で「待合」をやっており、夏休みに仙台に遊びに来た時、芸者衆の姿を見て憧れ、仙台に居ついて芸妓になった。浅草にいた頃は酉の市には何があっても必ず行く人で、仙台では八幡さまを始めにさまざまな社寺に参詣し、多くの守り札などをもとめ、縁起が良いと聞いたことは何でもやってみよう人だった。あまりに多くの守り札を買い求めたので、「お守りのデパート」などと呼ばれるほどだった。あるとき彼女は、歳時記などでとんど焼きの火で餅を焼いて食べる小正月行事を知り、大崎八幡のどんと祭に鏡餅を持っていき、社務所で長い棒を借りて焼いて食べる事を始めた。それ以来、毎年どんと祭の火で餅を焼いて食べていた。それを食べると一年丈夫でいるからとか、風邪をひかないからと言っていたという。彼女の娘でやはり仙台で芸妓を勤める昭和11年生れの話者は、「なかなかそれ焼けないんですよ、熱いし。交替で持ってね、重いし。それ焼けたとこだけちぎって。また焼いてね。みんな、「おばちゃん、何してんの」なんて子どもたちがね。「食べなさい、風邪ひかないのよ。受験に合格するよ」とか、毎年それやったんですよ。それをやらないと、どんと祭に行ったあれがないって。…だから、文献でなんか見ながら、「ああいい、これは縁起物だ」っていうんで、始めた。」と母を回想するのである。

第2節 どんと祭の現在から見えるもの

本節においては、昭和30年代以降、高度経済成長期を経て、現代に至るまでの仙台市内における

どんと祭の変化の様相を、地元紙である「河北新報」の記事を中心として分析することを目的とする。

小正月行事の変容とどんと祭の隆盛 戦後の急激な社会変化を経て、昭和30年代に至ると、仙台市内の小正月行事にも変化がみられるようになる。昭和30年代から40年代にかけての河北新報には、1月14日が近づく度に、仙台市内にモチ花売りが登場したことが取り上げられているものの〔資料1〕、14日に松飾りを外し、ダンゴ木を飾ることや、15日にアズキ粥を作るといった習俗は、既に「よき時代のノスタルジアを買う」〔資料2〕、「町角の郷愁 モチ花市」「世の中が目まぐるしくなればなるほど郷愁を感じるらしくモチ飾りの売れ行きも意外に上々」〔資料3〕などと表現されており、都市部を中心として小正月行事の捉え方が変化してきていることが窺える。

資料1 ほんのり春の気配 街を流すモチ花売り

○…仙台市内にモチ花売の姿がみられる、あすは“正月の十四日”戸ごとに松飾をおろし、ほこりをはらってモチ花を飾る日である。

○…紅白のモチをちりばめた枝の束をかかえて街を流す彼女たちの背に、冬の陽射しがやわらかくほおえみかけ、何となく春の訪れを告げているようなのどかな風情かって、かの西鶴が「天井裏にさしたるモチ花に春の心して…」と草したのも、なにかしらうなずける感じだ。

○…徳川時代のむかし養蚕の成功を祈ってマユダマを飾ったのがいつしかこういうならわしに変わったのだそうだが、仙台ではこの日松飾をたく大崎八幡の名物どんと祭のにぎわいにおかれて、かれんなモチ花を愛する人々が年々減っている。

※下線は筆者による

『河北新報』昭和30年1月13日夕刊8面

資料2 パッとモチ花 小正月呼ぶ店頭

小正月（十五日）のデコレーション、マユ玉が仙台市内の店先に出た。「ダンゴ木」と呼ばれ、一昔前にはどの家でも柱に飾ったエンギもの。赤いミズキの花に咲き乱れた白いモチの花は雪国の季節感にピッタリだ。お客さんたちも「よき時代へのノスタルジアを買う」といった表情だった。この「ダンゴ木」は十九日ごろまでにおろしてしまう地方が多く、その秋の豊作を祈りながら枝のモチを食べて正月気分_に別れを告げるという。

※下線は筆者による

『河北新報』昭和35年1月13日夕刊3面

資料3 町角の郷愁 仙台でモチ花市

あたたかく暮れて月夜や小正月（圭岳）

十五日は小正月、いわゆる女の正月だ。十四日はその年越しで、この日に仙台では門松や松飾りを納め、それを焼く行事が“どんと祭”なわけ。家々ではアズキがゆを作って祝い、松飾りに代わってミズ木にモチ花を咲かせたモチ飾りが登場するなど地方によっていろいろの習慣がある。

かつては元日以来、男性のごちそう作りなどでいそがしかった婦人たちが初めてゆっくり正月を楽しんだものだという。こうした情緒、世の中が目まぐるしくなればなるほど郷愁を感じるらしくモチ飾りの売れ行きも意外に上々「団地の人々も買っていきます」とモチ飾り屋さんは語っていた。

※下線は筆者による

『河北新報』昭和39年1月13日夕刊5面

また、昭和30年(1955)には、全国的に新生活運動が展開し、冠婚葬祭の簡略化や生活の近代化が推進されたことに伴い、門松の廃止も呼びかけられている。しかし、年中行事の簡略化が推進され、小正月行事が古きよき時代の習俗としてノスタルジックに受け止められていく一方で、大崎八幡宮のどんと祭はむしろこの時期に、15万人から20万人という戦後最大の人出を記録し続け、仙台を代表する祭礼へと成長を遂げていったことが明らかである〔資料4〕。

資料4 燃えるお正月 仙台名物 大崎八幡どんと祭

○…お正月の神様が炎にのって天に帰るといふ仙台名物大崎八幡神社のどんと祭が十四日夜行われた、門松廃止?の年というのにどこから集まるのか戦後最大の十五万の人出を記録したのは皮肉、午後六時古式さながら火打石で火をともし浄火がエン、と境内の天をこがせば絶えることない人の列もまたエン、

○…名物裸まいりもこの日二、六度(午後八時)というどんと祭にはめずらしい暖かさにすこぶる威勢よく、白装束に鈴の音もリン、と酒造店はじめ二十組以上が参加、参詣人の目をみはらせた。

○…車庫を空にして動員した市電、市バスは午後七時過ぎころからすべて超満員、ヘッドライトの流れさながら東京の目抜き通りをしのぐばかりで名物ねじりあめなど軒をつらねる露店、このあたりにかき入れのどんと祭景気をみせた

※下線は筆者による

『河北新報』昭和30年1月15日7面

なお、昭和30年代には、既に「どんと祭」という呼称が定着し、大崎八幡宮では現在と同様に「松焚き」と「裸参り」を中心とした行事が実施され、15日の明け方まで参拝客が訪れていたことが窺われる。神武景気を受けて、昭和32年(1957)には戦後最高の15万人が参拝しており、「炎を眺めながら神武景気に感謝した」との記述もみられる〔資料5〕。

他にも「このあたりにかき入れのどんと祭景気をみせた」〔資料4〕、「仙台市電、市バスも例年ない張り切り方、バスの方がうしみつ時まで運転すれば、市電も負けず劣らず、二十一台の臨時電車を増発、午前二時まで運転、サービスこれつとめる」〔昭和30年1月14日夕刊3面〕、「市電、市バスは延長運転、市内の映画館も明け方まで上映するところが多く、年に一度の火祭りは夜通し続けられる〔昭和34年1月14日4面〕といった記述がみられ、神社の周辺は明け方まであかつき参りの人々で賑わっていたことが窺える。

また、この頃、東一番丁商店街では正月の大売出しの宣伝のため、6つの大鳥居を立て、1月14日に鳥居を解体し、大勢で担いで大崎八幡宮まで運ぶ「どんと祭大鳥居奉納パレード」を実施しており、これがどんと祭の名物行事となっていた。商店街の関係者は、どんと祭の日のパレードを東京の神田祭のように定着させたいと述べており〔資料5〕、威勢の良い掛け声によって鳥居を運び、移動中には縁起物である火伏の纏を配布するなど、どんと祭を通じて商店街の宣伝にも努めていた。

この他にも仙台駅前に設置された正月の大売出し宣伝用の大型の達磨や、新伝馬町の三瀧山不動院の張子など、多額の資金を注ぎ込んで作られた巨大な縁起物が大崎八幡宮に物々しく運ばれ、どんと祭の雰囲気盛り上げていたことが窺える。このように、どんと祭は、正月送りの行事であると同時に、昭和30年代には商店街の活性化にも活用されていたことが明らかである〔資料5〕。

資料5 どんと祭=大崎八幡=人出ざっと十五万 神武景気の大鳥居も炎に

(別面諸報)きのう十四日夜は仙台名物の「火祭」どんとまつり、仙台市内の各神社の境内にはみんなが持寄った「松飾り」や「しめなわ」など正月の飾りを焼く火がたかれ、終夜賑わった。中

でも八幡町の大崎八幡神社には十五万をこす人が押し寄せ、寒さもゆるんだ夜遅くまで「はだか参り」などでごった返した。しかし警戒は万全、大した事故もなく、平穏な「どんとまつり」だった。

○…焼かれゆく“正月”の中には年末年始の商戦に活躍(?)した東一番丁、新伝馬町、駅前などに飾られた大鳥居やお不動さん、ダルマの姿もあった。つめかけた各商店街の人々は炎々夜空を焦がすほのおに包まれてゆくこれらの鳥居や不動尊をながめながら“神武景気”を感謝した。

○…東一番丁の青葉通、広瀬通角などに立てられた六つの大鳥居は同日午後までに取り外されて広瀬通りに勢ぞろいし、午後三時、白装束の山伏を先頭に東一番丁の各商店の店員と、学生約二百人にかつがれて東一番丁、駅前など市内を行進、夕刻大崎八幡神社に着いた。ベニヤ板の張り合わせとはいえ高さ二十五尺、太さ三尺五寸という大代物だけにこれがかつぐハッピ姿のバイトさんたちも寒中に汗して「ワッショイ、」先頭の「宝車」からはエンギものの小さい火伏のまといが見物人にばらまかれ宣伝は上々。

東一連合会の話では「人出の少い仙台に客を集めるため毎年この行事を行い、東京の神田まつりのように名物化する」と意気こんでいる。結局六つで三十六万円が灰になったわけ。

○…一方新伝馬町のお不動さまにある張子のお不動さんも鳥居と一しょに灰になった。やはり同日午後から町内の役員や神主さんが出席し、お神酒で祝って告別式を行い、午後四時ころ山伏姿の若者たちが引くりヤカーに鎮座して出発、町内を一巡したのち大崎八幡神社に到着した。ほのおを背負った高さ十二尺の“トリ年の守本尊”といわれる張子のお不動さんは「バリ、」と音をたてて火の中に消え、金六万円の威勢を見せた。

○…また仙台駅前の青葉通入口にでんと構えたダルマさんもこの夜どんとまつりに参加した。高さ五尺の二つが道路の西側に飾られ、年末から正月にかけ客のフトコロをにらんできたが、一つは十二日の大風で無残にも吹きとんでこわれてしまったので、駅前商店街では十四日もう一つのダルマさんも解体してトラック二台に積み夕刻同神社に運んだ。楽隊、おはやしを先頭ににぎやかに行進し、町内の人たちもトラック一台借切ってダルマさんの前途をみとどけに参列し鳥居やお不動さんに負けない盛況ぶり。これも二つで二万五千円の火炎だった。

さっそうハダカ参り 声もかすれる警戒陣

○…神明前の青年有志須藤正さんら二十二人は宮城の町商工会の激励を受けてさっそうとハダカ参り。午後六時総合グラウンド付近に集合、水ごりをとり身をきよめて出発、二十人町、名掛丁、東一番町、櫓町、北四番丁とコースをとり、白装束もいかめしく、鈴の音に邪気をはらって大崎八幡へと向った。

○…大崎八幡の境内は宵のうち出足しはあまりよくない方。例年にくらべて格段の暖かさで“遅く行っても大丈夫”というわけか午後八時ころには四万くらい。ところが、それを過ぎると人並みはみるゝあつくなり、同八時半には一躍二倍の八万、同九時には十二万といった調子。昨年の十五万という数字をオーバーしたというのが各方面の観測。

○…人出警戒の仙台北署は例年通り表の大鳥居わきに警備本部、拝殿下の裏参道分れ道付近に警備詰所をおき、約二百名の警官を動員、仙台市消防本部、日赤県支部なども協力して警戒態勢の完璧を期した。スピーカーには四人の婦警さんが二組に分れてつきっきり。迷子の照会、人波の誘導に大わらわ。「テープレコーダーを持ってくればよかった」とかすれ声でボヤいていた。

○…これが功を奏したものか、人が多く出た割に通行はスムーズ。神前に参り松かざりを燃やす善男善女の群れは文字通り流れるよう。人もさまゝなら祈る思いもさまゝでどんとまつりの夜はふけて行った。

※下線は筆者による

『河北新報』昭和32年1月15日4面

どんと祭の資源化—「仙台三大祭」としてのどんと祭— さらに、昭和30年代後半には、どんと祭は市民による正月送りという目的以外の意味を付与され始め、市民の行事から仙台市を代表するイベントとして認識されていく。河北新報の中にも、「みちのく最大の火祭り」〔昭和35年1月15日9面〕、「仙台名物『どんと祭』」〔昭和39年1月15日〕といった表現がみられるほか、この時期には「仙台七夕まつり」や「青葉祭り」とセット化され、「仙台三大祭」として外部に提示されるに至っている〔資料6〕。このことは、同じ時期に国鉄が「青森ねぶた」「秋田竿燈」「仙台七夕」を「東北三大祭り」として商品化したことと連動していることが推測されるが、どんと祭もこの頃から、七夕祭りと並び、仙台市を代表する観光資源として意識され始めてきたことが窺える〔資料7〕。

資料6 ハダカ参りも元気に 仙台名物『どんと祭』

古い伝統を持つ仙台の「どんと祭」が十四日夜から十五日暁にかけ、八幡町恵沢山の大崎八幡神社を中心とし市内六十四ヶ所の神社（市消防局届け出）で盛大に催された。

“仙台三大祭り”の1つとされるこの行事は「左義長」とも呼ばれる小正月の火祭りであり、この火をあびると若返るとか病気をしないとかいう言い伝えがあり、観光価値もあって年々にぎやかになっている。

寒冷前線通過のため午後からは気温が下がって小雪もちらついたが、暮れなずむころから大崎八幡神社境内には門松やしめ飾りを持った人たちが途切れることなく続き、松たき場の火勢は強くなる一方。商店街が年末年始の繁盛を祈って建てた大鳥居も投げ込まれて“正月”を納め、数十組の裸参りの若者たちが鈴を鳴らしながら周囲を舞う。縁起もののダルマや火伏せマトイを売る百二十数軒の夜店からの呼び声も祭り気分をあおってたいへんなにぎわいだった。神社の人の話では人出は昨年よりやや多く「さて、十七、八万人でしょうか」ということだった。

※下線は筆者による

『河北新報』昭和39年1月15日

資料7 運び込まれた大鳥居 今夜、恒例の“どんと祭”

七夕と並ぶ仙台の代表的な民俗行事“どんと祭”はきょう十四日夜から十五日暁にかけ仙台市八幡町恵沢山の大崎八幡神社で行なわれる。

“どんと祭”は「左義長」とも呼ばれる小正月の行事で、約二百年の伝統がある。この火をあびると若返るとか、病気をしないとかがいい伝えられ、燃え上がる炎がその年の景気を占うともいわれている。

大崎八幡神社参道にはこの朝、早くも数十軒の夜店が作られ、縁起もののダルマや火伏せまといの陳列に大わらわ。“松たき場”にはシメなわも張られ準備万端。夜の混雑を避けた近所の主婦たちがつぎつぎと投げ込んだ門松、シメ飾りが山と積まれていた。また、東一番丁通りで“商売繁盛”の守り役として大役を果たした高さ約七□の大鳥居もトラックで午前十時半には“松たき場”に運び込まれた。この鳥居は同日朝早く十二人の作業員が三十分がかりで取りはずした。

今夜の大崎八幡神社には去年の十五万人を上回る二十万人の人出が予想され、寒中の名物“はだか参り”も繰り出して景気づけをする。

なお同市内の“どんと祭”は大崎八幡神社ほか七十九ヶ所の神社（三消防署調べ）で行われる。去年は六十四ヶ所だった。

※下線は筆者による

『河北新報』昭和40年1月14日夕刊5面

昭和49年(1974)の記事には、「正月のフィナーレ どんと祭昔ながらの素朴さ 全国有数の大崎八幡宮」においては「生活の近代化の波のなかで、松納めの行事もしだいに薄れ、昔ほどのにぎわいを呈することがなくなった。東京などでは松飾りが正月過ぎればただのゴミとして回収されているケースが多いそうだ。そのなかにあつて仙台市内では『どんと祭』の名で、昔ながらの素朴な正月行事としての形式を残しながら現在まで脈々と続いている。大崎八幡神社の『どんと祭』は、お祭りの規模や歴史からいって全国にその名を知られ、冬場これといった祭りのない仙台地方では唯一最大の観光行事ともなっていて、宮城県内外からの観光客でにぎわう」と記されている。また、「六時前後からは、『裸参り』の一行が続々と到着するし、点火風景も撮影できるので、ピークより一足早く神社境内で待ち構えるのが賢明といえよう」と、この頃多く見られるようになったアマチュアカメラマンへの写真撮影時におけるアドバイスも記されている〔昭和49年1月10日3面〕。このことから、どんと祭を、仙台を代表する冬の行事として対外的にPRし、また外部の視線を意識して捉え直そうとする動きが窺える。

その後、昭和50年代後半には、各地で途絶えていた小正月行事の復活が試みられるなど、小正月行事を地域おこしに活用しようとする動きが生じ、ふるさと創生事業が実施される頃には、さらにこの動きが活発化していく(註1)。平成2年(1990)には「(中略)小正月の行事は各地で盛んである。いや、地域おこし、ふるさと創生の掛け声に乗って、年ごとに盛んになる気配だ。全国的に名を売った仙台のどんと祭もさることながら…(以下省略)」〔平成2年1月14日1面〕といった記述もみられ、小正月行事としてのどんと祭の資源化の動きが観察される。

神社から団地の公園へー「コミュニティどんと祭」の誕生ー 昭和40年代後半には、大崎八幡宮への参拝者は35万人程度にまで増加している。40年代の後半になると、大崎八幡宮や東照宮といった市内の代表的などんと祭会場は非常に混雑するようになり、参拝に出かけても本殿に近づくことができず、遠くから拍手を打つ人も目立ち始めた〔昭和56年1月15日10面〕。また、代表的な神社への参拝の集中は、交通渋滞も引き起こし、松納めを近所で済ませたいと考える人も増えてきた。こうした理由から、仙台市内におけるどんと祭の会場は、40年代以降急激に増加し、参拝客が分散化する傾向がみられるようになった。しかし、中には近所に神社がないといった新興住宅地もあり、昭和50年代に団地が増加し始めた後は、神社とは関係のない、団地の公園や空き地でどんと祭が行われるようになった。昭和63年(1988)には、仙台市内の134カ所でどんと祭が行われたが、このうち16カ所は公園や空き地で行われている。

特に、昭和50年代には団地ブームによって、仙台市郊外の住宅地で行われるどんと祭が急激に増加しており、昭和39年には64カ所であった開催地は、平成3年頃からは180カ所にまで増加している。こうして、昭和50年代を通じて、どんと祭を実施する新興団地の町内会が増加し、どんと祭は正月送りの神事から住民の親睦・交流の場としての性格を強めてきたと言える〔資料8、9〕。なお、新聞記事においては、町内会主催のどんと祭が「コミュニティどんと祭」と称されている。

町内会による「コミュニティどんと祭」が増加するに連れて、大崎八幡宮への参拝者数は減少してきた。大崎八幡宮への参拝者は昭和56年(1981)頃がそのピークであり、例年24～25万人が参拝していたが、各地でどんと祭が行われるようになった後には、参拝者数がピーク時の3分の2程度まで減少している。

さらに、町内の住民の親睦を図るため企画された町内会主催のどんと祭に、正月送りの神事の意味が逆に持ち込まれるといったことも生じている。昭和58年(1983)に始められた桜ヶ丘7丁目の青

葉台町内会では、どんと祭の会場である青葉台公園内に臨時の神殿を設置し、桜ヶ岡神社の宮司による神事が行われた後、正月飾りの焚き上げが行われている〔昭和62年1月15日12面〕。また、地区の空き地のどんと祭会場に、山形県羽黒町の出羽三山神社から山伏を招き、清めの儀式を行った後、お焚き上げをする町内会も登場している〔資料10〕。

資料8 小規模だけど 御利益同じさ 県内各地でもどんと祭 御神火燃える

十四日夜、仙台市の大崎八幡神社では恒例の「どんと祭」が行われ、大勢の人々を集めたが、同神社以外の県内各地の神社やお寺などでも、御神火に正月飾りを投げ入れ、手を合わせる家族連れの姿が目立った。規模は小さくても無病息災、家内安全を願う気持ちは皆同じ。各神社の境内は夜遅くまでにぎわった。

仙台市内では同夜、大崎八幡神社のほか東照宮、薬師堂、天満宮など百二十七カ所で御神火がたかれた。同市以外では泉市十五カ所、塩釜市五カ所、多賀城市十カ所、岩沼市一カ所、松島町六カ所、利府町四カ所など。県内各地で夕暮れごろから炎が上がった。

神社境内での昔ながらのどんと祭のほか、最近目立って増えてきた町内会単位の“ミニどんと祭”も盛んだった。仙台市米ヶ袋にある「縛地藏尊」では「近いので私でも来られます」とおぼあちゃん。家族連れや子供たちと一緒に、御神火で体を温めていた。

大崎地方のある消防署では「どんと祭」の最近の傾向について「田んぼや空き地に正月飾りを持ち寄って燃やす地区が多くなった」と言う。港のある七ヶ浜では、船だまりの海面に赤々と御神火が映える幻想的な「どんと祭」も見られた。

※下線は筆者による

〔河北新報〕昭和58年1月15日12面

資料9 郊外団地 盛んな火の手 どんと祭 松飾り、近くで焼く 仙台あすは127カ所で予定

あす十四日夜はどんと祭。仙台の名物行事の1つ大崎八幡神社のどんと祭には、今年も二十万人を超える人出が予想される。その一方で、最近郊外の団地などでの“ミニどんと祭”も盛んになり、仙台市消防局への届け出によると、あすは市内百二十七カ所で“火の手”が上がるはず。しかし、この世界にも栄枯盛衰があるようで、古くから地域の中心だった神社の中には、参拝客の減少を嘆いているところも少なくない。

どんと祭は小正月の行事。松飾りを外して燃やした後にはもち花（繭玉）を飾り、五穀豊穰（じょう）を祈る。仙台駅前朝市などでは数日前からもち花が売り出され、小正月の雰囲気盛り上げている。

同市消防局によると、市内で行われるどんと祭の件数そのものは年によって大きな変動はないが、五十年代以降に目立ってきたのが団地の公園や空き地で行われる“ミニどんと祭”。今年十五カ所で計画されている。

その多くは町内会の主催。「神社が遠いので手作り」というわけだ。

同市北東部の鶴ヶ谷二丁目中央町内会（渡辺久雄会長）では、二・五キロほど離れた東照宮からお札をもらってきて町内の公園で松飾りを焼き、町内会役員らがミカンや酒、もちを用意して親睦を深めることにしている。

また、同市卸町二丁目の卸商センターでは、一昨年、センター裏に建てられた神社に、組合役員が集まり、神火をたいて商売繁盛を祈る。典型的な新興どんと祭だ。

これに対し、古くからある神社やお寺のどんと祭は全般に、年々参拝客が減って地盤沈下気味。同市内のある神社では「最近の人は、松飾りは地元の神社で燃やして手ぶらで大崎八幡さんの

ようにぎやかなところへ行ってしまう。お賽銭（さいせん）などの上がりはみな向こうさんというわけで、参拝の少ない神社では仕方なく火をたいているようなもんですよ」とぼやく。

しかし、なかには商売繁盛で悦に入っているところもある。例えば、学問の神様として知られる同市榴岡の天満宮。入試を目前に控えた受験生の参拝が、特にここ七、八年前から多くなったという。

最近では仙台市内や近郊に寺院が“進出”してくる動きが目立っているが、これらのお寺にとってどんと祭は絶好のPRの機会。昨年十月に開山したばかりの同市荒巻の成田山経ヶ峰国分寺（国分伯龍住職）では、本山では十二月に行う「お焚（た）き上げ」の行事を十四日にしてどんと祭に歩調を合わせた。

山伏、僧りょが火の周りで祈祷をする儀式などを行う予定で三、四万人の人出を見込んでいる。

「大崎さんにはいくら頑張ってもかなわないが、こちらは車で来られるメリットがありますからね。成田さんの教えに神仏を問わず受け入れよとありますので、大崎さんへの行き帰りにも寄って下さい」（五十嵐琢元副住職）と宣伝に余念がない。

※下線は筆者による

『河北新報』昭和58年1月13日夕刊9面

資料10 住民主役に 広場で境内で どんと祭 地域に定着 仙台

社寺の境内に、町内会のお祭り広場に、ご神火が上がった。寒空の十四日夜、仙台市内をはじめ県内各地で行われた「どんと祭」。交通安全を、無事合格を、商売繁盛を…、それぞれの、さまざまなお祈りをすくい上げるように、燃え上がる炎。各会場は例年にもまして、夜遅くまでにぎわった。

仙台市内で行われたどんと祭は百二十八カ所（市内三消防署調べ）で、県内トップ。昨年より一カ所増えた。

このうち、同市北東部の自由ヶ丘団地のどんと祭は、地元町内会（五百二十世帯）の主催。「地域のコミュニティーづくりもかねて」と四年前、山形県羽黒町の出羽三山神社から山伏を招いて催したのがきっかけとなり、今年も、同神社山伏の大川治左衛門康隆さん（五九）に来てもらい、地区の空き地で午後五時半から始まった。

白装束の大川さんがホラ貝を合図に会場の清めの儀に入るところには五十人余の住民がしめ縄や松飾り、お札を手に集まった。赤々と燃えるご神火に手をかざしながら、ある主婦（三八）は「娘の高校合格を祈りました」

どんと祭も、七夕同様こうして地域単位で行われるようになってきたのが都市部の傾向。“団地都市”の泉市では、昨年の十五カ所から今年は十九カ所に増えた。

県内では、商売繁盛を願い商人とのゆかりが深いどんと祭の起こりにあやかっ、最近目立ってきたのが商工団体が音頭を取ってのどんと祭。迫町では地元の佐沼商工会青年部が「町の新しい名物にしよう」と始めてから、今年は六回目を数え、裸参りも登場した。

小牛田町でも、町商工会が手掛けたどんと祭が今ではすっかり定着。会場の神社には安産、子授けの神さまがまつられているとあって、「ことしこそは」とご利益を願う婦人の姿も。境内には開運のだるまや、まといを売る露店が立ち並びにぎわった。

このほか、神社を中心に気仙沼市では八カ所で、古川市で六カ所、塩釜市でも五カ所で行われるなど夜のどんと祭を最後に、お正月行事を締めくくった。

※下線は筆者による

『河北新報』昭和59年1月15日12面

裸参りへの企業参加の増加と「伝統裸参り保存会」の結成 どんと祭においては、「御神火が主役で

はあるものの、裸参りがないと様にならない」とも言われ、このことから市民は「松焚き」と「裸参り」を合わせて、「どんと祭」として認識していることが窺える。

昭和50年代前半には、男性と共に裸参りに参加する銀行員の女性の記事が取り上げられ〔昭和52年1月15日8面〕、百貨店の女性社員や看護師など、裸参りへの女性の参加が目立ち始めた。

また、50年代の後半には不景気や増税の影響を受けて、商売繁盛を祈願する企業による参加が増加した他、社員の親睦を深め、企業のPRを目的として裸参りに参加する企業も増え始めた。この時期は、特に大手企業の在仙支社・支店による参加が増加している。

これを受けて、昭和50年代には、古くから裸参りに参加してきた酒造業者らによって掲載された新聞広告に、以下のような苦言が掲載されてもいる。「裸参りは、いま造り酒屋だけのものではなくなり一般に行われるようになった。中には酒を飲んでかけ声を上げたり、太鼓やホラ貝ではやして走るなどの一行も見かけるが、故事にのっとり、あくまでも整然と礼儀正しく、厳粛に行うのが本来の姿であろう」〔昭和57年1月13日5面〕。

特に、企業の参加が増加した昭和50年代には、参拝者が体に色を塗り、酔って大声を上げるような行動が目立ち始め、大崎八幡宮では昭和60年（1985）以降、参拝に当たっての注意事項を記したパンフレットやビデオを作成し、裸参りの参加者に配布している。

そうした中、平成元年には、天皇崩御に伴い、裸参りを自粛する団体や、派手な幟や色物の着用を控える団体も出たため、「伝統的な“みそぎ”の神事が復活したよう」〔資料11〕だという声が上がった。

資料11 時節柄裸参りはみそぎ風 大崎八幡「どんと祭」

天皇ご逝去による自粛ムードで、裸参りはむしろ厳かな雰囲気にも。仙台市・大崎八幡神社で十四日夜、行われた「どんと祭」。ハイライトの裸参りは昨年の半分、約二千二百人の参加にとどまったが、参加企業の自社PRは控えめで、さらし、短パン姿の白い裸参りの行列が続き、伝統的な“みそぎ”の神事が復活したよう。冬の夜空を焦がすご神火の前は文字通り新時代の「平和」を祈る人の波であふれた。

神社境内に積まれた松飾りや、しめ縄の山にご神火が入ったのは午後四時過ぎ。ちょうど雪が舞い、気温も二度台と、冬の祭りには申し分のない舞台が整った。

続々と裸参りの男女の列が参道を上ってくる。もとは杜氏（とうじ）が新酒の醸造祈願のための“みそぎ”として行われていたが、最近では企業の参加が増え、ちょっぴり宣伝色が。それが今年は参加団体が約百十団体と昨年より八十団体も減り、企業名や商品名ののぼりやカラフルな装束もあまり目立たなかった。

「今年も参加しました。が、やはり自粛です。のぼりも色ものの着用はやめました」と、ある生命保険会社。「大行天皇のご逝去を悼む」とののぼりを掲げた団体もあった。

ある年配の参拝者は「昨年までと比べると寂しい気もするが“本当にお参りしている”って感じでいいね」と、“簡素”な裸参りの感想を話していた。

裸参りは自粛でも、参道のわきは露店が軒を連ね、いつものにぎやかな祭り風景。夜が更けるにつれ、赤々と燃え盛る“冬の火祭り”は家内安全、無病息災、商売繁盛を祈る人、人、人で夜遅くまでにぎわった。

『河北新報』平成元年1月15日27面

また、バブル景気の頃には、企業によるPRの活動が活発化し、裸参りが企業のPRイベントとなっているという批判も再び聞かれるようになった〔資料12〕。

資料12 歩くCM 仙台・「どんと祭」裸参り 縫いぐるみや太鼓 加速する企業PR

伝統の小正月行事で、盛んに自社PR。仙台市の大崎八幡神社で十四日、行われた“どんと祭”。呼び物の裸参りには昨年を上回る百七十団体、七千人が参加した。さらし、短パンの白装束に交じって、今年は縫いぐるみ姿の特別宣伝部隊もお目見えし、企業のPR合戦は年々、加速する一方。赤々と燃え盛る冬の火祭りは、家内安全、商売繁盛を祈る人たちが夜遅くまでにぎわった。

朝早くから持ち込まれた松飾りやしめ縄の山にご神火が入れられたのは午後四時五十分。炎が高々と上がったのを合図に、裸参りの男女が鈴を打ち鳴らしながら、続々と参道を上ってくると、祭り気分は一気に盛り上がった。

裸参りはもともと、寒の仕込みに入る杜氏（とうじ）たちがお参りしたのに由来するが、最近では大勢の参拝客が集まる一大イベントとあって、企業単位の参加が増え、今や格好の宣伝舞台に（以下省略）。

※下線は筆者による
『河北新報』平成3年1月15日23面

裸参りへの企業参加が増えることについては、仙台市の活性化につながるという見方が強い一方、古くからのしきたりを重視し、裸参りは企業の宣伝の場ではないと戒める声も上がっている。「杜氏が新酒の醸造祈願のための禊ぎとして行ってきた」という本来の目的を再確認しようとする動きも生じており、平成18年（2006）には酒造団体の関係者によって「伝統裸参り保存会」も結成されている〔資料13〕。

資料13 仙台・大崎八幡宮「どんと祭」／正統裸参り「次代へ」市民有志が保存会

仙台の誇り継承、一肌脱ぐ／移転の天賞酒造、2006年も不参加

1月14日夜、仙台市青葉区の大崎八幡宮で行われる小正月の伝統行事「どんと祭」で、裸参りの伝統的な様式を守ろうと、市民有志が「仙臺（せんだい）伝統裸参り保存会」を結成した。正統な裸参りをつかさどってきた地元の酒蔵「天賞酒造」（現まるや天賞）が移転したため、伝統の様式や装束が失われると危ぶまれており、会は継承に力を注ぐ。

呼び掛け人は、青葉区一番町で飲食店を営む谷徳行さん（54）。大崎八幡宮に新酒を奉納してきた天賞酒造が昨春、宮城県川崎町に移転し、今年も昨年に続き参加しないため、会をつくって裸参りの伝承に乗りだした。裸参りで毎年顔なじみの20～50代の男性約30人がはせ参じる。

大崎八幡宮によると、裸参りは江戸時代、厳冬期に仕込みに入る杜氏（とうじ）が、醸造の安全や吟醸を祈って参拝したのが始まりだという。史料でも江戸末期の1849（嘉永2）年の「仙台年中行事大意」で確認されている。

天賞の裸参りは（1）水をかぶって体を清める（2）ゆっくりと歩み、行きも帰りも私語を慎むために「含み紙」をくわえ、列から離れない（3）鈴をそろって鳴らす（4）列の順番にしきたりがあり、動かさない—など、伝統をしっかり守ってきた。

20年ほど前から毎年、天賞の裸参りに参加してきた谷さんは「酒造りに根差し、脈々と受け継がれてきた誇りがある地元の文化を絶やしたくない。次世代に伝えていくため、今はわれわれが頑張る」と話す。

今回は天賞の社主や杜氏がいらないため、奉納酒はない。ちょうちんや鈴、足袋、草履などは天賞から借りて裸参りに臨む。谷さんは「本当にやりたい人だけが集まった。伝統の様式にできるだけ近づけていく」と意気込む。大崎八幡宮も「様式を絶やさずに残すことは非常に意義がある」と歓迎している。

『河北新報』平成18年1月5日

さらに、「正統な」裸参りを静かに続けたいと、混雑した大崎八幡宮から周辺の神社へ参拝場所を変更した酒造会社も出てきている〔資料14〕。

資料14 河北抄

仙台・大崎八幡神社のどんと祭を盛り上げる「裸参り」。神社の説明によると二百五十年ほど前、新酒の仕込みを控えた城下の杜氏（とうじ）たちが、吟醸祈願したのが始まりという。

さらに股引（ももひき）、腰にしめ縄の“正装”も、身を清めた杜氏の姿を映している。右手に鐘、左手にはちょうちん。口に「含み紙」をして沈黙を守りながら、肅々のご神火を目指す。

だが、時代とともにそのスタイルも崩れていく。昨年は、裸参りにぬいぐるみが登場した。笛や太鼓、会社名を大書したのほりも珍しくない。20万人もが集まる祭りは、企業PRの絶好の場というわけだ。

伝統派の目には、そんな騒ぎが「墮落」と映る。とうとう今年は、しにせの酒造会社が「別の神社に参拝する」と宣言した。この思い切ったショック療法、今夜のどんと祭に効き目が表れるかどうか。

大崎八幡神社も最近、裸参りの乱れを正す意味を込めて、どんと祭をビデオ化した。受け継がれてきた祭りの「心」を大切に、とビデオは訴えている。あからさまな商魂が、厳かな神事にそぐわないのは確かだ。

※下線は筆者による

『河北新報』平成4年1月14日

現在も、景気の拡大や低迷に合わせて、企業による裸参りは増減しており、直来や衣装の代金がかさむことから、ここ数年は、参拝者の人数を減らす企業も増えている（註2）。

また、平成4年（1992）には仙台市による成人裸参り実行委員会が組織され、新成人による裸参りが実施されるなど、裸参りの目的も参加団体も多様化している。

どんと祭の拡大と変容 昭和30年代以降のどんと祭は、大崎八幡宮を中心としながらも、周辺の寺社、あるいは町内の公園などへと会場数を拡大し、またその性質も正月送りの神事から、観光資源化、企業や町内会の親睦・交流といった目的へと拡散してきた。さらに、平成9年（1997）頃からは、正月飾りを燃やすことによるダイオキシンの発生など、環境問題が盛んに取り沙汰されるようになったことで、正月飾りの素材の分別が徹底されてきた。

仙台市内のどんと祭は、東北の中核都市としての仙台において、不特定多数の都市住民を巻き込みながら拡大し続けてきた。現在は、大崎八幡宮へお守り代と昇殿料の千円を支払えば、誰でも気軽に裸参りに参加することができる。また、裸参りの衣装も市内の衣料品店において、一揃いで販売されている〔資料15〕。

どんと祭が、「仙台七夕まつり」と同様に仙台市を代表する行事として認識され、定着してきたことは、多様な価値観を許容する緩やかさによるものであり、都市型の祭礼としてのどんと祭の特質がここに窺える。

資料15 レジャー最前線／大崎八幡宮どんと祭（仙台市青葉区）／無病息災を炎に願う

14日夜、東北各地の神社で行われる伝統行事「どんと祭」。仙台市青葉区の大崎八幡宮（小野目

博昭宮司)の祭りは、その中でも最大規模を誇り、7万人以上の人出でにぎわう。

<寒さ耐え裸参り>

どんと祭は、藩政時代に始まった正月送りの行事。1月14日夜から翌15日未明にかけて、正月の松飾りを燃やす炎で暖を取ると、その1年は病難を免れるとされる。

大崎八幡宮の小岩裕一さんは「どんと祭の魅力と言えば裸参りだ」と話す。

裸で腹にさらし、腰にしめ縄を巻いた老若男女が、カネを鳴らして市内を練り歩く姿は仙台の冬の風物詩となっている。

寒さに耐えて八幡宮へ到着、本殿でおはらいを受けた後、御神火を一周するのが習わし。裸参りを3年続けると一生風邪を引かないとも言われる。

企業や団体の参加がほとんどだが、もちろん個人参加もできる。大崎八幡宮によると、裸参りは事前に申し込みが必要で、お守り代と昇殿料として1000円が掛かるという。

<白装束できめる>

裸参りは白装束が基本スタイル。創業100周年のユニホーム販売「ダイコクヤ」(青葉区、青山昭司社長)では、個人参加者向けに用品一式を販売していて、5000 - 1万2000円で全部がそろろう。「身支度のアドバイスもしている。気軽に申し出てほしい」と青山太郎専務は話す。

もちろん、迫力ある裸参りを身近で見るとも楽しみ方。八幡宮への到着ラッシュは午後4 - 6時で、「見物なら国道48号沿いが好位置」(小岩さん)という。

境内に立ち並ぶ露店もどんと祭の魅力。毎年、180店ほどが軒を連ね、夜祭りの華やかさを演出する。縁起物の人気は高く、「どんと祭限定」ともなれば、売り切れるのが早い。

<巨大おこし人気>

老舗和菓子店「中鉢屋」(宮城野区、中鉢喜隆社長)の「どんと大ねじり」はその1つ。らせん状にねじったおこしで通常は1個5センチ程度だが、この日だけは巨大おこしを販売する。

価格は大きさに応じて4種類。1.5メートルほどもある大ねじりは1個2万円、1メートル程度なら1万円。ほかに1000円(約30センチ)、500円(約20センチ)の手ごろな大ねじりもあるという。

人生山あり谷ありを表す大ねじりを食べることで、道が開けるとか。「お客さまの今年一年の健康を願い、1つ1つ丹精込めて作る」と中鉢社長は意気込んでいる。

<裸参り>

酒の仕込みに入る酒杜氏(とうじ)が酒造安全、吟醸祈願のため参拝したのが始まり。白装束に身を包み、左手にちょうちん、右手にはカネを持ち、口に含み紙をくわえて、黙々と大崎八幡宮の御神火を目指して市内を練り歩く。

※下線は筆者による
『河北新報』平成16年1月9日

註

1. 昭和56年(1981)には丸森町において、小正月に再び年取りをして厄落としをする「年重ね」という厄落としの行事が復活している〔昭和56年1月15日10面〕。
2. 一方で、裸参りをしなかった年に凶作になったことから、裸参りを復活させた団体もいる。

第3節 おわりに～ドンドの火とどんと祭～

本調査では、いくつかの新資料の発見や、聞き取りによる新しい知見の取得といった成果が見られた。その中から、従来定説とされてきたどんと祭の名称の由来に関する新たな問題点を指摘して、本調査のまとめに代えたい。

三原良吉と天江富弥の沈黙について 平成12年3月に宮城県教育委員会が発行した「宮城県文化財調査報告書第82集 宮城県の祭り・行事」の解説文『宮城県の行事』の中で、三崎一夫は「この行事の名称について、かつて三原良吉・天江富弥の両氏がある席上で、以前民間では「八幡堂のマツキ（松焚き）」とよんでいたが、他地方の同様の行事がトンドといわれていることから、大正（ママ）時代に仙台のそれもトンドであると報道され、トンドでは仙台人の発音になじまずドントとされて定着したのであると語られたが、仙台市のこの分野に詳しい両氏が言葉を一つにして語られたので、ほぼ違いはないであろう。」と記述している。

上記の内容について平成17年秋に直接、三崎一夫に質す機会を得た。その答えは「昭和50年前後に天江富弥が経営する仙台の「炉ばた」で、三原良吉が年中行事についての講演をし、そのあとで三原と天江と三崎が3人で話し合った。その際に三原と天江がどんと祭について、本来は八幡堂の松焚きと言い、ドントサイとは言わなかったと口を揃えて語った。三原良吉が自分の著書でどんと祭について書かないのは、三原が「ドントサイ」という名称に不快感を持っていたからではないか。そのため、昭和15年に『年中行事』を出版して、一矢報いようとしたのではないか。」ということであった。三崎一夫のこの見解を検証してみることにしたい。

まず関係者のプロフィールであるが、三原良吉は明治30年仙台市生まれ。仙台一中、早稲田大学英文科卒業。昭和3年に河北新報社に入社。論説委員、出版局長、監査役等を歴任し、昭和27年に定年で退社。在職中から郷土史研究者として知られ、仙台郷土研究会委員、宮城県文化財専門委員、仙台市文化財保護委員等を歴任、郷土史研究の功績で昭和36年度河北文化賞を受賞、昭和44年に勲五等瑞宝章受章。昭和57年に85歳で死去。天江富弥は明治32年、大崎八幡宮の氏子総代でお神酒酒屋の「天賞酒造」蔵元の7代天江勘兵衛の三男として誕生。大正10年に日本最初の童謡専門誌「おてんとさん」を創刊。仙台市内で居酒屋「炉ばた」を経営する一方で、郷土史家として知られ、児童文学の育成と郷土史研究の功績で昭和56年度河北文化賞を受賞。昭和59年に85歳で死去。両名とも仙台における郷土史研究の泰斗であった。

三原・天江の両名は、仙台市内の民俗行事や故事来歴などについて多くの著書や論考を書いている。しかしその中でどんと祭についてふれたものは意外なほどに少ない。三原は前述したように、昭和15年7月に仙臺昔話会から「仙臺年中行事繪巻 附仙臺年中行事大意」を刊行し、解説文を書いている。このうち「仙臺年中行事繪巻」の『正月習俗の図』の「裸まうて」の解説では「十四日の夜行はる、大崎八幡の松焚神事の裸参り」と記述し、どんと祭という名称を用いていない。また同書に掲載された「仙臺年中行事大意」の「十五日。大崎八幡宮。十四日夜より参詣群集す。この日、門松を八幡の社内にて焚失るなり。」の記述の見出しも「松焚き」であり、どんと祭の名称は一切使用していない。さらに、三原良吉の著作で昭和27年3月に仙臺市役所が発行した「仙臺市史6別編4」に所収された、当時唯一の民俗誌であった『仙臺民俗誌』の「歳時」の「正月」の項目で、三原はどんと祭はおろか大崎八幡宮の松焚きについてさえも一言半句も触れていないのである。これは極めて意図的な排除と考えざるを得ない。

一方天江富弥もどんと祭についての記述をほとんど残していない。典型的な例としては、昭和35年3月に宮城県史刊行会から発行された「宮城県史20（民俗Ⅱ）」所収の『童戯・童詞』の『年中行事』

の中で、天江富弥は小正月行事として「団子木、生り木責め、海鼠曳き、ちゃせご、鳥追い、はらめはらめ」を列記しているが、どんと祭や松焚き等についての記述はない。また富弥の実家であった青葉区八幡町の天賞酒造には、昭和15年と16年の天賞の蔵人の裸参りを描いた絵巻物が残されている。天江富弥の友人で、大正から昭和にかけて活躍した小説家、随筆家の平山蘆江（1882～1953）が富弥の誘いで天江家を訪れ、天賞の裸参りを見物してその様子を描いたものである。昭和15年の絵巻の中で平山蘆江は「仙台に松焚祭を見る」と記し、16年には「大崎八幡に賽す」としている。どんと祭という名称は用いていないが、注目されるのは15年の絵巻で「社殿のどんどの火焰中にごぼうじめを投げておまわりは終る也」と記述していることである。平山蘆江は当然のことながら友人の天江富弥からどんと祭について話を聞いているはずなので、祭の名称としては「どんと祭」を使わず「松焚祭」としたと考えられる。しかしその一方で「どんど」という火の燃え上がる様子の形容は一般化しており、大崎八幡宮のご神火への形容詞もそのように呼ばれていたことが考えられるのである。

さて、昭和15年2月に仙臺観光協会が発行した「仙臺の年中行事」に所収された『松焚（どんと）祭』の解説では、「ドント祭と云ふ名称は明治以後上方風に付したジャーナリズムの過誤であるらしく、仙台では昔からマツタキ祭と云つて居る。」と記述されている。この解説の筆者名は明記されていないが、言わんとすることは最近の研究の佐藤雅也や中富洋の所論と同じく、どんと祭の名称の新聞起源説である。そこで新聞起源説の根拠とされ第1章で全文を引用した明治39年と41年の河北新報の記事（資料集107・113）を改めて検証してみる。

河北新報の明治39年1月14日の記事と明治41年1月14日の記事は、ともに大崎八幡のご神体が九州の宇佐八幡の分身であるから、大崎八幡の松焚祭も九州の習慣が「仙台に紛れ込んで」きたものであろうとし、さらに「九州地方では一般に正月の松を神社の境内で焼くか是をドンドと称えて居る」として「松焚」に「ドンド」の呼称を充てている。この二つの記事は内容も表現もほぼ同じであることから、双方とも明治41年の署名にある「白村」なる人物の執筆記事であろうと思われる。「白村」は、明治41年1月の河北新報紙上ではいくつかの署名入りの「コラム」的な記事を書いている。1月1日の「猿茶屋」、1月5日の「新年竈男考」などで、5日の記事には「小山田白村」との署名がある。記事は松焚祭についてと同様の事物の起源についての解説というより蓋蓄に近い内容である。この「小山田白村」なる人物については、実名ではなく雅号と思われるが、河北新報社には当時の雅号と実名の対照リストが残っておらず、現時点では記事執筆者は不明である。しかし佐藤雅也や中富洋の研究では、明治39年以前は新聞記事に「ドンド」の表現はなく、白村の記事をきっかけにしてどんと祭の名称が一人歩きしていったと、推論されているのである。

この「白村」の実名を98年後の今は知ることが出来ないにしても、記事から33年後の段階では知っていた可能性のある人物がいる。昭和15年の「仙臺の年中行事」の解説文の執筆者である。解説者の氏名は本には明記されていないが、推測してみる。「仙臺の年中行事」には「松焚祭」の他に「七夕祭」や「盆火」などの付録解説があり、その中の「盆火」の解説は、起源を政宗公が五郎八姫のために焚かせたこと、寛永の始め頃に臣下に書状を送って見物に誘ったこと、若侍が騎乗して盆火の間を駆け巡ったこと、そして庶民が盆の三日間の慰安を楽しんだこと、などが記述されている。ところがこの記述と内容はおろか記載順や引用した地口「要らぬ彼岸が七日あり、可惜お盆はただ三日」までも同じ記事が、昭和28年8月5日に仙台市と仙台観光協会が発行した「仙台の七夕祭と盆祭」に掲載されている。著者は明記されており三原良吉である。昭和28年の三原良吉は57歳、郷土史の大家として著名な存在であり、その彼が昭和15年発行の、しかも同じ仙台観光協会が出した「仙臺の年中行事」の解説文を丸々盗用するとは考えられない。つまり「仙臺の年中行事」の解説文の筆者も三原良吉なのであり、盗用ではなく昔の自分の文章の焼き直しなのである。しかし「仙臺の年中行事」を匿名にしたのには理由があったのではないだろうか。

昭和15年当時、三原良吉は44歳、郷土史家として知られていたとはいえ、河北新報社に入社して12年目の社員である。その後輩の新聞記者が大先輩である「白村」氏に対して「ジャーナリズムの過誤」とまで言い切って「どんと祭と云ふ名称」を批判したのである。匿名にした理由がここにあったが、さらに三原は批判の手を緩めなかった。同昭和15年7月には「仙臺年中行事繪巻 附仙臺年中行事大意」を刊行し、あの祭は藩政時代末期に遡る「松焚き」であって「どんと祭」ではないことを、史料を用いて実証したのではないだろうか。

その三原良吉と同年輩であり、同じく郷土史家として知られ、さらに大崎八幡宮のお神酒酒屋、氏子総代の家に生まれ育った天江富弥が、年々昔の姿を変えながら盛大になっていき、新聞記者が勝手につけたどんと祭なる名称が普遍化していくことに、危機感を抱いていたことは想像に難くない。三崎一夫の言うように、彼らが「ドントサイ」という名称に不快感を持ち、それによってどんと祭の研究が停滞したとすれば、それは大いに不幸なことであった。

ドンドの火とどんと祭 最近の研究のうち佐藤雅也は「宮城県文化財調査報告書第82集 宮城県の祭り・行事」の中の『大崎八幡宮のどんと祭』の項目で「明治三十八（一九〇五）年一月十四日「河北新報」では、「大崎八幡神社祭典」とある。ここまでは、「どんと祭」という呼称はどこにも記載されていない。」としている。また中富洋も平成17年9月に東北学院大学民俗学OB会が発行した「東北民俗学研究」第8号所収の『大崎八幡宮の松焚祭の祭礼的な特質について』の中で「明治十一年から三十八年までは、「どんと」の呼称がみられない」と記述している。それに対して今回の調査では新たに明治35年の新聞記事に「どんど」の呼称が掲載されていたことが見つかった。

●わか歳 松の内も瞬く間に過ぎ去りて昨日は若歳を迎ひたるか昨夜より今朝へかけては八幡町大崎八幡宮の例祭あり参詣人は例の如く頗る多く門松を納めんとて市中より賑かなる囃しにて押出せるもあれば薄衣参りをなす信神者も少なからず境内はどんど火の焰熾んに暗みを照して鈴の音かしましかりき

「河北新報」明治35年（1902）1月15日第5面

この記事によって、「どんと祭」の呼称が人為的に作られたものであったとしても、「どんど」という炎に対する形容詞は以前からあったのではないかという疑問を呈することは出来る。天江富弥について述べた際の、平山蘆江が昭和15年の絵巻の中で記述した「社殿のどんどの火焰」は、平山が神戸生まれ長崎育ちであったとしても、大崎八幡宮で人々が「どんど」と言っていたことを記したものだと思えることが出来る。なによりも、いかに影響力の大きなジャーナリズム、新聞といえども、全く基盤のない言葉を一般に普及させることは極めて困難である。どんと祭は新聞記者による人為的命名であっても、その背景には「どんど」という人口に膾炙した言葉が既にあったと解釈すべきではないかとも考えられるのである。それを補強する資料が本報告書の第1章第4節の「どんと祭の諸相」と末尾の資料集で報告されている。仙臺叢書刊行会が発行した「仙臺叢書第四巻」に収録されている『日人句集』に、「どんと焼く里はしらみて鴨帰る」の句が掲載されているのである（資料集04）。遠藤日人は生年が宝暦8年（1758）、没年が天保7年（1836）の文化文政期の仙台藩を代表する俳人である。句の内容は明らかに夜通し焚かれる「どんと焼き」を詠んだものである。また日人と同時代の俳人乙二の句にも「どんど焚」があり（資料5）、二人の生年中に「どんと」を「焼く」あるいは「どんど焚」ということばが存在し、人々に知られていたことを示している。しかし現段階ではこの句は孤立した事例であり、これのみを以ってどんと祭の語源とするには無理がある。

一方、河北新報が松焚祭に「トント」や「ドント」の読みを充てだす明治30年代に、松焚きを「ど

んど」と呼ぶ例が俳句の世界に先行して登場する。いずれも河北新報紙上の俳句の欄であるが、明治32年1月10日の紙面には「弧月」の句で「北野にも見ゆるとんとの煙かな」、明治36年1月1日の紙面で「櫻香」の「海暮て丘に小きどんと哉」、明治36年1月23日の紙面には「麻琴」の「飾なげて焰高まるどんとかな」、「花衣」の「左義長の残る煙りや朝の雨」、「櫻香」の「霜の千木どんどの明り映りけり」、「牛南」の「左義長や橙焦げて残りけり」「左義長の土に地を這う煙かな」の句が掲載されている（資料集76・87・96）。前述した小山田白村の実名は不明だが、白村は俳号かも知れず、一連の俳句の世界での一般名詞を大崎八幡宮の松焚祭の記事に持ち込んだとも考えられるのではなかろうか。つまり、本報告書第1章第4節で明らかにされた史料からは、「どんと祭」の語源や呼称の普及が、「ジャーナリズムの過誤」というよりは、俳句の世界のことが一般化して行く、それを新聞が後押ししたとの構図が読みとれるのである。

今回の調査では、これまで大崎八幡宮に孤立した行事と見なされていた「松焚き」が、宮城県内にかなり古くから広く分布しており、それらとの関連性が無視できないこと。「裸参り」の形態や衣装が南部杜氏の故郷である岩手県の裸参りに類似する一方で、その背景には仙台地方に古くから伝わる「暁参り」や「寒参り」との関連性が覗え、さらに酒造りの歳人の中には小正月でない大晦日に裸参りしていた事例があったこと、などが新たな知見として得られた。また「どんと祭」の語源が人為的命名であったとしても、それが人々に受け入れられ普及する背景として「ドンド」という一般名称あるいは一般的形容詞が既に存在していた可能性が見えてきたことが指摘される。そして何よりも、どんと祭や裸参りが急速に普及・拡大・拡散して行く背景に、「大崎八幡宮のどんと祭」が持っていた都市型のイベント的性格が近代以降の時代性に適い、また行事や裸参りの画一化、マニュアル化がそれに拍車をかけたことがうかがえるのである。その意味で大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）は、特定の神社の伝統ある祭事としてよりも、この地で広く営まれていた小正月の民間習俗が、「都市」と「近代」という社会的・歴史的な背景のもとで、拡大再生産されている新たな都市の習俗であり、貴重な民俗文化財であると言えるのである。

【資料集】 大崎八幡宮の松焚祭と裸参り

本資料集は、大崎八幡宮の松焚祭・裸参りとその周辺事情を伝える歴史的諸資料を集成し年代順に掲載する。検索集作成作業の対象年代は藩政時代から昭和30年（1955）までとし、対象資料は仙台域に言及する近世の地誌紀行類と明治以降の仙台を拠点とする地方新聞記事などである。

新聞検索は仙台を拠点に発刊された地方新聞のうち、明治時代は「仙臺日日新聞」「陸羽日日新聞」「奥羽日日新聞」「東北新聞」「東北日報」「仙臺新聞」「仙臺報知」「河北新報」を、大正時代以降は「河北新報」を対象とした。資料の現存する明治11年（1878）から昭和30年までの全期間年ごとに、大崎八幡宮の松焚祭が執行されている1月14日を含む1月13日から16日まで4日間の仙台版全面を、加えて明治30年までは12月から2月の3ヶ月間の仙台版全面を検索している。大崎八幡宮以外への裸参りと旧暦での松焚祭の状況を確認するためである。

資料の検索は、主として宮城県図書館所蔵の図書・新聞によって行った。

◆資料1

安永～文化年間（1772～1818）白石欄兮著述岡崎良輔書写『仙臺始元』（斎藤報恩会蔵・未刊）
（略）

大崎八幡神賽 八幡祭式の事は八月の部にあり社宮の眞圖を二月に正月十四日の夜男女老幼群をなして大崎八幡に夜賽す暁天に至るまで諸人一隊一隊行還盡る事なし
（略）

◆資料2

安永～文化年間（1772～1818）白石欄兮著述岡崎良輔書写『仙臺始元』（斎藤報恩会蔵・未刊）
（略）

木下薬師の通夜 木下祭祀の事は三月にあり堂塔の眞圖は爰に出す正月七日の夜諸人群をなして木下薬師に賽す是を七日堂と云通夜する者多し夜籠りといふ寒候薄衣を着て詣る者ある裸参りといふ
（略）

◆資料3

文化年間（1804～1818）大崎八幡宮神主沼田豊前正『大崎八幡宮年中行事』（大崎八幡宮蔵・未刊）
（略）

一、惣禰宜中松明まで 御宮尔据詰居來申
候先十四日暮前相圖太鞆打候也夫より出仕勤行
常之通〈身曾貴太祓十二度中臣祓壹度〉三種太祓三十六度祈
念撰掌拍手等常之通神燈十二燈江献之油等ハ
當番人より世話いたし候相調候而十六日敬錢勘
定之節入料引 當候當方之禰宜江相渡ス十四
日夜當番所并御拜ニ而相用ひ申候炭薪等迄
も同日當番人世話被右調代右同断扱右十四日御
神事自分御神事ニ而寛延年中時分より歟祖父出
雲守代より

段々参詣之者大勢ニ見え候ニ付其居當番人神
燈神酒等相献様ニ取斗候処一年殊ニ参詣多夫
より惣禰宜詰居候処談候ハ、世間ニ而ハ御神事
とつたへ大勢参詣在之様ニ相成候由祠官沼田
若狭儀豊前正伯母聳ニ有之処享和二年七
十三歳ニ相成候処先年之次第段々覚居相咄申
候也
(略)

◆資料4

文化・文政年間（1804～1830）日人遠藤定矩『日人句集』

春の部

元日のめでたき日にも老に晁

元日も天氣二日も天氣哉

(略)

七種やとく髪結て長押ふく

庵の粥屑菜貫うて濟しけり

新参は夜も騒ぐや芹薺

どんと焼く里はしらみて鴨歸る

萬歳に梅持替て行違ふ

萬歳の休んで行くやせまい内

(略)

◆資料5

文政六年（1823）以前 松窓乙二『乙二句集』

睦月十五日赤湯の里の山に添うて行く事あり鹿の飲流れも氷のくさひひまなく打てさらに春とは
おもはれず

大歩は月日をねかへ谷の梅

萬歳か留生の妻子や飯時分

あの畑はしつけぬ麥かどんど焚

遅き日に着たら倦うぞかくれ簑

酒折は十日も遅し植る菊

◆資料6

天保五年（1834）以前 燕石齋薄墨『仙府年中往來』（仙台市博物館蔵）

(略)

十四日ハ松を曳きて米玉の花を咲せ赦宣子ハ襟に□を懸晴着を飾り門に立て祝を得く夕べにハ餅打
海鼠曳とて童共打群て是を引く同日夜宮より十五日迄大崎八幡宮参詣群集す

(略)

◆資料7

嘉永二年（1849）二世十遍舎一九『仙臺年中行事大意』

(略)

○十五日大崎八幡宮十四日夜より参詣群集すこの日門松を八幡の社内にて焚失るなり

(略)

◆資料 8

嘉永三年(1850)頃『仙臺年中行事絵巻』 ※「正月習俗之圖」「裸まうて」(図1参照)

◆資料 9

明治十一年(1878)一月八日「仙臺日日新聞」

○昨日は朝観音に夕薬師とか申して午前五六時比から元寺小路の観世音へは参詣人がおし掛けへし掛け釣鐘をゴーンゴーンと打散らし近年に無き群集でありました中にも澤山に寄り来り目覺しかりしは満境内作り花の賣店にて恰も春時花の開きたる心地ぞしたりける夕薬師にいたりても随分賑はへたる様子

◆資料 10

明治十一年(1878)一月十五日「仙臺日日新聞」

○昨夜は大崎八幡の祭禮なり従前は若歳と稱する日なれば市中の賑はへなかなかにてお負けに厄拂なとまで罷出て法螺吹き立て、ポーホンポーホンポーホンポーホンポーホン

◆資料 11

明治十一年(1878)一月二十三日「仙臺日日新聞」

○チャンチャンと打鳴らす半鐘に驚かされソレ火事だ火事だと巡查消防組は更なり爺も媼も若いも幼きも猫も杓子も飛出し何んでも火元は住吉だと上を下へと騒ぎ立て駆け付き見るとコハ如何に火事ではなうて例の頑的連が五幣を擔出し門松やら七五三繩やらを焼捨居たのでありますが一時満港の大騒動をなしました今頃は廳下邊では斯んな事はありますまいと石巻の伊志嘉波さんから申して來たるが廳下にもまだまだ

◆資料 12

明治十一年(1878)二月四日「仙臺日日新聞」

○鯛の頭も信心からとはよく云われたり廳下北五十人町大柳重吉妻六十近の婆アさんは松尾明神や中山不動を殊の外に信心して夜な夜なの参詣其邊で誰知らぬ者もなかりしか此程の事なりしとか如何なる御託宣やありけん夜十一時とも覺ふしき頃急に水を被り薄き一重に着更へつゝ中山さしてぞ出たりける夫れよりも婆アさんは急くとすれと老の足中山近く來たりし頃は木草も寝むる牛滿なるへし一人淋しき山路をも凝り固まりし老の一念一心腐亂に脳膜散亂婆ア散亂ダと唱ふる向うにコント啼いたる狐の聲あれは慥に松尾明神我を守らせ給ひしかあら有るかたや辱なやと其の壘土に額を摺り付け凡そ二時間計り立もえやらて居たりしとは自分て断せし事ならずは誰かは見たる人の有るべき是は疑かはしと思ひなからもさる人より書きおこせるまゝ

◆資料 13

明治十二年(1879)一月二十九日「仙臺日日新聞」

○昨日は舊曆七日に當を以て當地にては朝観音に夕薬師の唱へ朝は小闇き中より元寺小路萬願寺世観世音又夕邊には木の下薬師堂へ参詣するがならはしにて昨日も相應の参詣がありしよし

◆資料 14

明治十二年（1879）二月五日「仙臺日日新聞」

○一昨夜は寒明けなりしかば例の鬼やらひの聲家ゝに騒かしく舊弊家の無鐵炮ズドンズドンの音には漫録記者の大筒も閉口するばかりでありましたナゼあんなに鐵炮を打ったのだらう

○昨日は舊曆正月十四日なれば若年の餅を搗んとて東三番丁三浦源九郎方で餅米をふかし其中何かの仕度して居たが釜の火燃さかて板の間に焼付既に大事とならんとせしが家内は餅所でない大騒ぎ漸ゝの事で消したは十二時頃

○又昨夜は八幡堂の大崎八幡神社の祭典にて終夜の參詣事の外賑はへました

◆資料15

明治十三年二月二十五日「仙臺日日新聞」

○一昨夜は舊正月の十四日に當るゆゑ舊弊連が陸續ゝゝと大崎八幡へ參詣に出掛けたので其道筋は立錐と云ふ程でもないか随分賑やかでありました

◆資料 16

明治十三年二月二十六日「仙臺日日新聞」

○一昨ゝ夜は舊正月十四日なれば大崎八幡へ參詣せんと一盃機嫌で出掛けた序に稲荷怠冥^{いなりのたいめいじん}尽へも詣てんと押し掛けたゆゑ此頃ピン空々て居た常盤町か大賑ひ其處でも彼處でもお客様たよ一の聲が喧しく中にも舞鶴樓では廓内一番に客か多く上下とも皆詰切て仕舞後れて這入った客は居所がなく勝手の隅まで入込んで喰たり喰せたりした想たか年中正月の十四日かあれば宜いとて亭主は轉手乎舞て嬉しかり結構結構の聲か曉方まで絶なかつたと云ふ事でありましたと

◆資料 17

明治十三年二月二十六日「仙臺日日新聞」

○難た此野郎人の居るをも憚らす灰を蹴立アかつて是れ見やアかれ巳の体か此通りた間抜けめ鈍痴氣めと云ふより互ひに喧嘩を始め遂ひに警察の五卮介になつた野蠻れん咄しは立町二丁目の士族白石弘太郎「十七」同町の大石松之助（十八）の兩人か去る廿三日の夜八幡へ參詣に出掛け鳥居脇にて諸所より持ち來りし門松やメ繩など燃き居る人ゝに打交り居りしか弘太郎は過つて焚火の中に杖を落し拾ひ取らんとせしにパツト火花か散つて傍に居し北材木町鋸や中野源助か弟子鈴木新吉〔十七〕玉木留吉（廿）の兩人に灰か掛りしとて怒鳴出し双方共威張り立て既に掴みかゝらん勢ひに並居し人々か仲に立入りその場は事なく濟んたれど新吉留吉の兩人は中々心か鎮まらず今一度喧嘩をやつて腹癒せゝんと弘太郎松之助か歸る跡を付け來るとも知らず兩人は何心なく切り通しへ差掛りしに是れそ能き場所と新吉は下駄のまゝ弘太郎の足を力に任せて踏みければ不意を打れてドツかと倒れたを新吉透さず飛ひかゝり兼て用意やしたりけん一尺程の鳶口にて天窓^{あたま}をしたゝか打た上起しも立す脇の小川へ踏落せは此有様に駕吃^{びっくり}なし助立せんと松之助か打てかゝれは心得たりと留吉是に涉り合ひ互ひに劣らず争ふ内眼を打れて松之助前後を失ひアツト計りに聲張り上げ騒ぎ廻りし折こそあれ巡行の查公が通り掛られ其者共を取押へて種ゝお糺しありしかは何れも斯ゝと其始末を申し立弘太郎松之助の疵處を改められしに弘太郎は天窓^{あたま}に深さ一寸程の疵に額ひと足に打疵あり松之助は眼と左りの口の脇に打疵あれは大大介抱され新吉留吉の兩人は直くその場より拘引せられ拘留の上今にお調べを受て居るとは鈍惰野蠻の灰吹どもてありました

◆資料 18

明治十四年二月十四日「陸羽日日新聞」

○一昨夜は舊曆正月の十五日なれば當區八幡町の大崎八幡へ出掛けし参詣人は昨朝まで引も切らぬ程にて其中には裸体参りをせし野蛮人なども澤山見えましたが中、の賑ひでありました

◆資料 19

明治十六年（1883）一月十五日「奥羽日日新聞」

○曉参詣 昨夜より今曉へかけ例の八幡町なる大崎八幡社の曉参りも今年は何の故にかいと稀なりしといふ

◆資料20

明治十六年一月十八日「奥羽日日新聞」

○餅打喧嘩 去る十四日は若年とて常盤町は例年の通り餅打ち祝ひ廊中彼方此方の賑はひにて今野樓より雛妓四五名番頭と共に出かけ頓て小野兵へ押込むと同樓は豫て新曆を用ひず舊の正月ならでは客に對してさへ目出度とはいはぬといふ内規なれば斷然今日の餅打祝ひは御免蒙るといへば今野の番頭怒りを發し夫より双方の大悶着そのうち山の如き人立となり互ひに尉斗餅の角だちて鏡の丸く治らぬに仲人達も餅に搗き漸々こね取して濟せしとは新年から餡たらことだ

◆資料 21

明治十六年二月二十六日「奥羽日日新聞」

○お山参り 去廿一日は舊曆の正月十四日に當るを以て福島縣福島町にては男女老幼を問はず公園地裏なる靈山（月山湯殿山神の鎮座）へ参詣するもの數百千人雪を蹴立て午後七時頃より翌廿二日の朝まで續、として絶えざりしは流石に信仰の厚き事と社員よりの通信

◆資料 22

明治十七年（1884）一月十六日「奥羽日日新聞」

○一昨夜の景況 その模様こそ異れ是は孰れの地方にも有我國の舊習にて正月十四日の夜は當仙臺地方にては持ち打と稱へ物好なる騒客は思ひ思ひに奇様の装束をなし祝ひのためとて甲家乙戸を廻りて種々の狂藝妙戯をなし人をして驚を喫し腹を抱かしむ且つ是等の人にて訪はれし家にては祝儀なりとて金子を出すもあり酒肴を馳走するもあり又之を謝し斷るもありけり即ち一昨夜は其れに當るを以て午後七時頃より市中は何となく騒がしかりしも左まての事はあらざりしかど常盤丁は大賑はひにて三番叟茶番淺島忠信二十四孝其他種々ありて孰れも古体を摸し事物に似せたれ皆奇容戯体ならざるはなく見物人は山を爲して其雜沓云ふべくもあらざりし借また八幡町なる八幡社への参詣人は悪路なるにも拘はらず陸續と押し出して年始の飾り松等を携へ来り社内へ堆たかく積み之を焼き終夜人の絶えざりしは是も又當地の舊慣とこそは知られたり

◆資料 23

明治十七年二月一日「奥羽日日新聞」

○山形の二年参り 去廿七日は舊曆十二月の晦日に當るを以て山形にては二年参りと唱へ同夜より翌日に掛け小橋の神明八日町八幡其他所々の靈所へ市街よりは勿論近在より續、出掛けたれば歩行も自由ならぬ程雜沓なりし中には裸体参りとして壺公に認答めらるゝも見えたり是は全く舊慣を脱せざるものなり

◆資料 24

明治十七年二月五日「奥羽日日新聞」

○正月七日 當地方の舊習とて舊曆正月七日は朝觀音に夕藥師と稱へ朝未來より太陽の東の天に沖る比までは元寺小路なる觀音に詣で夕は又木の下藥師へ参り各自我身の幸を祈る者夥多しく鉦の緒さへ手に取ることのならぬは是維新前の事にして追々世の開明に随ひ參詣の者の數を減ぜしにぞ本年杯は如何あらんと想ひたりしが一昨三日は其例日なればにや朝觀音は守舊家が前宵の屠蘇の飲み過し歟將七草叩きに疲れて朝起の懶かりし爲ならんか左までの雜沓にはあらざりし夕はこれに引きかへ頃日天氣打續きて道は乾坦且つ常よりは暖氣なるに宵は月さへ清けかりしに浮れてか藥師堂は殊の外賑やかにてありし又同夜は儼迫の声四方に聞えて何となく騒々しかりし中國分町奈良屋の迫儼を爲す者は烏帽を冠り大豆に代へて金平糖又は蓬来豆を打撒す等當地方には異様のものなれば之を見ばやとて同店の前に人の山をなしたるも亦おかし

◆資料 25

明治十七年二月十二日「奥羽日日新聞」

○曉参り 一昨夜は舊曆正月十四日に當りしとて例の如く大崎八幡への參詣人は雪路をさへ厭はず午後八時頃より社内に充滿尚ほ昨日午前二時頃は最も盛んにして夜明け迄の賑ひは新曆に倍せしと且つ本年は神樂をも奏し町内には大掛行燈を揚たる杯都て社内の景色をましたりしと

◆資料 26

明治十七年二月十三日「陸羽日日新聞」

○あかつき参り 陰曆正月十五日の早天には曉参りと稱して諸神祠へ詣つるの風習は未だ去らず當仙臺區などにも多分之ありし事は前號にも掲げし程なるが田舎杯には況ての事殊に名取郡笠嶋村の村社道祖神社は御利生ありとて當曉に參詣するもの夥だしく隣村近在は勿論三四里の遠き朔風飛雪の際にも避易せず平素の朝寝坊も此曉に限り星猶ほ残れる頃に同社に達せんなど其前夜より心掛居る程なれば同社の段賑畜ことならず花表の前後人山の如く阿呆と呼ぶ鴉の声を聞かぬ先から鉦磬の声を聞き東方稍白き比はほ同社近傍は人頭の爲に黒しと云ふを例年の通りなりと云へり其賽錢の上る事も推知すべし故に村人謂へり太夫様一年の生計は此一曉にて給れりと而して其御利生ありと稱ふるは如何にも奇妙なる事共なり當曉漸く人の烏合せし折を窺ひ太夫（村人は同社の祠官を指して太夫様と云へり）は以前は烏帽子直垂にて神前に拝伏し畏み畏みの定祠を了へ然る後ち參詣人の男女を指し彼れと彼とはメツトとか何やら譯らぬことを獨語し入換り立換りの人に對して斯すること屢せり然に其太夫が指さしたる男女は必ず一年を出す夫婦となるを得るとの故に我も我もと先を競ふて人先に指さ、れんを欲せり之を見ても茲に參詣する多數の男女は概して此事を信するの伶俐者と見へたり左れば其指れざる者は差嘆の声を爲し額相集る毎に彼と彼とは太夫様に指さ、れたりなど最も羨ましげに話合ひ又其已れを指れし者は欣々たる色ありて御利生叶へりと打喜ぶが例なりとか然れば幾ら偏僻な田舎にせよ明治十七年の舊正月十五日頃には若者輩も余程賢こうなりたらうし且此不景氣にては無益賽錢と無益足を費す事は廢たるならんと思ひの外當年も男女數十人の參詣ありて何れも若者共なりしが中には裸体参り跣足参りもあり境内の積雪をも踏消す計りの雜沓にて定例の指さし式もあり最と盛んにて有りたりとは随分可笑かりし次第なりけり

◆資料 27

明治十八年（1885）一月十六日「奥羽日日新聞」

○曉参り 餅搗なる杵の音遠近となく聞えしは一昨日にしてそれなん若年の祝ひ事物する爲にて

繭^{まへたまき}玉^{たまき}鬻^{ひき}ぐ田^{いな}舎^な女^めの聲^{こゑ}さへ何^{なに}となう春^{はる}めけるに女^をの年^{とし}越^こ杯^は云^いふめれば裏^{うら}屋^やの嬬^{かあ}も今日^{けふ}ばかりはと我^{われ}の顔^{かほ}するもいとをかし又^{また}さすがにむかしの手^て振^ふ捨^す難^{がた}の人もありしと見え夜^よ更^げて後^{のち}鳥^{とり}追^おふ聲^{こゑ}すら僅^{わずか}かに聞^きえたるなん床^{とこ}し然^{しか}れば八^{はち}幡^{まん}町^{まち}なる大^{おほ}崎^{さき}八^{はち}幡^{まん}の曉^{あかつき}参^{まゐ}りも左^{ひだり}こそあらめと思^{おも}ふに違^{ちが}はず宵^よよりの参^{まゐ}詣^ぎにて各^{おの}々^{おの}松^{まつ}三^{さん}五^ご等^{どう}の飾^{かざり}り物^{もの}を持^もち行^いけの場^ばにて焼^や煙^{えん}もいつより許^{ゆる}多^たなりしを以^もて巡^{めぐ}査^さと消^{しょう}防^{ぼう}夫^ふとが詰^あ合^あて其^{その}が非^ひ常^{じょう}を警^{けい}固^こせしとか故^{ゆゑ}昨^{きのう}日^{にち}曉^{あけ}までは引^ひも切^きらぬ参^{まゐ}詣^ぎにて同^{どう}社^{しゃ}内^{うち}の賑^{にぎ}はひ一方^{いっぽう}ならざりしとなん

◆資料 28

明治十八年（1885）二月二十三日「奥羽日日新聞」

○朝^あ観^{くわん}音^{おん}に夕^{ゆふ}薬^{やく}師^し 一^{いつ}昨日^{きのう}は舊^{きゅう}曆^{りき}正^{せい}月^{げつ}七^{しち}日に當^{あた}り朝^あは元^{げん}寺^じ小^{せう}路^ろの観^{くわん}音^{おん}堂^{だう}夕^{ゆふ}は木^きノ下^{した}の薬^{やく}師^し堂^{だう}へ参^{まゐ}詣^ぎ相^あ應^{おう}に群^{ぐん}集^{じつ}せしと尤^{なほ}も薬^{やく}師^し堂^{だう}は新^{しん}曆^{りき}より一^{いつ}倍^{ばい}せしは近^{きん}在^{ざい}よりの出^で多^たかりし爲^{ため}にて赤^{せき}物^{もの}の如^{ごと}きは相^あ應^{おう}の賣^う方^{かた}なりしと

◆資料 29

明治十八年（1885）二月二十五日「奥羽日日新聞」

○大^{おほ}崎^{さき}八^{はち}幡^{まん} 来^きる廿^{にじゅう}八^{はち}日は旧^{きゅう}曆^{りき}正^{せい}月^{げつ}十^{じゅう}四^し日に當^{あた}るに付^つ八^{はち}幡^{まん}町^{まち}大^{おほ}崎^{さき}八^{はち}幡^{まん}社^{しゃ}に於^おて例^{れい}の如^{ごと}く祭^{まつり}典^{てん}執^{しつ}行^{ぎやう}せらるゝ由^{よし}尤^{なほ}も薬^{やく}師^し堂^{だう}観^{くわん}音^{おん}へ参^{まゐ}詣^ぎも新^{しん}曆^{りき}に倍^{ばい}せしと云^いへば同^{どう}社^{しゃ}へ参^{まゐ}詣^ぎりも必^{かならず}ず倍^{ばい}するならんと町^{まち}内^{うち}は今^{いま}より待^{まち}居^ゐるとの事^{こと}

◆資料 30

明治十八年（1885）三月二日「奥羽日日新聞」

○曉^{あけ}参^{まゐ} 兼^{かみ}て記^きせし通^{とほ}り八^{はち}幡^{まん}町^{まち}大^{おほ}崎^{さき}八^{はち}幡^{まん}は舊^{きゅう}曆^{りき}故^こか至^{いた}極^{ごく}の人^{ひと}出^で裸^{はだか}体^{まい}参^{まゐ}りさへ随^ま分^{ぶん}見^み受^うけしと又^{また}肴^{さかな}町^{まち}立^た町^{まち}の如^{ごと}きは餅^{もち}打^{うち}に出^で掛^かけしもありて殊^{こと}の外^{ほか}に賑^{にぎ}ひしと是^{こゝろ}は一^{いつ}昨^{きのう}夜^よより昨^{きのう}朝^{あさ}に掛^かての景^{けい}況^{きやう}

◆資料 31

明治十九年（1886）一月十四日「奥羽日日新聞」

○若^{わか}年^{とし} 本^{ほん}日は舊^{きゅう}慣^{かん}に依^より若^{わか}年^{とし}の餅^{もち}を搗^こる家^か々^々もあるやうに思^{おも}はれしが前^{まへ}玉^{たまき}木^き賣^う歩^ほく田^{いな}舎^な女^めも相^あ應^{おう}に見^み受^うられき

◆資料 32

明治十九年（1886）一月十五日「奥羽日日新聞」

○一^{いつ}月^{げつ}十^{じゅう}四^し日^{にち} 昨^{きのう}日は前^{まへ}号^{ごう}にも記^きせし通^{とほ}り若^{わか}年^{とし}と唱^なへ夫^{つま}々の儀^ぎ式^{しき}あるが中^{なか}にも當^{きやう}地^{くわん}方^{わん}の舊^{きゅう}慣^{かん}たるな海^ま鼠^ね引^ひ餅^{もち}切^{きり}茶^{ちや}旋^{せん}子^ご等^{どう}殊^{こと}に多^{おほ}く見^み受^うしが今^{いま}の世^よにはあらずもがなと思^{おも}はれたり又^{また}本^{ほん}日は曉^{あけ}参^{まゐ}りと唱^なへ八^{はち}幡^{まん}町^{まち}なる大^{おほ}崎^{さき}八^{はち}幡^{まん}社^{しゃ}へ参^{まゐ}詣^ぎする習^なはしなるが曉^{あけ}が追^お々^々宵^よとなり昨^{きのう}夜^よより今^{いま}曉^{あけ}までの参^{まゐ}詣^ぎ人も可^かなりにて殊^{こと}更^{さら}可笑^{わらわ}しかりしは鳥^{とり}追^おなりまだ明^あやらぬより何^{なに}やら喋^{しゃべ}り立^たる聲^{こゑ}さへ稀^{まれ}に聞^きえたるなりと是^{こゝろ}は昨^{きのう}十^{じゅう}四^し日^{にち}より今^{いま}曉^{あけ}までの概^{がい}況^{きやう}を記^きせるのみ

◆資料 33

明治十九年（1886）一月十六日「奥羽日日新聞」

○大^{おほ}崎^{さき}八^{はち}幡^{まん} 前^{まへ}号^{ごう}に十^{じゅう}四^し日^{にち}の景^{けい}況^{きやう}として粗^はぼ掲^か載^{ざい}せしが尚^{なほ}ほ漏^はれたる分^{ぶん}を補^{おぎな}ふに同^{どう}社^{しゃ}参^{まゐ}詣^ぎ人^{ひと}は可^かなりと云^いふものゝ宵^よに比^ひせば曉^{あけ}参^{まゐ}りは少^{すく}なく諸^{しよ}商^{あきんど}人も例^{れい}よりは稀^{まれ}なるのみならず商^{あきんど}ひ更^{さら}になく燈^{あかり}し油^{あぶら}の損^あ毛^け夜^よ蕎^{そば}麥^{あわ}賣^うは割^{わり}に多^{おほ}かりしも是^{こゝろ}れ將^{まさ}持^も歸^{かへ}りの姿^{すがた}只^{ただ}いつになく見^みえしは北^{きた}三^{さん}番^{ばん}丁^{ぢやう}土^{つち}橋^{はし}通^{とほ}に数^{かず}十^{じゅう}の提^{あかり}灯^{とう}を點^あせしと神^{かみ}社^{やしろ}内^{うち}の装^ま飾^{かざり}等^{どう}にていと見^み事^{こと}なりし又^{また}右^{みぎ}に準^まじ公^{こう}園^{えん}の櫻^{さくら}岡^{おか}神^{かみ}社^{やしろ}片^{かた}平^{へい}町^{まち}神^{かみ}宮^{みや}教^{きやう}會^{かい}所^{じよ}へ参^{まゐ}詣^ぎ

も至て少なかりしとなん

◆資料 34

明治十九年（1886）二月十九日「奥羽日日新聞」（五）

○曉参り 一昨夜は舊曆正月十四日なりしを以て例に依り八幡町大崎八幡社への参詣は實に夥多しく新曆よりは遙かに増り尤も盛んなりし由中には鳥追ふ聲も聞えしが是は些と舊弊過て聞え蒼蠅かりし

◆資料 35

明治十九年（1886）二月二十一日「奥羽日日新聞」（四）

○曉参り 舊曆正月十五日の曉に名取郡植松村たてのこしじんじや館腰神社同郡笠島村のだうそじん道祖神への参詣は近年稀なる程にて中にもをかしかりしはいかなる立願ありてにや此寒中をも厭はずひとへもの單物一枚の参詣人を多く見受たりしと云

○正月十六日 おととひ一昨日は旧曆正月の十六日とて地獄の釜の蓋さへ開と云ふ大齋日なればと宿下やどさがりに仕着の晴飾り丁稚お三の一日極楽丁稚は巾着を叩て焼芋の喰飽お三は紙入を拂ての小間物探し爲に市中も景氣付て見えしが中にも劇場は大繁昌松島東の兩座とも一杯の入りなりしと

◆資料 36

明治二十二年（1889）一月十六日「奥羽日日新聞」（五）

○曉参り 昨日は一月十五日なるを以て前夜より八幡町の大崎八幡宮に曉参りに出掛くる者引も切らず中には如何なる立願のある難有連にや裸体参り又は薄着参りと唱ふる参詣人も六七名ありて昨年よりは賑へたりしと

◆資料 37

明治二十三年（1890）三月六日「奥羽日日新聞」（五）

○曉参り 一昨夜は舊曆の正月十四日と云ひ宵の小雨の間もなく晴れ霞の衣打榮し月弓男浮かれ出しよりいざせ我もと男女打連立ち大崎八幡に参詣するなるべしゆきかへ往復の足音夜た、聞えしが社内の賑へ左こそと推せられぬ

◆資料 38

明治二十四年（1891）一月十六日「奥羽日日新聞」（五）

○曉参り 一月十四日の宵より翌十五日の朝迄あかつきまる曉参りと唱へ八幡町なる大崎八幡神社へ参詣するの習慣にて年々同社は賑ふことなるが殊に本年即ち一昨日の宵の中は参詣人頗る多く社内の雑沓一方ならず中にも國分町の酒造家大崎市三郎方にては番頭雇人等十余名が白襦袢一枚にて参詣せし如きは人々の目に付きたりしと併し商ひは相變らす不景氣お蔭で繁昌なりしは常盤丁なりしといふ

◆資料 39

明治二十五年（1892）一月十四日「東北新聞」（三）

●夜籠りと曉参り 昨夕は十三日の夜籠りにて遠近の神社佛閣に現世後世をいの禱るものあり又今曉は十四日の曉参りにて老若の男女は雪路に足駄の音をならして諸處の靈所にもうずるもの多く殊に大崎八幡はいと賑しき程の参詣人にて物賣まで市をならべたり、とりわけ熱心なる信仰家は世の雪空に單衣一枚にて走せ廻るも見えたり、爲に八幡町の大道は人の往來織るが如きの混雜なりき

◆資料 40

明治二十五年（1892）一月十五日「奥羽日日新聞」（三）

○曉参り と唱へ昨日の宵より本日の曉^{あかつき}かけて八幡町なる大崎八幡へ参詣するの習慣なるが本年も可
なりの参詣ありしと云ふ

◆資料 41

明治二十五年（1892）一月十五日「東北新聞」（三）

●餅打 昨晩は餅打の宵なりしかば當市の子供連は戸毎に廻りなかなか賑わひたり又常盤町は昨
年來の不景氣にて是等の佳禮を廢し至て静かなりし由

◆資料 42

明治二十五年十二月二十九日「東北日報」（三）

○門松の相場 本年は門松非常の高値にて三階位の處にて一對六十錢位ゐる相場なりと其原因は官
林の取締頗る嚴重にて一步も踏入ることの出来ぬ爲なりと

◆資料 43

明治二十六年（1893）一月十四日「奥羽日日新聞」（五）

○曉参り 今晚より明朝にかけ曉参り^{あかつきまる}と唱へ八幡町なる大崎八幡社へ参詣するの例しなれば同社内の
賑へ思ひ遣らる

◆資料 44

明治二十六年（1893）一月十四日「東北新聞」（三）

◎持打を受けず 當市常盤町各貸坐敷にて例年の通一切持打を受けぬことにせしといふ

◆資料 45

明治二十六年（1893）一月十四日「東北日報」（三）

○八幡神社の祭禮 今、明兩日は例年の通り當市八幡町八幡神社の祭典を執行する由なれば今夕の如
き老若男女の参詣夥しく定めし賑ふことならん

(略)

○正月乞兒^{こじき} ヤレ萬歳、ヤレ歌うたひ、ヤレ餅貰ひと名つけて一月來れば乞丐^{こじき}となり市内毎戸の門邊
に立ちて年のうちを貰ひ歩くものをば正月乞丐と呼ぶことなるが彼等の中には近郷にて相應に暮し居
る者も交り居る由破廉恥^{はれんち}とやいはん、鐵面皮^{てつめんぴ}とや云はん

◆資料 46

明治二十六年（1893）一月十五日「東北新聞」（三）

◎十四日 昨夜は正月の十四日にて芽出度やかせどり持打^{もちうち}、などもありて、子供の嬉しさうに各戸を
祝ひあるくなど市中は中々の賑ひなりし

◆資料 47

明治二十六年（1893）一月十五日「東北日報」（三）

○女子の越年^{としこし} 昨十四日は恰かも女の年取りに當りたれば湯屋、髪結等は可なり混雜せしが午后より
はチラホラ年賀にかけ歩く者を見受けたり

◆資料 48

明治二十六年（1893）一月十七日「東北日報」（三）

○八幡神社の祭禮 去る十五日は當市八幡町大崎八幡神社大祭日にてありければ前日の宵祭の如き老幼男女の人出夥しく常盤町より支倉通北三番丁と道路の氷り居る爲め小足にて歩く囂しき曉に徹して止まず、社前には例年の通り四方より持來りたる門松を燃しければ炎焰天を焦し其賑はしき言はん方なかりし

（略）

○昨日の大齋日 昨日は正月十六日にて地獄の釜の蓋も開くてふ年二度の大齋日なれば市内の湯屋、散髪屋等は悉く休業し年期小僧は待ちに待たる放樂日、何れも籠を出でし鳥の心地にて此所彼所を遊び行き松島座、森民座、仙臺座の素人芝居其他の興行物まで爪も立たざる大入、市中の料理屋、飲食店も相應の來客あり明る春を待ちたる女子等が今日もを晴れて着飾りて笑ひさゞめき手を引き合ふて遊び行くさまは何となく春めきたりし

◆資料 49

明治二十七年（1894）一月十三日「奥羽日日新聞」（五）

●曉参り 明日は例年の如く八幡町大崎八幡社への曉参りも多かるへく扱は同社内の賑ひ思ふへきなり

◆資料 50

明治二十七年（1894）一月十四日「東北新聞」（三）

○女の正月 今日十四日にて女の正月明日は上元明後十六日は藪入りなり右に付市中は賑ふなるべし明朝の曉詣酒屋の裸体まゐりもいさましからん（八幡社の賑）

◆資料 51

明治二十七年（1894）一月十四日「東北日報」（三）

○わか年 今日若年にて女子の年取と云ふ日なれば各家にては其々の儀式を整ひ雑煮餅に身動きさへならぬ花嫁あれば屠蘇に後先忘る、老婆もありて何となく市中の景氣賑々しく暫しは過ぎ行く正月の足を駐めたり又古例を守る家々は前玉を飾る向も多く撃壤鼓腹の御代こそ有難けれ

○曉参り 明日は正月十五日のこととて當市八幡町の大崎八幡社へ曉参りをなす人々多きことなるが本年は例年の如く寒氣も餘り烈しからねば一層の参詣者ならん去れど瘦我慢に齒を喰めて裸か参りをするは違警罪の禁物なれば能々注意す可し

◆資料 52

明治二十七年（1894）一月十六日「奥羽日日新聞」（五）

●曉参り 兼て掲載せし如く一昨日は折からの暴風にも拘はらず参詣人非常に多かりしとのことなり

◆資料 53

明治二十七年（1894）一月十六日「東北新聞」（三）

○一昨夜の餅打 一昨日十四日は新正若年越にて女の正月と云ひ餅打等にて賑ふ當日なるが年の好況につれ餅打等も一層賑かにて各商家を祝ひ廻り頗る盛會なりき本社も亦數組の祝を受け深更迄之が迎接に忙しかりき

◆資料 54

明治二十七年（1894）一月十六日「東北日報」（三）

○八幡神社の祭典 當市八幡町なる同神社にては一昨日の宵祭りより昨日に掛け例年の通り祭典を行ひしか市内酒造家その他より裸体参りを爲せしもの數多見受けしか兩日とも強風吹き荒れし爲め社内に於て焚火を禁ぜられしにぞ市内各戸より持ち集りたる門松は堆きまして社内に充満し去る十四日の曉参りより夜に入り中々の参詣人なりき

◆資料55

明治二十七年（1894）一月十七日「東北新聞」（三）

○各寺院の雑踏 昨十六日は一年一度の藪入日とて雪模様にも係はず老若男女等墓参りに出掛けたるもの多く新寺小路邊は中々の賑なりしといふ

（略）

○藪入の景況 昨日は藪入にて市内の召使丁稚小僧の放生とて餅屋蕎麦屋小料理屋興行物は仙臺松島森民座など非常の大入りなりし

◆資料 56

明治二十七年（1894）一月十七日「東北日報」（三）

○昨日の藪入 昨日は正月十六日の大齋日にて地獄の釜の蓋も明くてふ藪入の當日とて市中は頗る賑々しく殊に小僧やお三等が年に二度の追放日なれば思ひ思ひに仕度を整ひ芝居に飛込むもあり鮎屋、天麩羅屋、蕎麦屋に鱈腹頬張りて目の玉を轉繰り返すもあり少しは大人に成り掛りたる中僧等は一人洒落て三居澤の翠松館、三瀧の望洋館、土樋の廣瀬館、越路の聚遠樓に繰込む向も相應にあり常盤町の営業停止を無念がるの輩は鹽釜岩沼迄も單騎獨行して日頃の手柄を顕はす不心得者もあり概して藝妓屋、芝居、料理店、飲食店等は相應の來客ありて新年以來不景氣に閉たる愁眉をヤッと開きたり

◆資料 57

明治二十八年（1895）一月十三日「奥羽日日新聞」（三）

●繭玉木 明十四日は女の年取りと稱する若年にて近在より繭玉木賣りが多勢入込み市内を賣行くも買人は至て稀れなりと

◆資料 58

明治二十八年（1895）一月十三日「東北新聞」（三）

●明後日の曉参詣 明十四日は松の葉の目でたき一月の祝も終りとなし同夜曉参りのため各神社は賑ふならんが殊に大崎八幡社塩釜神社等への参詣非常に多かるべく酒造家連信仰熱心家連のは裸参りもあるならん

◆資料 59

明治二十八年（1895）一月十五日「東北日報」（三）

●八幡神社の祭典 昨日は一月十四日に相當するを以て市内八幡町なる全神社に於て例年の通り大祭典を執行せしが夜に入り造酒家社康その他の裸体参り等ありて全町内は中々の賑はへなり獨し

◆資料 60

明治二十八年（1895）一月十六日「東北日報」（三）

●一昨夜市内の光景 松の内の十五日も一昨夜限りとなる門松を徹き除きて市内八幡町なる八幡境内に運び焼き捨つるが例なれば市内は夕景より殊の外雑鬧し夜明けまで多少の人通りありたり

◆資料 61

明治二十八年（1895）一月十六日「東北新聞」（三）

●一昨夜市内の景況 一昨日午後よりは女の年越とて何となく賑はしく夕方よりはお祝ひお祝ひと子供の呼び聲毎戸に見舞はれ大崎八幡社其他の神佛は賑ひ非常のものにて焼近き頃は螺貝の聲音遙かに響き渡りカラカラカラの足駄音繁く時には白布の参詣者あれば駈け來る女の裸参り等さてもさまざま明ければ拾五日の東天旭高し

●祈祷の婦人多し 八幡神社は昔より弓矢神と唱へ武運を守ると傳ふるより時節柄参詣人非常に多く殊に一昨夜の如きは大崎八幡社頭の賑ひ甚しく就中軍人留守宅の遺族、婦人の参詣夥しく華弱き身に雄々しくも水垢離をとりて白衣一枚の裸参詣、夫の戦功を祈り俸の武運を禱る杯實に凄まじき程なりし此一念を以てするも我軍は必ず勝つべき筈なりと感涙を揮ふて語るものもありき

◆資料 62

明治二十八年（1895）二月十六日「奥羽日日新聞」

●曉参り 今朝は陰曆正月十五日のこと、て勇み肌の若者等は裸参りと稱ひ白衣一枚を着して公園地大神宮八幡町大崎八幡宮等へ曉き参詣に出掛けたるもの多く一昨夜より掛けて同神社の参詣者は殊の外多かりしとぞ

◆資料 63

明治二十九年（1896）一月十二日「東北新聞」（三）

●八幡神社祭禮 當市大崎八幡社は來十四日夜祭りにて松納め翌十五日は本祭なり

◆資料 64

明治二十九年（1896）一月十四日「東北新聞」（三）

●曉参り 明十五日は曉参りのため鹽釜神社大崎八幡其他への参詣者未明より多からん

◆資料 65

明治二十九年（1896）一月十六日「奥羽日日新聞」（三）

●大崎八幡の曉参り 去る十四日の夜より翌十五日の曉に掛け参詣し且つ松飾等を持行き焼棄るの習慣なるより何れも日中より夫々準備を爲し頓で暮近うなるや競ふて参詣するを見受けたり而して國分町酒醸家大崎店にては例年の如く裸参り（但し浄衣一枚にして腰にメ繩を張れり）を爲したる中々に勇ましかりき又夜に至りては之れも一つの慣しとて男女の幼童群を爲し「錢もち金もち寶もち此方の旦那は身上もち」と口々に唱へ軒毎に祝儀を貰ひ歩く杯市中は賑々しくも亦蒼蠅き程なりき折柄誰か趣向にや出たりけん國分町人力車營業新車方より挽出したるは諸方の正月飾物を以て軍艦を模造しそれに陸海軍萬歳の旗を建て又家々の提灯を釣したる最も陽氣に見受けられぬ次でいと殊勝にもあはれなりしは軍人の家族にやあらん十五六歳とも見ゆる令嬢兩名白衣一重を着し素足にて参詣せるにてありき自体本年は戦争後のこととて参詣人は特に多きを覺えしとぞ

◆資料 66

明治二十九年（1896）一月十六日「東北新聞」（三）

●一昨夜の大崎八幡 一昨日は正月十四日にて當市八幡町大崎八幡神社の祭典なりしが例に依りて参詣の老若男女夕刻より續出し同町入口より社前に至るまでの間は殆んど通行をなし得られぬ程にて例年より一層の賑かなりしといふ

◆資料 67

明治三十年（1897）一月十四日「仙臺新聞」（三）

- ◎今晚の八幡堂 十四日なれば例年の通り門松納めの爲め賑やかなるべし
- ◎團子木の賣聲 昨日は市内各町に團子木の振れ聲何よりも耳立たり

◆資料 68

明治三十年（1897）一月十四日「東北新聞」（三）

●一昨夜來の市内 歌舞音曲の停止とて何れも謹慎を表し光景蕭條たり

◆資料 69

明治三十年（1897）一月十四日「東北新聞」（三）

- 鳥追と新正月 松葉の一月も本日限りにていよいよ鳥追となる、鳥追ひは各地に依り其の式異なり東京の如きは鳥追とて、朝またき三弦を乱弾して各戸を廻りメ繩松等は神社に納むるを常とし當仙臺地方の如きは拂曉やハイヤハイホウイホウイ等の語を以て鳥追式となし氏神に納むるなりし
- 八幡神社祭禮 本晩は正月十四日俗に松飾り奉納と唱ひ八幡町同社の夜祭りなり

◆資料 70

明治三十年（1897）一月十五日「奥羽日日新聞」（三）

●昨日の大崎八幡 昨日は當市八幡町に鎮座する八幡神社の祭典にて例年なれば曉き参り其他終日賑ふ可き筈なるが禁内の御不幸に遠慮して終日ひそやかなりしと就ては正規の祭典は舊曆一月十四日まで延期するとのことなり

◆資料 71

明治三十年（1897）一月十五日「仙臺新聞」（三）

◎祭典延引 前號の紙上に記せし大崎八幡の祭典は此度の國喪に付舊曆正月十五日まで延引せり

◆資料 72

明治三十年（1897）二月十七日「奥羽日日新聞」（三）

- 大崎八幡宮 の祭典は御大葬の爲め陰曆正月十四十五の兩日に延期せる由は曾て報道せしが一昨夜は恰も其の十四日とて参拝する者非常に多く午前二時頃まで下駄音絶えざりし
- 昨日の停車場 昨日は陰曆正月十五日に相當せし事とて竹駒鹽釜諸神社への参詣者頗る多かりし爲め當市岩沼鹽釜等の各停車場は終日雜沓したりといへり

◆資料 73

明治三十年（1897）二月十七日「河北新報」（五）

●停車場の雜踏 昨日は舊曆正月十五日なるを以て近郷近在より鹽釜邊或は古社舊跡等へ参詣するも

の夥しく毎列車殆んど溢れん計りにて當停車場も發着毎に雑踏を極めたり

◆資料 74

明治三十一年（1898）一月十三日「東北新聞」（三）

●大崎八幡社例祭と電燈 明十四十五兩日は當市大崎八幡社例祭なるが本年は大電燈を用ゐる参詣者便を計らんと町内有志者は三居澤電燈会社に協議し其位置等を定めしといふ

◆資料 75

明治三十一年（1898）一月十四日「東北新聞」（三）

●唄女の年始と市内の景況 昨日は寒暖計も四十度の上に昇り御大喪も已に明き且つ静穩の好天氣なりしかば市内人出非常に多かりし中にも唄女の年始は中々に花々しく殊に目立ちしは吉野家連小里次郎ふねあい子（今年一本となりし新妓）半玉のまさ子など綺羅を飾りて元氣よく續いて萬家の徳助小みよも、助小きん小半半玉のみつよ、小松家、菊の家、松葉家、花の家、中よろつ其他の群妓は寒さに閉し紅梅の一時に發きしに似イヤ艶麗艶麗と褰て通るもあれば、三河万歳、めでた節、關候、三味線門付なんども時を得顔に市中を歩き始めて正月らしき景況を呈したり

◆資料 76

明治三十一年（1898）一月十六日「東北新聞」（三）

●幫間連の年始廻り 虎坊の幫間仙中林中露中に今後披露した花中の四騎轡を並べて市内鬚肩筋並びに料理屋待合藝妓家などへの年始其口上に曰く今年の繁昌お目出度う國會解散御目出度う政府では不景氣挽回の爲の御解散なれば先づ撰舉人様方の御機嫌を伺ひ御意の儘に御當選受合の積りそれも御祝儀の多い方にハイ賛成致しますなんかんと持合せの口調を年玉にしてイヤモウ元氣なるものなり

◆資料 77

明治三十二年（1899）一月十日「河北新報」（三）

祝れた人も亦來る水祝い 弧月
河豚喰うた去年の噺しや明の春
北野にも見ゆるとんとの煙り哉
新しく殖へて目出度し孫の年
報國の恵みも厚き日のはしめ
社家に神酒すゞめくれけり初詣

◆資料 78

明治三十二年（1899）一月十三日「河北新報」（五）

●大崎八幡の曉祭り 來る十四日の夜より十五日に掛け八幡町の大崎八幡宮に於て例年の通り曉祭りを執行し伊達伯爵名代の参拝もある由なれば定めし賑ふべく且つ同夜は松焼を無代價とし又電燈提灯等の數をも増して境内を不夜城とすると云へば一層の光景を添ふ事ならん

◆資料 79

明治三十二年（1899）一月十三日「東北新聞」（三）

●大崎八幡曉詣り 來十四五兩日大崎八幡宮にては例の通り松焼無代價執行、丸屋大崎吉岡等の各酒造家にては舊例により若者の薄衣参りの準備中なりと

◆資料 80

明治三十三年（1900）一月十五日「河北新報」（五）

●昨夜の八幡宮 寒氣は厳しかりしも折柄の月夜とて市中男女の参詣例年よりも多く薄衣参りの若衆も可なりあり坂の上の年繩焚場は例に依りて中々熾んにて今曉に至るまで頗ぶる賑ひたり

◆資料 81

明治三十四年（1901）一月十五日「東北新聞」（七）

●八幡神社の例祭 昨夜は例の八幡町八幡神社の例祭なり朝來の日和にて人足殊に繁く玩具屋菓子屋煮賣屋などの商人連は朝より我れ先に我れ先にと詰め掛け押掛け其場を占めけるが夜に入り例の如く信神連裸参りのチリンチリン松納め若者共のヨイサヨイサッ定めて凄くも亦喧しきことにぞあらん

◆資料 82

明治三十四年（1901）一月十六日「河北新報」（五）

●八幡社の賑ひ 一昨夜は正月十四日の事とて例年の如く裸参りやその他の参詣人にて八幡堂なる八幡社の賑ひたる事一方ならず二日町より北三番丁へかけて木町通より舊常盤町より総体八幡町への通路は通り切れぬ程にて社前には種々の露店多くかゝり見世物は僅かに大蛇一ヶ所なりし社前には先を争ふて冥利を願ふ人はベター一面押し合ひへし合ひ殊に本年は例年に比し裸参りの數頗ぶる多く総体二百名もありたるが中にも猫豆組國太郎組マツタ仙臺座の俳優及び森徳座の俳優など屋臺よ車まよの大騒ぎ幾百千人の老若男女只だなんとなくワヤワヤ押掛け押返へりかくして曉まで人通りの絶えぬなどは賑かなりし次第とはいふべし

◆資料 83

明治三十四年（1901）一月十六日「東北新聞」（七）

●一昨夜の市内 門松メ飾りを八幡社へ納むるもの、跣足参り、寒参り等多く、殊に森徳座の松納めは藝妓屋其他を合併し荷車三輛にて神樂太鼓で練出す杯大賑ひ、仙臺座も俳優一同曉き参りをなせし由

◆資料 84

明治三十五年（1902）一月十五日「河北新報」（五）

●わか歳 松の内も瞬く間に過ぎ去りて昨日は若歳を迎ひたるか昨夜より今朝へかけては八幡町大崎八幡宮の例祭あり参詣人は例の如く頗る多く門松を納めんとて市中より賑かなる囃しにて押出せるもあれば薄衣参りをなす信神者も少なからず境内はほとんど火の焰熾んに暗みを照して鈴の音かしましかりき

◆資料 85

明治三十五年（1902）一月十五日「東北新聞」（三）

●昨日の大崎八幡 曉詣の往來も前年に比し多く門松納めの雑踏は又格別にて八幡町は毎戸珠燈を掛け社前には諸商人の店張りありき殊に天氣よく風尠なかりし故焼淨むる門松メ飾りの炎勇ましく深更赤裸体詣りの數も多かりき

◆資料 86

明治三十五年（1902）一月二十五日「河北新報」（一）

清秋會句録

産土神に村を擧りしどんどかな	牛南
柴積て幾たび川を覗きけり	同
春いまだ狭長山田の芹寒く	同
梅楽き嵯峨の庵や琴を弾く	同
(略)	
京の町に火事のはやりて年寒き	麻昔
襟巻を帽子の中に入れてあり	同
畑打に梅の名所を尋ねけり	同
左儀長の人の顔皆あかあかと	同
(略)	

◆資料 87

明治三十五年（1902）二月二十三日「奥羽日日新聞」（三）

●夜の仙臺（二十一日）

▲途上の光景と雑感▲

▲陰暦の松納め 越し時に二度尻餅や年の坂由來仙臺には陰陽に亘りて正月を祝ふ向多く田舎に入れ
ば勿論市内場末には義理一遍に松飾りを爲し神事其他は総べて陰暦を用ゆる方多く見受けらる左れば
にや當夜陰暦十四日には例の大崎八幡に松納を兼ねあかつきまひり曉詣引きも切らず夫れを當て込むこあきんど小商人露店等
油ゆえん烟臭き空氣もて満たざれなかなか雑踏を極めたり

▲遊廓 近來客足絶へて落冥の死地と化したる遊廓も陰暦あかつきまひり曉詣と鹽釜神社をかこつけに歩を運ぶ田
舎者多くあかけつと赤毛布と草鞋掛の三々五々隊を成して押し歩あ行く爲か小見世には可也の客を見るも大見世に
は蜘蛛の巣を張る計りの不景氣目も當てられし沙汰にもあらず是でこそ天下太平と申すべきにや
(略)

◆資料 88

明治三十六年（1903）一月一日「河北新報」（二）

新年海

元朝の海高砂も見ゆるべし	櫻香
海暮て丘に小きどんど哉	同
海の幸に山の幸にと四方拜	寒堂
初日浴びて海神祭る人遠か	同
元日や吹雪に海も見えぬ也	今來
海樓や波平かに初日影	同
初空の海に雪ふる静けさよ	乙字
月出つる二日の海や船祝	同
海原や瑞穂の國の初日の出	放江
元日や海の日本に聖天子	野老

◆資料 89

明治三十六年（1903）一月五日「河北新報」（四）

新年雜詠

海暮れて舟玉の灯や初荷舟	櫻香
若水や切火たばしる桶白き	同
(略)	
どんどやく煙や海邊の並木松	麻昔
紙舒べて手のたゆたひや筆始	同
(略)	

◆資料90

明治三十六年（1903）一月十四日「東北新聞」（三）

●今晚の松注連納め 松の内も今日限りにて今晚は松注連納めなるが市内にては例により大崎八幡の境内賑ふことなるべし又今夜は舊臘花嫁初詣入りの家々へ餅打を唱えて藝人が押出して祝儀を貰う習慣もあり賑々しきことなるべしと

◆資料 91

明治三十六年（1903）一月十五日「河北新報」

●昨夜の大崎八幡社 八幡町なる大崎八幡神社にては例年のごとく昨夜は午後の七時頃より参詣の人出盛り曉頃まで絶間なかりしが例の廣目屋猫豆等の廣告樂隊は各得意先きの門松を荷車に山を積み重ね花々敷繰出したる傍々大通りより境内までは一方ならず賑ひ社内には晝夜共神樂の奉納もありたり

◆資料 92

明治三十六年（1903）一月十五日「東北新聞」（七）

●昨日の賑ひ 十四日のこととて悪路も厭はず年始廻りの人々もあり夜に入り松注進納めにて例により八幡神社への参詣も多かりきか

◆資料 93

明治三十六年（1903）一月十六日「東北新聞」（七）

●一昨夜の八幡社 一昨夜當市大崎八幡社に例年の通り夜禁（ママ）りあり夕頃より老若男女群集雑沓門松年繩を焚く焰頗る盛なりき又例の裸躰参りも各隊列を作りて出かけ殊に仙台座興行中の俳優連數十名腕車を連ね先頭は樂隊に歩調を整へ後尾には年繩門松等を満載せるチャリーズを附し恰も出征行進隊の如く花々しき有様なりき

●本日の養父入り 本日は商舖の番頭丁稚小僧雇人放樂日故例によりて各遊覽場飲食店は相應□賑ふべし又明十七日は湯屋床店の休業なれば矢張り賑ふなるべし

◆資料 94

明治三十六年（1903）一月十六日「奥羽新聞」（五）

●青柳一座の八幡詣 仙臺座に興行中なる壯士俳優青柳一座総員十余名にて一昨夜人力車に何れも座名を染抜きたる紅燈を點じ市中音樂隊を先驅に馬鹿囃臺を後ろに威勢よく八幡神社に参詣したるは廣告を兼ねたるよき思付きなりし

◆資料 95

明治三十六年（1903）一月十六日「奥羽新聞」（五）

花柳便り若菜籠（略）▲一昨日の時間過ぎにお八幡様へ参詣に行った藝妓屋は吉野家、柳家、いて

ふ家、玉よろづ、丁子屋、新東家、よろづ家、福すゞき等で其の藝妓げいしやが惣出だつたから實に花々しく八幡様も大分御眼尻おんまなじりを下げられたか何うだか分らないが一行の中に御精進でも悪かつたと見え石段で轉んだ妓ひとなどあって大陽氣おほにぎやかであつたげな▲此のお八幡様の宵祭りに若い女の裸参りはだかまゐと老婆ぼあさんの裸参りはだかまゐと書生の裸参りはだかまゐは三幅對の見物であつたが惣体に昨年より人出き多く又た裸参りはだかまゐも多かつた

●怪しからぬ縁起物 市内連坊小路七番地庄司清次郎妻カツ（六一）は一昨夜同東九番丁姓不詳アイ、クマなど云ふ面々と打連れ共に怪しからぬ木製の物を扇に載せ國分町界隈の家に入り込み餅打もちうちの御祝儀しやべなど、蝶舌せり居りしを風紀係に認められしが昨日一同召喚の上其の不心得を誠に釋放

◆資料96

明治三十六年（1903）一月十七日「東北新聞」（七）

●養父やぶい入りの景況 各商舖の番頭丁稚雇人昨日正午頃よりポツポツ往來賑はしく見えたるが森徳座女芝居松嶋仙台両座も相應なる入にて夜は開氣館長壽亭名掛館（卅日迄日延せり小樂丈へ米屋町より後幕を送られ物語も安中騒動頼朝小僧とせり）なぞ入りあり各勸工場飲食店共繁昌せしが今十七日は湯屋床店の休業日なるも家々によりては十九日に日延せるもありと

◆資料97

明治三十六年（1903）一月二十三日「河北新報」（四）

清秋會句録

大賢は愚なるが如く海鼠かな	放江
河豚曰く汝の生を咀はむか	同
寒潮に二つ飛び立つ千鳥かな	同
臘梅に霰の玉の碎くなり	同
暮口に銀貨を鳴らし藪入す	同
やぶ入の話かさなる巨たつかな	麻琴
飾なげて焰高まるどんどかな	同
いさかひに人乱れたるどんど哉	同
やぶ入の土産ひろげて語りけり	同
左義長の残る煙や朝の雨	花衣
霜の千木どんどの明り映りけり	櫻香
やぶ入の車に乗るや□午	落魚
左義長や橙焦げて残りけり	牛南
左義長の月に地を這ふ煙かな	同

◆資料98

明治三十七年（1904）一月一日「河北新報」（十）

巖上松

禿山の巖の松に初日かな	幽谷
納め松三東になりぬ岩の上	櫻香
岩の上どんどの松の焼け残る	全

◆資料99

明治三十七年（1904）一月十四日「東北新聞」（七）

●本夜の賑ひ 大崎八幡神社の祭典と松納めとにて定めて賑ふことなるべし

◆資料100

明治三十七年（1904）一月十五日「河北新報」

●八幡神社の國威宣揚祭 當市八幡町鎮座の大崎八幡神社の於ては例年の通り昨日松焼例祭を行ひ併せて全國神職會決定の趣旨に依り國威宣揚祭をも營みたる處天氣の宜しきと時節柄とて例年にも倍して參詣人夥多しく頗ぶる雜踏を極めたり

◆資料101

明治三十七年（1904）一月十五日「奥羽新聞」（三）

●昨夜の松納め 毎年當地方の慣習として一月十四日の夜門毎に立てたる松飾りを撤して之を大崎八幡社へ持行き火に投じて一片の灰塵とし夫より八幡へ賽して歸る事なるが昨夜は其當日とて宵の程より詰掛くる老若男女中々に夥多しく或は車に或は囃子など着けて牽き行くなど大分賑はひたりしが警察署にては豫じめ其群集を慮りて警官を派出し取締に注意せしめられたれば万事好都合にて曉に及んで皆々退散せし由

◆資料102

明治三十七年（1904）一月十六日「河北新報」（五）

●參詣の留主に泥坊 北目通り九番地瀧喜太郎（五十五）は長女きさ（二十三）との二人暮らしにて薪炭商をなし居るものなるが一昨夜七時半頃きさと共に八幡神社に參詣に出掛け歸宅して見れば戸が開放しになり居るより不審に思ひ筆筒の中を檢め見しに衣類八點盜難に罹り居るのみか折角搗立ての餅までも盜まれて皆無なるに二人は尻餅をついて之れはこれ

●次も盜難 一昨夜六時頃當市虎屋横丁の伊藤春吉方にて家族か夕飯を食し居る間に店先に置きたる塩鮭一俵（八本入にて見積二圓）盜難に罹る

●八幡祭りと警察事故 一昨夜の八幡神社祭典は非常の人出なりしより警察事故も多かりしが當市連坊小路の筆職加藤義一郎方の雇人高田忠藏は黒縹子の財布を金一圓三厘在中のま、掏り取られ名掛丁二十番地佐々木政治は唐縮緬の風呂敷一枚を拾ひ名掛丁の佐藤キチは妹と倅勇治（十一）を連れて出掛けたる途中にて勇治を見失ひしとて其筋に訴ひ出でしが同夜神社近傍にて發見し又十八九歳の青年が二十二三歳の番頭体の者と喧嘩を始めたるを横田巡查が通り掛かり説諭し次に參詣人中に娼妓らしき女ありしより警官が取調べたるに娼妓にはあらざりしこと判明して許されたり

◆資料103

明治三十八年（1905）一月一日「河北新報」（九）

新年十句

勅題のつたなき歌や筆始	牛南
ものゝ圓き陸月橙鏡餅	同
思ひたゝす嵯峨の使や明の春	同
美しき顔見そめけり松の内	同
物をこそ思へと歌留多取に鳧	同
天を衝く杉明かにとんどかな	同
嫁が君ことりと宿の夜更たり	同
掛乞の鞆に鍵や初鴉	同

軍國の旗かけ高し初日の出 松月
吾背子の影膳すゑて雑煮かな 同

◆資料104

明治三十八年（1905）一月十四日「東北新聞」（三）

●本日 七日を正月の一段落とすれば本日は正月の二段落なる年越しなりされば舊式に因みて今日まで注連や松飾りをなし置きたる家は取納めて其跡へ繭玉として柳の枝に粳米にて拵らへし小團子を附して祝ふなり又取外したる注連と松飾りは市にては大抵大崎八幡神社へ納めて焼き捨てるなり左れば本宵の八幡神社の祭典はなかなかの賑ひにして裸体詣りと唱ふるものさへ往來する例あり八幡町は一帯に提灯を掲げ物賣など出でて繁るべく殊に同神社は軍神として尊め居れば軍人留守宅の人々の参詣も定めて多からん尚本日は婦人連にはうす紅賣るを買ふて用ふるを縁起よしと流行居れば是又なかなかに賣口あらん△因みに十五六両日は藪入に當れど新曆を用ゆるもの尠なければ茲には省きぬ

◆資料105

明治三十八年（1905）一月十四日「河北新報」（五）

●大崎八幡神社の祭典 當市大崎八幡神社にては今十四日例年の通り松納めの祭事を執行す
●戦時の裸参り 別項所載の大崎八幡神社祭事に就ては慣例によりて裸参りする者時節柄として殊に多数なるべく就中出征者の爲め盡す婦女子尤も多かるべし

◆資料106

明治三十八年（1905）一月十五日「東北新聞」（五）

●八幡神社の祭典 既報の如く昨日の大崎八幡神社祭典は日中より茶番興行露店等あり人出でなかなかの賑ひなりしが夜に入りて一層賑はひ尚白石興産の提灯行列ありき

◆資料107

明治三十八年（1905）一月十六日「東北新聞」（四）

●一昨夜の注連納み、宵の内よりの雑踏は大層なものにて午後八時比に至り八幡町は人を以て埋むる斗りなりしが戦捷祈祷提灯行列の団体は各酒店白石興産市内靴商の連中二百餘名にて華居前にて爆竹を鳴す杯なかなかの元氣にして裸体詣りと唱ふるものも例年よりも數多く露店の見世物の數も多く八幡神社の参詣者は近來稀なる程雑踏を極めたるか中途みぞれ雪の降りしに一時群集が左右に頽れしも忽ち晴れて再び賑ひける時仙台座壮俳青柳一座の出勤俳優が車を連ねて参詣の途中北三番丁路上にて万歳を唱へし男あり一座が無言にて通り過せしは不都合なりと人力車を停めて口争いとなりしも参詣の途中なればとて件の男を宥めて何事もなく済みしといふ

◆資料108

明治三十九年（1906）一月十四日「河北新報」（五）

大崎八幡の松焚祭 仙臺古來の慣例……起りは慶長十二年より
今夜は例年の通り大崎八幡社の松焚祭だが戦争のお正月故松取め方々のお禮詣などもあるべく常には倍して賑はう事だらうと思ふ△色々の舊慣例が年々に廢れて行くにも拘はらず、此松焚祭許りは少しも變る事なく、年々盛んになるので、仙臺市内は申すに及ばず、宮城名取の郡部からも態々松取めに來る△金儲けには抜目のない世の中、近頃では荷車や荷馬車で各戸の松を集む神樂囃しで取めに來るものある、追々は松取請負株式會社と云ふのが市内に出來るかも知れぬ△扱此松焚祭（ママ）と云

ふは東北では珍しい慣例であって六縣下何処にも此習しが無いのみならず、仙臺藩でも唯此城下の仙臺計りで行はれて居つた習慣である△夫に就いては何か面白い縁起でもある事かと調べて見ると別段何と云ふ事でないが此松焚祭まつたきまつりの抑々の起りに就いて少し許り聞き込んだ事を書いて見よう△一体此大崎八幡の落成は慶長十二年であって青葉城よりは五年後れて出来上がった、最も此の社の元を尋ねて見ると、最初は遠田郡八幡村とほだごほりやはたむらに在つたので、八幡太郎義家の建立したのだとか云ふ話である、義家の子孫しもふさのくにおほさきごほりが下総國大崎郡に禄を食んだので大崎の名が此八幡様にも附いて來、夫から飛び飛びに飛んで仙臺の八幡様も大崎八幡と云ふ事になった、政宗公が岩手山に城を築いた時遠田の大崎八幡を岩手山に移し、仙臺に城を築いてから又此地に移したのなそうだ△エライ由來記を述べて了つたが、遠田に在つた時も岩手山に在つた時も、此松焚祭と云ふ者はなかつたが、此地に移つた即ち落成の年慶長十二年に始めて此松焚祭が起つた、初めは至つて微々たる者であつたが年増に盛んになつて來たとの事である△然らば此慣例が突然何處から移つて來たかと云ふにそれは漠然として取り留めた事は判つて居らぬ△併し正月の松を焼くと云ふのは、清浄な者を汚しては成らぬとの考から起つた事で、朝廷の古い儀式にも見えて居り、又九州地方では一般に正月の松を神社の境内で焼くか是をドンドと稱えて居る、ドンドと云ふ事は歳時記にも見えて居るから發句を作る人は知つて居る△ツマリ大崎八幡の松焚祭まつたきまつりも即ち此ドンドであつて其神体が宇佐八幡の分身故九州の方の習慣が何かの場合に此仙臺に紛れ込んで古來の慣例しふくわん（ママ）となつた者と見える△夫は兎に角として若い人方などは炬燵に這入り込んで居眠りしてるより今夜は大崎の松火にあたつて身を淨めるのも結構な事と思はれる△夜は何でも五時頃から焚き始めて九時十時頃が一番盛んに燃え、後はトトロ火が明くる朝迄残つて居る

◆資料109

明治三十九年（1906）一月十五日「河北新報」（五）

- 大崎八幡の松納め 昨日は前夜來の降雪道路に堆く、夜に入りての寒氣一層甚しかり大崎八幡の松焚祭まつたきまつりは案外の人出にて七時頃より九時頃迄八幡町通は往來するさの人織るが如く非常の賑ひなりき
- 曉詣 昨夜は正月十四日とて當市大崎八幡社等への白衣詣はくゝまうで數多あり特に今拂曉ふつげうの曉詣あかつきまうでもあり塩釜神社、竹腰、竹駒社等への參詣も多かりしならむ

◆資料110

明治三十九年（1906）一月十六日「東北新聞」（四）

- 大崎八幡祠の松焚祭 一昨午後六時半頃から松を携へ參詣する者引きも切らず押し出し振鈴の音莊嚴なる境内に普く神々しく拜せられぬ
- △境内の見世物 境内の見世物には活動人形、米國産三色大鼠、日露戦争機關等にて相應の収入ありし様なり
- △境内の松焚 例年に變らぬ松焚まつは非常に盛にて火焰天を焦すばかり寒天微風さへ起したれば寒を暖むるにも焚火の四周に集り物々しく見えぬ
- △各町の賑ひ 平常はちと淋しき八幡附近の町々は往來する人にて街は狭苦しく殊に過日の細雪地に氷り迂り勝ちて散々伍伍手に手を取合ひ押合ふ様例へん様もなかり
- △男女の裸詣り 四五人宛組合をなし一様の提灯を手にし寒天に白單衣一枚洋褌しろひとい へづぼんと云ふ扮装にて行く様古趣を帯びて物珍らしく數十名の多きに達せる事なるが提灯印を覺えし儘記せば福床、三浦硝子製造所、鈴幸金田、杯殊に女の裸詣りは甲斐々々□姿にて衆人の目を惹きたり
- △賽錢箱荒し 幾万といふ參詣人の中には悪人も有る見え賽錢箱荒し夥しく果ては番人を附して警戒するに至りし
- △俳優藝妓の參詣 俳優には青柳一座をはじめ當地の各座に興行中の者何れも花やかな神燈を捧げ車

輻を連ねて勇ましく藝妓連も伍をなして参詣をなせり因に軍隊も神譜を奏して詣でたりかくの如く押合揉合人出多かりしは昨朝二時頃迄續きたりといふ。

◆資料111

明治四十年（1907）一月三日「河北新報」（三）

●新年二十五句

（略）

大書する坐右の銘や筆始	犁雨
官邸に妓家の年玉來りけり	同
舊年の鬼遠のかぬ病哉	黄村
杉森の空焦るまでどんと哉	同
六出で、都まぢかし絵双六	柳翠
御騎初髭に色交ひけり	同

（略）

◆資料112

明治四十年（1907）一月十四日「河北新報」（五）

●今夜の大崎八幡 本日は昔しより後の年越しと稱して歳神に鏡餅を供へ繭玉餅稲穂餅等を作り作物の豊饒を祝ひ曉きに至れば松飾り年繩を卸して粥を焚き之れを供へて氏神の社へ松納めを爲すが當地方の例なれば櫻ヶ岡大神宮を始め各所の神社は男女老若の参詣も多きが中に大崎八幡は一層盛んにして白装束に手鈴の音高く跣足参りの勇ましきもあり松の焚火は天をも焦さんばかりなるが今宵の大崎八幡は定めて賑ふ事なるべし

◆資料113

明治四十年（1907）一月十五日「河北新報」

●昨日の大崎八幡

一月の十四日、松の内と外との岐れ日、家毎に納むる松と年繩とは一括されて鎮守の社に焚るゝのである、此の日に臨時祭典を行ふ大崎八幡はその昔しより今日に至るまで、相も變らぬ人出の雑踏、社内は朝の中に祓はれて社司を始め数名の神職にて嚴かなる神事は行われた、雪はなし、道路はよし、そよとの風もなき午後五時頃より、境内數ヶ所に焚き始めた松飾りの火は如法闇夜を照破して、悪魔も善魔も影を隠して見る目たゞ明煩々たる別世界、來るわ參るわ老いも若きも男も女も、松を抱へて集まるもの無慮何千と云ふも愚か、中にはナニとか八幡を握手の場所とさゝやくもあるべく、ガンガンの響は絶間なく聞えるとチンリンチンリンの音は大鳥居近く進み來るは裸参りの三々五々、多くは酒屋働きの勇み肌、と見ればコハ如何にまたうら若き婦人のシャツ一枚に湯巻ホラホラ、雪も欺く脛もあらはは一向専念のいと殊勝さ、晝尚暗き老杉の彼方此方には物賣る人々の叫びに紛れて星にさゝやくそれもある、堇の末路に泣くそれもある、一領の鏡を持ち來つて之れを寫し出さば如何なるものが現れやうか、夜は浮世の雑踏に更け行きて、社内はますます大混雜、此の時、會社工場連合の提灯行列は火影一團の珠數を作つて社の前に進み來る、こは六時を合圖に鉾山監督署前に集合し本社前に萬歳を唱へて、停車場より名掛町新傳馬町大町二丁目を引返し辻より國分町北一番丁同三番丁を練り廻して今しも此處に來たのである、社前に至るや奉納額を神職に渡して一同休憩した、神職はこれを内陣に納めて祈りを捧げしが、さしにも喧囂を極めた境内も一時は水を打たる如く森肅とした、我れは鍋焼うどんの喰れた聲も遠く聞ゆる八幡町へと退却した、後ろを向けば焚火の炎焰鬱たる杉の梢を

漏れて天に樺色の幕を張った、町内各戸の軒提灯に娑婆の闇路を照されつゝ、なほ押しかくる参詣人の波を潜ってホット一息吐いたのは早十一時（みどり）

◆資料114

明治四十一年（1908）一月十四日「河北新報」（二）

●大崎八幡の松焚祭

今夜は例年の通り大崎八幡神社の松焚祭だが此松焚祭と云ふのは當大崎八幡でばかり執行するので東北地方では多く其の例を見ない凡ての舊慣例が年と共に廃れ行くにも不拘この大崎八幡でやる松焚祭のみが反對に其起源の當時より日に月に盛んになって行く此松焚祭は何年前から行はれてあるか其本社とも云ふべき遠田郡田尻町字八幡なる郷社大崎八幡神社では此舊慣はないそれから見ると其後のものであらう政宗公が岩出山に遠田の八幡から大崎八幡を遷宮したが間もなく仙臺に城を築かれてから當市に移した岩出山邊の神社の何處にも此松焚祭と云ふはない此起りは慶長十二年に始めて起つたので仙臺に移されてからなのである此慣例は慶長十二年に至つて突然起つたが問題であるが委しいことは漠然として取り留めた事は判つて居らぬが多分九州地方からの習慣が何かの場合に紛れ込んだのか又は政宗公が持って來られたのかの二ツにほかならぬのである九州地方では一般に正月の松を焼くと云ふて清浄なものを汚してはならぬと云ふ處から起つた事で朝廷の古い儀式にも見えて居る大崎八幡はその神体が宇佐八幡の分身故自然政宗公が加へたのであらう九州地方でやる松焚祭は歳時記にも見えて居つて舊き習慣である朝廷では御神樂などの時に禁中の庭上に焼く篝火がある之を庭燎と云ふて居るが庭燎の起源は芝居即ち俳優と其起源を同じであつて天照皇太神が天の岩戸に隠れさせ玉へる時天の細女命が可笑しく面白き手振足踏をして歌ひ舞ひて神の御心を和げ樂ましめた時に庭燎を焚いたに起因して居るそれを神事に用たのが今の松焚祭の時にも行ふやうになつたのである神樂が廢れて清浄なる松を汚ざる爲めと云ふ處にばかり重きを於て來たのらしひ今宵は定めて賑ふ事であらう（白村）

◆資料115

明治四十一年（1908）一月十四日「河北新報」（五）

●松焚祭伊達伯名代差立 今日大崎八幡神社松焚祭執行に付き参拝の爲め伊達伯爵名代差立てらる、筈なり

◆資料116

明治四十一年（1908）一月十六日「河北新報」（四）

裸参り

自分の行く手に一隊の裸参りが練りて行くのがある、駆け抜けてそれを見ると、金棒を引いた壯者が二人先頭に併んで行く、後から續くのが七人、都合九人の一隊である、手に提げた提灯の屋號が一々違つてる所を見れば、何れ近所の信神同志が申合はせた一隊であらうが、金棒に至つては蓋し大に發展したものだ、人數に於ても又た形式に於ても、この位に振つたものはこの夜の裸参り中で恐く無かつたやうだ、尤も樂隊に萬燈に鬼灯提灯といふやうに、丸で救世軍式な森徳座の一隊や、又た座の名と各自の名とを染め抜いた鬼灯提灯を差し上げて、車に乗った仙臺座の一隊など、大々的に發展したのはあるが、（略）

◆資料117

明治四十一年（1908）二月十五日「河北新報」（五）

●明日の曉詣で 明日は舊正月の十五日に相當すれば市内にては大崎八幡、東照宮、毘沙門、愛宕、

その他最寄りの神社又た近在にては宮城野八幡、木下白山など例に依りて暁まいりの人にて賑ふなるべし

◆資料118

明治四十二年（1909）一月十四日「河北新報」（五）

●大崎八幡とどんど 市内八幡町大崎八幡宮にては本日午後四時頃より翌十五日に亘りて松竹、注連を焚くが舊例なるが昨年の如きは松竹注連を持ち來たれる者のみにて實に三萬二千餘と算せられこれに参詣者及び見物人等を合する時は無慮五万人の人出なりしと云へば本日も定めし人出多かるべく仙臺警察署にては混雑を避けん爲め正服及び角袖巡查數十名を派遣して是が取締をなさしむる筈にて八幡町入口より先は乗車を禁ずる由なれば参詣者は右心得置くべしと云ふ因に本年度は例年に比して興行物少なく唯だ活動寫眞あるのみなるが例の裸体参りは定めし見物なるべく仙臺座の山口定子一座五十餘名も一座打ち揃ふて参詣をなすべしといふ

◆資料119

明治四十二年（1909）一月十六日「河北新報」（四）

●八幡詣り 一昨夜の松焚

△松の翠緑を負ふて行くのは男である、小風呂敷、包むに余る年繩を下ぐる女は、連れ立ちて刻足、道は凍て、雪に音あり、カラコロと人は流れて指す方は八幡宮である、宵の七時の道路は行く人ばかりだ、角脇飴屋の火は是より八幡宮道の標榜らしく、十二軒丁の石屋が、降積む雪の石燈に燭したのは折柄の思付きで振って居た（略）△打振る鈴に、薄衣参りの白衣の人が黒きを分けて行くが中に、婦人のそれか夜目にも著く打上りたる姿、人目包みの深く陰くれて、何事の祈念を籠めての信心であらう、群集を避けがちに行くのがあった、來るものは菊池商店の淨衣の一隊である、先達が金鈴の音に、威容を正して腰にメ繩口には淨紙、静々と練って行く、續いて一團また一團、遠のく鈴に近づく鈴（略）△八時の石段、己に参詣を終つた仙臺座の一連を交へたる群集は瀧瀬の如く下る、湧く如く打ち寄せた参詣者は潮の如くに上る、上るものと下るものと狭き石段は身動きが出来ぬ、積雪は满地を覆ふて居る、樹梢の白雪は未だに地に委せぬ、この銀白浩たる中を一道の黒き人の流れが揉みに揉むのである、空際に戦うのは各自の提灯と提灯だ、百級の石階は何時達すべくも見えなかつた△馬場の松焼は壯観である、來るものも來るものも、一把の松にあらざれば一擔の其である、盛んに燃ゆる上へと投げ込む、白烟は高く上って、松葉の香が四方へ広がる、ヤッショイの掛声で運ぶのは小山の如きもので、町内連合のものであらう、それが殊に氣勢を挙げた△拝殿の八時三十分、社縁に並んで蹲くまる薄衣詣の雪白の人五七人、神官は敬しく御幣を持して祓い清める、神酒をいただきせる、懐中守札を与える、この同勢の引き返すを待たず、又五六人が並ぶ、今年は参詣者は少ない様ぢやが薄衣詣りは変らぬ百人は超えたとの事である△神社の敷石は、凍てて凸凹の足元頗る危険だ、『アレお駒さん』なんて頻りに転ぶ、下る長い石段は一步は一步と危ふくなる、爵時の油断も出来ればだ、それ阿嬌を伴ふお人こそいや御心配であらうと

◆資料120

明治四十三年（1910）一月十五日「河北新報」（五）

●昨夜の松焼祭 當市八幡町大崎八幡神社に於ける松焼祭は例年の如く昨夜執行されたり今年は凍雪の憂ひもなく至極平穩なる天候とて八時頃よりポツポツ人出があり十時頃に至りては木町通り北三番丁より八幡町通りは人垣を以て埋まるばかり巡查は聲を囁らして左側勵行を叱咤するも功なく社頭より境内には種々の興行物の客を吸引するに忙はしく雑言はん方なく境内馬場には例の如く盛んに各

戸より納むる松飾をドンドン焚き火炎は天に押し恰も白晝の如く其壯觀は年に一度の見物なりき斯くて宵よりの人出は鶏鳴を告ぐる頃に至りて散ずると共に今年の松焚祭は終りを告げたり

◆資料121

明治四十三年（1910）一月十六日「河北新報」（三）

●壯觀なる松焚祭 △丈餘の火柱天に押し △八幡社境内は人の波
チリンチリンといふ□しい鈴の音、歩みを止めて□□へると、白襦衣しろしやつに白股引しろももひきの若者が七名、軽快な装でハイヨーと鬨を作つて、雪崩せんばかりの人の雜鬨を分けて走る、此の寒詣での一隊が通り過ぎると往來はまた數知れぬ下駄の音、締りないさんざめきの聲で充たされる、行く人の松と来る人の肩とが叩き合つて、流石に廣い大通りも人の畝を作つた、(略)是非なく鳥居の左側に立つて居ると前の人後ろの人の間に挟まれ歩むとはなしに、身は押されて何時の間にか石壇の上の馬場に持つて行かれた、忽ち左に火の柱が立つて何丈といふ上まで高く燃え上る、焰の唸りは凄まじく松の木立の間に響く、近よれば早や幾百の人の詣でし後と見えて、火柱の音は高く山を成して五六間の間に跨がって居る、而も猶ほ詣づる人の限りなく左右前後から門松が投げ込まれる、半ば枯れた松竹はパチパチと音を立て、焰と共に空に沖する、上つた焰は空を焦して、火花は杉並木うらぶの上に美はしく散ずる、其壯觀や實に言語に絶する程、百人百色の老幼男女は十重二十重に火を圍繞して拜んで居た徐に歩を社前に進めると、忽ち拍子木の音、鐘の響き、三味線の音などが、交々耳に波を打たせる、一寸二錢見世物が三つ四つ並んで居た、不具娘の藝當、地獄極楽、鼠の藝、それから女軽業であった何れも大入りで、看板先には數知れぬ人が黒山をなして、懐勘定をして居る、(略)夜の更けるに従つて人出が増して来る、藝者の一隊が来る、役者の一隊が来る、火は漸く下火になったが、猶ほ火を囲む人が減らない、松焚の廣場は益廣く、灰は八尺以上も高く積つた、社内に集まる人、焚火の傍に立つ人、祭壇に進む人等、行きも切れず、斯くして東雲の白むまで八幡社境内は終夜人の波を打つて居た

◆資料122

明治四十四年（1911）一月十四日「河北新報」（五）

●大崎八幡の松焚祭 今十四日は例年の通り八幡町の大崎八幡の例祭なるが恒例の儀式ありて炎焰天に押し其壯觀他に見るを得ざるべし参詣者は翌十五日朝に至るも絶えざるは例に依つて例の如くなるべし其他市内の各醸造家の薄衣詣りうすぎまきなどもあるべく今夜の八幡町は非常の雜踏を告ぐる事なるべし

◆資料123

明治四十四年（1911）一月十六日「河北新報」（五）

●一昨夜の松焚祭 △近年珍らしき良夜 △押な押なの大群集
例年の一月十四日夜は市内各戸の戸の松飾りを徹して之れを八幡町の同社へ納め又北四番丁の松尾神社、大町一丁目頭の櫻ヶ岡神社、荒町毘沙門天堂その他へも持参して神火に附する慣はしなるが別けても同夜は近年に無き晴夜にて風も無く道も好く婦人小兒も参詣し易かりしかば市内各方面より転ばぬ要心に靴、草履などを穿ち八幡町指して急ぐ人引きも切らず午後六時頃より土橋通以西は押すな押すなの群集にて神殿と坂下なる大鳥居迄の間の如き上ると下ると全く動きのつかぬ程其間を冴ゆる鈴の音勇ましく三人、五人、十人と間々女人を交へし寒詣での組々白の鉢巻白装束弓張堤燈片手に上下するより左側通行勸行の警官は世話のやけること一通りならず十時頃ともなりて雜沓一層甚だしく午前一時頃迄は只揉みつ揉まれつ御坂おさかを上下し居たり御坂の兩側には市内主なる店舗の献燈あり神殿に出づれば一般参詣者の外に寒詣で連の所謂お堂を三返回りて神酒の馳走あり堂門前向て右側には女劍舞、怪動物、玉乗り及び鳴子涌谷其他洪水山崩れの見世物等ありて何れも見物人多く見受けらる又南

方の廣場には七八間四方に注連繩を張り神官と警官消防夫にて万一を警め參詣者の持來れる徹松を神火に附し居りその嵩四五間四方に二間ほどの高さともなりて燃ゆる火炎に黒煙を上げ其の煙の中に高く寒月の皓々として掛れるを見透されたり斯くして昨日午前二三時頃迄人の往復絶へず御坂の下より八幡町全部の兩側土橋通角殊に木町通附近の菓子屋、芋屋、蕎麦屋、おもちゃ屋等を始め辻商人賣卜者、読賣等彼處此處に割居して相應に實入りもありたるが如かりしも街路は多數參詣者の爲め踏み堅められ玻璃鏡面の如くになりしより紳士や歩行になれぬ婦人連を始め酔客などのお尻を打つも多かりしは氣の毒に見受けられたり

◆資料124

明治四十五年（1912）一月十四日「河北新報」（五）

●八幡神社松焼祭 仙臺市八幡神社にては今十四日十五日年始例祭に兼ねるに恒例の通り松焼祭を行ひ軍人軍属各事業団体の參詣ある可く曉かけて伊達伯爵御名代を始め近郷近在の參拝者頗る多かる可き餘想にて境内は非常のものなる可しと尚興業物も數箇所が開場する由なるが石工高橋嘉兵衛氏は花崗石を以て二丈余の龍燈と名くる石燈を献納し頗る見事なり因に松メ繩等は毎年の通り無代價焼却す可しといふ

◆資料125

大正八年（1919）一月十五日「河北新報」

◇松飾り去る日

底氣味の好からぬまでに季節外れの温暖を呈し居たる数日來の天候も十三日夕刻よりの少々強かりし北風に依然小寒最中らしき寒氣と變じ粉雪さへ降り積みて昨十四日の市内は門松の影の消え行くと共に例年通りの松焚祭日和を現じた、早朝から市内の大路小路は幼児の今日を晴れと着飾つたチャセゴの

◇産衣姿 の美麗さに賑はつた、粉雪のチラホラと飛び交う間を友染模様を背に垂れて背負つた本尊の幼児より背負つた御當人の得意相な乳母婢女の初春らしい顔や何時見ても品の好い黒五ツ紋の産衣に男子の誇りを示す顔の母御の姿等が彼方此方と行き交ふた、夕方からは例に依つて此の寒天も何のそのと言つたやうな

◇寒詣姿 の凛々しさが勇ましい鈴の音と共に大崎八幡社を指し繰り込んで行く、八幡社境内はこれも恒例に依つて松焚の火煙が高く天を焦がし非常な雑踏を呈した、斯くて仙臺名物松焚祭の一夜も明けて今日十五日は

◇曉詣の 人影に往来は未明からカラコロの凍路を踏む信女善男の下駄の音に賑ふことである

◆資料126

大正九年（1920）一月十四日「河北新報」

松焚祭を最後に 仙臺の松除き

仙臺の松の内は本日の八幡町大崎八幡社の松焚祭を以て打止めとなり門松輪飾りは芽出度く巷の軒々を撤回される大正九年の正月気分は古式な「錢持ち金持ち寶持ち」と巷に良家の子弟にまでも許容した門付けの聲も聞かず十四日間の行樂はただ一宵大崎八幡境内の松焚のほのふと共に空高く遙々と消いて行く例年の吉例酒造店各商鋪の店員の裸詣り松を手にした家々の男女は一年の願ひ事と無病の祈りを松焚に托すべく八幡町は異常の賑ひを呈することであらう殊に今年は桃の花も咲きさうな暖かさだからかとかど宵からは大變な人出であらうと思はれる

◆資料127

大正十二年（1923）一月十四日「河北新報」（二）

松焚祭 市内大崎八幡神社の松焚祭は恒例により十四、五の兩日間執行されるが献膳火伏祈祷の祭事伊達伯名代の参進ありと尚薄衣詣りは東洋醸造の百二十餘名を筆頭に多数の申し込みあつて異彩を放つべく町内は各戸献燈及裝飾し煙花を打揚ぐる等種々の催しが計畫されてゐる八幡町及八幡自警團では万一に備ふべく徹宵警戒する由である

◆資料128

大正十二年（1923）一月十五日「河北新報」（二）

松の別れ 今晚の大崎八幡

大正十二年の年頭を壽く日もいよいよ今日一日を限りて行樂は盡きる人生を幾つかに割つて一つ一つと世態を度量りして行く松飾や注連繩の芽出度気分も今日は一束に荒繩に引括られて社々の松焚の煙と消えて行くこの名残の正月に残る土俗の傳説は松焚の火に暖を取れば本年一年の病難から免れることが出来るとやら信疑は兎に角本夜の松の別れは市内大崎八幡神社を筆頭に教樂院丁のお大日様等の各社は正月のお拂ひに門松を擔ぐもの日頃の信心と否とを問はず賽者踵を踏むの雑踏を呈するのが仙臺市一行事としての偉觀で就中この日を以て曉詣りと唱へ年重ねの日と定めている田舎の人々も大分あるやうであるから本夜から明朝にかけての松焚祭は實に元旦三ヶ日七草に次ぐ然も有終の美をなす正月の別れである例に依つて當夜は天の美祿の芳醇に水の幸と米の幸とを願ぐ各清酒醸造家杜氏連並に各商店員の肉體美に健康を誇る裸形の寒詣りが寒空に振鈴の音も高く白紙を堅く一文字に口に咬んで街々を練り遠く八幡社に詣ずるの壯觀が勇ましくも眺められる筈で幸に夜は霽たりさだめて八幡社前百幾階の石燈は押壓されるやうな混雜を呈すると思はれる

◆資料129

大正十二年（1923）一月十五日「河北新報」（三）

松焚祭り

名目は歳重ねの曉参りだが事實は新宵詣りの松焚祭、空は震たり地は堅く凍て付く草履道 嚴冬寒國の大路小路に先ずこれ程の人出をみる事はまアあるまい、年中の書入れを只この一日に集中した

大崎八幡 神社の境内は朝来隈なく粧を凝らし百燭の電燈を総門に輝かして如法暗夜に瞬く常夜燈に代へ神殿には百匁二百匁の蠟燭幾百燈光明赫灼と燦き渡つて神巖端然と詣者に備へてゐる市内並に近郊近在から芽出度き正月の供え者を擔いた連中は上り詰めた石磴の左側杉立木の中を拓いた一平地に午後六時半を期し炬火一仄の炎を投ずると同時にドンドンと

松飾りを 投入れる見る見る火光は天を焦して空紅々と夕映の心地する頃から灯に誘はれた蛾の様にイヤ出るわ出るわ、二重廻し長マント目出し帽子角巻御高祖寒夜にめげぬ老若 幾千幾万正送りと云ふ奴で眞黒々に八幡社へ押しかける、八幡町道筋は爪も立たぬ大雑踏、折柄の

成金振り に自動車を駆つた放蕩者も棍棒で人を搔き分けやうとした花街の婀娜を乗せた人力車もこうなつては動きが取れず「何だつてこんな處へ曳込みやがるんデイ」と疝癪玉が破裂して若い輩から張り倒されたやうという雑踏が一人二人、三々伍々勇ましい寒詣りの裸が鈴を響かして通る午後八時半頃からは益々激しく社前の石段は全く□頭

相反錯し て一進一退の信神氣を失つて罵り合つて居るのは何時もながら奇觀である、かかる故に神殿に喧しく耳を聳するばかりに鈴、鰐口を響かして一身一家の万榮を五銭十白銅まぢりに格安に願ふ人々の賽銭は市の道路にスポンヂボールを投げた様に前方の人々の頭と頭をバンドして何處へか飛んで行く、神様も全くこうなると應接に違があるまい

千手観音などは全く考へたものだと思う、午後九時十時十一時はいやが上にも彌まさつて其間には例の壯観フジビール會社大集團の寒詣り菊池鳳山杜氏連の関取土俵入然とした骨格の注連に飾つた裸形の偉軀等町々の歓美の中心となつて祭典に一異彩を放つて居た、續いて市内興行界仙臺座歌舞伎座の俳優連活動寫真館関係者の一行が樂隊のドンチヤン囃しで賑かに

練り込んどんとぎいで来る午後十二時過ぎはお座敷明の藝妓連で又艶つばい賑ひを見せて居る、斯くして十四日松焚祭は松焚の煙の空に絶えぬ十五日の暁かけて拍手と鰐口の音が斷續して非常な盛況を見せて居た

◆資料130

昭和二年（1927）一月十六日「河北新報」夕刊（二）

松焚祭も 寒詣りも 今年に至って 寂寥だった

正月十四日深更から十五日の暁にかけて人出と門松送りに賑はふ仙臺行事の一なる當市八幡町大崎八幡のどんと祭も諒闇の初春とあってすべてが至って淋しく人出も例年の五分の一に足らなかったしめ縄や廣□旗などに美しく飾られる八幡町一帯の街路も今年は遠慮して何等特殊な装飾を施さず興行物の掛小屋から流れる樂隊囃子の音も賑やかな境内も今年は猿芝居がタッターツかけられたゞけであった名物の松焚きは持ち寄るべき門松年縄がない爲いつものやうな炎々てんをこがし老杉の梢を照らすといった壯観はなく古い神符やす、けた達磨の四つ五つを燃やした位のものであるそれでも曉詣あかつきもうでの人足絶えず市内各神社佛閣も相應に賑はつたこの行事の附き物として名物の一つにかぞへられてゐる白衣姿はくいすがたの寒詣りかんまゐも例年通りの大袈裟なものは見當らなかつたが三人四人一團のそれは可なりあつた十四日深更から十五日午前四時ころまで大路小路に凍土を踏む蹠音をたゞず自動車も頻りに縦横に飛んだ警察事故も少く泥酔検束者一名拾得遺失の届出各一件よりなかつたかくてどんと祭の一夜はさびしく明けた

◆資料131

昭和六年（1931）一月十四日「河北新報」

ドント祭の警戒 市内電車は運転時間を延ばし バスも運転區間延長

仙臺警察署では十四日夜のドント祭は昔からの大崎八幡社の外に櫻ヶ岡大神宮、東照宮、釈迦堂にて同様執行し荒町の毘沙門堂からも届出があるので十三日山本署長が幹部議の上火防班、交通班及び風紀班を組織し取締まる事となつたが、電車は十五日午前二時まで運転し、市街自動車會社延ばすは従来北三番丁新坂通り角まで運転を許可してゐたが同區域を全然安全地帯とし本年は大學病院前を西進して土橋通北三番丁丁字路まで運転する事となり、一般自動車は新坂通佐久間伯邸脇から中島丁を経て八幡社に出で歸途は北五十人町角角五郎丁を澱橋へ一方通行することに制限した。

◆資料132

昭和六年（1931）一月十六日「河北新報」

織るよな詣りの人波 天を焦がす淨火炎々 昨夜市内の松焚祭

ゆふべは松焚祭だ、松の内お正月も一夜の名残り。昨日市内大崎八幡神社では社祠、神官一同潔齋朝から神域を淨めて宵をまつた。雪空に人出の程を氣づかつたものの宵の頃から注連縄松を擔いだ老幼男女が凍てついた石段を押すな押すなと上り始める、七時、八時人の流れがいよいよ絡□と動く、身動きが出来ない、列が前へ揺れる毎に社殿の鈴が神閑たる暗やみに訝してお燈明の大ローソクが静かに揺れる石段上の左の空地では一歳の嘉壽を祈り籠めた松が炎々と天にさかる淨火の中で山を築いていく。境内には見世物小屋が二つ……ジンタならで銅鑼がヤケに肝かん高いろんな食もの屋が詣路の兩側

に所狭く陣取って参詣歸りのお客さんにノドを涸らす、踏みならされた雪は坦々砥をなして滑る、轉ぶ轉ぶ。丸鬚が腰を折って、大學生が尻をつく毎にヤンヤの喝采が大向ふの詣客から爆發する。轉んだ當人は縁起轉びだとして笑ひながら立上る。

思ひ出したやうに雪が霏々として降り舞ふ、この中を岩久酒屋その他の哥兒達が裸詣り、酒宣傳の堤燈も抜け目がない、この中を覺醒會所屬の連坊小路青年團、婦人野外宣傳部、市電禁酒會、石心會、仙臺青年禁酒會、作興禁酒會の青年會員總勢六十餘名が青年惡風の基は酒と神前にブドー液をお神酒に献供し禁酒運動を祈願した。

神社前から土橋通りまでの八幡町道路の兩側はけふ一夜にはか菓子屋と化けて鳩おこし、ネジリが飛ぶ様に賣れる。十時、十一時夜心深くなるにつれて往くさ歸るさの人の群が大□のやうに織る□□□客を吞吐しきれない、打上げる花火は夜を通じて冲天に花を描く曉方かけて粹な花柳人の曉詣りあかつきまゐでドント祭の幕が閉ぢて行った。

當夜は大崎八幡の外に市内では今年始めて西公園の櫻ヶ岡神宮荒町の毘沙門天、釈迦堂の天神宮、宮町東照宮、北三番丁の松尾神社でも松焚祭を舉行それぞれ一夜詣客に賑はった。

◆資料133

昭和七年（1932）一月十四日「河北新報」（二）

青葉神社でもどんと祭 裸詣りの申込みが非常に多い

近方の便宜をはかり青葉神社でも今年から境内において仙臺名物である松焚祭を執行することゝなったが、十四日宵から撤宵で古い神札や松飾りをお祓祝詞を白して淨火で焼き上げる、同時に水防鎮火祭と満洲派遣軍の武運長久祈願祭も行ふが裸参りも既に伊澤酒造店其他から申込みあり、花火打揚、奉納神樂等相當賑はふべく通町北鍛冶町其他五ヶ町では大いに意氣込んでゐる。

◆資料134

昭和十三年（1938）一月十五日「河北新報」

月明に映ゆ御神火 一入威勢よき裸詣 仙臺名物どんと祭

お正月に名残惜しむ

懐しいお正月に最後の名残を惜しむ松焚祭は全國的に種々形態の異なつた珍異風を見せてゐるがとりわけ仙臺のお國自慢とんど祭の壯觀は恒例によつて十四日の宵闇迫ると、もに豪華な幕をひらいた

【若】い男の意氣を見てくれといはんばかりの裸参り衆は南京一番槍そこのけの大元氣で高々と差上げた弓張堤燈を尖兵として沐浴齋戒した逞しい身體にメ繩を締めハイヨハイヨと一列縦隊で街々を練り歩き目標は一つ大崎八幡へ續々と押寄せる夜が更けるにつれて沿道筋となつてゐる北三番丁、十二軒丁、國分町、二日町などは怒濤のような一般参詣人で埋め盡されて了ふ、夜明けまでの人出無慮四万と註せられ今春は輝く戦捷せうに湧き上る民衆の感激を乗せて物凄**い**ばかりに壯絶な情景を綴つてゆくタクシー通路に指定された澱橋、瀧前丁、角五郎丁界限は蜿蜿長蛇のやうな

【自】動車の大群が光芒の障壁をつくる有様社前では肌をつんざく酷寒を衝いて若い衆がザンブザンブと勢ひよく水垢離をとる群像も炎々と夜空を焦がす焰の反射をうけて何かしら神々しいものを感じさせる、淡い月明は亭々たる老杉の梢を透して美しい、拜殿の神鈴は皇軍の武運長久に赤誠籠めて打振る参詣者の勢ひでもぎ取られんばかりの騒ぎだ、「まとひ」や「捻りおこし」「名物甘酒」「戦勝飴」等の賣出しも素晴らしい景氣だ、戦捷の春にふさはしく参詣する娘たちにもめつきり日本髪が殖えるところ明るくほ、笑ましい日本趣味の洪水が大戦祝賀、景氣回春、

【豊】年万作の渦巻く歡喜と昂奮が伊達藩獨得のどんと祭に捌け口を見出して火山口のやうに奔出したので、大崎八幡以外にも東照宮、青葉神社、松尾神社さてはなまめかしい小田原遊廓等々でも松焚

祭がそれぞれ盛大にとり行はれたので、全市の夜空は終夜赤々と燃えさかり静かに暁を迎へたのである

= 寫眞は炎々天を焦す御淨火（上）と寒水をザンプとかぶり沐浴、裸詣りする兄イ達（下） =

◆資料135

昭和十四年（1939）一月十五日「河北新報」

石段も揺ぐ人の群 徹宵淨火に祈る 戦時色 昨夜の松焚祭

【仙臺】 興亞新春を多彩に飾るお國自慢松焚祭は十四日夜の大仙臺を異常の亢奮に包んだ、風が落ちて静かな夜空に風冴えるころともなれば市内大崎八幡を始め東照宮、青葉神社、松尾神社、亀岡八幡などはお正月に名残を惜しむ無慮數万の老幼男女に埋められ門松を焚く炎々と天を焦す御神火は長期建設の幸多い發足を約束するかの如くまた參拜者に銃後尖兵の決意を促すかに思はれた = 寫眞は淨火を囲む人々（上）裸詣り（中）蜿蜿參拜の人の群 =

.....

聖戦第三年目の松焚祭だ、時局柄ではあるが、

武運 長久、戦捷の春の喜びをこめて北三番丁から大崎八幡神社の門前まで例年の如く屋臺が並び捻りおこしがブラ下がつてゐる、花火も時折打ち上げられる、正午ころ八幡町小學校の全兒童が參拜したのを始め晝間は門松、注連繩を焼いて正月を返上しつゝ、武運長久を祈る敬虔なる參拜者が踵を接してゐたが、暮れ方市内某店の哥兄連が凍てついた大地を裸で走ってくる頃になるともう興奮のゑつぼだ、社務所前の空地で焚かれるお正月の名残は空地を取り圍んで天に聳ゆる幾百年の老杉の梢よりも高く一晚中

燃え 續けてゐる、ところてんの様に押し出されて來る群集の間を縫つて裸の若者達は神社前で寒水を浴びて祈願する、群集の中に交つて驚異の目を見張つてゐた在仙某外人達の目にこの日本的風景は何と映じたか九時十時と更けるにつれて參拜者はいよいよ多く暁までその延人員四、五万といはれた、バスは大學病院以西は終夜運轉休止自動車の一方的進路である北二番丁、北五十人町、中島丁方面は流行兒ダットサンも加へ「踵を接して」ヘッドライトの切れ目のない光芒を作りながら驀進してゐる、中に日本髪の花柳界の花形がおさまつてゐるのも

例年 通りの光景であつた

◆資料136

昭和十五年（1940）一月十五日「河北新報」

お國自慢の松焚祭 裸詣も銃後の意氣で

【仙臺】 紀元二千六百年の新春を飾るお國自慢の松焚祭は十四日夜から暁にかけて仙臺市内各神社一齊に執行した、折柄の降雪で眞白に清められた參道を參詣人で埋め、大崎八幡神社は無慮數万の人出、天を焦がす松飾りをやく御神火を圍んで賑やかに“政變、後繼内閣”と時局の流れが反映してゐる、二千六百年はこれで行かうとばかり商店キネマ、個人等零下五度の酷寒を物ともせず、水垢離をとつての裸詣に意氣を示せば、子供や夫の武運長久を祈る婦人の裸詣りも少くない、なほ仙臺放送局では水垢離とる實況を録音にをさめ、來仙中の小説家平山蘆江氏は十年來構想を練つてゐた二千六百年を記念すべき現代日本小説の完成を祈願すべく五十九歳長崎生れの雪知らずの老軀で裸詣りをするなど燃え上る淨火と共に參詣者も後から後からと今朝までつゞいた、この日仙臺市電、バス等は運轉時間を延長して參詣人の便を圖り、仙臺署、北三、八幡町青年團、戸主會、警防團員が出勤交通整理に奔走沿道の各商店は営業時間を延長して名物“おこし”販賣戰を演じた（寫眞は裸詣）

◆資料137

昭和十六年（1941）平山蘆江「天賞裸参り絵巻」

昭和十五年一月十四日

奇縁ありてわか天江富弥氏にさそはれ仙台に松焚祭を見る

天江家の実家丸屋勘兵衛ハ青葉城下に名高き旧家の酒造家なり

嘉例としてこの夜大崎八幡へ裸参りする行事あり

有縁の衆として且ある心願の仔細あり

おのれもまた裸参りの一行に加はる

夜八時お蔵の前に勢揃ひをして

一行三十余人高提灯を先登に

お蔵のまはりを三度まはりて

のっしのっしと大またに力あしをふみしめつつ

約三四丁はなれし大崎八幡へまゐり

御社殿の雪をふみつつここも亦

三度まはりてお神酒を頂き

社殿のどんどの火焰中に

ごほうじめを投げて

おまゐりは終る也

その日を思い出を偲びつつ 辛巳画

平山蘆江

かしわ手三度打ちて水を三杯あびる

白木綿の行衣に大きな牛蒡じめを腰にまき

向鉢まきをしめ口に力紙をくはへる

片手に振鈴

片手に提灯

辛巳正月再び大崎八幡に賽す

このとし丸屋は新築なりて裸参りの行事亦賑やか也

辰どしは寒さ殊の外強く根雪悉く凍りて

肌をつんざく寒風烈しかりしが

巳どしは我が故郷長崎の冬とおなじほどの温かさなり

夜九時頃おまゐり終りて夜あかしの酒宴あり

かくし藝いろいろ

藹々たる和氣の中に行事を終わる

昭和辛巳

早春

平山芦江

先登は高はり提灯
ご主人名代文弥君
杜氏の親方
十九歳の青年 この人威勢甚だよく道々闊歩せり
御神酒
おさかな
おそなえ
武運長久

◆資料138

昭和十九年（1944）一月十五日「河北新報」（三）

決勝祈る裸詣り 仙臺の松焚祭の賑ひ

仙臺恒例の行事松焚祭は今年も十四日夜大崎八幡に相も變らぬ賑やかさでくりひろげられた

新春の夕空はくつきりと晴れ渡り北斗の光芒も決勝を約束された新しい年を祝福するやうにまたゝいてゐる

市電は七臺を増發、終電を一時間延長して十二時まで運轉、次々と吐き出されるごった返しの人・人人の群も恒例の郷土藝術のなつかしさをたゞよはせてゐる、拜殿の大鈴、小鈴は戦捷の春の喜びを謳ってひっきりなしに鳴り通してゐる

鈴の音、拍手、拜殿の前に目白押しの群れの面をなで、賽銭が流星の様に飛んで快よいひゞきを投げる、やがて裸詣りの屈強の若者達が善男善女の群をかきわけながら參道を進んで来る揃ひのさらしの肌着一枚夜目にも白く清浄に進む中には上半身素裸の青年の姿も多い

「こんな元気のよい裸詣りって今年あ始めてだ」

素裸の逞しい背を見送って、そちこちに驚きのさゝやきがもれる、境内に積まれた正月飾りは、今年は防空上から松焚は中止、例年なら神域の夜空をこがした大松焚祭はこの宵はみられず夜の明けはなれるのを待って行はれた【寫眞】松焚祭

◆資料139

昭和二十三年（1948）一月十五日「河北新報」（二）

どんと祭・雨でお流れ

仙台名物大崎八幡宮どんと祭（松焚祭）は折からの寒の雨でお流れとなった、この日市電では増發運轉を行つたがかんじんの參詣人はちらりほらり“□まらぬお祭りに火はつけられません”と神主さんはどてら姿で語つた、十五日夜は□□□でもやるそうだが折から仙臺一帯は停電、時折參詣人の振る鈴の□がさびしくひびいて裸詣りも荒町から来たという婦人がただ一人、天をこがすばかりの火にいるどられた例年と打つて變つた黒一色のどんと祭だつた

◆資料140

昭和二十四年（1949）一月十五日「河北新報」（二）

浄火に集う數万 どんと祭裸詣り返咲く

十四日夜は仙台名物のどんと祭 大崎八幡神社の神主さんがこんな暖かいどんと祭は二十五年ぶりですというように寒中とは思われない暖かさに午後六時過ぎころから子供づれの人出が目立つて多く最

盛の九時ころは実に数万に達し臨時増発の市電、市バスはいずれも鈴なりの満員、参道には昔なつかしい一本百円のねじりこしやきりアメも復活するし繊維事情のきゆうくつさから途絶えていたという名物裸参りも市内酒造店一団体の若い衆達がそろいの真新しい白パンツで元気よく参加あかあかと燃える浄火に一段と景氣を添えたが人こみをねらつた教組の正月選挙舌戦は境内ご法度とあつて鳥居の外にしめ出され電車道路にトラックを並べて道行く人に声をからして呼びかけていた

【写真】 にぎわう「どんと祭」

◆資料141

昭和二十七年一月十五日「河北新報」夕刊（二）

餅花街に香る、松飾りさようなら

「もち花」正月の飾物、みず木の枝にもちの小玉をさまざまの色につけて神前に供え五穀豊穰を祈る（歳時記）

きょう十四日はもち花が松飾りにかわって家ごとに飾られる、農家では太古よりの行事そのまま、天井をお、うほど大きいもち花の下で一そろつて新しい年の農作を祈る、仙台市内の各商店でもこの日門松を大崎八幡神社に納め、もち花を飾つて一家安泰、商売繁盛を祈願するのだ

（写真）もち花売り、

◆資料142

昭和三十年一月十三日「河北新報」夕刊

ほんのり春の気配 街を流すモチ花売り

○…仙台市内にモチ花売の姿がみられる、あすは“正月の十四日”戸ごとに松飾をおろし、ほこりをはらってモチ花を飾る日である。

○…紅白のモチをちりばめた枝の束をかかえて街を流す彼女たちの背に、冬の日射しがやわらかくほおえみかけ、何となく春の訪れを告げているようなのどかな風情 かって、かの西鶴が「天井にさしたるモチ花に春の心して……」

と草したのも、なにかしらうなずける感じだ

○…徳川時代のむかし養蚕の成功を祈ってマユダマを飾ったのがいつしかこういうならわしに変わったのだそうだが、仙台ではこの日松飾をたく大崎八幡の名物どんと祭のにぎわいにおされて、かれんなモチ花を愛する人々が年々減っている。

【写真】 街を流すモチ花売り（仙台市長町で）

◆資料143

昭和三十年一月十五日「河北新報」（七）

燃えるお正月 仙台名物大崎八幡どんと祭

○…お正月の神様が炎にのって天に帰るといふ仙台名物大崎八幡神社のどんと祭が十四日夜行われた、門松廃止？の年というのにどこから集まるのか戦後最大の十五万の人数を記録したのは皮肉、午後六時古式さながら火打石で火をともし浄火がエンエンと境内の天をこがせば絶えることない人の列もまたエンエン

○…名物裸まいりもこの日二・六度（午後八時）というどんと祭にはめずらしい暖かさにすこぶる威勢よく、白装束に鈴の音もリンリンと酒造店はじめ二十組以上が参加、参詣人の目をみはらせた。

○…車庫を空にして動員した市電、市バスは先後七時過ぎころからすべて超満員、ヘッドライトの流れがさなら東京の目抜通りをしのぐばかりで名物ねじりあめなど軒をつらねる露店、売店、このあ

たりにかき入れのどんと祭景氣をみせた

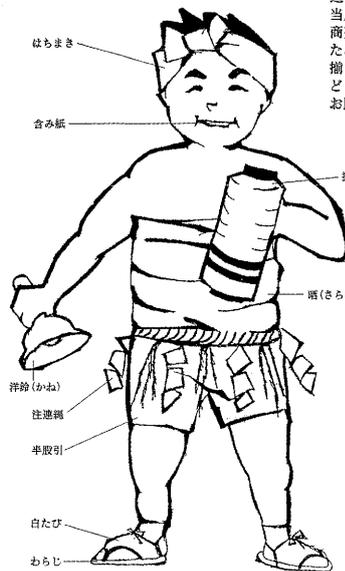
【写真】 天をこがすどんと祭



図1 「仙台中行事絵巻」(常盤雄五郎編)部分

どんと祭

“どんと祭”裸まいのり装束



恒例の大崎八幡宮“どんと祭”が近づいてまいりました。当店では、新年の無病息災・家内安全・商売繁盛などを願って参拝される方のため、「裸まいのり用品一式」を取り揃えております。どうぞお早目にご注文下さいますようお願い申し上げます。

〈どんと祭の由来〉
正月の“歳神様”の神送り行事で松焚祭ともいわれておりました。時に裸まいのりは、酒柱兵が吟醸折願のため神詣に来たのが今に伝わったものです。

〈神社の参拝方法〉
1. 拝殿の前に並んでおはらいを受ける。
2. 御神酒を頂く。
3. 御神火を右廻りにまわる。
その他、
注連縄・神札・正月の飾り品などを御神火にお納め下さい。

三方
御神前へのお供え物は、三方におのせてお持ち下さい。

1. さらしの巻き方

半分に折って巻いておく。
途中で半分ヒネるとたるみにくい。

2. 半股引の着用

※ポイント
下をくぐらせる。
AとBを結んで完了!

3. わらじのはき方

後で交差、前でもう一度交差してAとBを前で結ぶ。

4. 含み紙の折り方

6. 御神前へのお供え物
御神前へのお供え物(献儀品)は三方におのせてお供え下さい。

5. 女性は上に雨袴を着る。(さらし天笠装)

裸まいのり用品一式
ホズミ
仙台市青葉区八幡4-3-5
☎233-1011 FAX 233-1321
営業時間 午前9時～午後7時

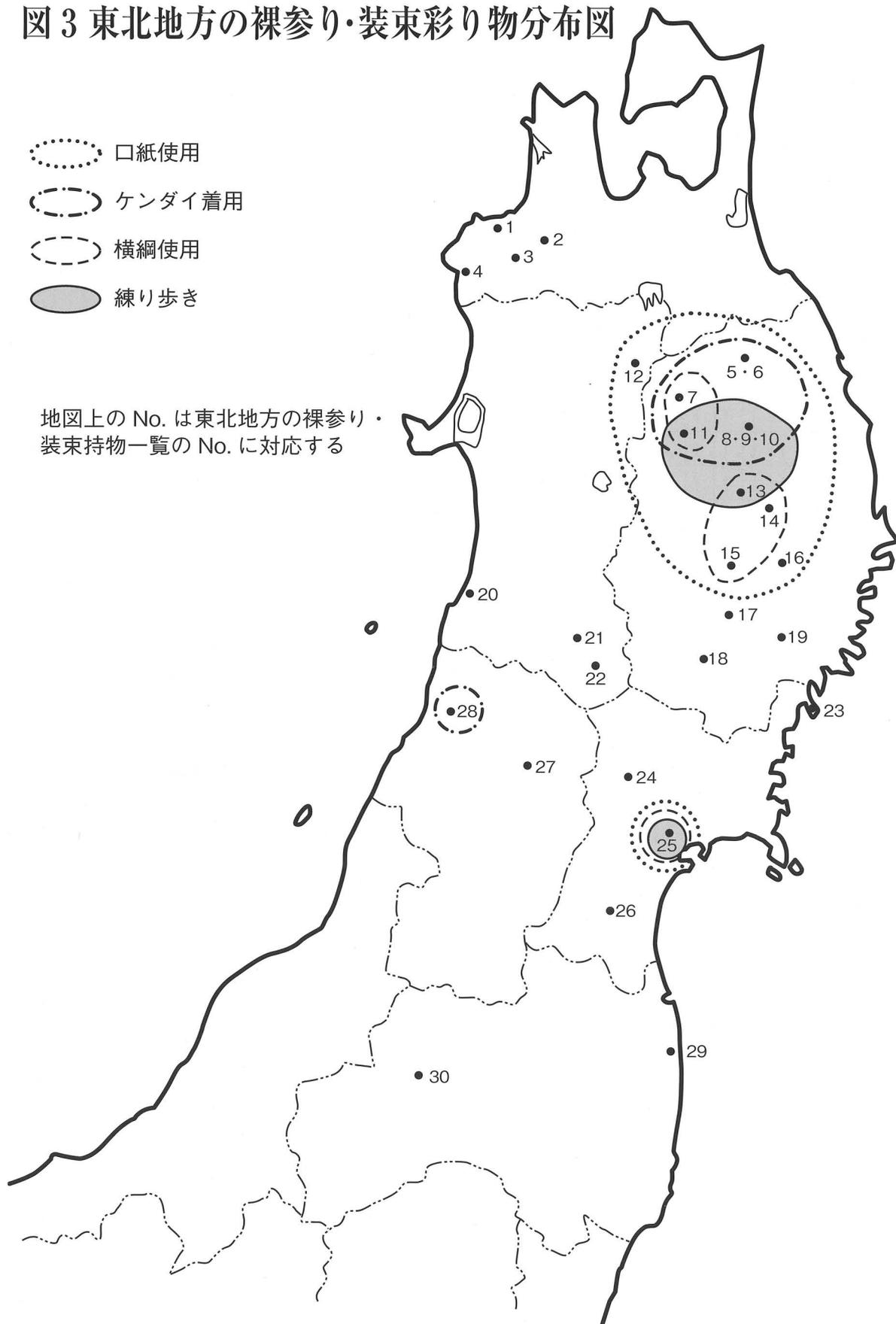
図2 衣料品店ホズミ(有)で配布しているパンフレット

表1 東北の裸参り装束採り物一覧

No.	名	所		日	装束		東		採り物		備考
		場	場		装束	装束	採り物	採り物			
1	舞戸正八幡宮裸参り	青森	西津軽郡野田町舞戸	正八幡宮	新曆12月31日
2	常盤の裸参り	青森	南津軽郡常盤村	常盤八幡宮	新曆1月1日	◎	○
3	鬼沢の裸参り	青森	弘前市鬼沢	鬼神社(きんじや)	旧曆1月1日	◎	○
4	岩崎の裸参り	青森	西津軽郡岩崎村	岩崎神社(いわさき)	新曆12月30日	△	○
5	サイト	岩手	二戸市	似鳥八幡宮	旧曆1月6日	○	○
6	裸参り	岩手	二戸市	香福神社	新曆1月2日	○	○
7	平笠裸参り	岩手	岩手郡西根町平笠	宮田神社・八坂神社	旧曆1月8日	○	◎	○	○	○	上半身に白肌着 ケンタイは長くともはマダの水の波を模倣 口紙は紙幣を折紙にする。もとは旧曆12月14日に実施。注連縄を肩に斜めに背負う。
8	教寺裸参り(おあみださん)	岩手	盛岡市北山	教浄寺	新曆1月14日	○	○	○	○	○	もとは旧曆12月14日に実施。注連縄を肩に斜めに背負う。
9	桜山神社年越祭・裸参り	岩手	盛岡市内丸	桜山神社	新曆1月26日	○	○	○	○	○	注連縄を肩に斜めに背負う。古くは女性の裸参りは白い単衣姿だという。
10	盛岡八幡宮年越祭・裸参り	岩手	盛岡市八幡町	盛岡八幡宮	新曆1月15日	○	○	○	○	○	もとは12月14日に実施。注連縄を肩に斜めに背負い、太い注連縄を腰に巻く。
11	雫石の裸参り	岩手	岩手郡雫石町	三社盛神社・永昌寺	新曆1月3日曜日	○	○	○	○	○	もとは1年おきの旧曆2月19日に実施。
12	土深井裸参り	秋田	鹿角市土深井	稲荷神社・八幡神社 胸形神社・山神社	1年おきの新曆 2月第3日曜日	○	○	○	○	○	晒半纏は昭和前期に着られた。
13	志和八幡宮裸参り	岩手	紫波郡紫波町志和	志和八幡宮	新曆1月5日	○	△	○	○	○	前夜祭の裸参り祈願祭での装束。口紙は光勝寺境内一の扉をくぐるまでは含まない。
14	光勝寺五大尊蘇民祭	岩手	紫波郡石鳥谷町	五大堂・光勝寺	旧曆1月6日	○	○	○	○	○	...
15	胡四王神社蘇民祭	岩手	花巻市矢沢	胡四王神社	新曆1月2日	○	○	○	○	○	...
16	小友裸参り	岩手	遠野市小友	藏龍神社	旧曆1月28日	○	○	○	○	○	...
17	毛越寺二十夜祭	岩手	西磐井郡平泉町	毛越寺常行堂	新曆1月20日	●	○	○	○	○	おより行列での厄男の装束。足袋は地下足袋を履く。松明は大松明を腰で支える。
18	黒石寺蘇民祭	岩手	水沢市黒石	黒石寺	旧曆1月7-8日	○	○	○	○	○	鎮祭での祈願祭(裸参り夏参りともいう)での装束。ハサミの原形ともいわれるオハナイリを持つ。
19	大原水かけ祭り	岩手	東磐井郡大原町大原	大原商店街	新曆2月11日	○	○	○	○	○	もとは旧曆1月18日に実施。半股引を履く。
20	新山神社裸参り	秋田	本庄市石脇	新山神社	新曆1月16日	○	○	○	○	○	白鉢巻に蠟燭を差し、白いネルを腰に巻く。
21	二井山裸参り・夏参り	秋田	平鹿郡雄物川町二井山	湯殿山神社	新曆1月7日	○	○	○	○	○	素足。女性の裸参りは夏参りと呼ばれ、白い単衣を着る。
22	水神社初丑祭り	秋田	湯沢市岩崎	水神社(八幡神社境内)	旧曆11月初丑の日	○	○	○	○	○	...
23	御崎神社裸参り・一点参り	宮城	気仙沼市唐桑町	日高見神社	旧曆1月14日
24	柳沢焼け八幡	宮城	加美郡加美町柳沢	八幡神社	新曆1月14日	○	○	○	○	○	...
25	大崎八幡宮参り・松焚祭・とんと祭	宮城	仙台市青葉区八幡町	大崎八幡宮	新曆1月14日	○	◎	○	○	○	かつて女性はいし車衣の長着を着た。現在女性はいし車半纏を着る。半纏にかつて半纏を履く者もある。
26	刈田嶺神祇参り・とんと祭	宮城	刈田郡蔵王町宮	刈田嶺神社	新曆1月14日
27	愛宕神社裸参り	山形	尾花沢市延沢	愛宕神社	新曆1月15日	○	○	○	○	○	...
28	八幡神社や祭り	山形	東田郡余目町千原	八幡神社	新曆1月15日	○	○	○	○	○	...
29	浪江水かけ祭り	福島	双葉郡浪江町権現堂	浪江神社	旧曆1月8日	○	○	○	○	○	男女とも晒半纏を着る。
30	七日堂裸参り	福島	河沼郡柳津町	福満虚空蔵尊円蔵	新曆1月7日	○	○	○	○	○	素足。

【装束・特物の記号一覧】 ○●◎□△装束特物として用いている ...不明 [鉢巻]○白鉢巻 ●色鉢巻 [下帯類]◎相模まわし □褌 △半股引・短パン [注連縄]○細い注連縄 ◎太い注連縄 [足袋]○白足袋 ●地下足袋 [松明]◎大松明 [ハサミ]●オハナイリ

図3 東北地方の裸参り・装束彩り物分布図



【参考写真】

I. 大崎八幡宮のどんと祭の現在



■写真 I-1 国宝大崎八幡宮
—平成17年撮影—



■写真 I-2 松焚祭・拝殿前の賑わいと神前にてお祓いを受ける裸参りの一行
—平成17年1月14日撮影—



■写真 I -3松飾りが持ち寄られる松焼き場
—平成19年1月8日撮影—



■写真 I -4点火式・忌火を松明に移す
—平成18年1月14日撮影—



■写真 I -5点火式・勢いよく燃え上がる炎
—平成18年1月14日撮影—



■写真 I -6松焚祭・正月を送るどんとの火
—平成18年1月14日撮影—



■写真 I -7人混みの中の御神火
—昭和頃：島山進一氏所蔵—



■写真 I -8露店の建ち並ぶ参道
—平成17年1月14日撮影—



■写真 I -9深夜の松焼き場
—平成18年1月14日撮影—

II. 大崎八幡宮への裸参り



■写真Ⅱ-1 (1) 天賞酒造の裸参り
八幡町の街路の中央を歩み参詣に向かう一行
—平成16年1月14日撮影—



■写真Ⅱ-1 (2) 天賞酒造の裸参り
鳥居をくぐり大崎八幡宮にさしかかる一行
—平成16年1月14日撮影—



■写真Ⅱ-1 (3) 天賞酒造の裸参り
人々に見まもられ参道を歩む
—昭和中頃：畠山進一氏所蔵—



■写真Ⅱ-1 (4) 天賞酒造の裸参り
拝殿にて神職の祓いを受ける
—昭和中頃：畠山進一氏所蔵—



■写真Ⅱ-1 (5) 天賞酒造の裸参り
昭和15年頃の参詣の様子
—「天賞裸参り絵巻」平山蘆江筆：天江文夫氏蔵—



■写真Ⅱ-2企業団体の裸参り・JR東日本仙台支社
—平成19年1月14日撮影：JR東日本仙台支社提供—



■写真Ⅱ-3企業団体の裸参り・仙台市立病院
—平成19年1月14日撮影：仙台市立病院提供—



■写真Ⅱ-4個人家族の裸参り
—昭和52年頃撮影：岩松卓也氏提供—



■写真Ⅱ-5人波を分けて拝殿へ向かう
裸参り一行
—昭和の中頃：畠山進一氏所蔵—



■写真Ⅱ-6御神火の周りを三度巡る
—平成17年1月14日撮影—

Ⅲ. 大崎八幡宮の歴史



■写真Ⅲ-2 大崎八幡神社・大崎市岩出山
—平成17年7月撮影—

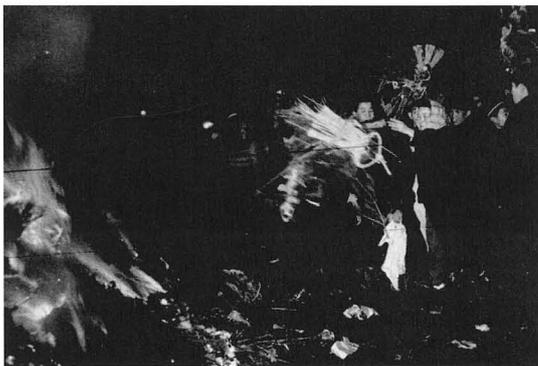


■写真Ⅲ-1 大崎八幡神社・大崎市田尻
—平成17年7月撮影—



■写真Ⅲ-3 成島八幡神社・山形県米沢市
—平成18年5月撮影—

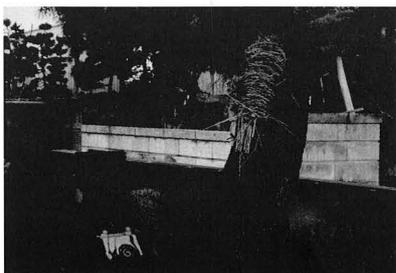
Ⅳ. 仙台地方の正月送り行事



■写真Ⅳ-1 青葉区八幡町・大崎八幡宮のどんと祭
—昭和中頃：島山進一氏所蔵—



■写真Ⅳ-2 青葉区大倉・小倉神社のオサイト
—平成18年1月15日撮影—



■写真Ⅳ-3 若林区荒浜
屋敷神近くの樹木に納められた正月飾り
—平成19年1月撮影—



■写真Ⅳ-4 青葉区大倉
オサイトを焼く早坂家裏山のウチガミ様
—平成18年1月15日撮影—



■写真Ⅳ-5 青葉区大倉
石田家のワラ火
—平成18年1月15日撮影—

V. どんと祭のひろがりと変容



■写真V-1 (1) 青葉区宮町・東照宮のどんと祭
燃えさかる御神火
—平成18年1月14日撮影—



■写真V-1 (2) 青葉区宮町・東照宮のどんと祭
どんと祭期間における東照宮の賑わい
—平成18年1月14日撮影—



■写真V-2 (1) 青葉区・大日堂(柳町)のどんと祭
正月飾りを持ち寄る人々
—平成18年1月14日撮影—



■写真V-2 (2) 青葉区・大日堂(田町)のどんと祭
堂内で行われる祈祷の様子
—平成18年1月14日撮影—



■写真V-3 (1) 若林区木ノ下・陸奥国分寺のどんと祭
正月飾りに護摩の火が移される



■写真V-3 (2) 若林区木ノ下・陸奥国分寺のどんと祭
松焚きの火を回る裸参りの一行



■写真V-4 若林区南鍛冶町・三宝荒神社のどんと祭
—平成18年1月14日撮影—



■写真V-5 若林区五十人町・伊達八幡社のどんと祭
—平成18年1月14日撮影—



■写真V-6 青葉区・大日堂(田町)のどんと祭
—平成18年1月14日撮影—



■写真V-7 太白区向山・大満寺のどんと祭
—平成18年1月14日撮影—



■写真V-8 泉区古内・賀茂神社のどんと祭
—平成18年1月14日撮影—



■写真V-9 泉区高森・泉パークタウンのどんと祭
—平成18年1月14日撮影—

VI. 岩手県南部地方の裸参り



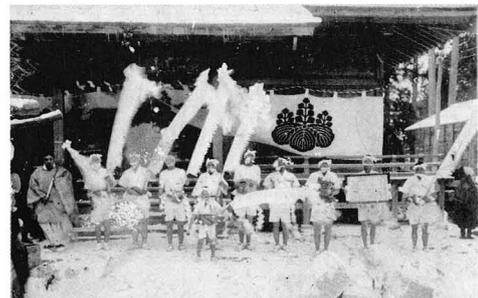
■写真VI-1 (1) 二戸市・似鳥八幡宮の裸参り
社殿に参詣する裸参りの祈願者
—平成18年2月3日撮影—



■写真VI-1 (2) 二戸市・似鳥八幡宮の裸参り
祈願者の舞い上げた火の粉を見てその年を占う
—平成18年2月3日撮影—



■写真VI-2 (1) 紫波町・志和八幡宮の裸参り
ジグザグに歩く裸参りの行列
—平成18年1月5日撮影—



■写真VI-2 (2) 紫波町・志和八幡宮の裸参り
祈願者の古い集合写真
—昭和10年代以前：門前克子氏所蔵—



■写真VI-3 (1) 雫石町・三社座神社の裸参り
ハサミを持つ祈願者
—平成16年1月18日撮影—



■写真VI-3 (2) 雫石町・三社座神社の裸参り
町中を歩き永昌寺に向かう祈願者の列
—平成16年1月18日撮影—



■写真VI-4 盛岡市・盛岡八幡宮の裸参り
—平成16年1月15日撮影—



■写真VI-5 遠野市小友・巖龍神社の裸参り
—平成16年2月28日撮影—

VII. 裸参りの拡散



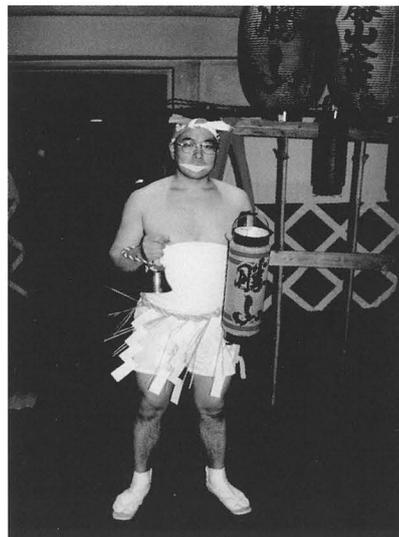
■写真VII-1 青葉区八幡町・ホズミ
ショーウィンドウの裸参り衣装
—平成16年1月14日撮影—



■写真VII-2 (1) 青葉区上杉・勝山酒造
青葉神社への裸参り
—平成16年1月14日撮影—



■写真VII-3 泉区古内・賀茂神社
栗駒建業の裸参り
—平成18年1月14日撮影



■写真VII-2 (2) 青葉区上杉・勝山酒造
—裸参りの衣装
—平成16年1月14日撮影—



■写真VII-4 (1) 大和町吉岡・吉岡八幡神社
早坂酒店店の裸参り
—昭和40年代中頃：早坂秀子氏 本田完治氏所蔵—



■写真VII-4 (2) 大和町吉岡・吉岡八幡神社
陸上自衛隊大和駐屯地隊員による裸参り
—平成19年1月14日撮影—

VIII. 時代にみるどんと祭と人々



■写真Ⅷ-1 青葉区・一番町四丁目商店街振興組合
正月を彩った赤鳥居を大崎八幡宮のどんと祭に奉納する
—昭和32年頃撮影：一番町四丁目商店街振興組合提供—



■写真-2 青葉区八幡町・大崎八幡宮
参道で駄菓子を売る露店に飾られた鳩パンと干支の犬パン
—平成18年1月14日撮影—

IX. どんと祭の現在から見えるもの



■写真Ⅸ-1 泉区高森・泉パークタウン
地域のコミュニティーによるどんと祭
—平成18年1月14日撮影—



■写真Ⅸ-3 増加する女性の裸参り
—平成18年1月14日撮影—



■写真Ⅸ-4 伝統裸参り
—平成16年1月14日撮影—



■写真Ⅸ-2 青葉区宮町・東照宮
環境に配慮し徹底される正月飾りの素材の分別
—平成18年1月14日撮影—



■写真Ⅸ-5 企業や団体の裸参り
—平成18年1月14日撮影—

大崎八幡宮の松焚祭（どんと祭）参考文献

大崎八幡宮関係参考文献

- 田邊希文『封内風土記』明和9年（1772）
『風土記御用書出』「遠田郡八幡村」安永4年（1775）
『奥州仙台大崎八幡来由記』大崎八幡宮 享保元年（1716）
『仙台鹿の子』元禄8年（1695）
鈴木家文書『八幡宮仙台江取移候義ニ付書出』享保元年7月（田尻町史史料編1983）
水月堂『奥州里諺集』宝暦10年（「仙台領の地誌」今野印刷2001）
『風土記御用書出』「玉造郡下野目村」安永2年（1773）
米沢市史編さん委員会『米沢市史』1997
『大日本古文書』「伊達家文書」
「貞山公御自筆年始御儀式巻」天正10年（1582）
「諸寺家年始進物日記」表紙「慶長五年正月四日諸寺家中」慶長5年（1600）正月
社団法人宮城県観光連盟『ウェルカム みやぎ観光ガイドブック'03』2003
仙台市史編さん委員会『仙台市史特別編6 民俗』1998
三原良吉編『仙臺年中行事繪巻 附仙臺年中行事大意』仙臺昔話会1940
「仙臺年中行事繪巻」嘉永3年（1850）頃
「仙臺年中行事大意」嘉永2年（1849）
『会議所ニュース』仙台商工会議所1972
燕石斎薄墨『仙府年中往来』文政13年（1830）仙台市博物館所蔵
小西利兵衛『仙臺昔話電狸翁夜話』1925
宮城県教育会『郷土の伝承』「宮城教育」特集号1931
仙臺観光協会編『仙臺の年中行事』1940
竹内利美『日本の民俗 宮城』第一法規出版1974
大崎八幡宮『参拝のしおり』2005
佐々久「神社概説」『宮城縣史12（学問宗教）』1961
佐々久「どんと祭考」『仙台商工会議所月報』1988
小野寺正人「大崎八幡宮の「どんと祭」はなぜ始まったのか」『宮城県の不思議事典』新人物往来社2004
宮城県教育委員会編『宮城県文化財調査報告書第82集 宮城県の祭り・行事』2000
中富洋「大崎八幡宮の松焚祭の祭礼的な特質について」『東北民俗学研究』東北学院大学民俗学OB会2005
菊地勝之助「どんと祭（松焚祭）の由来」『仙台事物起源考』郵辦社1964
『ふるさと宮城文化百選①まつり』宝文堂1984
『日本民俗大辞典』吉川弘文館2000
藤原勉「仙臺方言」『仙臺市史6別編4』仙臺市役所1952
三崎一夫「年中行事」『宮城縣史21（民俗Ⅲ）』1973
三崎一夫編『祭礼行事・宮城県』桜楓社1992
仙台市史編さん委員会『仙台市史 通史編5 近世3』仙台市 2004
『増補俳諧歳時記栗草』上下巻 岩波書店 2000
創刊百周年記念事業委員会編『河北新報の百年』河北新報社 1997

- 金沢規雄「佐藤紅緑と仙台」（『ふるさとの文学史』第4号 東北文学調査会 2000）
佐々久『國分町と菅原家』宝文堂 1984
朝倉治彦編『日本名所風俗図会 1 奥州・北陸の巻』角川書店 1987
斎藤月岑 朝倉治彦校注『東都歳時記3』平凡社 1972
若月紫蘭 朝倉治彦校注『東京年中行事1』平凡社 1968
三原良吉『仙臺民俗誌』『仙臺市史6 別編4』仙臺市役所 1952
天江富弥「年中行事」『宮城縣史20（民俗Ⅱ）』所収「童戯・童詞」宮城縣史刊行会 1960
三原良吉『仙台的七夕祭と盆祭』仙台市・仙台観光協会 1953

仙台藩領内と周辺部の小正月行事に関する参考文献

- 佐々久・竹内利美監修『ふるさとみやぎ 文化百選①まつり』1984
文化庁文化財保護部『無形の民俗文化財記録第39集 南奥羽の水祝儀』1996
東北歴史博物館編『東北地方の信仰伝承宮城県の年中行事』2005
宮城県教育委員会編『宮城県民俗分布図緊急民俗分布調査報告書』1977
文化庁編『日本民俗地図2』1978
- [福島県伊達郡]
- 桑折町史編纂委員会編『桑折町史 第3巻 各論編「民俗・旧町村沿革」』1989
梁川町史編纂委員会編『梁川町史 第11巻 民俗編I』1993
- [刈田郡]（以下宮城県）
- 蔵王町史編纂委員会編『蔵王町史 民俗生活編』1993
七ヶ宿町史編纂委員会編『七ヶ宿町史 生活編』1982
横川二百年祭実行委員会編『木地の里横川』1986
宮城県教育委員会編『宮城県文化財調査報告書第三十四集 山中七ヶ宿の民俗』1974
- [伊具郡]
- 丸森町史編纂委員会編『丸森町史』1984
丸森町教育委員会編『丸森町民俗分布図 きえゆくいろりの火』1986
角田町郷土誌編纂委員会編『角田町郷土誌』1956
佐藤清晴著『ふるさとの四季と年中行事 村の十二ヶ月』1980 法文堂
- [亘理郡]
- 山元町誌編纂委員会編『山元町誌』1971
- [柴田郡]
- 大河原町史編纂委員会編『大河原町史 諸史編』1984
安藤長吉著『船迫あれやこれ』1979
- [岩沼市]
- 岩沼市史編纂委員会編『岩沼市史』1984
- [仙台市]
- 仙台市史編纂委員会編『仙台市史1 本編1』1954
仙台市史編纂委員会編『仙台市史6 別編6』1952
仙台市史編纂委員会編『仙台市史 特別編6 民俗』1998
- [仙台市太白区]

- 秋保町史編纂委員会編『秋保町史 本編』1976
三原良吉『二口谷の民俗』1983 宝文堂
仙台市歴史民俗資料館編『広瀬川流域の民俗』1988
[仙台市若林区]
中田の歴史編集委員会編『中田の歴史』1991
[仙台市青葉区]
仙台市歴史民俗資料館『八幡町とその周辺の民俗』1984
佐藤雅也「仙台地方の山村地域における正月・小正月行事」仙台市歴史民俗資料館編『調査報告書第10集』1991
[仙台市泉区]
泉市誌編纂委員会編『泉市誌』1986
[仙台市宮城野区]
仙台市歴史民俗資料館『榴ヶ岡と宮城野の民俗』1982
[多賀城市]
多賀城町誌編纂委員会編『多賀城町誌』1967
[多賀城市史]
桜井道子編『南宮生活誌明治・大正・昭和の記録 我もまた郷土の土を創りし人』1987 南宮老人クラブ寿会
[宮城郡]
宮城郡教育会『宮城郡誌』1972
利府町誌編纂委員会編『利府町誌』1986
宮城郡利府村々誌編纂委員会編『利府村誌』1963
宮城町誌編纂委員会編『宮城町誌』1969
松島町誌編纂委員会編『松島町誌』1960
松島町史編纂委員会編『松島町史』1991
七ヶ浜町誌編纂委員会編『七ヶ浜町誌』1967
[塩釜市]
鈴木寛蔵著『浦戸の今昔（四）』1982 塩釜市浦戸公民館
[黒川郡]
富谷町誌編纂委員会編『富谷町誌』1965
富谷町誌編さん委員会編『新訂富谷町誌』1993
大衡村誌編纂委員会編『大衡村誌』1983
東北歴史資料館編『東北歴史資料館資料集第4集 南川の民俗宮城県大和町南川ダム予定地域調査報告書』1981
[石巻市]
石巻市史編さん委員会編『石巻市史 第5巻』1963
[牡鹿郡]
牡鹿町誌編さん委員会編『牡鹿町誌 下巻』2002
女川町史編纂委員会編『女川町誌』1960
[遠田郡]
田尻町史編纂委員会編『田尻町史』1960
[桃生郡]
立花改進著『わがふるさとの町飯野川』1965
桃生町史編纂委員会編『桃生町史 第三巻』1990
桃生村誌編纂委員会編『桃生村誌』1961

- 河南町誌編纂委員会編『河南町誌』1967
雄勝町史編纂委員会編『雄勝町史』1967
[加美郡]
村山貞之助編『中新田町史』1964
中新田町史編さん委員会編『新訂中新田町史』1997
宮崎町史編纂委員会編『宮崎町史』1973
[志田郡]
三本木町誌編纂委員会編『三本木町誌 下』1966
志田村誌編纂委員会編『志田村誌』1950
[古川市]
古川市史編纂委員会『古川市史 下巻』1972
古川市史編纂委員会『古川市史 別巻 平成風土記』2001
[玉造郡]
岩出山町史編纂委員会『岩出山町史 民俗生活編』2000
鳴子町史編纂委員会編『鳴子町史 下巻』1978
[登米郡]
中田町史編纂委員会編『中田町史』1977
東和町史編纂委員会編『東和町史』1987
[本吉郡]
志津川町誌編さん室編『生活の歓 志津川町誌Ⅱ』1989
本吉町誌編纂委員会編『本吉町誌Ⅱ』1982
津山町史編纂委員会編『津山町史 後編』1989
唐桑町史編纂委員会編『唐桑町史』1968
宮城県本吉農業改良普及所『語り継ぎたい津山のくらし』1984
津山町教育委員会編『郷土誌資料（第四集） 横山村誌資料』1983
柳津町教育委員会編『郷土誌資料（第一集） 柳津町誌資料』1980
[栗原郡]
栗駒町誌編纂委員会編『栗駒町誌』1963
高清水町史編纂委員会編『高清水町史』1976
栗原郡藤里村誌編纂委員会編『栗原郡藤里村誌 上』1922
瀬峰町史編纂委員会編『瀬峰町史』1966
金野正著『栗原の歴史と民俗 増補新版』1990
金成町史編纂委員会編『金成町史』1973
三崎一夫『栗原郡民俗資料集第一集 金成の年中行事』金野正発行 1970
高清水町史編纂委員会編『高清水町史』1976
一迫町史編纂委員会編『一迫町史』1976
金成町史編纂委員会編『金成町史 増補版』2002
瀬峰町史編纂委員会編『瀬峰町史 増補版』2005
花山村総務課編『花山村史 増補版』2005
[気仙沼市]
羽田部分林組合・羽田周辺民俗研究会『羽田周辺の民俗』1981

[気仙郡]

三陸町史編纂委員会編『三陸町史』1988

[陸前高田市]

陸前高田市史編纂委員会編『陸前高田史 第五巻 民俗編上』1991

[胆沢郡]

金ヶ崎町史編さん委員会編『金ヶ崎町史』1965

胆沢町史刊行会『胆沢町史 民俗編 I』1985

仙台市文化財調査報告書第305集
大崎八幡宮の松焚祭と裸参り
調査報告書
2006年12月

発行 **仙台市教育委員会**
仙台市青葉区国分町三丁目7番1号
文化財課 TEL 022(214)8892

印刷 **株式会社 仙台紙工印刷**
仙台市宮城野区善竹3丁目1-14
TEL 022-231-2245
